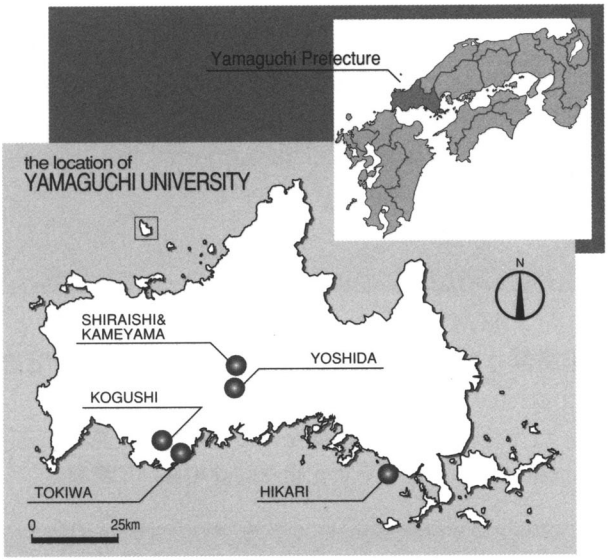
山口大学構内遺跡調査研究年報XIV

2000

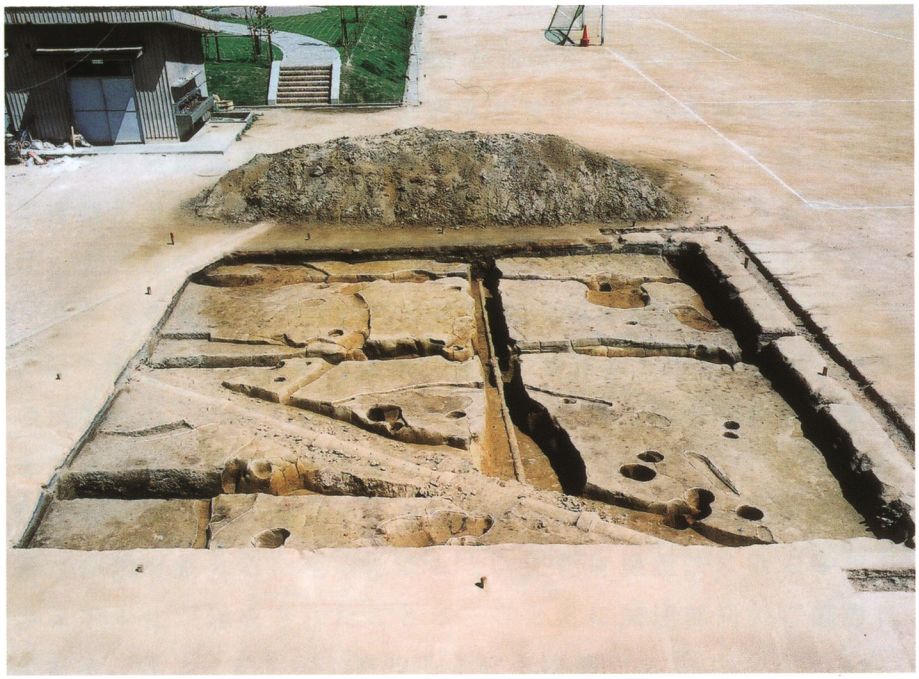
山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報XIV



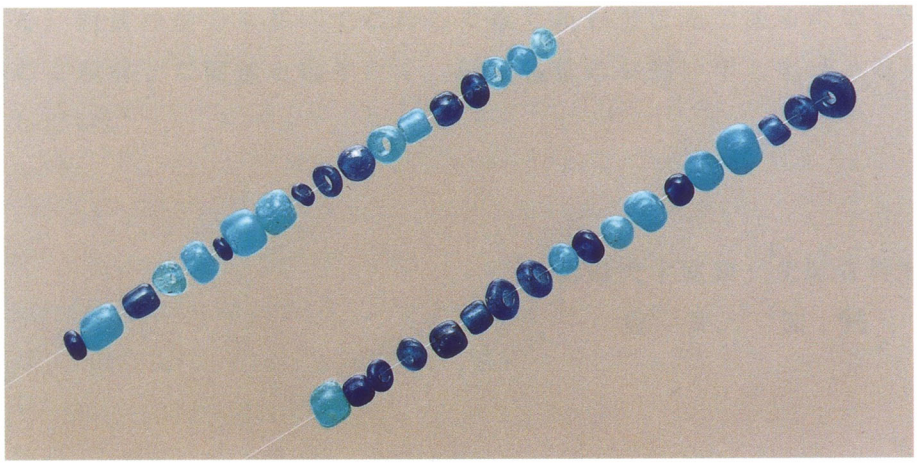
2000

山口大学埋蔵文化財資料館



吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

写真上　Ｂトレンチ全景（西から）
写真下　Ｂトレンチ出土ガラス小玉（約1.4倍）



序　　文

山口大学構内遺跡調査研究年報XIVを刊行することができた。

本報告書に収録した内容は、平成6年度に山口大学埋蔵文化財資料館が行った学内発掘調査の成果であり、その大半は、景気浮揚を目的とした前年度補正予算の繰り越しによる事業に関わるものである。これらの事業は、資料館の通常年度の業務に上乗せされたものであったため、平成5・6年度の業務は、資料館の能力を大幅に超過することになった。結果、屋外調査終了後の室内整理作業と報告に多くの歳月を要した。

この反省にたち、資料館では平成7年度以降、学内発掘調査業務の円滑化を計るべく、種々の取り組みを行ってきた。とりわけ、工事計画策定に先立ち埋蔵文化財調査の必要性や調査内容等について十分な連絡協議を行う体制を整えるに至ったことと、文化財保護法に則る手続き業務のマニュアル化が達成されたことは、ひとえに関連部局のご協力によるものである。ここに記してお礼申し上げる次第である。

しかしながら、なお長年の念願とする、埋蔵文化財資料館の展示及び整理・収納設備の改善充実が未だ実現しないなど問題も多い。館員としても、発掘成果の地域への還元を図る機会を設けるなど、一層の努力が必要である。さらに、遅滞する平成7年度以降の業務報告が今後の急務である。館員の全力を挙げてこれらに取り組むところであるので、今後一層のご理解とご鞭撻を賜りたく、関係各位にお願い申し上げ、巻頭の辞としたい。

山口大学埋蔵文化財資料館

館　長　　加　納　　隆

例　　言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が、埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成６年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。

2．現地における調査・研究は、人文学部考古学研究室　中村利至久（４年生）・中村幸弘（３年生）の協力を得て、資料館員　豆谷和之・村田裕一・田﨑美佐が担当した。

また、出土遺物の整理と報告書の作成は平成６年度から平成11年度の間に行い、同館員　佐野正子（～平成8年3月30日）・田﨑美佐（～平成8年3月30日）・八杉幸子（平成8年4月1日～平成10年3月30日）・品川直江（平成8年4月1日～平成11年3月30日）・金子大輔（平成10年4月1日～）・中村仁美（平成11年4月1日～）が携わった。整理と報告書作成の統括は当初、豆谷・村田で行っていたが、豆谷の転出により、村田と後任の田畑直彦（平成8年8月～）とで引き継いだ。

3．調査・研究における事務一般は、平成６年度は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。

4．現地における遺構の実測などは、豆谷・村田・田﨑・中村（利）・中村（幸）が行った。

5．遺物実測は、土器・木製品を田畑・八杉・品川・中村（仁）が、石器を村田・八杉が、ガラス小玉を品川が行った。製図は、田畑・品川・金子・中村（仁）が行った。

6．本文の執筆分担は目次に記した。

7．現地の写真撮影は、田﨑の補佐を得て豆谷・村田が行った。遺物写真は、第２章に関係するものは土器・石器を田畑が、ガラス小玉を村田が撮影した。第３章に関係するものは村田の指示で金子が撮影した。

8．近世陶磁器については財団法人北九州市教育文化事業団　佐藤浩司氏・山口県埋蔵文化財センター　谷口哲一氏に、石器の石質鑑定は山口大学理学部助教授　永尾隆志氏に助言を仰ぎ、懇切なご教示を得た。また、当館収蔵遺物について、山口県埋蔵文化財センター　小南裕一氏よりご寄稿いただいた。記して感謝の意を表したい。

9．本書の編集は中村（仁）の補佐を得て村田が行った。

10．調査・研究においてはカラースライド・フォトＣＤを作成しており、出土遺物とあわせて埋蔵文化財資料館で保管している。

11．調査担当は次のとおりである。（平成６年度）

調査主体　　埋蔵文化財資料館　　館　　長　　中村　友博

		館　員	豆谷　和之
		同	村田　裕一［平成6年7月1日～］
		同	佐野　正子
		同	田﨑　美佐
事務局		事務局長	木村　豊
	本部庶務部	部　長	本田　虔司
	庶務課	課　長	岩本　義男
		課長補佐	松本　正史
	庶務係	係　長	森田　義富
			笠井　政雄
			片山　信一
			田中　薫
			深尾ヒロ子

12. 調査研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は平成６年度）

事務局庶務部　人事課長　糸永憲義、同課長補佐　柳　洋二、同専門職員　中野拓彦、人事係長　岡村秀幸、同係　清廣哲之、森山　睦

経理部　部長　新藤　勇、主計課長　太田正信、同課長補佐　石﨑啓介、経理課長　月貫和夫、同課長補佐　田中善人、総務係長　上谷克弘、予算係長　牧原和仁、監査係長　髙林昭夫、管財係長　末次敏男、用度係長　山﨑昭博、同係　常國武志、田中　隆

施設部　部長　黒岩七三、企画課長　本永　清、建築課長　山地久司、同課長補佐　岡崎正則、設備課長　池尻安宏、総務係長　平川和孝、同係　田坂武男、企画係長　鈴木輝美、建築第一係長　小川賀津夫、同係　中谷幸一、武市佳人、建築第二係長　河田徹也、同係　澤谷弘美、電気係長　吉永峯生、同係　松田清司、岡野友資、前田康孝、機械係長　鹿嶋正則、同係　板垣健一、新里英明、中村兵衛

学生部　部長　降矢順治、次長　平島　明、学生課長　中村　勤、同課長補佐　岩佐豈典、総務係長　中光博輝、同係　庄野栄二、平岡朋子、学生係長　山田直行、同係　尾川圭三、宮本達司

人文・理学部　事務長　兵頭欣二、事務長補佐　藤川年章、中島岩弘、会計係長

伊藤篤紀、同係　安食一二三

教育学部　事務長　西野雅博、事務長補佐　中村文穂、会計係長　荒石光明、附属山口小学校校長　岡村豊太郎、同副校長　松村芳彦、附属山口中学校校長　川村博忠、同副校長　中原和昭、山口附属学校係係長
礒部孝至、同係　河田孝行、佐村順子、須藤弘子、附属光小学校校長田代直人、同副校長　内山英治、附属光中学校校長　末廣正巳、同副校長　神足　進、光附属学校係係長　浜田千春、同係　高橋吾郎、西村文隆、吉田常子、松重淳子、附属養護学校校長　横山省三、同副校長　古屋博樹、附属養護学校係係長　小松治樹、中谷雪生

経済学部　事務長　野村宗成、会計係長　藤井良雄　同係　高橋修二、山根美千代、池田浩弥子、川神宣一

医学部　事務部長　永田榮一、同次長　畦西繁夫、総務課長　松添光弘、同課長補佐　原　和男、管理課長　今井　勝、同課長補佐　石川恒夫、亦野高志、庶務係長　楠元敏胤、総務係長　佐村研治、経理係長　髙崎明祈、施設管理係長　須川　悟、同係　村上民子、濱井富吉、田村勇治、建築係長　川西智信、設備係長　山本安雄、同係　吉野高己、吉井貞雄、橋本一範、弘中智則、田中武敏、田村悦夫、

教養部　事務長　竹腰直道、会計係長　山本隆嗣　同係　金子淑子、佐々木義正、石田愼二、矢田部洋治

人文学部考古学研究室

吉田構内の発掘調査作業員

安達世津子、石川芳江、石津京子、茨木重美、岡　イツコ、岡野美智恵、金海美代子、金子万代、金子幸江、金子芳子、川端信子、河村伸子、栗林さつき、栗林妃抄子、桑原恭子、篠原澄江、杉山久枝、鈴木久子、津野田志津子、中村　節、中村美佐子、原　千寿恵、原　百合子、深野生恵、福田良子、亦野芳江、宮内和子、三好澤江、森近冴子、山崎シヅエ、山下リツ子、山本京子

凡　　例

1. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA－24区南西隅を起点（構内座標x＝0，y＝0）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

   x＝X+206,000

   y＝Y+64,750

2. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

   竪穴住居跡……SB，土坑……SK，溝……SD，柱穴……Pit，落ち込み……SX

3. 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

4. 標高数値は海抜標高を示す。

5. 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

6. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976) に準拠した。

7. 土器・陶磁器の実測図は、下記のように器種分類した。

   断面黒塗り……須恵器、陶磁器

   断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器・陶器、瓦質土器

本　文　目　次

第１章　平成６年度山口大学構内遺跡調査の概要 ……（村田）…… 1

第２章　吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査 ……（豆谷・田畑）…… 5
　第１節　調査の経過 …… 5
　第２節　遺構 …… 8
　第３節　遺物 …… 38

第３章　吉田構内第２屋内運動場新営に伴う発掘調査 ……（村田・中村仁）…… 109

第４章　平成６年度山口大学構内の試掘調査 ……（豆谷）…… 147
　1　経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査 …… 147
　2　実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査 …… 153
　3　吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査 …… 157

第５章　平成６年度山口大学構内の立会調査 ……（豆谷・村田）…… 161
　第１節　吉田構内の立会調査 …… 161
　　1　経済学部商品資料館仮設電柱設置工事に伴う立会調査 …… 161
　　2　人文学部前駐車場整備工事に伴う立会調査 …… 162
　　3　テニスコート改修工事に伴う立会調査 …… 163
　　4　教育学部附属養護学校生活訓練施設棟新営工事に伴う立会調査 …… 164
　　5　教育学部附属養護学校生活排水管改修工事に伴う立会調査 …… 165
　　6　陸上競技場整備（透水管埋設）に工事伴う立会調査 …… 165
　　7　ハンドボール場改修（プレハブ設置）工事に伴う立会調査 …… 166
　　8　野球場フェンス改修工事に伴う立会調査 …… 166
　　9　基幹環境整備（ボイラー室配電盤設置）工事に伴う立会調査 …… 167
　　10　九田川河川局部改良工事に伴う立会調査 …… 167
　　11　第２屋内運動場仮設電柱設置工事に伴う立会調査 …… 168
　　12　教養部水道管破裂修理工事に伴う立会調査 …… 168

13　グランド屋外照明施設配線埋設工事に伴う立会調査 …… 169
14　公共下水道接続（教育学部附属養護学校プール排水施設設置）工事に伴う立会調査 …… 169
15　サークル棟給水管埋設工事に伴う立会調査 …… 170
16　プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査 …… 170
17　公共下水道接続（汚水管雨水排水施設設置）工事に伴う立会調査 …… 171
18　教育学部スロープ設置（音楽棟）工事に伴う立会調査 …… 171
第2節　小串構内の立会調査 …… 172
医学部附属病院MRI－CT装置棟新営に伴う立会調査 …… 172
第3節　亀山構内の立会調査 …… 173
1　教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査 …… 173
2　教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査 …… 173
第4節　光構内の立会調査 …… 174
教育学部附属光小中学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査 …… 174
第5節　その他構内の立会調査 …… 175
湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修工事に伴う立会調査 …… 175

付　篇

付篇Ⅰ
実体顕微鏡によるガラス小玉の観察 ……（村田）…… 179
付篇Ⅱ
山口市内採集の縄文時代草創期石斧 ……（小南 裕一）…… 187
付篇Ⅲ
山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器 ……（田畑）…… 189

山口大学構内遺跡調査要項 …… 207
山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 207
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 208

山口大学構内の主な調査 …… 210

Summary …… 221

図 版 目 次

PL. 1　吉田構内全景（南から）

＜吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査＞

PL. 2　(1) Aトレンチ遺構検出状況（北西から）

(2) Aトレンチ遺構完掘状況（北西から）

PL. 3　(1) Aトレンチ遺構完掘状況（南西から）

(2) Aトレンチ河川遺物出土状況（北から）

(3) Aトレンチ南西壁土層断面（北東から）

(4) Aトレンチ南西壁土層断面（北東から）

PL. 4　(1) Bトレンチ遺構検出状況（北西から）

(2) Bトレンチ遺構完掘状況（北西から）

PL. 5　(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡検出状況（南西から）

(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南西から）

PL. 6　(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南から）

(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（北東から）

(3) 配線トレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南東から）

(4) Bトレンチ第1号竪穴住居跡滑石製紡錘車出土状況（東から）

PL. 7　(1) Bトレンチ第2号竪穴住居跡検出状況（北西から）

(2) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（北西から）

PL. 8　(1) Bトレンチ第2号竪穴住居跡検出状況（南東から）

(2) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（南東から）

(3) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（南から）

(4) Bトレンチ第2号竪穴住居跡炉跡検出状況（南西から）
PL. 9 (1) 配線トレンチ第3号竪穴住居跡検出状況（南東から）
(2) 配線トレンチ第3号竪穴住居跡完掘状況（南東から）
(3) 配線トレンチ第4号竪穴住居跡検出状況（南東から）
(4) 配線トレンチ第4号竪穴住居跡完掘状況（南東から）
PL.10 (1) Bトレンチ縄文土器検出状況（北西から）
(2) Bトレンチ縄文土器検出状況（南東から）
(3) Bトレンチ縄文土器検出状況（北から）
(4) Bトレンチ河川土層断面（北西から）
PL.11 (1) Bトレンチ第1号溝検出状況（南西から）
(2) Bトレンチ第1号溝完掘状況（南西から）
(3) Bトレンチ第1号溝完掘状況（北東から）
(4) Bトレンチ第1号溝土器出土状況（南西から）
PL.12 (1) Bトレンチ第3号土坑土層断面（南東から）
(2) Bトレンチ第3号土坑完掘状況（南東から）
(3) Bトレンチ第4号土坑土器出土状況（南東から）
(4) Bトレンチ第4号土坑完掘状況（南東から）
PL.13 (1) Bトレンチ第1号土坑検出状況（北東から）
(2) Bトレンチ第1号土坑完掘状況（北東から）
(3) Bトレンチ第2号土坑検出状況（北西から）
(4) Bトレンチ第2号土坑完掘状況（北西から）
PL.14 (1) Bトレンチ第5号土坑完掘状況（北東から）
(2) 配線トレンチ第2号溝完掘状況（北西から）
(3) 配線トレンチ落ち込み1完掘状況（南西から）
(4) Bトレンチ落ち込み1完掘状況（北西から）
PL.15 (1) Cトレンチ遺構検出状況（南東から）
(2) Cトレンチ遺構完掘状況（南東から）
PL.16 (1) Cトレンチ第1号土坑土層断面（北西から）
(2) Cトレンチ第1号土坑完掘状況（北西から）
(3) Cトレンチ落ち込み状遺構完掘状況（北東から）

(4) Cトレンチ北西壁土層断面（南東から）
PL.17 (1) Dトレンチ完掘状況（北東から）
(2) Dトレンチ完掘状況（南西から）
(3) Dトレンチ北西壁土層断面（東から）
PL.18 (1) Eトレンチ全景（北東から）
(2) Eトレンチ全景（北西から）
(3) Eトレンチ南西壁土層断面（東から）
(4) Eトレンチ北東壁土層断面（西から）
PL.19 (1) Fトレンチ遺構完掘状況（北東から）
(2) Fトレンチ遺構完掘状況（南東から）
PL.20 (1) Fトレンチ縄文土器出土状況（西から）
(2) Fトレンチ縄文土器出土状況（北西から）
(3) Fトレンチ北東壁土層断面（西から）
(4) Fトレンチ南西壁土層断面（北から）
PL.21 (1) 配線トレンチE区遺構検出状況（北東から）
(2) 配線トレンチE区土層断面（南西から）
(3) 配線トレンチF区（北から）
(4) 配線トレンチG区（北から）
PL.22 (1) Aトレンチ河川出土縄文土器
(2) Aトレンチ河川出土弥生時代前期～中期土器①
PL.23 Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器②
PL.24 (1) Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器③
(2) Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器④
PL.25 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器①
PL.26 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器②
PL.27 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器③
PL.28 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器①
PL.29 A・Bトレンチ出土土器
PL.30 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器②
PL.31 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器③

PL.32　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器④
PL.33　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑤
PL.34　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑥
PL.35　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑦
PL.36　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑧
PL.37　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑨
PL.38　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器⑩
PL.39　Aトレンチ河川出土土器・石器・石製品、表採磁器
PL.40　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器①
PL.41　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器②
PL.42　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器③
PL.43　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器④
PL.44　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器⑤
PL.45　(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土土器
(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土石器
(3) Bトレンチ第2号竪穴住居跡出土石器
(4) Bトレンチ第2・3号竪穴住居跡出土土器
PL.46　(1) Bトレンチ第4号竪穴住居跡出土土器
(2) Bトレンチ第1号土坑出土土器
(3) Bトレンチ第2号土坑出土石器
PL.47　(1) Bトレンチ第3号土坑出土土器
(2) Bトレンチ第4号土坑出土土器
PL.48　(1) Bトレンチ第6号土坑出土土器
(2) Bトレンチ落ち込み1出土土器
(3) Bトレンチ落ち込み1出土石器①
PL.49　Bトレンチ落ち込み1出土石器②
PL.50　(1) Bトレンチ落ち込み1出土石器③
(2) Bトレンチ土坑8出土石器
PL.51　(1) Bトレンチ第1号溝出土土器
(2) 配線トレンチ第2号溝出土土器

PL.52　配線トレンチC区落ち込み1出土遺物
PL.53　(1) 配線トレンチ落ち込み1出土土器
(2) 配線トレンチ落ち込み1出土土玉
(3) 配線トレンチ落ち込み1出土石器
PL.54　(1) Bトレンチ暗渠、遺構検出時出土土器
(2) Bトレンチ暗渠、遺構検出時出土石器①
(3) Bトレンチ遺構検出時出土石器②
PL.55　Bトレンチ撹乱・表土掘削時出土土器
PL.56　(1) 配線トレンチE区・G区出土土器
(2) 配線トレンチE区出土石鏃
(3) 配線トレンチG区出土土器
(4) Cトレンチ出土土器
(5) Eトレンチ出土土器
PL.57　Fトレンチ河川出土縄文時代後期土器
PL.58　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期深鉢①
PL.59　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期深鉢②
PL.60　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期浅鉢①
PL.61　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期浅鉢②
PL.62　(1) Fトレンチ河川出土弥生時代前期～古墳時代中期土器
(2) Fトレンチ河川出土敲石
(3) Fトレンチ河川出土三脚石器
＜吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査＞
PL.63　(1) 調査前全景（東から）
(2) 遺構完掘状況（南上空から）
PL.64　(1) 大溝1・2検出状況（北東から）
(2) 大溝1・2完掘状況（北東上空から）
PL.65　(1) 大溝1完掘状況（北から）
(2) 大溝1完掘状況（南から）
(3) 大溝2完掘状況（北から）
(4) 大溝2完掘状況（南から）

PL.66　(1) 大溝1土層断面（北壁部分・南から）
(2) 大溝1土層断面（BB'断面・南西から）
(3) 大溝1土層断面（南壁部分・北から）
PL.67　(1) 大溝2土層断面（AA'断面・南西から）
(2) 大溝2土層断面（BB'断面・南西から）
(3) 大溝2土層断面（南壁部分・北から）
PL.68　(1) 大溝2杭跡列配列状況（南西から）
(2) 大溝2杭跡列配列状況（東から）
PL.69　(1) 大溝2杭跡列検出状況（東から）
(2) 大溝2杭跡列完掘状況（東から）
(3) 大溝2杭跡列検出状況拡大（東から）
(4) 大溝2杭跡列完掘状況拡大（東から）
PL.70　(1) 大溝2杭列検出状況（南東から）
(2) 大溝2杭列断ち割り状況（北東から）
PL.71　(1) 土坑1完掘状況（北東から）
(2) 土坑1土層断面（南東から）
(3) 土坑1土層断面（南西から）
PL.72　(1) 小溝1・2・5・7・9検出状況（南西から）
(2) 小溝5・7・9及び大土坑検出状況（西から）
(3) 小溝1・2・5・7・9完掘状況（南西から）
(4) 小溝7完掘状況（南西から）
PL.73　(1) 小溝1・2・5・7土層断面（FF'断面・南西から）
(2) 小溝1・2土層断面（GG'断面・南西から）
(3) 小溝5・7土層断面（GG'断面・南西から）
(4) 小溝5・7土層断面（JJ'断面・南西から）
PL.74　(1) 貯蔵穴内炭化物層上面検出状況（北から）
(2) 貯蔵穴完掘状況（北から）
(3) 貯蔵穴上部土層断面（北から）
(4) 貯蔵穴内炭化物層土層断面（北から）
PL.75　(1) 大土坑完掘状況及び西壁土層断面（北東から）

(2) 近世大溝西壁部分土層断面（東から）
PL.76 (1) 配管等埋設部分調査区全景（南から）
(2) 配管等埋設部分調査区土層断面（南西から）
PL.77 (1) 大溝１・２・３出土縄文土器
(2) 大溝１・２・３出土弥生土器
PL.78 大溝２・３出土弥生土器
PL.79 大溝１・２出土石器
PL.80 (1) 小溝１・５・７・９出土土器
(2) 小溝５出土石器
PL.81 (1) 大土坑出土土器
(2) 近世用水路出土土器・粗陶器①
PL.82 (1) 近世用水路出土土器・粗陶器②
(2) 近世用水路出土砥石
(2) 近世用水路出土下駄
＜経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査＞
PL.83 (1) 調査前全景
(2) 調査区完掘状況全景（東から）
PL.84 (1) Ａトレンチ全景（北から）
(2) Ａトレンチ河川１土層断面（北西から）
(3) Ｂトレンチ全景（北から）
(4) Ｂトレンチ河川１土層断面（南東から）
PL.85 (1) Ｂトレンチ遺構完掘状況（北西から）
(2) Ｃトレンチ全景（北から）
(3) Ｄトレンチ完掘状況（東から）
(4) Ｅトレンチ遺構完掘状況（東から）
＜実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査＞
PL.86 (1) 調査区完掘状況全景（南西から）
(2) 調査区北西壁土層断面（南から）
＜吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査＞
PL.87 (1) 調査区全景（南東から）

(2) 調査区全景（北西から）
(3) 河川１北壁土層断面（西から）
(4) 河川２北壁土層断面（南から）
付篇 II　＜山口市内採集の縄文時代草創期石斧＞
PL.88　縄文時代草創期の石斧（山口市内採集・刃部拡大）
原色図版
＜吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査＞
PL.89　Bトレンチ第１号竪穴住居跡出土ガラス小玉
PL.90　Bトレンチ第３号竪穴住居跡出土ガラス小玉
PL.91　Bトレンチ出土ガラス小玉（部分拡大）
＜吉田構内第２屋内運動場新営に伴う発掘調査＞
PL.92　(1) 近世用水路出土土師質土器
(2) 近世用水路出土陶器①
(3) 近世用水路出土磁器①
(4) 近世用水路出土陶器②
(5) 近世用水路出土磁器②
PL.93　近世用水路出土陶器③
PL.94　近世用水路出土磁器③

挿　図　目　次

＜平成６年度山口大学構内遺跡調査の概要＞

Fig. 1　山口大学吉田・亀山構内位置図 …… 3
Fig. 2　山口大学小串・常盤構内位置図 …… 4
Fig. 3　山口大学光構内位置図 …… 4

＜吉田構内の発掘調査＞

グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

Fig. 4　調査区位置図 …… 5
Fig. 5　トレンチ配置図 …… 7
Fig. 6　Aトレンチ遺構配置図 …… 8
Fig. 7　Aトレンチ壁面土層断面図 …… 9

Fig. 8　Bトレンチ、配線トレンチ
遺構配置図 …… 10
Fig. 9　Bトレンチ壁面土層断面図 …… 11
Fig.10　配線トレンチA区壁面土層断面図…… 12
Fig.11　配線トレンチC・D区
壁面土層断面図 …… 13
Fig.12　Bトレンチ第1号竪穴住居跡
実測図 …… 15
Fig 13　Bトレンチ第2号竪穴住居跡
実測図 …… 17
Fig.14　Bトレンチ第3・4号竪穴住居跡
実測図 …… 19
Fig.15　Bトレンチ第1号溝、
第3・4・6号土坑実測図 …… 21
Fig.16　Bトレンチ第1・2・5・7号土坑、
配線トレンチ第2・3号溝実測図 …… 23
Fig.17　Cトレンチ遺構配置図 …… 24
Fig.18　Cトレンチ壁面土層断面図 …… 25
Fig.19　Cトレンチ第1号土坑実測図 …… 26
Fig.20　Dトレンチ実測図 …… 27
Fig.21　Eトレンチ遺構配置図 …… 28
Fig.22　Eトレンチ壁面土層断面図 …… 29
Fig.23　Fトレンチ遺構配置図 …… 30
Fig.24　Fトレンチ壁面土層断面図 …… 31
Fig.25　配線トレンチE・F・G区
実測図 …… 33
Fig.26　Aトレンチ河川出土縄文時代晩期～
弥生時代中期土器実測図 (1) …… 39
Fig.27　Aトレンチ河川出土
弥生時代中期土器実測図 (2)…… 40
Fig.28　Aトレンチ河川出土弥生時代
前期・中期土器実測図 (3) …… 41
Fig.29　Aトレンチ河川出土
弥生時代後期土器実測図 (1) …… 43
Fig.30　Aトレンチ河川出土
弥生時代後期土器実測図 (2) …… 44
Fig.31　Aトレンチ河川出土
弥生時代後期土器実測図 (3) …… 45
Fig.32　Aトレンチ河川出土
弥生時代後期土器実測図 (4) …… 47
Fig.33　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (1) …… 49
Fig.34　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (2) …… 51
Fig.35　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (3) …… 53
Fig.36　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (4) …… 55
Fig.37　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (5) …… 57
Fig.38　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (6) …… 59
Fig.39　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (7) …… 60
Fig.40　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (8) …… 61
Fig.41　Aトレンチ河川出土
古墳時代前期土器実測図 (9) …… 62
Fig.42　Aトレンチ河川出土
陶磁器・石器実測図 …… 63

Fig.43　Bトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (1) …… 65
Fig.44　Bトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (2) …… 66
Fig.45　Bトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (3) …… 67
Fig.46　Bトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (4) …… 68
Fig.47　Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土
遺物実測図 …… 71
Fig.48　Bトレンチ第2号竪穴住居跡出土
遺物実測図 …… 72
Fig.49　Bトレンチ第3号竪穴住居跡出土
遺物実測図 …… 72
Fig.50　Bトレンチ第4号竪穴住居跡出土
遺物実測図 …… 73
Fig.51　Bトレンチ第1号土坑出土遺物
実測図 …… 74
Fig.52　Bトレンチ第2・3号土坑出土遺物
実測図 …… 75
Fig.53　Bトレンチ第4・6号土坑出土遺物
実測図 …… 76
Fig.54　Bトレンチ落ち込み1出土遺物
実測図 …… 77
Fig.55　Bトレンチ落ち込み1、土坑8出土
遺物実測図 …… 78
Fig.56　Bトレンチ第1・2号溝出土遺物
実測図 …… 79
Fig.57　配線トレンチ落ち込み1出土
遺物実測図 …… 81
Fig.58　Bトレンチ暗渠・遺構検出時出土遺物
実測図 (1) …… 82
Fig.59　Bトレンチ遺構検出時出土遺物
実測図 (2)、配線トレンチ撹乱・表土掘
削時出土遺物実測図 …… 84
Fig.60　配線トレンチE区・G区出土遺物
実測図 …… 85
Fig.61　Cトレンチ出土遺物実測図 …… 86
Fig.62　Eトレンチ出土遺物実測図 …… 86
Fig.63　Fトレンチ河川出土
縄文時代後期土器実測図 …… 87
Fig.64　Fトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (1) …… 88
Fig.65　Fトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (2) …… 89
Fig.66　Fトレンチ河川出土
縄文時代晩期土器実測図 (3) …… 90
Fig.67　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期土器
実測図 (4)、弥生時代前期土器・土師器
実測図 …… 91
Fig.68　Fトレンチ河川出土石器実測図 …… 92

第2屋内運動場新営に伴う発掘調査

Fig.69　調査区位置図 …… 109
Fig.70　調査区遺構配置図 …… 111
Fig.71　調査区壁面土層断面図 …… 113
Fig.72　大溝1・2土層断面図 …… 115
Fig.73　大溝2北半杭跡列実測図 …… 119
Fig.74　大溝2杭列実測図 …… 120
Fig.75　大溝3下層土坑状遺構実測図 …… 121
Fig.76　大溝出土縄文土器実測図 …… 122

Fig.77　大溝１・２・３及び大溝３下層土坑状遺構出土弥生土器実測図 …… 123
Fig.78　大溝出土石器実測図 …… 125
Fig.79　小溝５平面図 …… 128
Fig.80　小溝７平面図 …… 128
Fig.81　小溝５・７土層断面図 …… 129
Fig.82　小溝６土層断面図 …… 130
Fig.83　小溝８土層断面図 …… 130
Fig.84　小溝９土層断面図 …… 130
Fig.85　小溝等出土遺物実測図 …… 131
Fig.86　貯蔵穴実測図 …… 132
Fig.87　大土坑及び出土土器実測図 …… 132
Fig.88　近世用水路実測図 …… 133
Fig.89　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（1） …… 134
Fig.90　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（2） …… 135
Fig.91　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（3） …… 136
Fig.92　近世用水路出土陶磁器実測図（1） …… 138
Fig.93　近世用水路出土陶磁器実測図（2） …… 139
Fig.94　近世用水路出土陶磁器実測図（3） …… 140
Fig.95　近世用水路出土石製品・木製品実測図 …… 141

＜吉田構内の試掘調査＞

経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査

Fig.96　調査区位置図 …… 147
Fig.97　調査区遺構配置図 …… 149
Fig.98　トレンチ壁面土層断面図（1） …… 150
Fig.99　トレンチ壁面土層断面図（2） …… 151

実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査

Fig.100　調査区位置図 …… 153
Fig.101　トレンチ設定図 …… 154
Fig.102　トレンチ壁面土層断面図 …… 155

吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査

Fig.103　調査区位置図 …… 157
Fig.104　トレンチ設定図 …… 158
Fig.105　トレンチ実測図（1） …… 159
Fig.106　トレンチ実測図（2） …… 160

＜吉田構内の立会調査＞

Fig.107　調査区位置図 …… 161
Fig.108　調査区位置図 …… 162
Fig.109　調査区位置図 …… 163
Fig.110　調査区位置図 …… 164
Fig.111　調査区位置図 …… 165
Fig.112　調査区位置図 …… 165
Fig.113　調査区位置図 …… 166
Fig.114　調査区位置図 …… 166
Fig.115　調査区位置図 …… 167
Fig.116　調査区位置図 …… 167
Fig.117　調査区位置図 …… 168
Fig.118　調査区位置図 …… 168
Fig.119　調査区位置図 …… 169
Fig.120　調査区位置図 …… 169
Fig.121　調査区位置図 …… 170
Fig.122　調査区位置図 …… 170
Fig.123　調査区位置図 …… 171

Fig.124　調査区位置図 …… 171
＜小串構内の立会調査＞
Fig.125　調査区位置図 …… 172
＜亀山構内の立会調査＞
Fig.126　調査区位置図 …… 173
Fig.127　調査区位置図 …… 173
＜光構内の立会調査＞
Fig.128　調査区位置図 …… 174
＜その他構内の立会調査＞
Fig.129　調査区位置図 …… 175
Fig.130　立会地点詳細位置図 …… 175
付篇II
＜山口市内採集の縄文時代草創期石斧＞
Fig.131　縄文時代草創期石斧実測図 …… 188
付篇III
＜山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器＞
Fig.132　山口盆地北半の主要遺跡分布図 …… 190
Fig.133　湯田楠木町遺跡調査区位置図 …… 190
Fig.134　湯田楠木町遺跡出土の壺（1）…… 192
Fig.135　湯田楠木町遺跡出土の壺（2）…… 193
Fig.136　湯田楠木町遺跡出土の壺（3）…… 194
Fig.137　湯田楠木町遺跡出土の甕（1）…… 195
Fig.138　湯田楠木町遺跡出土の甕（2）…… 196
Fig.139　湯田楠木町遺跡出土の高坏 …… 197
Fig.140　湯田楠木町遺跡出土の
　器台・底部 …… 198
Fig.141　柳瀬遺跡LS005出土土器 …… 201
Fig.142　吉永遺跡III－東地区
　SB－5出土土器 …… 201
Fig.143　秋根遺跡LK093出土土器 …… 202
＜山口大学構内の調査区位置図＞
Fig.144　吉田構内地区割及び
　主な調査区位置図 …… 223
Fig.145　小串構内調査区位置図 …… 225
Fig.146　常盤構内調査区位置図 …… 227
Fig.147　亀山構内（幼稚園・小学校）
　調査区位置図 …… 229
Fig.148　亀山構内（中学校）
　調査区位置図 …… 231
Fig.149　光構内調査区位置図 …… 233

表　目　次

＜平成６年度山口大学構内遺跡調査の概要＞

Tab. 1　平成６年度山口大学構内遺跡調査一覧表 …… 1

＜吉田構内の発掘調査＞

グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

Tab. 2　出土遺物観察表（土器） …… 96

Tab. 3　出土遺物観察表（土製品） …… 106

Tab. 4　出土遺物観察表（石器・石製品）… 107

Tab. 5　出土遺物観察表（ガラス小玉） …… 107

第２屋内運動場新営に伴う発掘調査

Tab. 6　小溝一覧表 …… 126

Tab. 7　出土遺物観察表（土器） …… 144

Tab. 8　出土遺物観察表（石器・石製品）… 146

Tab. 9　出土遺物観察表（木製品） …… 146

付篇Ⅲ

＜山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器＞

Tab.10　出土土器観察表 …… 205

Tab.11　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 209

Tab.12　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 209

Tab.13　山口大学構内の主な調査一覧表 …… 210

第１章　平成６年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・亀山構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代の遺物が出土する小串構内など周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を行う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺での既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合いなどを勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の方法によって調査を実施している。

平成６年度は下記のように、事前調査3件、試掘調査3件、立会調査23件の計29件の調査を実施した。本年度は通常年度を大きく上回る調査を行うこととなったのであるが、これは平成５年度の第３次補正予算関連事業の繰越し分が、翌６年度の事業として組み込まれたためである。資料館では平成６年度中この対応に大変苦慮する結果となった。発掘調査は平成６年度中に全ての項目を終了したが、平成５年度事業報告のための整理作業は大幅に遅滞せざるを得なかったのみならず、平成６年度事業分の整理作業にはさらに通常を大幅に上回る期間を必要とすることとなった。

Tab.1　平成６年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積（㎡）	調査期間	挿図番号
事前	グランド屋外照明施設新設	吉田	E－20，F－21，G－18・22，H－19・20，I－21	496	5月９日～7月15日	Fig.144 No.149
	第２屋内運動場新営	吉田	G－15・16，I－15・16	726	7月16日～10月20日	Fig.144 No.150
	グランド屋外照明施設配線埋設	吉田	F－21，G－20・21，H－19・20	124	11月７日～12月２日	Fig.144 No.151
試掘	経済学部商品資料館新営	吉田	K－21，L－21	87.5	４月４日～４月22日	Fig.144 No.152
	実験廃液処理施設棟新営	吉田	H－12，13	2	４月25日～４月27日	Fig.144 No.153
	体育器具庫及び便所新営	吉田	G－17，H－17	60	10月３日～10月５日	Fig.144 No.154
立会	経済学部商品資料館仮設電柱設置	吉田	L－22，M－22・23	5	６月20日	Fig.144 No.155
	人文学部前駐車場整備	吉田	K－23，L－22・23	6	７月27日	Fig.144 No.156
	教育学部附属養護学校生活排水管改修	吉田	F－19	2	８月２日	Fig.144 No.157
	テニスコート改修	吉田	B－17，C－16・18，D－15～17，E－15・16	15	９月５日	Fig.144 No.158
	教育学部附属養護学校生活訓練施設棟新営	吉田	B－20～22，C－20	16	９月26日	Fig.144 No.159

調査区分	調　査　名	構内地区	構内地区割	面積（㎡）	調査期間	挿図番号
立会	陸上競技場整備（透水管埋設）	吉田	C－18，D－18・19	200	10月７日	Fig.144 No.160
	ハンドボール場改修（プレハブ設置）	吉田	K－22	30	10月20日	Fig.144 No.161
	野球場フェンス改修	吉田	H－22，I－21・22	3	10月20日	Fig.144 No.162
	基幹環境整備（ボイラー室配電板設置）	吉田	O－16	4	10月25日	Fig.144 No.163
	九田川河川局部改良	吉田	D－15，E－14・15	100	10月28日・1月11日	Fig.144 No.164
	第２屋内運動場仮設電柱設置	吉田	G－14・15	0.5	11月11日	Fig.144 No.165
	教養部水道管破裂修理	吉田	I－16	2	11月15日	Fig.144 No.166
	グランド屋外照明施設配線埋設	吉田	E－20，F－20～22，G－18・19・22，H－19，20，I－20・21	150	12月15・19・20日	Fig.144 No.167
	公共下水道接続（教育学部附属養護学校プール排水施設設置）	吉田	A－21	4	12月９日・1月20日	Fig.144 No.168
	サークル棟給水管埋設	吉田	F－14	1	12月16日	Fig.144 No.169
	プール新営給水管埋設	吉田	E－15，F－15・16	10	12月26日・2月15日	Fig.144 No.170
	公共下水道接続（汚水管雨水排水施設設置）	吉田	C－18	6	３月３日	Fig.144 No.171
	教育学部スロープ設置（音楽棟）	吉田	H－17	10	３月17日	Fig.144 No.172
	医学部附属病院MRI-CT装置棟新営	小串		300	３月24日	Fig.145 No.25
	教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設	亀山		3	11月10日	Fig.147 No.14
	教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設	亀山		7	１月27日	Fig.148 No.15
	教育学部附属光小中学校プール新営給排水管埋設	光		19	２月16日	Fig.149 No.16
	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	その他		44	１月13日・2月２・９日	

吉田構内の調査（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田1677－1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

事前調査3件、試掘調査3件、立会調査18件を実施した。

グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査では、吉田構内南西部に位置するサッカー・ラグビー場を囲むようにしてＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの６つのトレンチを設定した。このうちＢトレンチでは、弥生時代中期から後期にかけての4棟の竪穴住居跡を検出した。とくに、後期の2棟の竪穴住居跡からは、合計37個のガラス小玉が出土している。Ｂトレンチは、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡を多数検出した遺跡保存地区に隣接しており、これらは一連のものである。この他、Ａトレンチでは河川を検出し、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が多量に出土した。これは、昭和42年に吉田遺跡調査団が検出したものと同一の河川であると推定できる。また、Ｆトレンチの河川からは、縄文時代後期から晩期後半の土器・石器が出土した。なお、この工事では付随する配線の埋設工事も行われた。これについても事前調査を実施したが、本体部分工事に伴う事前調査と合わせ

て第２章で報告している。

第２屋内運動場新営に伴う発掘調査では、大小の溝と土坑を検出した。調査地は吉田構内の低地部にあたるが、調査地区の全域において青灰色及び黄灰色の安定したシルト層の地山を検出した。溝以外の遺構の検出が乏しく、若干の削平も考えられるとはいえ住居跡など直接生活と結びつく遺構の検出がなかったことは、吉田遺跡における土地利用を考える上での重要な手がかりとなろう。遺物は、大溝から弥生土器や石器が、用水路からは近世の陶磁器が多量に出土した。

経済学部商品館新営に伴う試掘調査では、古墳時代以前と考えられる河川を2条検出した。遺物の出土は極めて少なかった。実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査は小規模で、遺構・遺物の検出はみられなかった。体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査では、河川を検出したが出土遺物は土器1点のみで時期の特定はできない。

Fig.1　山口大学吉田・亀山構内位置図

立会調査はいずれも小規模で、グランド屋外照明施設配線埋設工事、公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う調査で遺物包含層を検出した以外は顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

亀山構内の調査 （教育学部附属山口幼稚園：山口市白石三丁目1−2、同山口小学校：白石三丁目1−1、同山口中学校：白石一丁目9−1所在）

立会調査2件を実施した。附属小学校、附属中学校ともにプール新営に付随する給水管埋設工事に伴うものでいずれも小規模の調査である。附属中学校で河川の一部と考えうる土層を確認したが、他に顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

Fig.2　山口大学小串・常盤構内位置図

小串構内の調査 (医学部、同附属病院、医療技術短期大学部：宇部市大字小串1144所在)

立会調査1件を実施した。顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

光構内の調査 (教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字室積浦1−1所在)

立会調査1件、プール新営工事に付随する給水管埋設工事に伴う調査を実施した。現地表下30～55cmに遺物包含層と考えられる土層を確認した。ここからは、土器の小片が少量出土した。

Fig. 3　山口大学光構内位置図

その他構内の調査

山口市湯田温泉６丁目に所在する山口大学湯田温泉宿舎敷地で、公共下水道接続及び排水施設改修工事に伴い、立会調査一件を実施した。当地は過去に2回ほど立会調査が行われている。今回の調査では、昭和61年度の調査で確認された敷地南西部分の地山に引き続き、敷地北辺部分で地山を検出し、宿舎全域に安定した地山の存在が想定できるようになった。

第２章　吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

第１節　調査の経過

平成５年度の補正予算により、サッカー・ラグビー場における夜間照明施設設置の計画が本格化した。サッカー・ラグビー場の広大な敷地、南北140m、東西170mの範囲を照明するには、グランドの四隅及び中央両端の計6ヶ所に照明塔の設置を必要とした。計画された照明塔の高さは24mと大規模なもので、それを支える基礎の掘方は10m×10mを必要とした。また、6ヶ所の照明塔への電気配線が必要であり、高圧線のため現地表面から少なくとも50cmは掘り込まねばならなかった。

サッカー・ラグビー場付近は、かつて山口大学吉田遺跡調査団が第Ⅲ地区の南区・北区と呼んで重視した地区である[1]。特に、北区はサッカー・ラグビー場の東隣接地にあって、現在は遺跡保存地区となっている。遺跡保存地区は山口大学吉田遺跡調査団が昭和42年に、山口大学埋蔵文化財資料館が昭和57[2]・59[3]・60・61年度[4]に調査を実施し、弥生時代中期前半から古墳時代中期の竪穴住居跡21棟、その他にも土坑や柱穴を多数検出している。これらの調査により、微高地上に弥生時代から古墳時代中期の集落が形成されていたことが明らかになった。そしてその重要性から、本地は遺跡保存地区として遺構の保存措置が取られた。しかし、集落は遺跡保存地区にとどまらず北西方向に展開しており、埋蔵文化財資料館が昭和56年度に実施した教育学部棟新営に伴う発掘調査[5]では、弥生時代後期の住居跡を4棟検出している。また昭和58年のラグビー場防球ネット新営工事に伴う発掘調査[6]でも古墳時代の住居跡を検出している。以上の調査結果から、サッカー・ラグビー場の北東、保存地区から北西の教育学部棟一帯は、微高地が発達し弥生時代から古墳時代にかけての遺構密度の高い地区であることが認識されていた[7]。

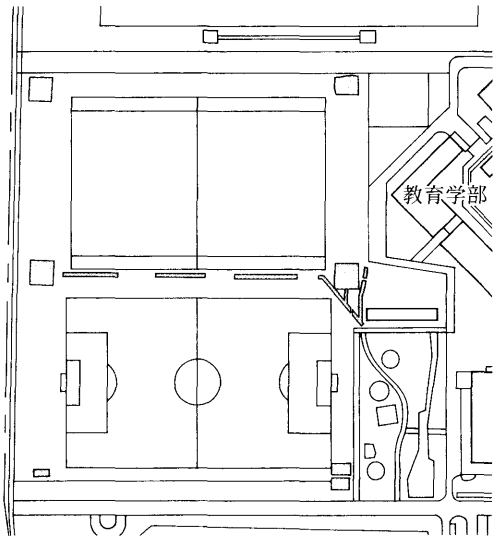


Fig.4　調査区位置図

一方、山口大学吉田遺跡調査団が南区と呼んだ構内南門周辺では、多量の土器を含んだ弥生時代の河川が検出されている。遺跡保存地区の微高地に対して、南門周辺に

は低地が広がり、幾筋もの河川のあることが予想された。

埋蔵文化財資料館運営員会の協議の結果、調査が必要であるという判断が下された。これを受け、埋蔵文化財資料館が発掘調査を実施することになった。工事は照明塔部分が先に行われ、その完成後に配線工事が行われるため、発掘調査は照明塔部分と配線部分について、調査期間を変えて行う変則的なものとなった。

照明塔部分については、5月9日から7月15日まで調査を実施した。照明塔はグランドの周囲6ヶ所に設置された。サッカー・ラグビー場の北東辺に沿った3つの照明塔部分を東側からA・B・Cトレンチとし、南西辺に沿った3つの照明塔部分を東側からD・E・Fトレンチとする。6つの調査区では、様相が大きく異なった。

照明塔配線部分については、11月7日から12月2日まで調査を実施した。配線部分においては、先に行った照明塔部分の調査により地下データが得られていたため、それを基に関連部局との協議を行い、グランド側溝工事などに伴う既掘部分への配線埋設を行うよう要請し、埋蔵文化財への影響を最小限に食い止める配慮がなされた。その結果、サッカー・ラグビー場の南西辺に沿った配線部分については、遺構面及び遺物包含層が深く、工事による埋蔵文化財への影響はないと考えられたため、埋蔵文化財資料館の立会のもと掘削を許可した。北東辺の配線部分は、グランド側溝やネット基礎などの既掘部分に沿った路線に変更し、掘削に際しては埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。

一方、グランドの中央を北東－南西に貫く配線については、照明塔部分のBトレンチとEトレンチの調査で、グランド中央を北東－南西に貫く近世暗渠のあることが判明しており、その暗渠掘削部分に沿った配線埋設を要請した。それでもなお、遺構面及び遺物包含層に影響が及ぶため発掘調査を実施した。この中央配線部分は全長が110mと長く、調査区の間に陸橋部を設けた。この陸橋部や調査区の方向、または旧地形の変化から、調査区をA1・A2・B・C・D・E・F・G区に8区分した。このうち、A1～D区までは照明塔Bトレンチの周囲に配しており、検出した遺構は一連のものであることから、Bトレンチと合わせて説明を行う。

なお、照明塔のBトレンチにおいて検出した3棟の竪穴住居跡の保存を検討するために、埋蔵文化財資料館運営委員会が再び招集された。関連部局と協議の結果、竪穴住居跡を避けたBトレンチ内の南東側で、矢板を打ち込む工法への変更により遺跡の破壊面積を縮小して、照明塔の基礎工事が行われることになった。

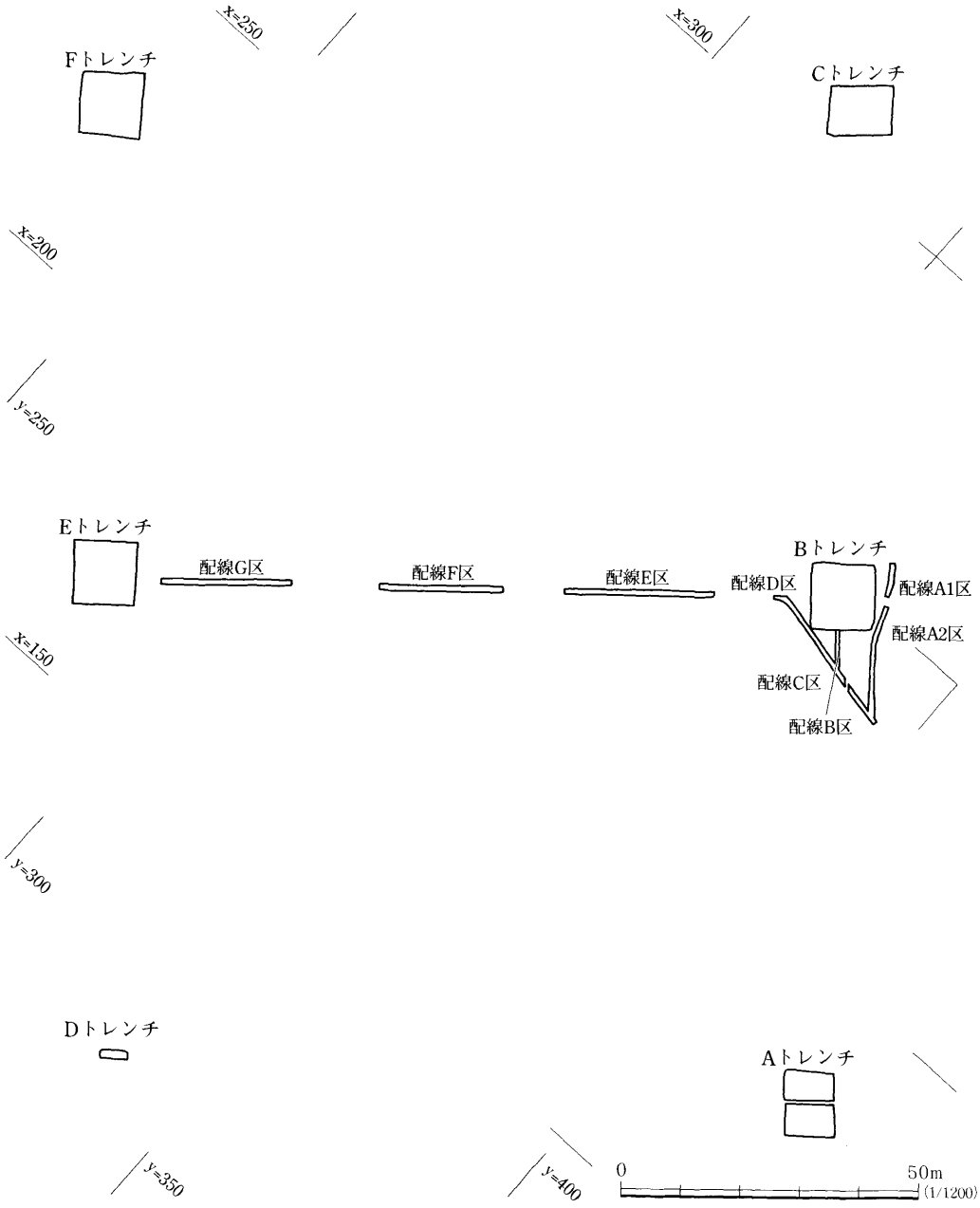


Fig.5　トレンチ配置図

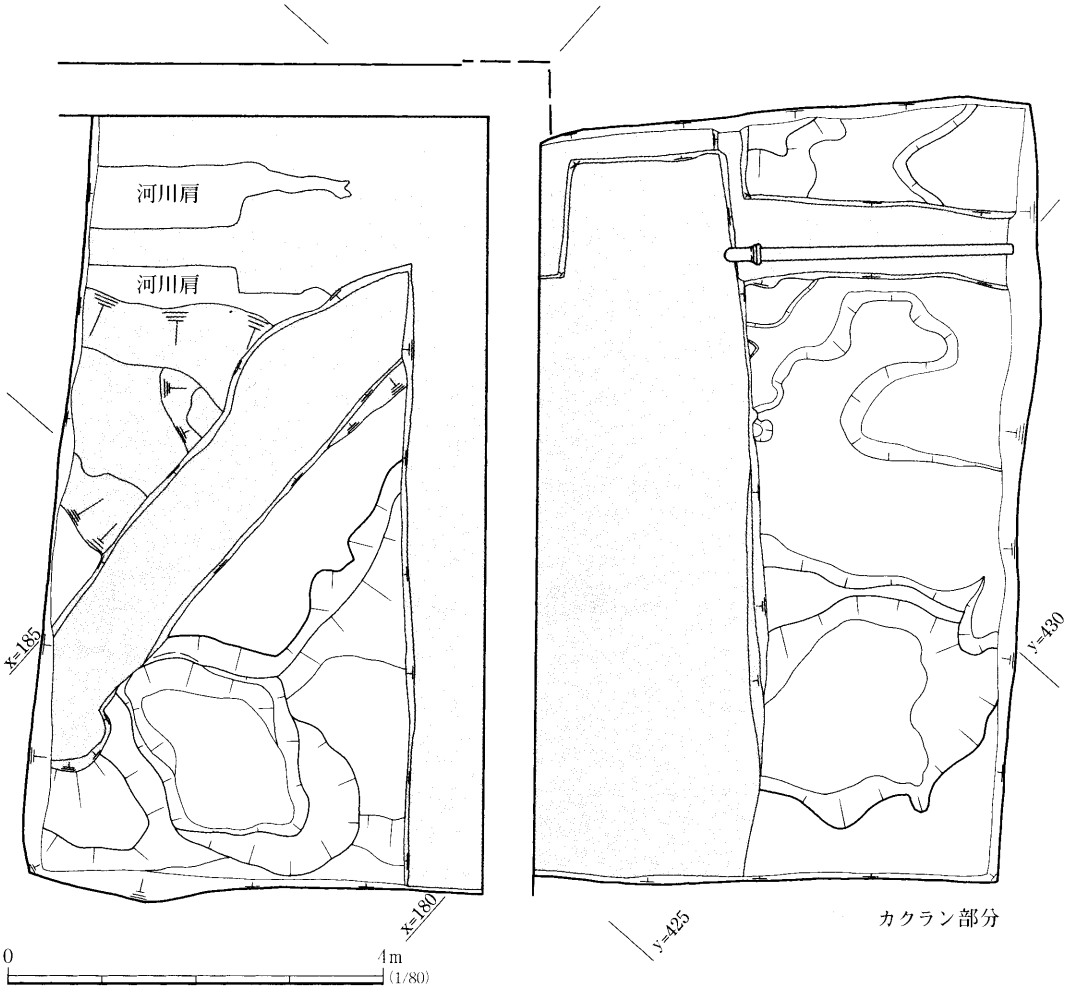


Fig.6　Aトレンチ遺構配置図

第2節　遺構

1　Aトレンチ（Fig.6・7, PL.2・3）

Aトレンチは、遺跡保存地区の南側に接して設定した8m×10mのトレンチである。造成土の直下が河川堆積土で、上下の厚い明黄色礫層が中層の黒灰色シルト層を密閉していた。この黒灰色シルト層は、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土器を多量に含んでいた。調査は5月9日から5月30日まで実施し、終了とともに埋め戻した。

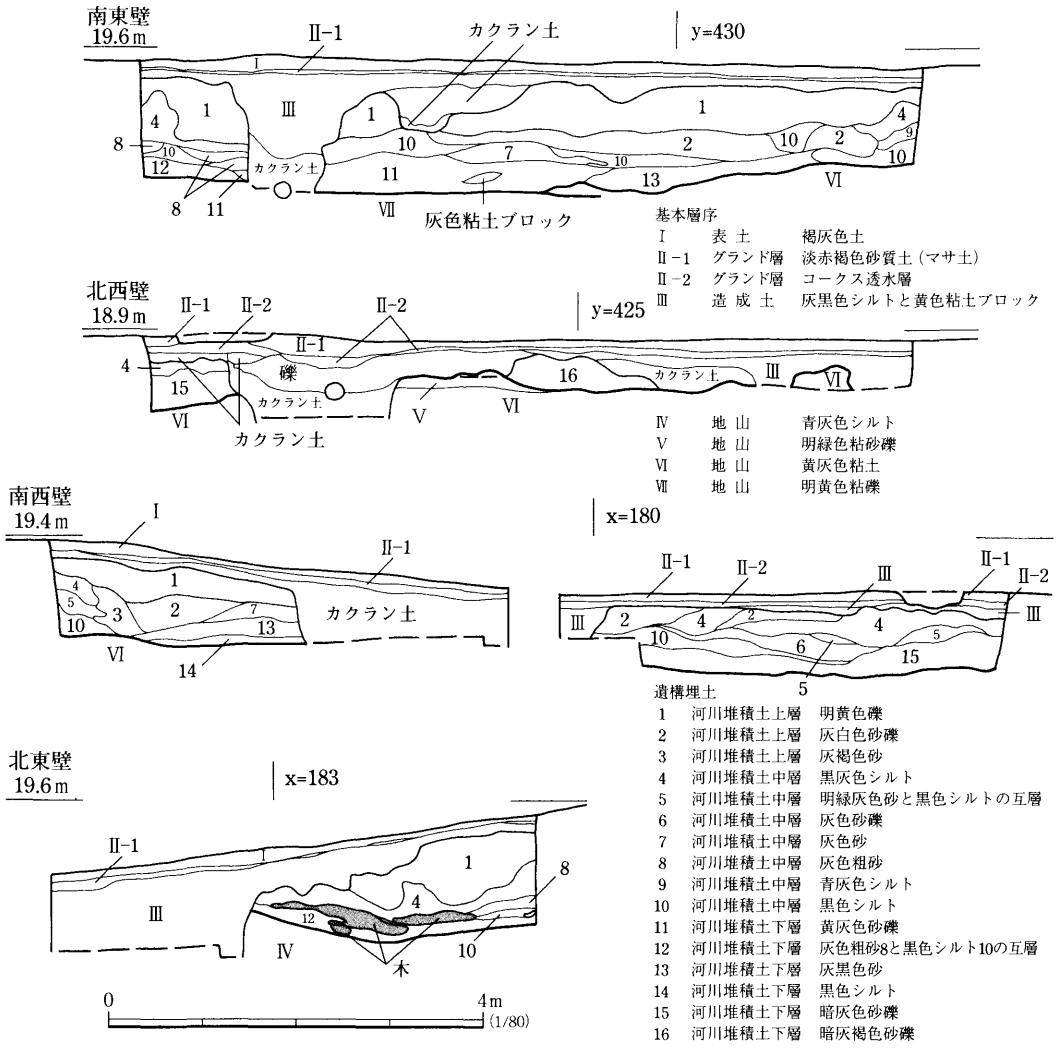


Fig.7 Aトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

本トレンチ内においては、薄い表層土の直下は河川堆積土であった。グランドから一段上がった南門道路の法面部分において、表層土直下から検出した厚さ約50～60cmに渡る明黄色礫は河川の最終堆積土と考えられる。礫の大きさから、突発的な大水がもたらしたものと推測できる。この層から遺物は一切認められなかった。この明黄色礫に密閉されていたのが、中層の黒灰色シルトである。植物遺体と共に、多数の土器片が出土した。下層は砂礫層であるが、土器はほとんど含まない。地山は黄灰色粘土あるいは青灰色シルトを主とし、一部明緑色・明黄色の粘砂礫が認められた。

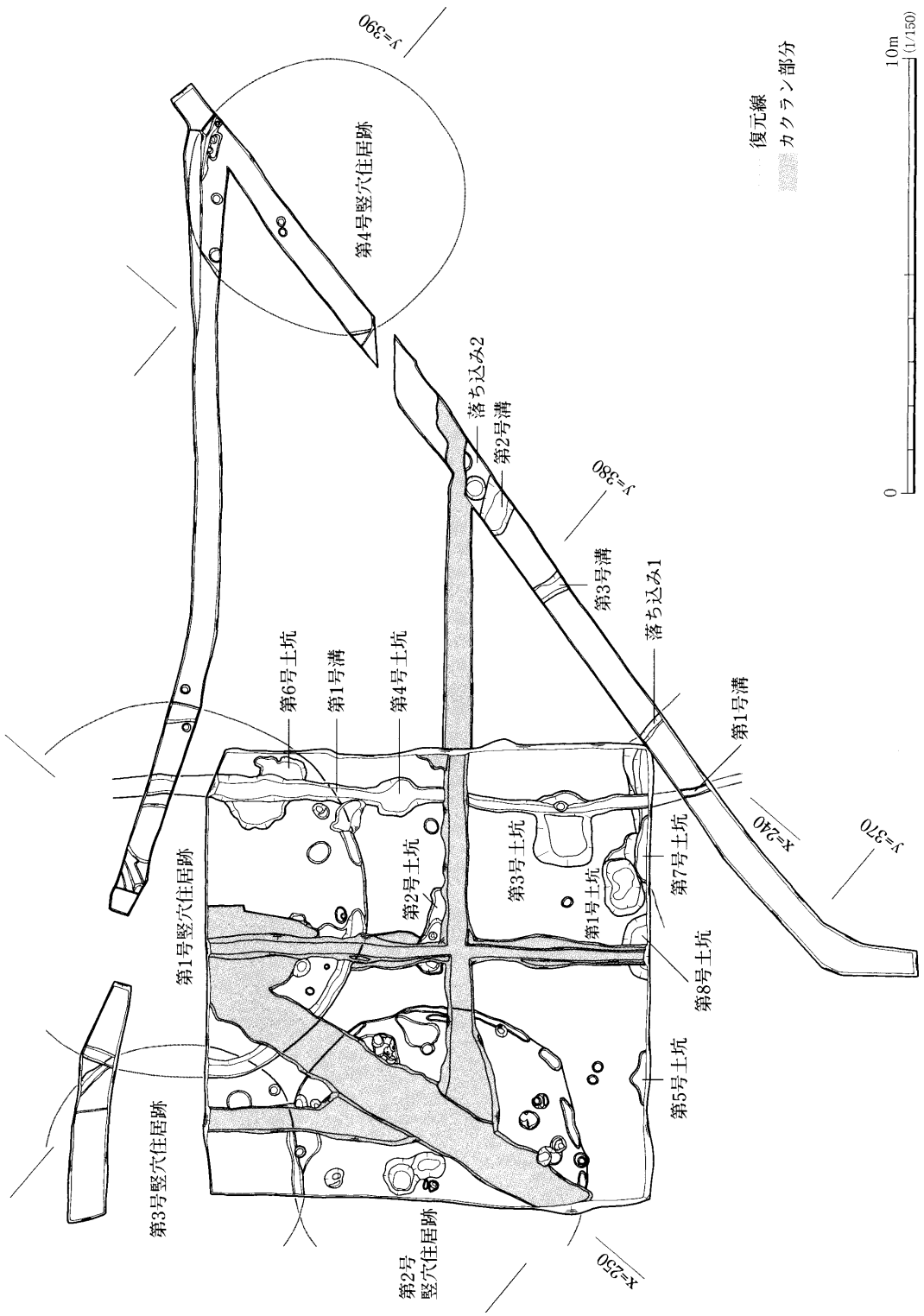
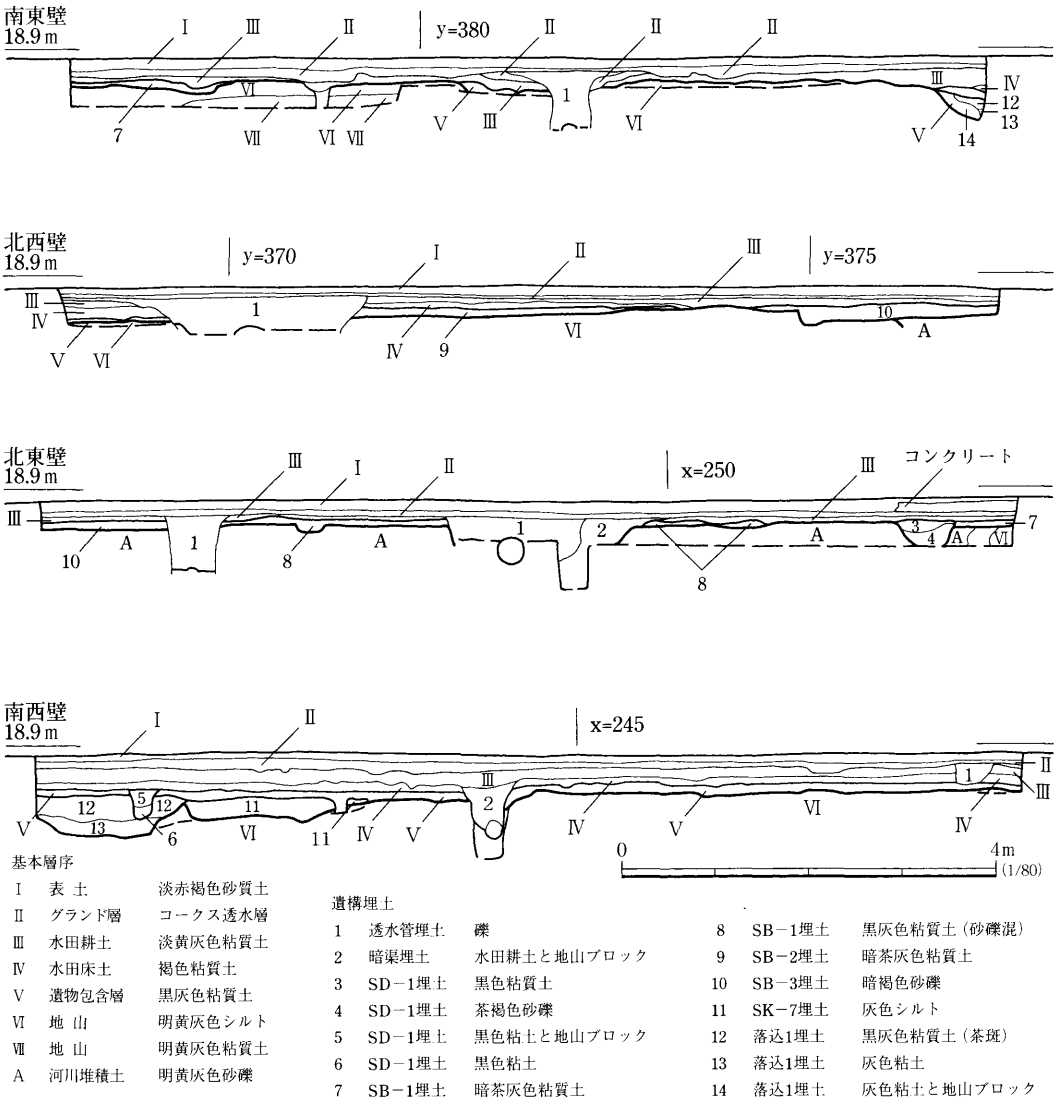


Fig.8　Bトレンチ、配線トレンチ遺構配置図



基本層序

Ⅰ	表 土	淡赤褐色砂質土
Ⅱ	グランド層	コークス透水層
Ⅲ	水田耕土	淡黄灰色粘質土
Ⅳ	水田床土	褐色粘質土
Ⅴ	遺物包含層	黒灰色粘質土
Ⅵ	地 山	明黄灰色シルト
Ⅶ	地 山	明黄灰色粘質土
A	河川堆積土	明黄灰色砂礫

遺構埋土

1	透水管埋土	礫	8	SB－1埋土	黒灰色粘質土（砂礫混）
2	暗渠埋土	水田耕土と地山ブロック	9	SB－2埋土	暗茶灰色粘質土
3	SD－1埋土	黒色粘質土	10	SB－3埋土	暗褐色砂礫
4	SD－1埋土	茶褐色砂礫	11	SK－7埋土	灰色シルト
5	SD－1埋土	黒色粘土と地山ブロック	12	落込1埋土	黒灰色粘質土（茶斑）
6	SD－1埋土	黒色粘土	13	落込1埋土	灰色粘土
7	SB－1埋土	暗茶灰色粘質土	14	落込1埋土	灰色粘土と地山ブロック

Fig.9　Bトレンチ壁面土層断面図

2　Bトレンチ（Fig.8～11, PL.4）

Bトレンチは、保存地区の南西側（グランドの北辺中央にあたる）、クラブハウス前に設定した10m×10mのトレンチである。グランド層直下が竪穴住居跡の遺構検出面であり、削平の著しさを窺わせた。調査は5月9日から7月15日まで実施した。また、周囲の配線トレンチA1・A2・B（透水管による撹乱内に設置した）・C・D区からは、Bトレンチと一連の遺構が検出されているため、合わせて報告を行う。

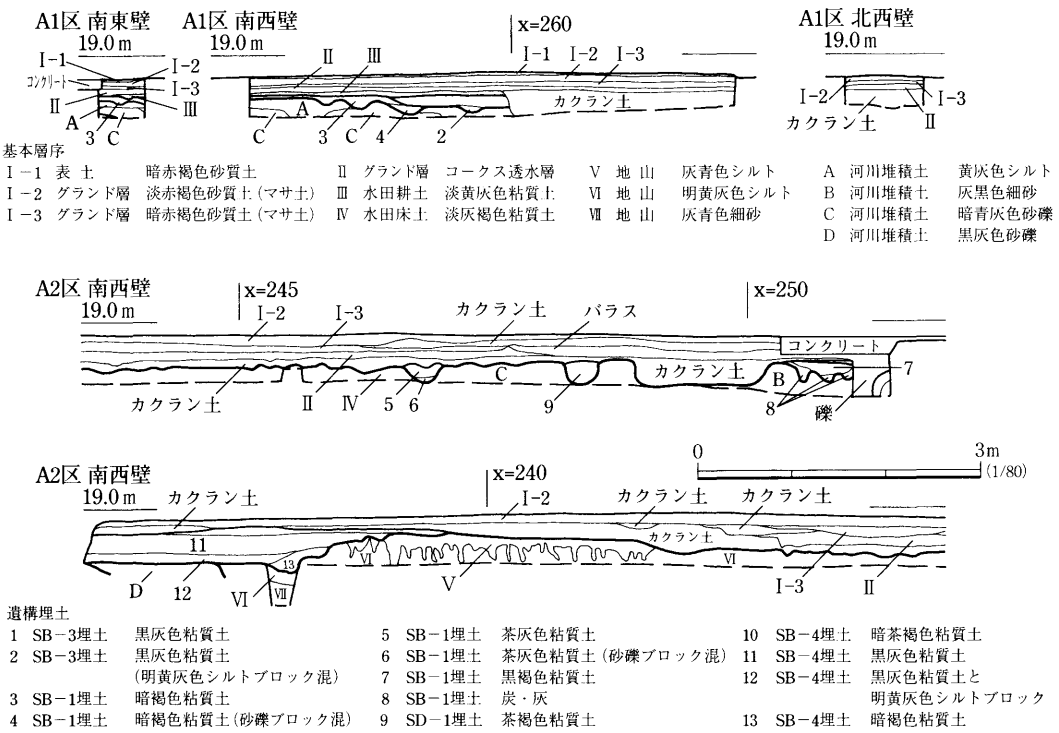


Fig.10 配線トレンチA区壁面土層断面図

(1) 層序

Bトレンチの北東側では、グランド層の直下に数cmの水田層が残されているだけで、すぐに第Ⅵ層：明黄灰色シルトの地山となる。南西にゆくにしたがい地形は落ち込み、厚くなった水田層下で、第Ⅴ層：黒灰色粘質土の遺物包含層が認められた。

この土層堆積状況は、配線トレンチ内においても同様であった。北東側のA1・A2区では水田層はほとんど残っておらず、グランド層の下は撹乱層を挟んで、河川堆積土の明黄灰色砂礫及び地山と考えられる第Ⅵ層：明黄灰色シルト（上面標高約18.5m）となる。しかし、撹乱をまぬがれたA2区の東側では、標高18.7mで第Ⅴ層：灰青色シルトを検出していることから、本来第Ⅵ層の上には第Ⅴ層が広く堆積していたと考えられる。実際、地形が落ち込んだC区では、第Ⅴ層：灰青色シルト（上面標高約18.5m）及び第Ⅵ層：明黄灰色シルト（上面標高18.4m）の上下2層の堆積を確認している。また、C区では撹乱の少ない部分で水田層を確認することができた。C区は南西側のD区に向かって深く落ち込んでいる。D区では地山層を確認しておらず、配線トレンチのD区からE区中央にかけては、大きな谷地形があったと想定される。

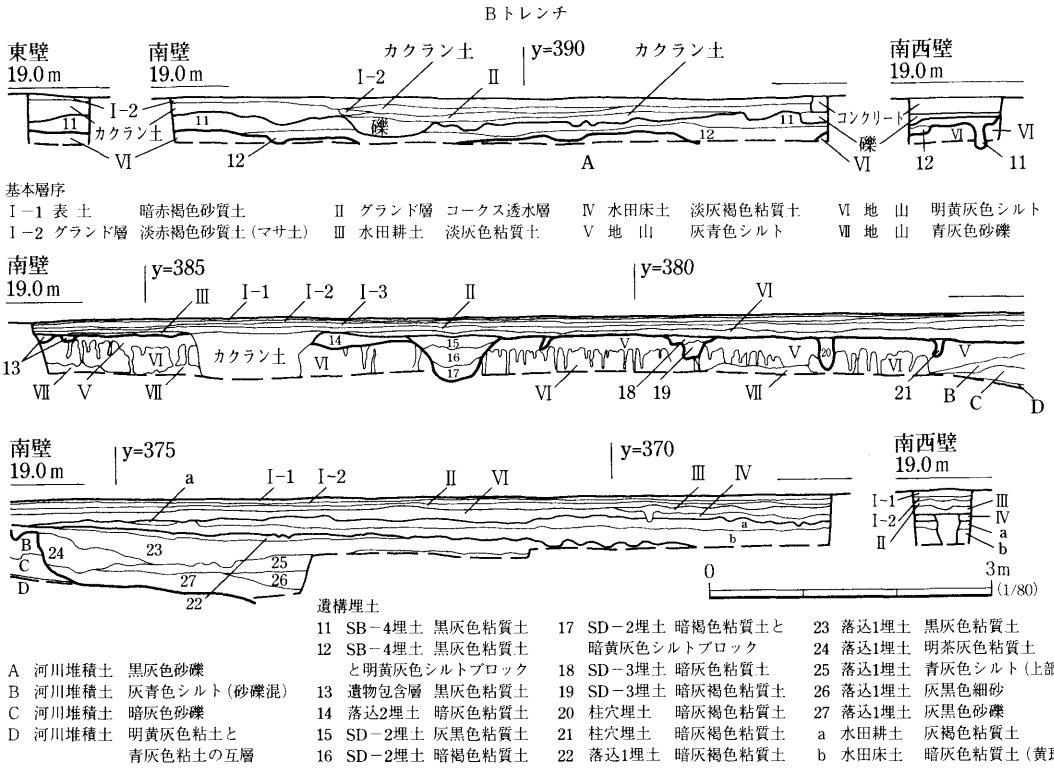


Fig.11 配線トレンチC・D区壁面土層断面図

これらのことから、Bトレンチ付近は微高地から低地への変換域にあたり、その南西側は大きく落ち込み、北東側の微高地は後世に著しい削平を受けていることが判明した。

(2) 遺構

河川 (PL.10)

Bトレンチの北東辺に沿って検出した。弥生時代の遺構検出面となる第VI層：明黄灰色シルトと同一面上の標高約18.5mで、河川堆積層と考えられる明黄灰色砂礫の広がりを認めた。この明黄灰色砂礫の際に沿うように堆積し、明黄灰色シルトよりやや色調の薄い淡黄灰色シルトから縄文時代晩期中葉の土器を検出した。淡黄灰色シルトは下層になるにつれ、明黄灰色粘質土へと変化していた。明黄灰色粘質土層は無遺物層であるらしく、この層こそが本来の河川肩部と考えられた。おそらく、明黄灰色砂礫が河川本流の堆積土であり、淡黄灰色シルトは河川肩部の堆積土であろう。

明黄灰色砂礫の検出状況から、河川は南東から北西に流水していたと考えられる。検出したのは南肩部で、北肩部は調査区外にあるため、河幅は不明である。深さも、河床面を確認していないので不明である。給水管による撹乱が河川上面から深さ約40cmに及ぶが、河川の堆積土内にとどまる。明黄灰色砂礫層からは縄文土器小片がわずかに出土した。

第１号竪穴住居跡（Fig.12, PL.5・6）

Ｂトレンチの北東部と配線トレンチで検出した、直径約8.4mの円形竪穴住居跡である。Ｂトレンチには住居跡の西側約1/3がかかり、住居跡の東側は配線トレンチで周溝の南北両端を検出したことから推定している。Ｂトレンチで検出した住居跡西側部分は、給水管とグランド透水管、弥生時代後期終末の第１号溝によって著しい撹乱を受ける。また、住居跡の北西側は、第３号住居跡に切られているが、周溝には撹乱が及んでいない。住居跡検出面の標高は18.52mである。住居跡の基盤となる土層は、明黄灰色シルトと明黄灰色砂礫である。これは河川堆積土上に竪穴住居を掘り込んだことによるもので、明黄灰色砂礫が河川本流部分の堆積土である。住居跡の埋土は一様ではなく、黒灰色粘質土を主としながら、基盤土層が明黄灰色砂礫の部分は砂礫を多く含む。

本住居跡は上面の削平が著しく、Ｂトレンチで辛うじて約5cmの周壁立ち上がりが検出できた。配線トレンチ南側では削平が床面にまで及び、下層の河川堆積土が露出している。土色は若干にごっているが、踏み込みなどによるものであろう。床面標高は、Ｂトレンチで18.47m、配線トレンチで18.58mである。床面は自然地形と同じく、北東から南西にむかってやや傾斜していたと考えられる。周溝が巡るが、南側の一部が途切れており、出入口の可能性がある。周溝は幅約30cm、床面からの深さが約10cmである。周溝底面の標高は、Ｂトレンチで18.35m、配線トレンチで18.40mを測る。周溝も床面と同様に、北東から南西にむかって傾斜がつけられていたと考えられる。柱穴は住居跡内において8基検出した。これらは平面形が円形あるいは楕円形を呈し、直径20～40cmと大きさに問題はないが、床面からの深さが10～25cmといずれも浅い。

炉については、配線トレンチにおいて炭・灰が充填した不定形な落ち込みを検出しており、可能性がある。ただし、この炉跡と考えられる落ち込みは、上面を溝状の遺構に、北側をグランド透水管によって撹乱されており、検出したのは東肩にとどまる。したがって平面形態については不明である。深さは、住居跡床面から約17cmである。

遺物は、住居跡埋土より、小片ではあるが弥生時代後期の土器が出土している。また、周溝の上面からは滑石製紡錘車が出土した。なお、埋土を水洗選別したところ19点のガラス小玉を検出した[8)]。しかし、石器及び剥片を見いだすことはできなかった。

本住居跡の時期は、滑石製の紡錘車を伴うことや石器が消失していることから、出土土器が示すとおり弥生時代後期に比定できる。また、弥生時代後期終末の特徴を持ったタタキ甕を含む第１号溝に切られることから、終末以前の弥生時代後期と考えられる。

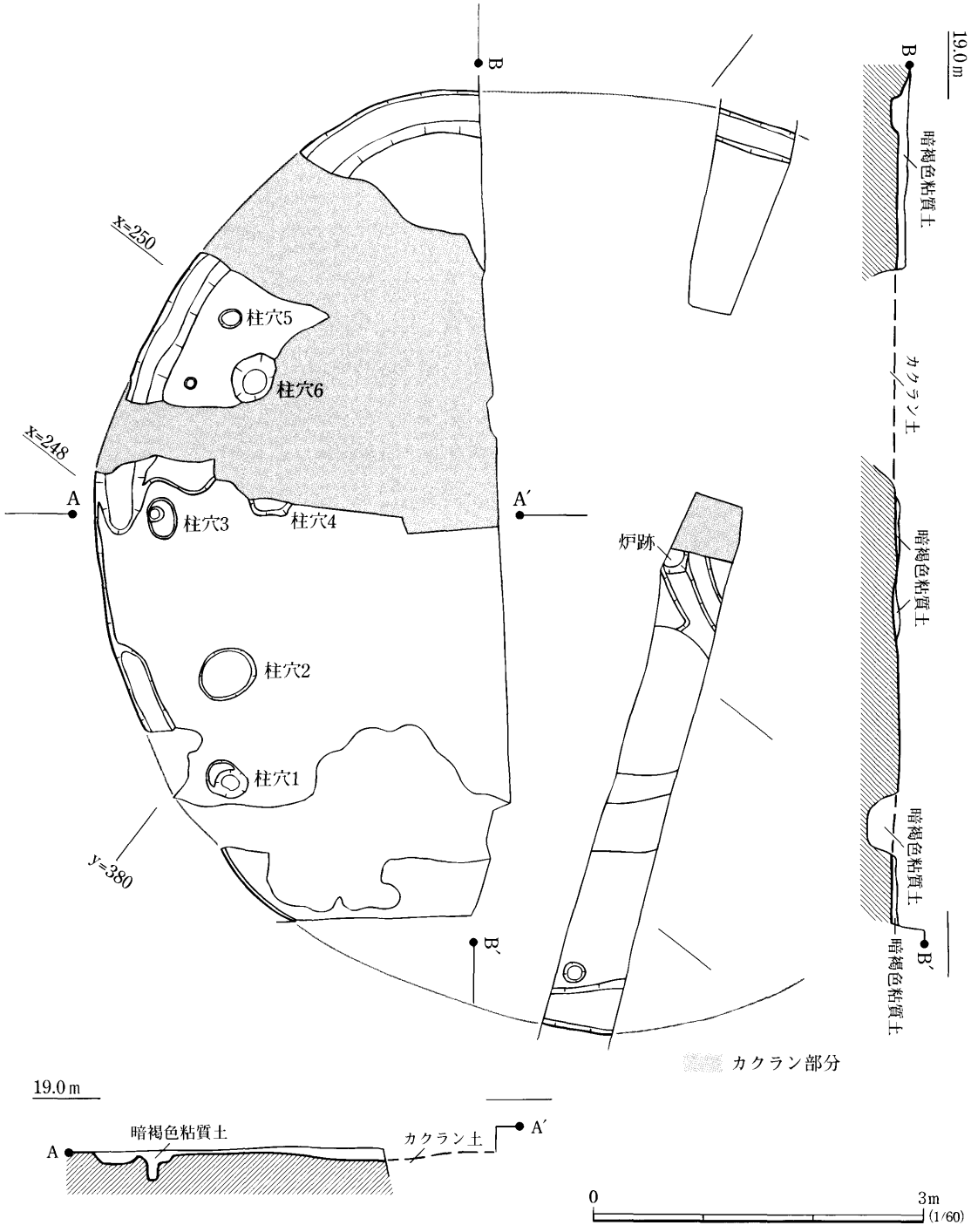


Fig.12　Bトレンチ第1号竪穴住居跡実測図

第２号竪穴住居跡（Fig.13, PL.7・8）

Ｂトレンチの北西辺で検出した、直径約7.2mの円形竪穴住居跡である。住居跡の西半分は調査区外にある。検出した住居跡の東半分は、給水管と透水管によって著しい撹乱を受けていた。北側は第３号竪穴住居跡によって切られており、当初この第２号竪穴住居跡に伴うと考えた北側周溝は、最終的には第３号住居跡に伴うものと判断した。本住居跡の検出標高は18.54ｍであるが、著しい削平のため周壁は残っておらず、周溝のみを検出している。しかし、その周溝も断続的にしか検出できず、削平が周溝底面直上にまで及んでいることを示している。ただし、後世の水田による削平は、住居跡の北側のみであり、住居跡の南側上部には遺物包含層の堆積が認められた。遺物包含層は、弥生土器の他、土師器を含んでいた。第２号住居跡はかなり早い段階（おそらく古墳時代）に削平を受けていたことが窺える。住居跡の検出面となる土層は、第Ⅵ層：明黄灰色シルトである。

検出した床面には、第１号住居跡と同様のにごりが認められた。床面の明黄灰色シルトに、黒灰色粘質土がブロック状に混じっている。おそらく、生活面として使用され、踏み込まれた結果であろう。周溝は検出面から2～6cmの深さである。削平を受け周溝が浅くなる部分があり、また断続的である。住居跡の東側では周溝の一部が二重になる箇所がある。柱穴は住居跡内において13基検出しているが、このうち主柱穴になると考えられるものが8基である。ただし、このうちの6基については、2ヶ所でそれぞれ3基ずつが切り合っている。建て替えを示すものであろう。これらの柱穴は、いずれも平面形が円形を呈し、直径は30～40cm、深さは検出面から30～60cmである。

住居跡中央付近において炭・灰層の広がりを確認した。掘り下げた結果、2基の土坑と、浅い柱穴状の落ち込みとなった。このうち浅い柱穴状の落ち込みの性格については不明である。2基の土坑は炉跡と考えられ、浅い柱穴状の落ち込みについても、上面が削平された炉跡の可能性がある。炉跡１（北側の土坑）は長軸80cm、短軸70cmを測り平面形は円形に近い。深さは検出面から約20cmである。炉跡２（南側の土坑）は長軸75cm、短軸56cmを測り平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から約20cmである。両者とも埋土は2層からなり、上層は茶灰色粘質土で下層は炭・灰である。周溝は二重になる部分があり、柱穴も切り合いがあることから、本住居跡は最低2回の建て替えが行われたと考えられる。

遺物は、削平が床面にまで及ぶため極めて少ない。したがって本住居跡の時期について、出土遺物からは明らかにできないが、第３号住居跡に切られることから、弥生時代後期以前のものと考えられる。

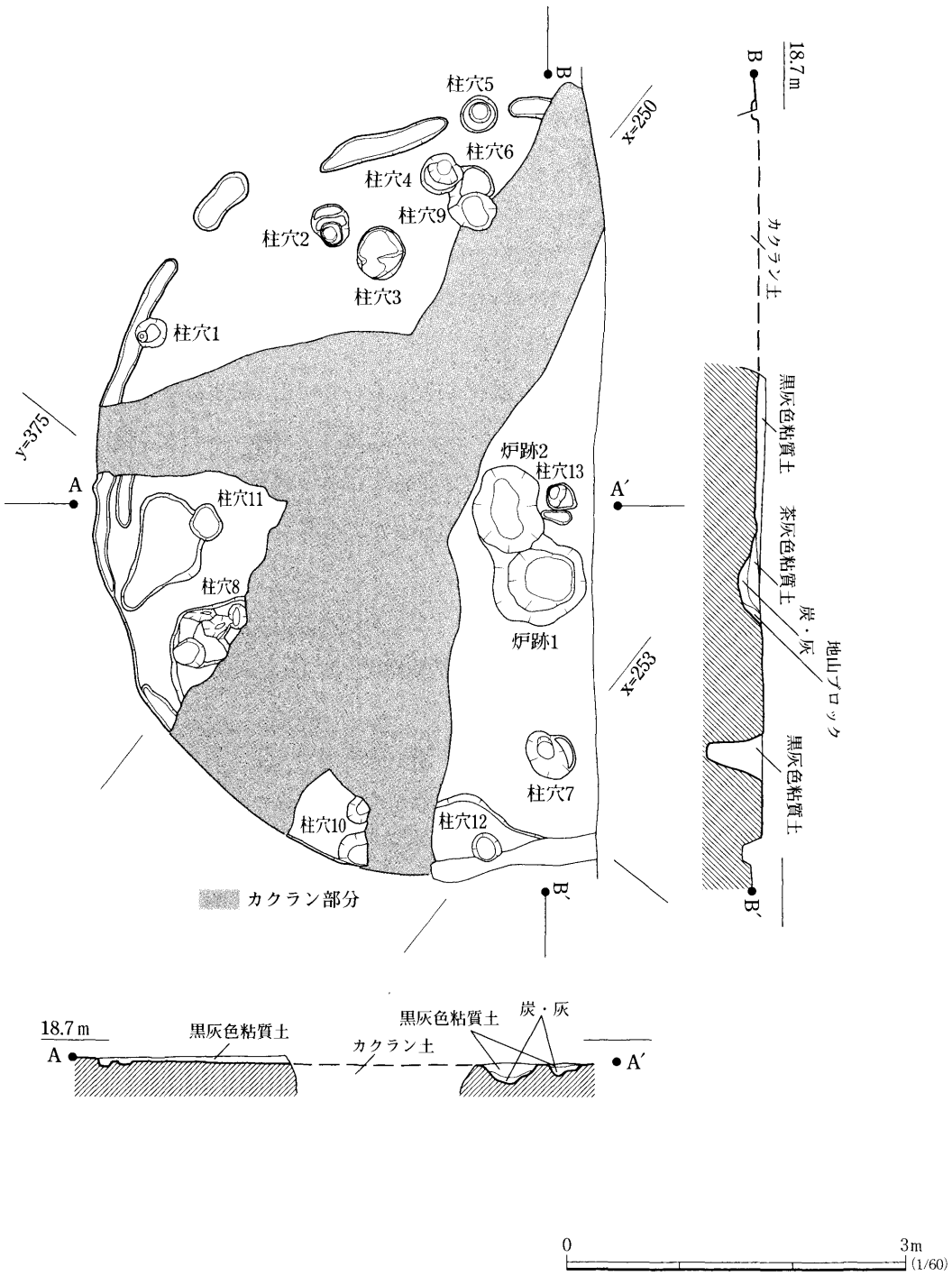


Fig.13　Bトレンチ第2号竪穴住居跡実測図

第３号竪穴住居跡（Fig.14, PL.9 (1) (2)）

Ｂトレンチの北隅と配線トレンチで検出した、推定直径約6.0mの円形竪穴住居跡である。第１号竪穴住居跡と第２号竪穴住居跡を切り込んでいる。検出当初、第３号住居跡の周溝を第２号住居跡のものと考えたため、第３号住居跡を落ち込み状遺構ととらえ、住居跡としての検出を行っていない。しかし、平坦な床面や多数のガラス小玉の出土、その後に行った配線トレンチの調査結果から、住居跡と判断するに至った。配線トレンチでは、住居跡北側の大半が撹乱を受けていた。検出標高は18.54mである。河川堆積土である明黄灰色砂礫（部分的に暗青色砂礫層）を検出面とする。

床面の標高は18.46mであり、高さ約10cmの周壁を残していた。埋土は暗褐色砂礫である。周溝はＢトレンチでの第２号住居跡との切り合い部分と、配線トレンチで検出している。周溝幅は約20cmを測り、床面からの深さは約5cmである。周溝底面の標高は18.35mである。Ｂトレンチでは住居跡内で柱穴を2基検出したが、両者とも主柱穴になるとは考えられない。

遺物は、弥生時代後期の土器とともに、ガラス小玉が18点出土している。本住居跡の時期は、第１号竪穴住居跡を切ることから、弥生時代後期でもやや下がると考えられる。

第４号竪穴住居跡（Fig.14, PL.9 (3) (4)）

配線トレンチで検出した推定直径約6.3mの円形竪穴住居跡である。調査区の幅が狭いため、北東の周壁及び周溝と、西の周壁を検出したにすぎない。また、北東の周壁部分のほとんどは、給水管によって撹乱されていた。検出標高は18.52mである。基盤となる土層は明黄灰色シルトであるが、住居跡の中央部分は明黄灰色シルトを切り込んだ黒灰色砂礫が基盤となっている。弥生時代以前の河川堆積土であろう。

床面の標高は18.44mである。床面からの周壁の立ち上がりは、Ｂ区では約8cmであるが、Ａ2区では20cm近くを測る。埋土は黒灰色粘質土であるが、基盤層上面において厚さ約10cmに渡る黒灰色粘質土と明黄色灰色シルトのブロック土を検出している。貼り床とも考えられるが、周溝埋土との切り合いを観察する限りにおいて、このブロック土は周溝の埋土である暗褐色粘質土を覆っていた。第１号・第２号住居跡と同じく床面のにごりの可能性が強い。周溝を検出したのはＡ2区の南端部である。Ｃ区においては、周壁の立ち上がりを確認したが、周溝は認められなかった。周溝は幅約20cmで床面からの深さが約5cmであった。周溝底面の標高は18.40mである。住居跡内において4基の柱穴を検出した。弥生時代中期後半の土器片が出土している。

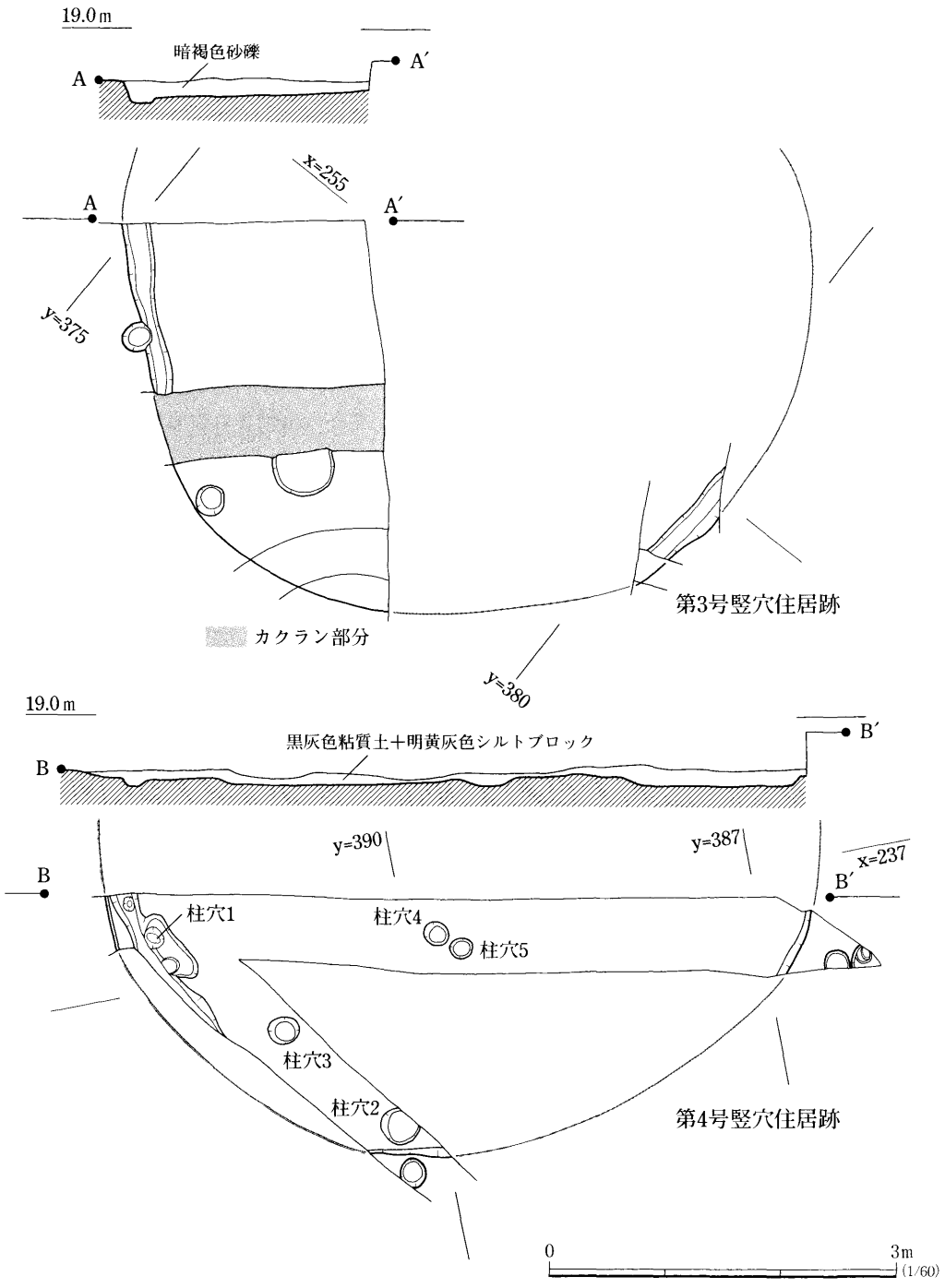


Fig.14　Bトレンチ第3・4号竪穴住居跡実測図

第１号溝（Fig.15, PL.11）

第１号溝は北東－南西に軸をもつ溝である。Ｂトレンチで検出した弥生時代後期の第１号竪穴住居跡の埋土上面から切り込まれている。Ｂトレンチを中心として、配線トレンチのＡ2区及びＣ区で検出しているが、溝はさらに調査区外へと延びている。溝幅40～60cm、調査区内での延長12.9mを測る。北東側の底面標高は18.3mであるのに対し、南西側の底面標高は18.1mとやや低く、溝幅は北東側が約60cm、南西側が約40cmを測る。自然地形の傾斜方向から、北東から南西への流路方向が考えられる。第６号土坑の西に隣接した溝の底面には、甕が口縁部を下にして置かれていた。この甕や、他に出土した土器片の特徴は、弥生時代後期終末を示している。

本溝は、弥生時代後期の第１号竪穴住居跡が埋没してから掘削されたと考えられる。性格は不明であるが、北東側は微高地がさらに高くなっていると考えられ、そこにある住居跡の排水路であろうか。

第３号土坑（Fig.15, PL.12 (1) (2)）

Ｂトレンチの西側で、第１号溝に連結した状態で検出した隅丸方形の土坑である。規模は、長軸1.8m、短軸1.2mを測る。検出面の標高は18.5m。土坑の底面標高は18.28mである。土坑内の第１号溝の底面標高は18.22mと、溝底面のほうが土坑底面よりやや深い。また、土坑内の溝中央部には柱穴があった。柱穴の底面標高は18.1mである。埋土は2層からなり、第１層：黒色粘質土、第２層：黒灰色粘質土である。埋土の検討により、溝と土坑の間に切り合いを認めたが、一連のものである可能性も高い。

出土遺物にはタタキ甕胴部片があり、土坑の機能時期は第１号溝と同じく弥生時代後期終末と考えられる。性格は不明である。

第４号土坑（Fig.15, PL.12 (3) (4)）

Ｂトレンチ内の第１号溝のほぼ中央で検出した不定形な土坑である。第１号溝が幅90cmほどに広がる土器溜まりの可能性もある。底面においても幅は広がっているが、底面の標高は溝と同じである。埋土は２層からなり、第１層：灰黒色粘質土、第２層：暗茶灰色粘質土であるが、溝の埋土と基本的に同様である。

第６号土坑（Fig.15）

Ｂトレンチ内の第１号溝の東側、第１号竪穴住居跡の埋土上面で検出した土坑である。第１号竪穴住居跡の埋土の上から切り込まれていたため、検出当初は輪郭が不明確であった。第１号溝が幅1.6mほどに広がる土器溜まりの可能性もある。

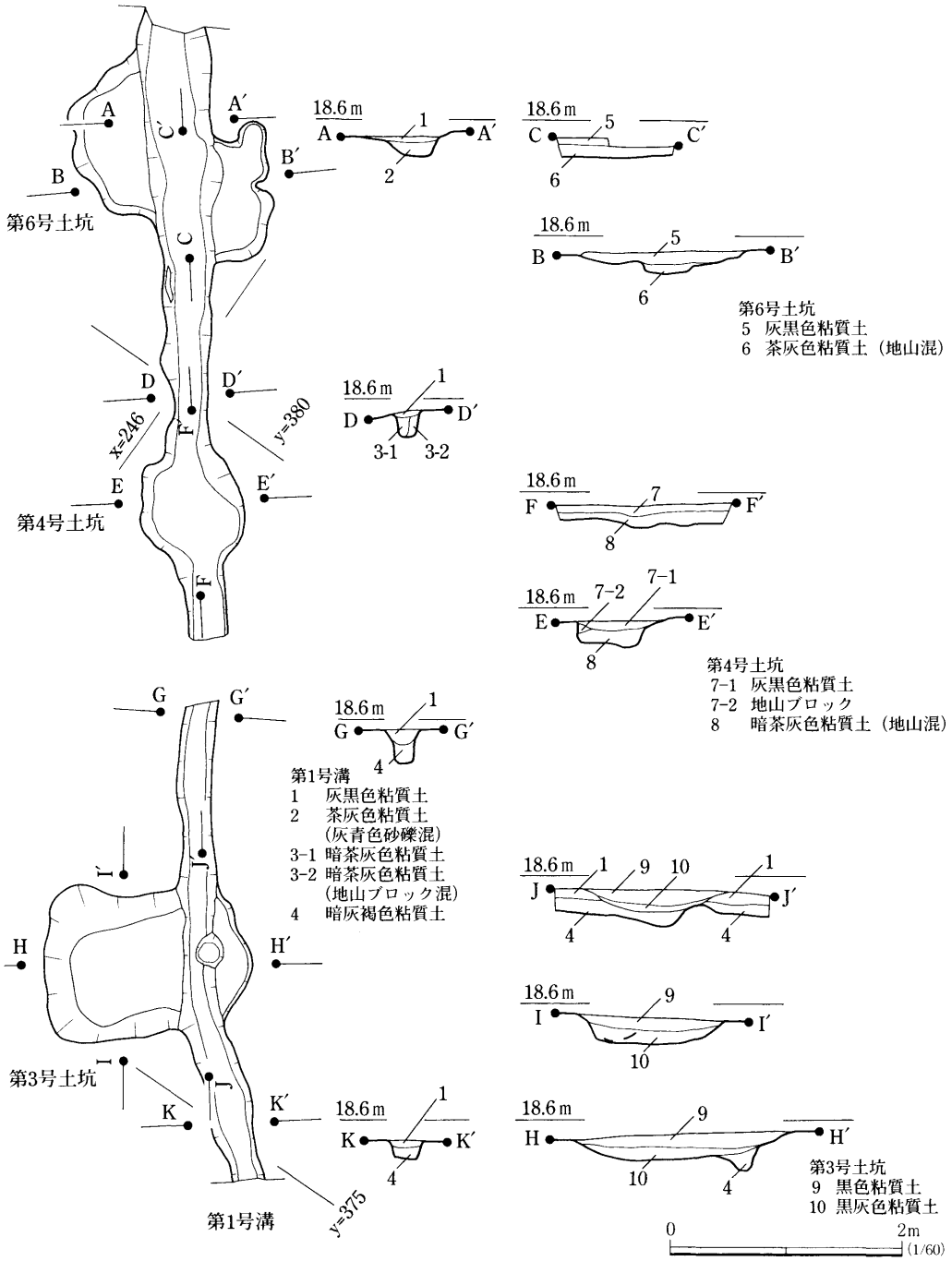


Fig.15　Bトレンチ第1号溝、第3・4・6号土坑実測図

第１号土坑（Fig.16, PL.13 (1) (2)）

Ｂトレンチの西側、落ち込み１の東肩に接して検出した、平面形が楕円形を呈する土坑である。長軸は1.3m、短軸は80cmを測る。検出面の標高は18.4mで、深さは検出面から約25cmを測る。断面形は浅い皿状となる。底面標高は18.15mである。埋土は2層からなり、第１層：黒色粘質土、第２層：黒灰色粘質土である。上面で高坏脚部と甕口縁部、自然石などを検出している。出土した高坏脚部の特徴は、弥生時代後期後半を示す。

第２号土坑（Fig.16, PL.13 (3) (4)）

Ｂトレンチのほぼ中央、給水管と暗渠によって分断された状態で検出した土坑である。平面形は不定形な長楕円を呈すると考えられるが、西側を給水管によって切られるため、全形は不明である。長軸2m、短軸は50cm以上である。深さは検出面から約30cmで、南側のみにテラスをもった、変形二段掘りの土坑である。一段深くなった北側底面では、やや南よりに柱穴が検出された。柱穴の深さは土坑底面から約40cmである。

第５号土坑（Fig.16, PL.14 (1)）

Ｂトレンチの南西辺で検出した不定形な土坑である。大部分は西側の調査区外にあると考えられ、全形は不明である。検出面の標高は18.38mである。深さは検出面から約4cmほどしかなく、底面標高は18.34mである。

第２号溝（Fig.16, PL.14 (2)）

配線トレンチのＣ区で検出した溝である。北側にコーナーがあり、長楕円形を呈する土坑の可能性もある。長さは1m以上、幅は70cmを測る。検出面の標高は18.4mであり、深さは検出面から約40cmである。底面標高は18.86ｍであった。弥生時代中期後半の土器が出土した。

落ち込み１（Fig.16, PL.14 (3) (4)）

Ｂトレンチの南隅及び配線トレンチのＣ区で検出した落ち込みである。埋土の下層は砂礫からなり、河川と考えられる。調査したのは北肩のみであり、全体の規模については全く不明である。仮にＥ区で検出した落ち込みをＢトレンチ落ち込み１の南肩とすると、幅は30ｍを超えるが、妥当性に疑問を残す。北肩はほぼ垂直に落ち込んでいる。埋土は大きく3層に分かれる。上層の黒灰色粘質土は古墳時代前期の遺物を包含している。下層の灰黒色砂礫からは弥生時代中期後半の土器が出土している。検出面の標高は18.5mである。深さは河床面を確認できた地点で検出面から約70cmを測るが、河床面はさらに南側へと落ち込んでいた。

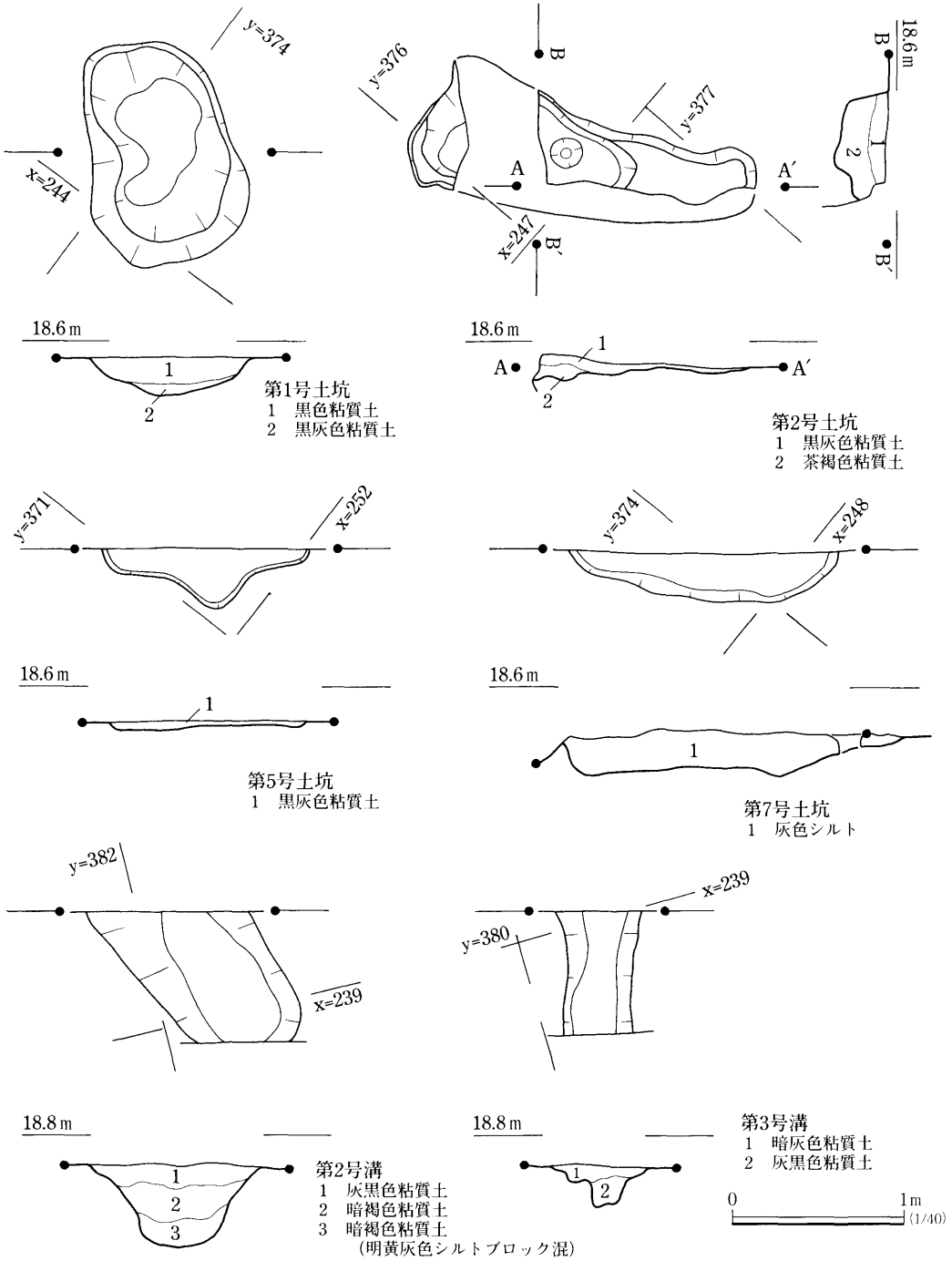


Fig.16　Bトレンチ第1・2・5・7号土坑、配線トレンチ第2・3号溝実測図

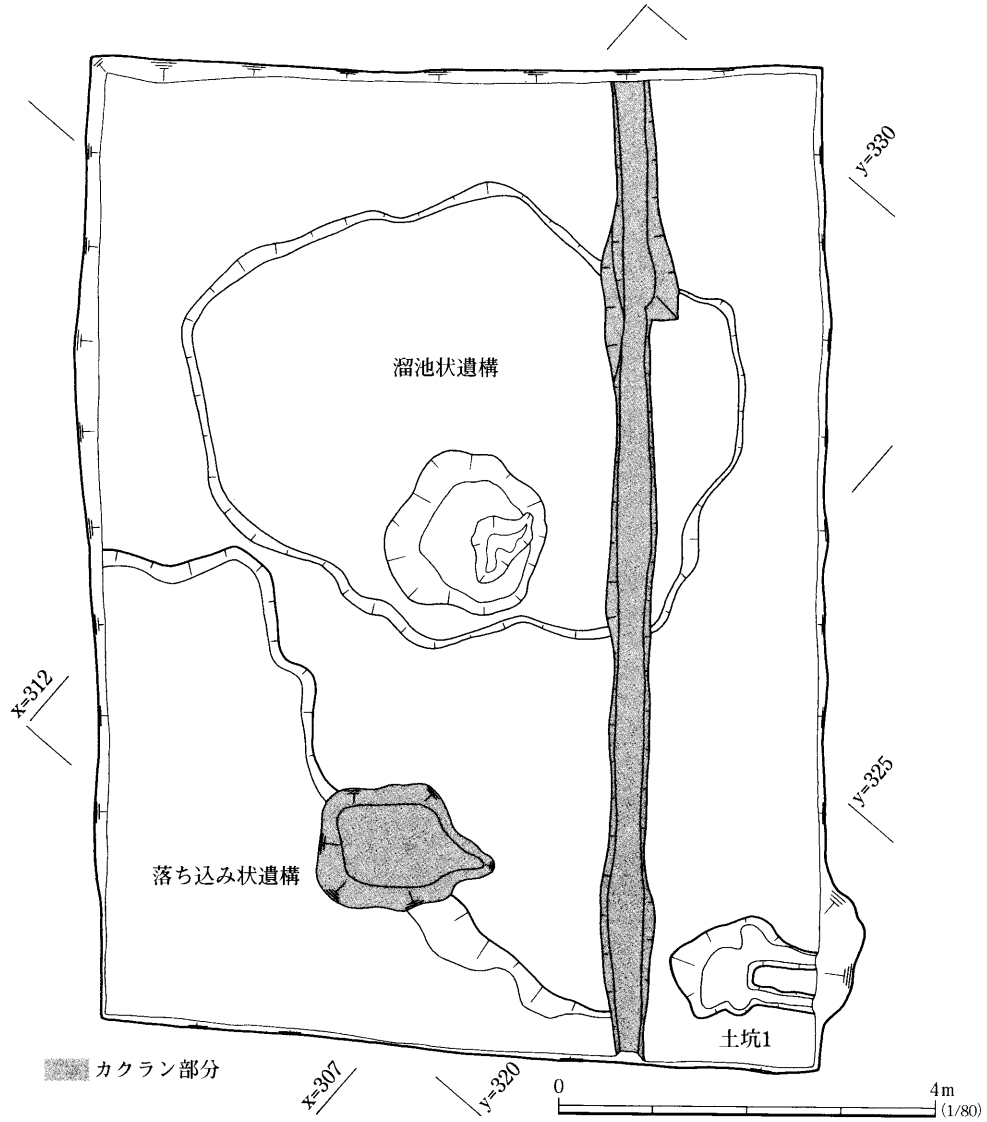


Fig.17　Cトレンチ遺構配置図

3　Cトレンチ（Fig.17・18, PL.15）

Cトレンチは、陸上競技場との境にあたるサッカー・ラグビー場の北端に位置する。遺構は、調査区の南端で2条の小溝が連結する小土坑を、調査区の西側で古代から中世にかけての土器を含んだ浅い落ち込み状遺構を、調査区中央で溜池状遺構を検出している。調査は5月30日から6月10日まで実施した。

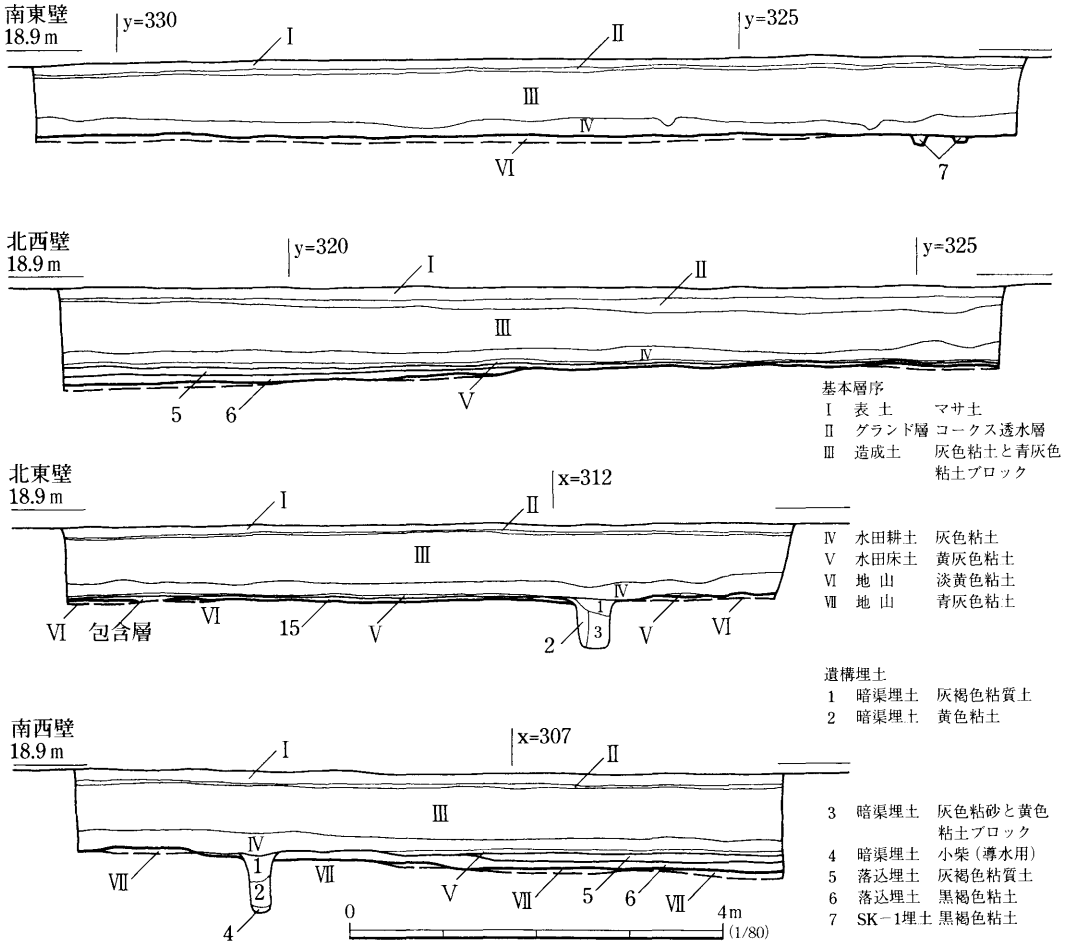


Fig.18 Cトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

基本層序は次の順である。第Ⅰ層：マサ土、第Ⅱ層：コークス透水層、第Ⅲ層：造成土、第Ⅳ層：灰色粘土（水田耕土）、第Ⅴ層：黄灰色粘土（水田床土）、第Ⅵ層：淡黄色粘土。

第Ⅲ層は、グランド造成時に平坦地を確保する目的で、地形的に低まったグランド西側のみに持ち込まれたものらしい。Eトレンチと同じグランド西側のFトレンチでも確認される。厚さは約50cmである。第Ⅳ層と第Ⅴ層は、統合移転前の水田層である。遺構は第Ⅴ層を除去した第Ⅵ層の上面、標高18.0mで検出した。また、トレンチの西から北にかけては、第Ⅴ層と第Ⅵ層の間に、わずか数cmではあるが遺物包含層を挟んでいる。このことからも、旧地形が西側に向かって傾斜していると判断できる。

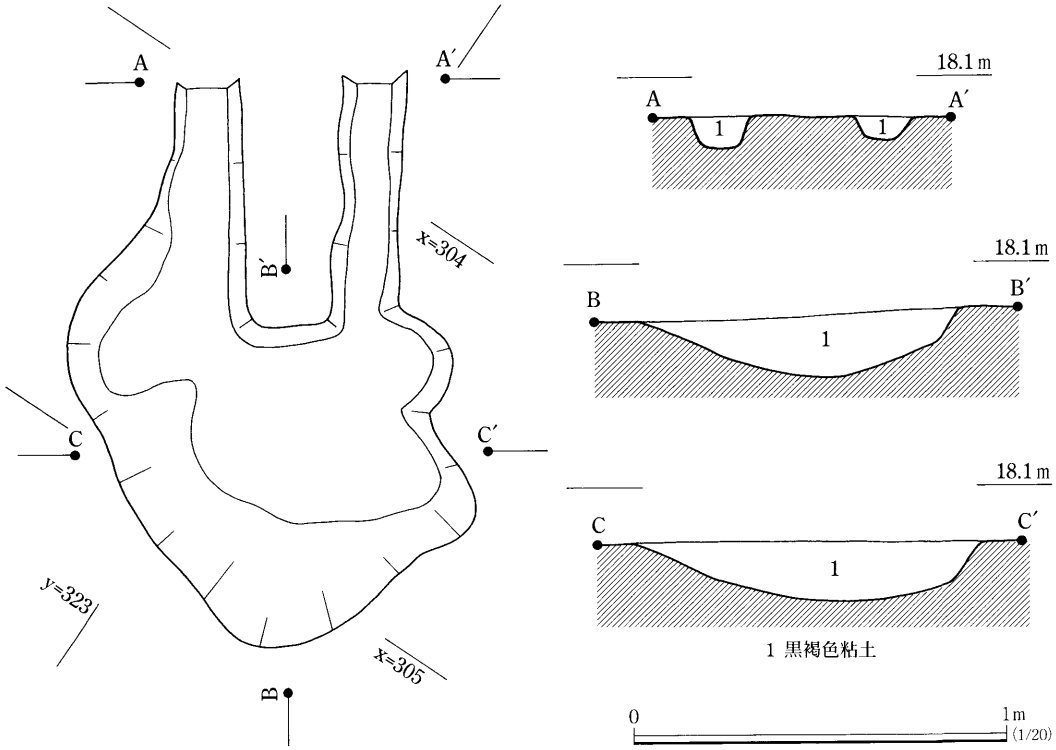


Fig.19　C トレンチ第 1 号土坑実測図

(2) 遺構

第 1 号土坑 (Fig.19, PL.16 (1) (2))

トレンチ南端で検出した不定形の土坑である。長軸約1.0m、短軸約0.8mを測る。検出面の標高は18.0mである。深さは約20cmで、底面標高は17.78mである。南側には、平行する2条の小溝が取り付く。小溝は幅20cmである。深さは検出面から約5cmで、底面標高は17.95mを測る。埋土は、土坑・溝ともに黒褐色粘土の単層である。

落ち込み状遺構 (PL.16 (3))

トレンチ西側で検出した浅い落ち込みで、全形は不明であるが、西側へ谷状に落ち込んでいる可能性がある。検出面の標高は17.9mで、調査区内で最も深い西端の底面標高は17.7mである。埋土は2層に分かれ、上層が灰褐色粘質土、下層が黒褐色粘土である。

溜池状遺構

調査区の中央やや北東寄りで検出した楕円形の落ち込みである。暗渠に切られた形で検出したが、埋土は暗渠と同じく灰色粘砂と黄色粘土のブロック土であり、暗渠と同時期か、それ以前であっても近接した時期と考えられる。長軸約6.0m、短軸約5.0mを測る。

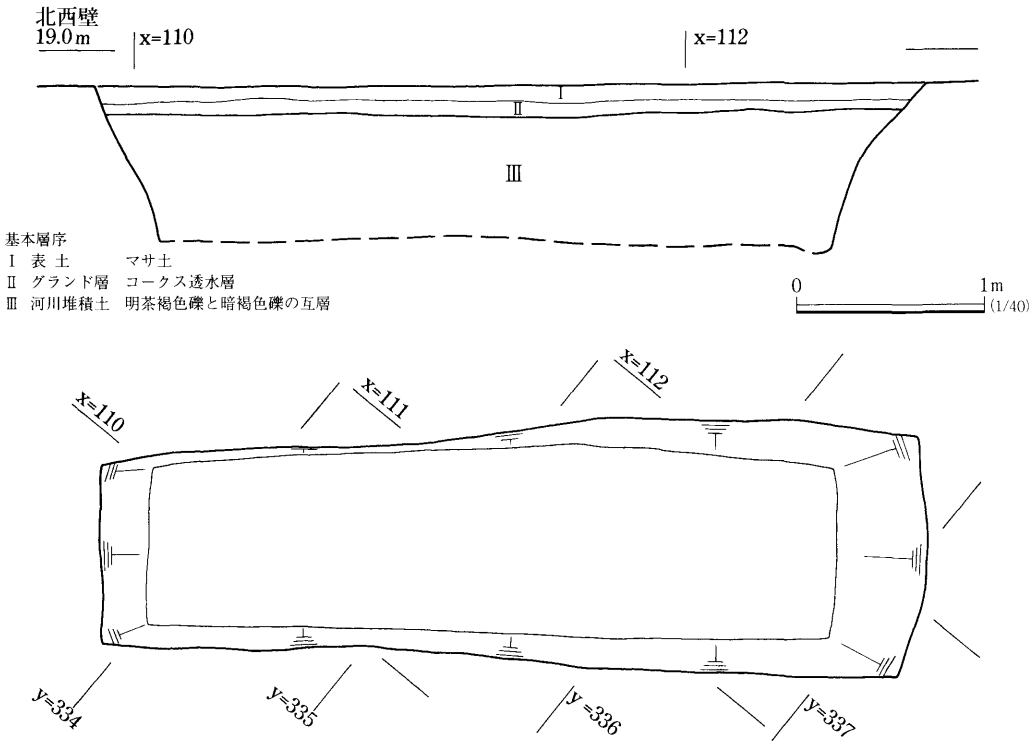


Fig.20　Dトレンチ実測図

4　Dトレンチ (Fig.20, PL.17)

Dトレンチはグランド南端、南門のすぐ西側に設定したトレンチである。調査は5月30日から行う予定であったが、表層を除去した途端、礫層となり湧水が激しく、水中ポンプの排水量を上回ったため、一旦調査区を埋め戻した。Dトレンチの位置が地下水の本流にあたると予想されたため、7月13日からの再調査は重機のバケット幅の掘削にとどめ、土層の確認のみを目的とした。調査区は幅1m、長さ4mで、面積約4㎡の小規模なものとなった。遺構は全く認められず、7月15日に埋め戻しを行った。

(1) 層序

層序は、第Ⅰ層：マサ土と第Ⅱ層：コークス透水層からなるグランド層の直下が、河川堆積土の第Ⅲ層：明茶褐色礫と暗褐色礫の互層となっており、激しい湧水をみた。第Ⅲ層はより下位に続くが、湧水を水中ポンプ2台で辛うじて排水していたため、安全管理面から現地表下約80cmのところで掘削を中止した。

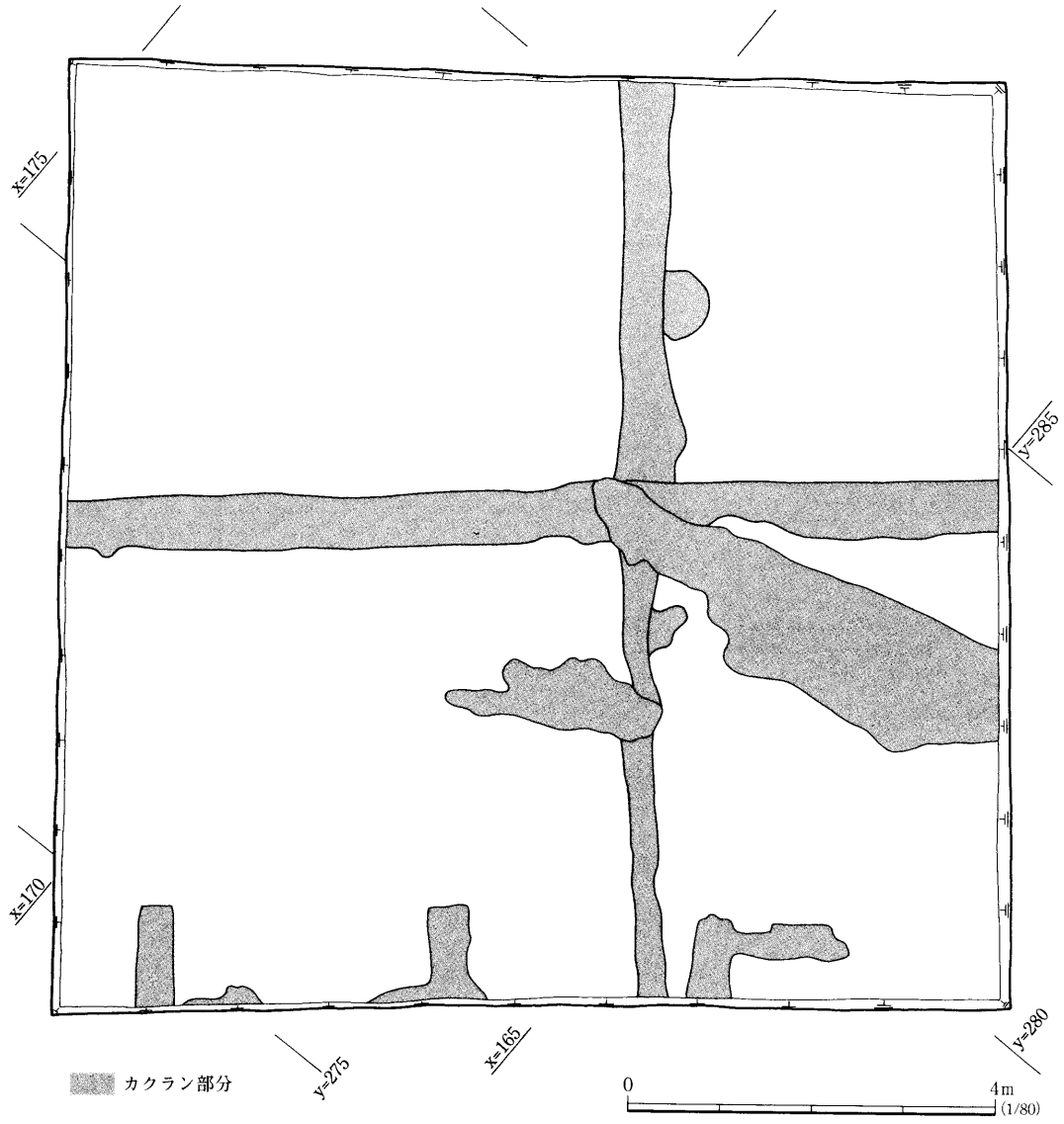


Fig.21　Eトレンチ遺構配置図

5　Eトレンチ（Fig.21・22, PL.18）

Eトレンチはグランド南西部、Dトレンチと Fトレンチの並びの中央に設定した10m×10mのトレンチである。調査は6月10日から6月21日まで実施し、7月13日に埋め戻しを行った。縦横に近世暗渠が巡らされており、顕著な遺構は認められなかったが、調査区の全体に渡り黒色粘質土の遺物包含層が広がっていた。

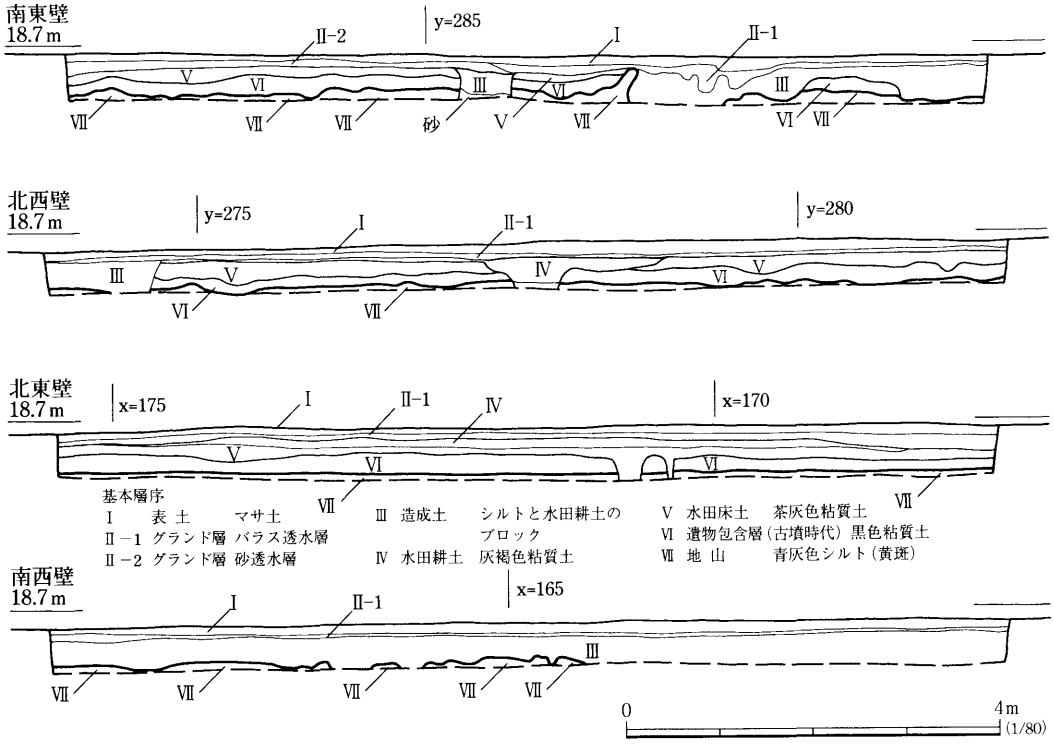


Fig.22　Eトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

基本層序は以下のとおりである。第Ⅰ層：マサ土（表土）、第Ⅱ層：バラスと砂の透水層、第Ⅲ層：シルトと第Ⅳ層のブロック土（造成土）、第Ⅳ層：灰褐色粘質土（水田耕土）、第Ⅴ層：茶灰色粘質土（水田床土）、第Ⅵ層：黒色粘質土（遺物包含層）、第Ⅶ層：青灰色シルト（地山）。

地山となる第Ⅶ層：青灰色シルトの検出面は標高18.2mである。上面には遺物包含層である第Ⅵ層：黒色粘質土が厚さ約20cmに渡って堆積していた。第Ⅵ層と第Ⅶ層の境では、黒色粘質土が青灰色シルトに溶け込んでマーブル状になっていた。第Ⅵ層が第Ⅶ層を強い勢いで浸食しながら堆積していったことを示すと考えられる。遺物包含層である第Ⅵ層に含まれる炭化物は少なく、人為的形成というよりは洪水など自然的要因によって形成された可能性が高い。 Aトレンチ及び配線G区で検出した弥生時代後期終末の河川の氾濫原であった可能性も考えられる。ただし、Eトレンチの第Ⅵ層は、須恵器出現直前の土師器を含んでおり、前述の河川より新しい年代が与えられる。

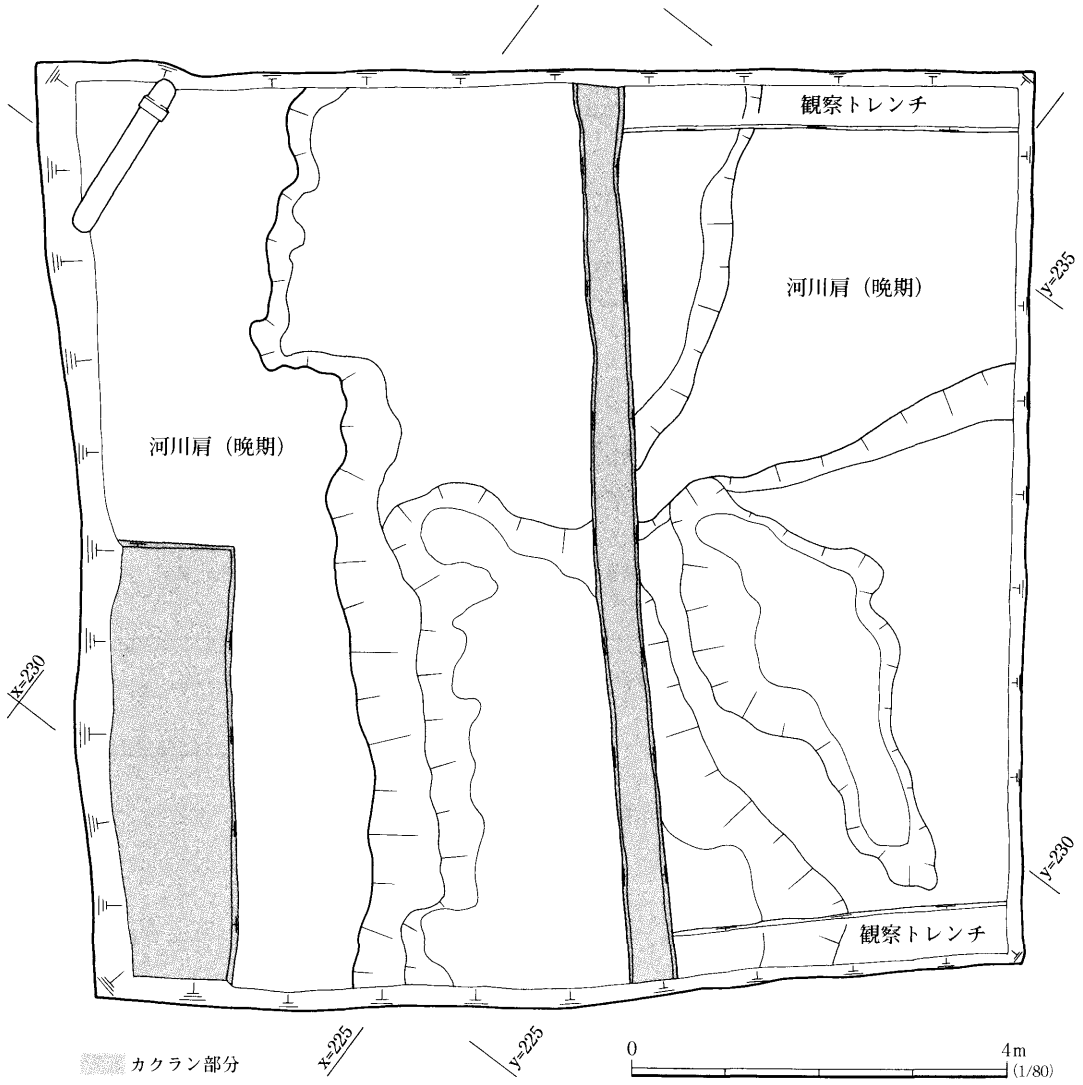


Fig.23　Ｆトレンチ遺構配置図

6　Ｆトレンチ（Fig.23・24, PL.19・20）

Ｆトレンチはグランドの西端に設定した10m×10mのトレンチである。調査は6月21日から7月8日まで行い、7月13日に埋め戻しを行った。

縄文時代の河川を検出した。河川は青灰色シルト及び青灰色砂礫を河床とする上層と、それ以下の下層の２時期に区分できる。上層から晩期土器が、下層から後期土器が出土した。なお、Fig.23には、北西肩が検出できた、河川上層（縄文時代晩期）を図示している。

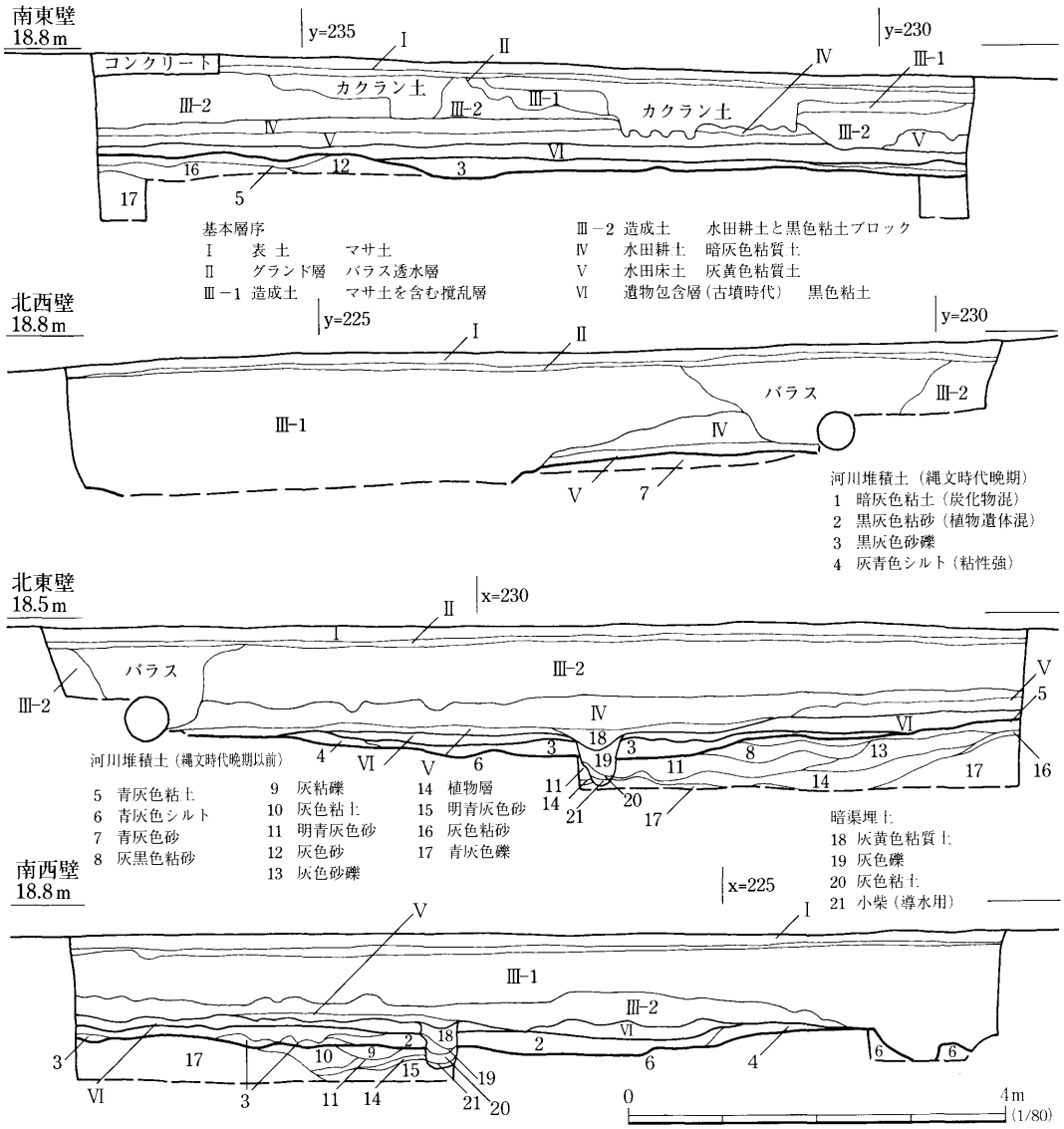


Fig.24　Fトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

水田層直下に厚さ約10cmの第Ⅵ層：黒色粘質土の遺物包含層が広がっていた。弥生土器や土師器を含み、Eトレンチで検出した遺物包含層と一連のものと考えられる。以下は河川堆積土で、上下2つのまとまりで捉えられる。上部は縄文時代晩期の河川堆積土（1～4）、下部は晩期以前の河川堆積土（5～17）である。上部の河川は、下部の河川堆積土（5・6）を肩として検出する。7以下は砂礫層が続き、若干の縄文時代後期の土器片を出土している。

7　配線トレンチ（Fig.25, PL.21）

前述したように、照明塔への電源を引き込むために、電線の地中埋設がグランド内で計画された。高圧電線のため現地表から50cm以上の掘削が必要であり、幅は1mが要求された。検討の結果、ＢトレンチとＥトレンチの間には暗渠が通っており、この暗渠部分を掘削することによって周囲の埋蔵文化財への影響を極力小さくしようとする妥協策が取られた。結果的に、グランドの中央にトレンチを入れる形となった。Ｅ区は長さ25m、Ｆ区は長さ20m、Ｇ区は長さ22mのトレンチである。調査期間は11月7日から12月2日までである。

(1) 層序

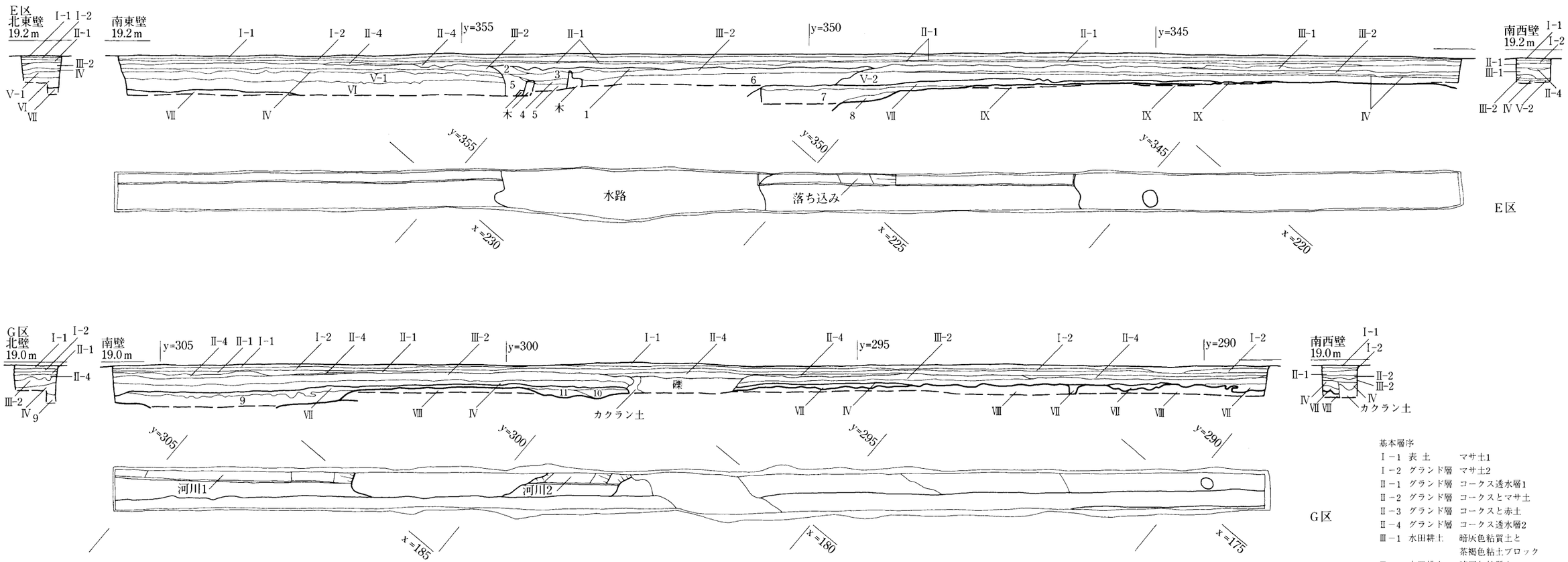
基本層序は次の順である。第Ⅰ層：マサ土、第Ⅱ層：コークスを主とするグランド透水層、第Ⅲ層：暗褐色粘質土を主とする水田耕土、第Ⅳ層：灰黄色粘質土（水田床土）、第Ⅴ層：灰褐色粘質土を主とする水田耕土、第Ⅵ層：暗灰褐色粘質土（水田床土）、第Ⅶ層：黒灰色粘質土（遺物包含層）、第Ⅷ層：青灰色シルト（地山）、第Ⅸ層：明黄灰色粘土（地山）、第Ⅹ層：暗灰色砂礫（地山）

Ⅰ・Ⅱ層は大学のグランド造成に関係するもの、Ⅲ～Ⅵ層は統合移転以前の水田層である。第Ⅶ層が遺物包含層であるが、Ｅ区西端・Ｆ区・Ｇ区東半では検出していない。後世の開墾により削平されたのであろう。標高18.5～18.6mで第Ⅷ層を検出している。これも、遺構面が一定の高さを保っていたと考えるよりは、後世の浸食や開墾の著しさを示すものであろう。Ｆ区は第Ⅷ層の検出面が18.6mと他の調査区と比較して若干高いが、包含層及び遺構は検出していない。Ｆ区付近は本来微高地であり、遺構は削平されたと考えるべきであろう。なお、Ｅ区西半は深い落ち込みになっており、遺物を含む埋土が厚く堆積していた。

(2) 遺構

配線トレンチＥ～Ｇ区は、トレンチを暗渠上に設定したこともあり、遺構の検出は極めて少ない。Ｅ区では東半のほとんどが深い落ち込みになっている。この落ち込みは、Ｂトレンチで検出した弥生時代中期後半の落ち込み１と埋土が近似する。

Ｇ区では河川を2条検出している。調査区東側の河川１は河幅が約5m、深さは検出面から30cm以上あるが河床を検出していない。河川１の西隣にある河川２は河幅が約1.2m、深さは約20cmである。河川１が本流で、河川２は支流であろう。河川１から複合口縁壺が出土していることから、Ａトレンチで検出した河川につながると考えられる。



基本層序

Ⅰ－1	表　土	マサ土1
Ⅰ－2	グランド層	マサ土2
Ⅱ－1	グランド層	コークス透水層1
Ⅱ－2	グランド層	コークスとマサ土
Ⅱ－3	グランド層	コークスと赤土
Ⅱ－4	グランド層	コークス透水層2
Ⅲ－1	水田耕土	暗灰色粘質土と茶褐色粘土ブロック
Ⅲ－2	水田耕土	暗灰色粘質土
Ⅳ	水田床土	灰黄色粘質土
Ⅴ－1	水田耕土	灰褐色粘質土
Ⅴ－2	水田耕土	灰色粘質土（砂礫混）
Ⅵ	水田床土	暗灰褐色粘質土
Ⅶ	遺物包含層	黒灰色粘質土
Ⅷ	地　山	青灰色シルト
Ⅸ	地　山	明黄灰色粘土
Ⅹ	地　山	暗灰色砂礫

遺構埋土

1	水路埋土	暗灰色粘質土と黄褐色粘土ブロック	4	水路埋土	暗褐灰色砂質土
2	水路埋土	暗灰色シルト（礫混）	5	水路埋土	明褐色砂礫
3	水路埋土	暗灰色粘質土	6	水路埋土	灰色粘質土（礫混）
			7	落込埋土	暗灰青色粘土
			8	落込埋土	灰色粘土
			9	河川1堆積土	黒色粘土
			10	河川2堆積土	黒色粘土
			11	河川2堆積土	灰黒色粘質土

Fig.25　配線トレンチＥ・Ｆ・Ｇ区実測図

8　小結

本調査は、吉田構内南西部に位置するサッカー・ラグビー場の周囲及びその中央部で実施した。結果的に、土層や埋蔵文化財の有無を広範囲に確認でき、また旧地形を復元する大きな手がかりとなった。グランド北東部のＢトレンチ付近と、グランド中央の配線トレンチＦ区付近に、南東から北西に延びる二つの微高地があり、その間には谷状の大きな落ち込みのあることが判明した。また、配線トレンチＦ区付近の微高地の南側にも低地部があり、Ｇ区では弥生時代後期から古墳時代前期の土器を含んだ河川を検出した。この旧地形に対応するように遺構及び遺物の分布が認められた。検出した遺構について、時代を追ってまとめる。

(1) 縄文時代

Ｆトレンチにおいて、縄文時代後期の河川を検出した。この河川は、現在吉田遺跡で遺構検出面としている黄色系あるいは青色系シルト層の下位で確認された。流路方向は不明である。この河川の上面に、北から南に流れる縄文時代晩期の河川を検出した。Ｂトレンチにおいても、南東から北西に流れる縄文時代晩期の河川を検出している。これらの河川肩部の堆積土がシルトであり、このシルトが吉田遺跡低地部の弥生時代の遺構面を形成していることが判明した。

(2) 弥生時代

Ｂトレンチと配線トレンチＡ1・Ａ2・Ｃ区において、4棟の円形竪穴住居跡を検出した。うち2棟は中期、他の2棟が後期のものと考えられる。いずれも削平が著しく残存状況は良くない。最大のものは後期の第１号竪穴住居跡で、直径8.4m、推定床面積約54㎡である。なお、後期の2棟の竪穴住居跡から、合計37個のガラス小玉が出土している[9]。その他、Ｂトレンチ及び配線トレンチＣ区からは、弥生土器を含んだ土坑7基と溝2条を検出した。

(3) 古墳時代

Ｂトレンチにおいて、弥生時代後期の第１号竪穴住居埋没後に上面から掘り込まれた小溝を検出した。小溝には土坑が連結しているが、両者の機能的関係は不明である。グランド北東部に設定したＡトレンチとグランド中央の配線トレンチＧ区では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を多量に含んだ河川を検出しており、これらは一連のものと考えられる。また、この河川は、より低い南東部側にたびたび氾濫したと考えられ、Ｅトレンチやトレンチにおいて、洪水堆積土である黒色粘質土層を検出している。

(4) 古代

グランド北西隅のCトレンチにおいて、古代の土器を含んだ落ち込み状遺構を検出している。性格については不明である。

今回の調査分を加えると、遺跡保存地区から教育学部講義実験棟にかけての微高地では、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居跡が30棟検出されたことになる。その内訳は、遺跡保存地区21棟[10]、昭和56年度教育学部校舎新営4棟[11]、昭和59年度ラグビー場防球ネット1棟[12]、平成6年度屋外照明施設新設4棟である。これらの調査は微高地上全体には及んでおらず、微高地全体では竪穴住居跡の棟数はさらに増加するものと考えられる。今回検出したBトレンチの状況は、竪穴住居跡の切り合いはあるものの、遺構密度は遺跡保存地区と比較すると希薄で、地形的にも微高地の末端であることを考えるならば、集落の中心はBトレンチの北東側から遺跡保存地区にかけて存在したと想定される。

また、今回の調査ではグランド中央においても微高地を確認しているが、遺構及び遺物を検出することはできなかった。しかし、山口大学吉田遺跡調査団刊行の『吉田遺跡発掘調査概報』[13]には、第Ⅲ地区南区とする南門周辺において、河川北側で弥生時代中期から後期にかけての遺構が検出されたとの記述がある。南区で検出した河川の北側は、位置的にはグランド中央付近にあたり、配線トレンチF区で検出した微高地の末端と考えられる。とすれば、配線トレンチF区では遺構が認められなかったが、これは微高地が後世に大きく削平されたためで、本来は遺構が分布していた可能性が高い。南区の出土遺物から、遺跡保存地区の微高地と谷を挟んだグランド中央の微高地にも、弥生時代中期から古墳時代前期の生活域が広がっていたと考えられる。遺跡保存地区からサッカー・ラグビー場にかけては、弥生時代中期から古墳時代前期の大規模な集落が形成されていたのであろう。

微高地に対し、低地部では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器を含む河川を検出した。河川堆積土に含まれる遺物は水漬け状態であったため、土器は器面が美しく保たれ、植物遺体は腐食せず残っていた。これらは生活域である微高地上から流れ込んだものと考えられる。河川の大部分は、未だグランド下に眠っている。将来、有機質遺物を調査研究することによって、往時の自然環境と生活を総合的に復元する大きな手がかりを得ることが可能であろう。

［注］

1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）

3) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）

4) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990年）

5) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内Ｈ－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）

6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）

7) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年）

8) 第１号竪穴住居跡出土としたものには、第１号溝出土のもの（228～232）を含む。これは、第１号溝からのガラス小玉の出土が、第１号溝が第１号竪穴住居跡を切り込んだ部分付近に限られることから、本来住居跡内にあったガラス小玉が流れ込んだと判断したためである。

9) 前掲注８参照

10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1991年）

11) 前掲注５文献

12) 前掲注６文献

13) 前掲注１文献

第3節　出土遺物

1　Aトレンチ出土遺物

Aトレンチでは、河川から縄文時代晩期～古墳時代前期の土器が大量に出土した。遺物は、排水溝をはさんで南側を1区、北側を2区とし、各層ごとに取り上げたが、各時期の土器が混在しているため、一括して時期別に分けて説明を行うこととする。地区、層位については観察表を参照されたい。

(1) 縄文時代晩期 (Fig26－1～4, PL.22 (1))

わずか4点であるが、縄文時代晩期中葉の土器が出土している。

1は深鉢胴部片である。外面には二枚貝条痕を施し、内面は条痕をナデ消している。岩田四類 $c^{1)}$ に相当する。

2・3は浅鉢の口縁部～胴部片である。2は口唇部をカマボコ状に肥厚させ、胴部はヘラ状工具により抉りを施す。口縁部内面もヨコミガキによって抉りが施されている。外面にはヨコミガキが施される。3は口縁部に山形状の突起があり、内面に抉りを施す。内外面とも風化が激しい。ともに岩田四類cに伴う浅鉢で、岩田四類bに相当する。4は底部である。浅鉢の底部の可能性が高い。凹底を呈する。風化が激しい。

(2) 弥生時代前期 (Fig.26－5・28－8, PL.22 (2) ・24 (2))

5は甕の胴部である。外面にタテハケの後、4条のヘラ描沈線を施す。煤が付着している。内面はナデが施される。28は甕底部である。やや上底で外面にタテハケを施す。

(3) 弥生時代中期

北部九州系壺 (Fig.26－6～10, PL.22 (2))

6は長頸壺の頸部である。外面は丹塗りで、タテミガキを施す。7～9は鋤先口縁壺である。7・8はヨコナデにより口唇部を凹ませ、9は丸くおさめる。10は広口壺である。ヨコナデにより口唇部を跳ね上げる。

垂下口縁壺・在地系壺 (Fig.26－11～14, PL.22 (2)・23)

11は口縁部である。ヨコハケの後山形文とヘラ状工具による刺突が施される。12は頸部で、貼付突帯が剥離している。13は口唇部を刻み、口縁部内面を肥厚させ、2ヶ所で穿孔する。頸部は2条のヘラ描沈線と3条の貼付突帯を持ち、その上から逆U字状の浮文を施す。外面はナデで内面はヨコミガキである。14は胴部で、2条一組の貼付突帯を持つ。

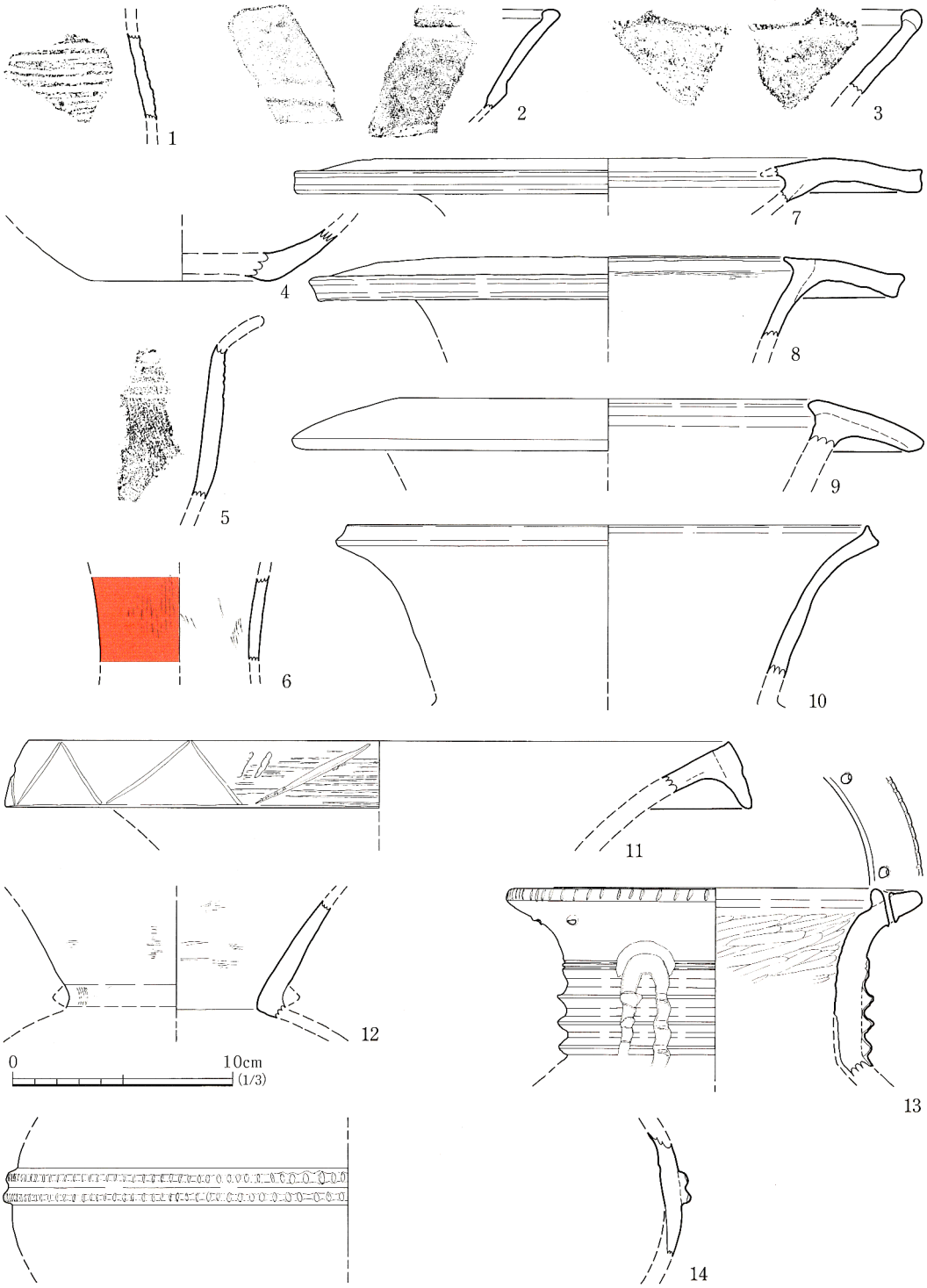


Fig.26　Aトレンチ河川出土縄文時代晩期～弥生時代中期土器実測図(1)

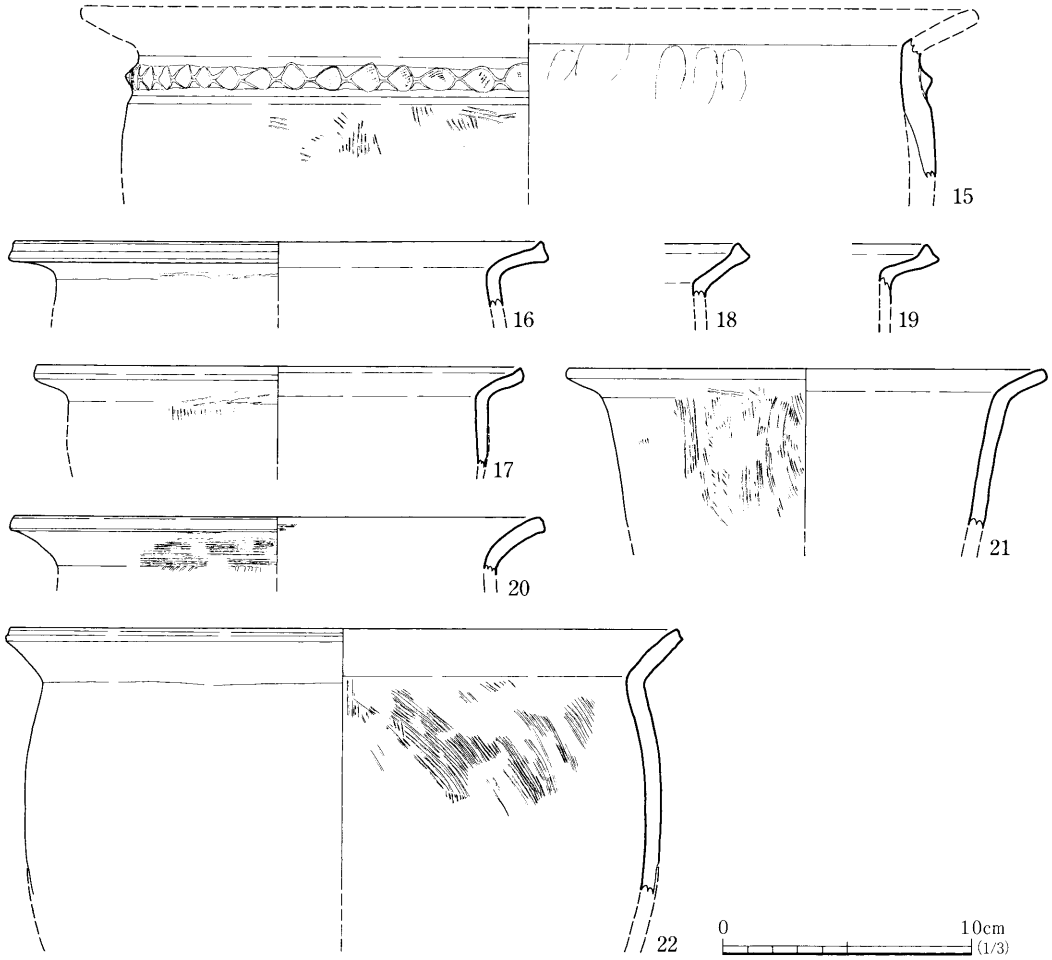


Fig.27　Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器実測図(2)

甕 (Fig.27−15〜22, PL.23)

15は瀬戸内系の甕である。胴部に1条の貼付突帯を持つ。突帯貼り付け時の強いヨコナデにより、大きくくぼむ。突帯には布巻棒圧痕が施される。外面はハケの後、ナデが施される。内面には指頭痕が顕著に残る。風化が激しい。

16〜19は跳ね上げ口縁の甕である。16〜18の胴部外面はタテハケ後、ナデが施される。20・22は口縁部に面を持ち、21は丸くおさめる。20の口縁部外面はタテハケの後ヨコハケが施される。内面はナデが施される。21の胴部外面はタテハケの後、ナデが施される。内面はナデである。22は口唇部が凹む。外面は大半が風化しているが、残存部分はナデが施され、煤が付着している。内面には左上がりのハケが施される。体部はやや外に張り出し

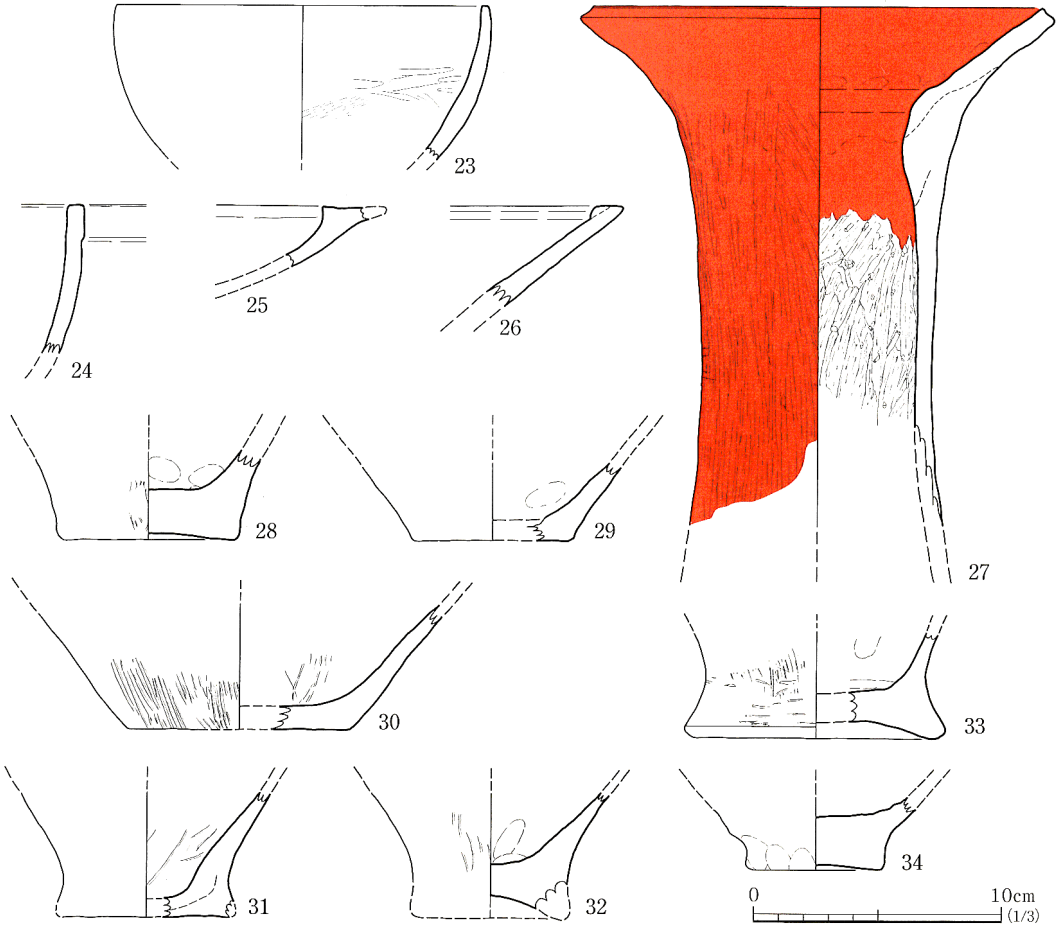


Fig.28　Aトレンチ河川出土弥生時代前期・中期土器実測図(3)

ており、後期初頭に下る可能性もある。

鉢・高坏（Fig.28－23～26，PL.23）

23・24は鉢である。23は直口で口唇部に面を持つ。24は口縁部を肥厚させる。外面は風化が激しく調整は不明。内面はヨコミガキが施される。25・26は高坏の坏部である。25は口唇部を欠損している。26は内面に粘土紐を貼り付け肥厚させる。

器台（Fig.28－27，PL.24(1)）

27は北部九州系の器台である。外面は丹塗りでタテミガキが施される。口縁部内面は丹塗りで、その直下は下から上へケズリが施される。出土状況から後期に下る可能性もある。

底部（Fig.28－28～34，PL.24(2)）

29～34は底部である。29・30は壺底部、31～34は甕底部である。

(4) 弥生時代後期

河川出土遺物は弥生時代後期後半以降～古墳時代前期が主体である。このうち、複合口縁壺、底部については終末期及び古墳時代前期のものと区別が困難なものが含まれる。今回の報告では、複合口縁壺は弥生時代後期に、底部については古墳時代前期の土器に含めた。終末期については古墳時代前期の土器と区別が困難なため、古墳時代前期の土器に含めた。

広口壺 (Fig.29－35, PL.25)

35は頸部が短く直立して外反する。口縁部はあまり広がらない。口唇部に面を持ち、軽くつまみ上げる。風化が激しく内外面の調整はわからない。後期中葉のものと考えられる。

複合口縁壺 (Fig.29－36～44, Fig.30－45, PL.25・26)

36は立ち上がりで剥離している。立ち上がりは短い。やや外反し、端部を外側につまみ出す特徴から後期後半以降と考えられる。37・40は立ち上がりのみで以下を欠損している。37は端部に面を持つ。内外面はナデである。40は口縁部外面に5条単位の櫛描波状文が施され、内面はナナメハケ後、ナデが施される。38・39は立ち上がりを欠損しており、剥離痕が観察できる。38は受部端部に面をもち、立ち上がりと合わせてヨコナデが施される。外面は風化が激しく、調整は不明。39は受部端部にヘラ状工具による刻みが施される。内面に剥離痕が観察できたため、複合口縁壺として復元した。内外面の調整はヨコナデである。

41は立ち上がりで剥離している。立ち上がりは内傾し、接合面が観察できる。外面には上部に指頭痕が残り、その直下に4条単位の櫛描波状文と4条の擬凹線が施される。風化が激しく、内外面とも調整は不明。42は立ち上がりがほぼ直立し、端部は丸くおさめる。立ち上がりで剥離しており、接合痕が観察できる。内外面はタテハケの後、斜方向のミガキが施される。43は立ち上がりの上半を欠損する。下半には櫛描波状文が施されており、現状では2条が確認できる。内面にはナナメハケがわずかに残る。風化が激しい。

44は複合口縁壺の頸部～胴部である。頸部は断面台形の貼付突帯をもち、突帯上にはハケ原体によって斜格子状に刻目が施される。刻目は右上がりの後に、左上がりに刻まれる。外面はタテハケ、内面はヨコハケが施される。

45は口縁部及び立ち上がりを欠損する。色調は淡黄色で、1mm～3mm大の砂粒を含むが胎土は比較的精良である。42と近似した胎土であり、同一個体の可能性がある。胴部下

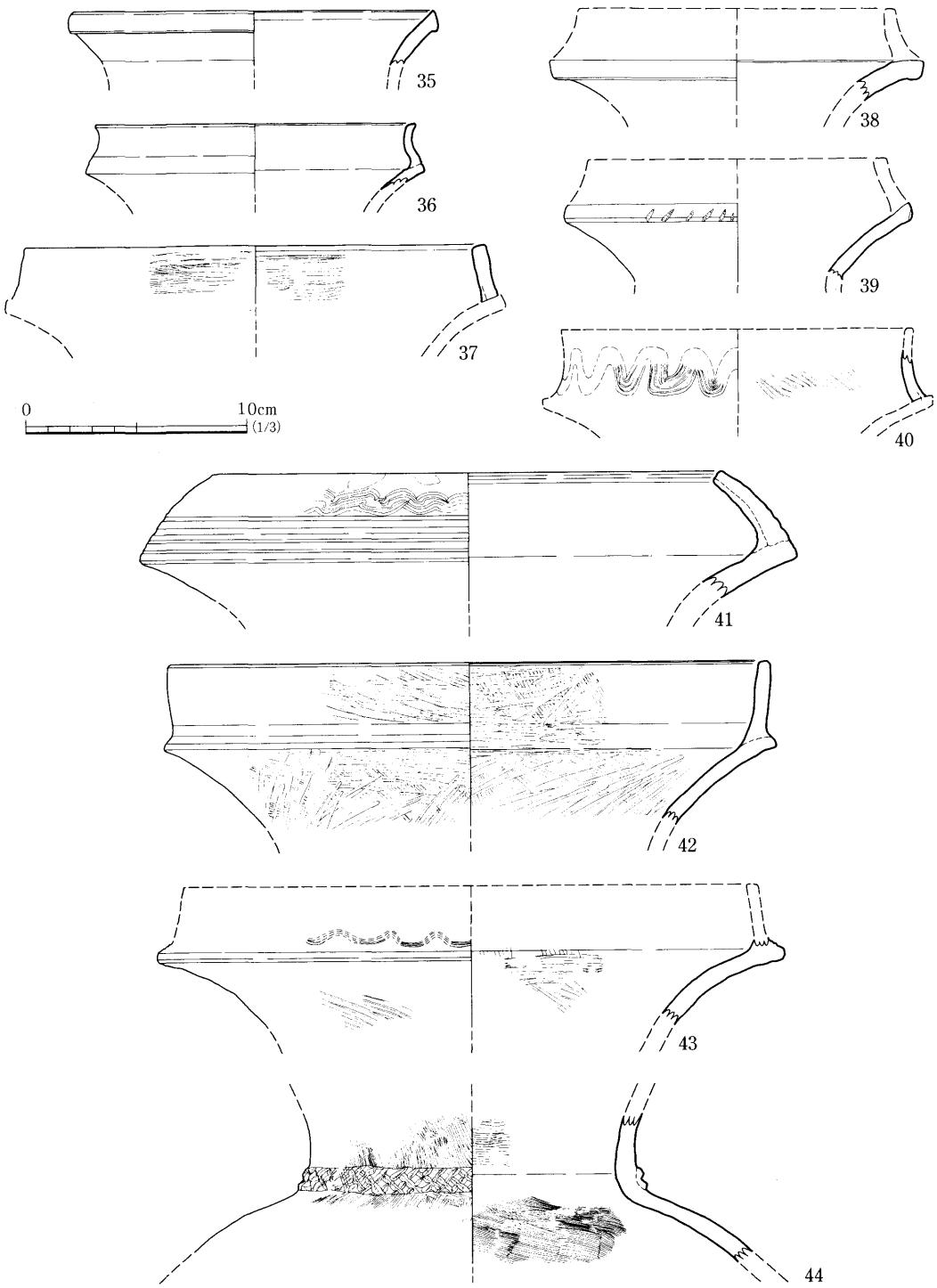


Fig.29　Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(1)

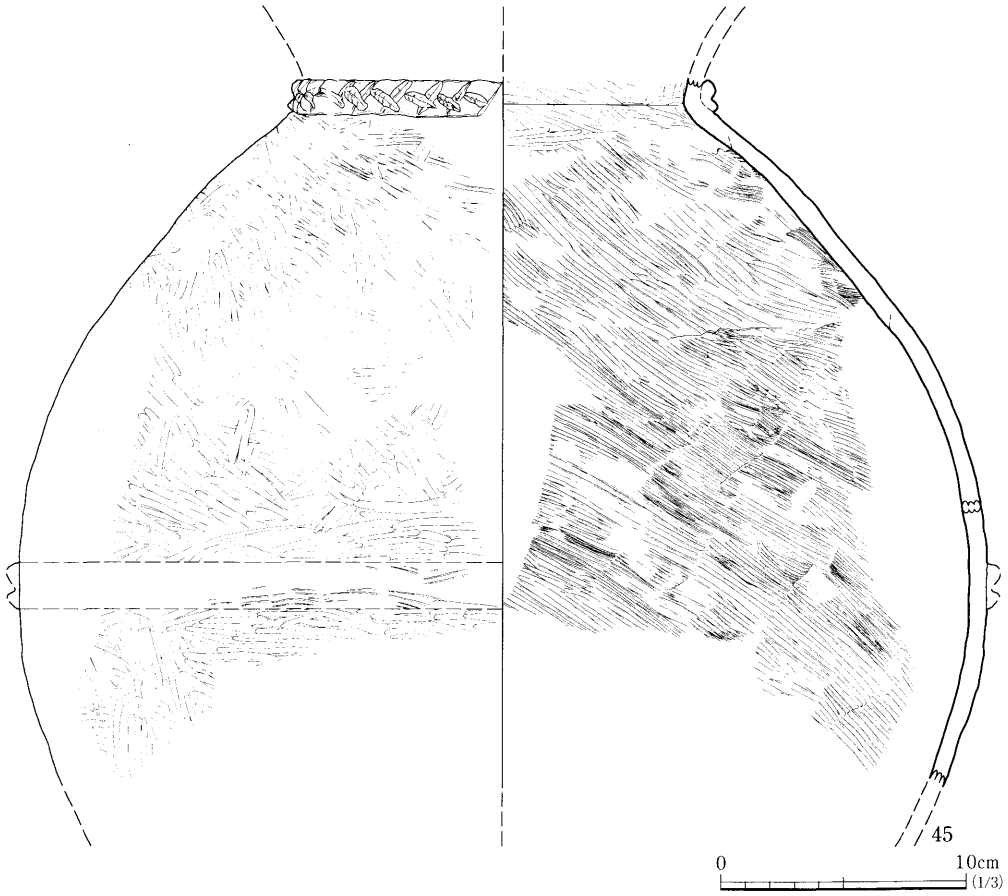


Fig.30　Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(2)

半は接合しないが、同一個体と考えられるため図上復元した。胴部外面はハケの後、ヨコ、斜方向のミガキが下から上へ施される。上半部はハケが顕著に残っている。頸部には1条の貼付突帯を持ち、突帯上はハケ原体によって斜格子状の刻目が施される。刻目は右上がりの後に、左上がりに刻まれる。胴部中位には突帯の剥離痕がある。頸部と同様な貼付突帯があったと考えられる。突帯貼り付け前にヨコハケが施される。内面は粘土帯接合痕が2ヶ所で確認できる。荒い左上がりのハケが下から上へ施される。頸部内面はハケの後、ヨコ・斜方向のミガキが施される。残存器高は28.8cm、胴部最大径は39.3cmを測る。

甕 (Fig.31－46～50, PL.25)

46・49は後期前葉の甕である。46は口縁部が「く」の字状に短く外反し、肩が張る。口縁部内面にはヨコハケが施される。胴部外面は風化しており、調整は不明。内面は下から

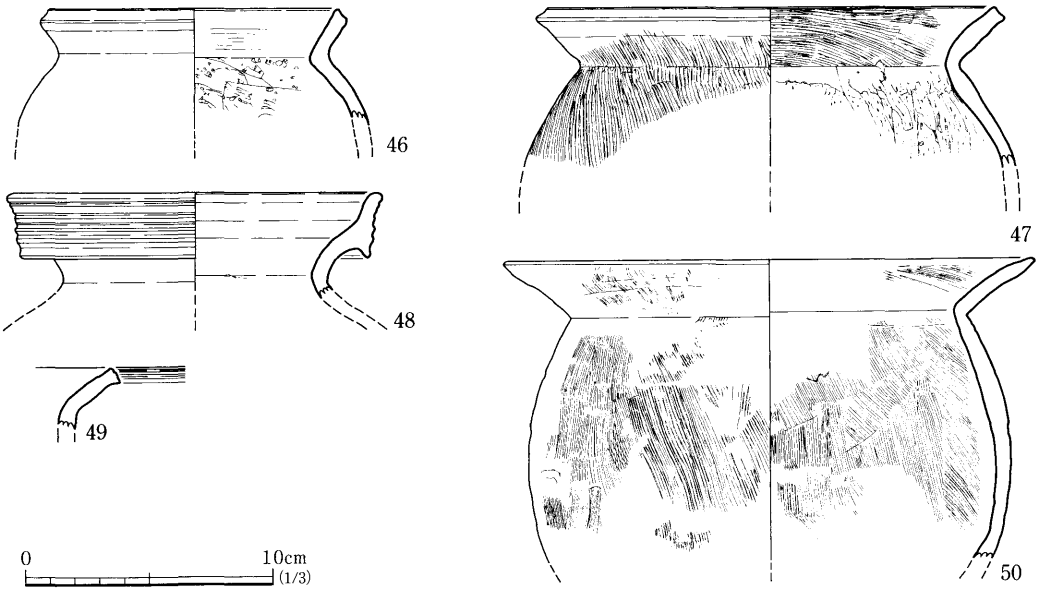


Fig.31　Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(3)

上へケズリが施される。49は口唇部に2条の擬凹線が施される。内外面にはヨコナデが施され、煤が付着する。47は後期後葉の甕である。口唇部を凹ませ、外面には左上がりのハケが施され、煤が厚く付着する。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は下から上へ荒いケズリが施される。50は口縁部が舌状で大きく外反する。胴部中位が張り出す。口縁部外面はタテハケ後、ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ナデが施され、胴部外面、内面は左上がりのタテハケが施される。後期終末のものと考えられる。

山陰系甕 (Fig.31－48, PL.25)

48は拡張した口縁部に5条の擬凹線が施される。内外面にはナデが施され、外面には煤が厚く付着する。藤田編年2期[2]、中川編年Ⅲ期[3]相当の後期中葉のものと考えられる。山口県内において後期中葉の山陰系土器は県北部で突抜遺跡[4]、坂手沖尻遺跡[5]、羽波遺跡[6]、宮ケ久保遺跡[7]で甕の大半を占め、また、佐波川下流域においては右田一丁田遺跡で11号住居跡[8]から出土している。山口盆地では出土例は少なく、後期中葉のまとまった資料が得られていないことから、位置付けは今後の課題である。

高坏（Fig.32－51～61，PL.27）

51は坏部である。上半が屈曲し短く外反する。内外面にわずかにタテハケを残す。その特徴から後期中葉のものと考えられる。

52～55は坏部で後期後半のものと考えられる。52は口唇部の面取りを行う。坏部上半で屈曲し、外反する。内面には接合時の段を残す。内外面はタテミガキが施される。53も口唇部の面取りを行う。坏部が直線的に外反する点で52よりも新しい傾向を持つ。内面は接合時の段を残す。内外面はタテミガキが施され、内面はヨコハケをわずかに残す。

54は口唇部を丸くおさめる。坏部上半は緩やかに外反する。外面はタテミガキが施され、内面は右上がりのミガキが施される。風化が激しい。55は口唇部に強めの面取りを行う。坏部上半は緩やかに外反する。外面はタテミガキ、内面はヨコミガキが施される。風化が激しい。

56～59は脚部で後期後半のものと考えられる。56は坏部との接合面で剥離しており、完成した脚部に坏部を接合したものと考えられる。円形透かし孔が2ヶ所で確認でき、3方透かしと考えられる。外面はタテミガキが観察できるが、風化が激しい。内面は透かし孔より上部で下から上のケズリが観察できる。57も接合面で剥離し、中央に穿孔する。外面はタテミガキ、内面はナデが施される。58は坏部と脚部の上半部が残る。外面は風化が激しく調整は不明。坏部内面は放射状にタテミガキが施される。脚部内面にはシボリ痕を残す。59は坏部と脚部が接合面で剥離しており、完成した脚部に坏部を接合したものと考えられる。脚部には6方の円形透かし孔が施される。裾部の開きは小さい。坏部外面はヨコハケが施される。内面はかすかに放射状ミガキが観察できるが、風化が激しい。脚部外面はタテハケ後タテミガキが施される。風化が激しい。内面はナデが施される。裾部外面は左上がりのハケ後、タテミガキ、内面はヨコハケが施される。

60・61は裾部である。60は裾部があまり広がらず、端部に面を持つ。外面がタテハケ後、タテミガキが施される。1ヶ所で円形透かし孔の下部が残る。内面はケズリ後、ヨコハケ、タテミガキが施される。61は端部を丸くおさめる。風化が激しいが、外面はヨコハケがわずかに観察できる。内面はヨコハケ後、ヨコミガキが施される。小片のため、古墳時代前期の高坏の可能性もある。

鉢（Fig.32－62，PL.27）

62は鉢である。ヨコナデにより口唇部をつまみ出して先を尖らせている。このために歪みがみられる。外面にはタテハケをわずかに残す。内面はタテハケ後、ナデが施される。

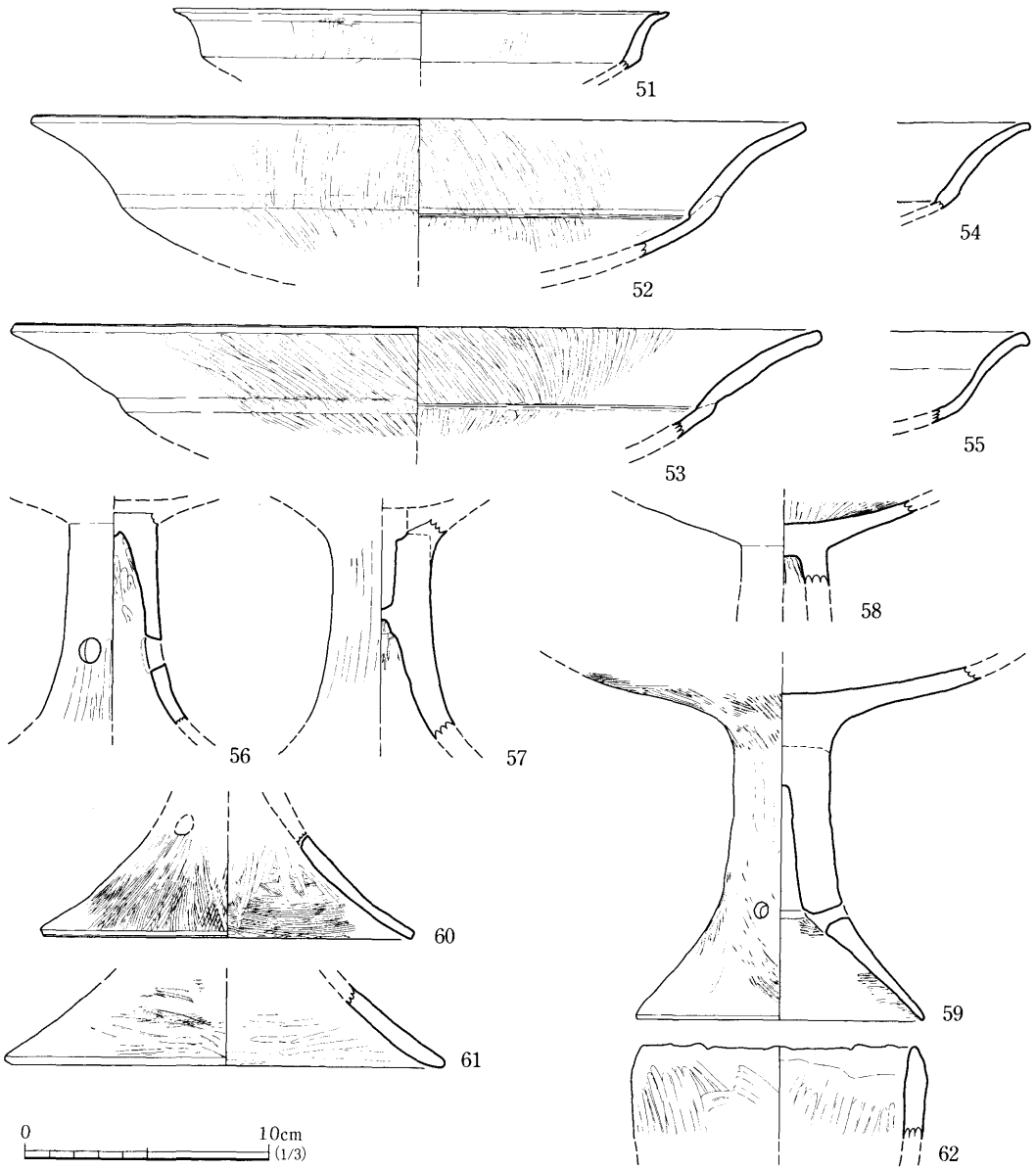


Fig.32　Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(4)

弥生時代後期としたが、他時期の可能性もある。

(5) 古墳時代前期

河川出土土器のうち、主体を占め、時期的に下限となるのが弥生時代終末から古墳時代前期の土器である。先に述べたように、弥生時代終末の土器は古墳時代前期の土器と区別が困難なものが含まれるため、合わせて説明を行う。

直口壺 (Fig.33－63・67, PL.28・29)

63は直口壺である。口縁部は外方へ直線状にのび、球状の胴部を持つ。口縁部外面にはタテミガキ、胴部外面はヨコミガキが施され、部分的に煤が付着している。口縁部内面にはヨコミガキ、胴部内面上半部には接合痕を明瞭に残し、指頭痕がみられるほか、下半部にはヨコミガキが施されており、煤が付着している。

67は直口壺の頸～胴部である。接合しないが同一個体3片から図上復元した。外面はヨコハケ後、ヨコミガキが施される。内面はヨコハケ後、草茎状の原体で下から上へのナデが施される。

広口壺 (Fig.33－64・65, PL.28)

64は口縁部以下を欠く。口縁部の中程で屈曲して外反する。外面はナデで内面はヨコハケが残るが、風化のためよくわからない。65は口縁部が緩やかに外反する。口縁部外面は丁寧なヨコミガキを施し、内面にはヨコハケ後、ナデが施される。胴部外面はヨコミガキを施し、内面はヨコハケの後、右から左方向のケズリが施される。

東部瀬戸内系壺 (Fig.33－66, PL.29)

66は壺の口縁～胴部で、形態が香川県下川津遺跡出土の下川津Ｂ類土器[9]に近似している。下川津Ｂ類の特徴を以下に要約しておく。①胎土は微細な角閃石を多く含む。②形態は直立ないし、内傾する頸部から強く折れて口縁部はほぼ水平に開き、端部をつまみ上げる。③体部外面はヘラミガキ、内面の上半は深く顕著なユビオサエで、下半はヘラケズリが施される。④口縁部内面には凹線状の強いナデが施される。

この特徴を踏まえて66を見てみると、胎土には角閃石は含まず、他と同様に1～3mmの砂粒を多く含んでいる。形態は近似しているものの、口唇部のつまみ上げはなく、口唇部は丸くおさめる。体部外面はタテハケの後、タテミガキを施し、内面上半にはユビオサエが施されるが、下川津Ｂ類ほど顕著ではない。下半はヨコハケが施される。

以上のように66は胎土、口唇部形態、調整において下川津Ｂ類とは異なっている。間接的には下川津Ｂ類の影響を受けた可能性が考えられるか、下川津Ｂ類土器は丸亀平野以東と阿波の一部に多く分布し、讃岐西部以西ではわずかしか出土していない。時期的に、移

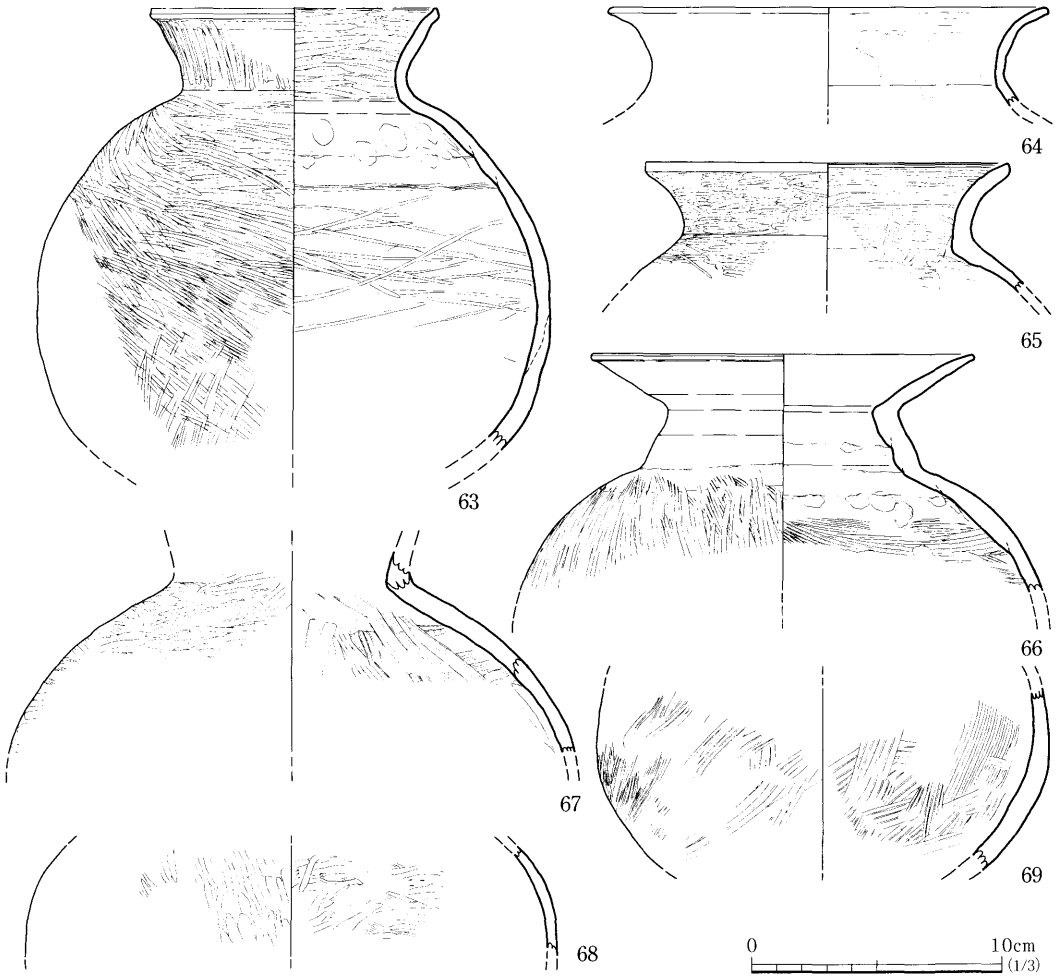


Fig.33　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(1)

動の時期は庄内期の古相に相当する下川津4期に多く、その前後では極めて少ないという。66は単独で時期を決定するのは困難であり、判断は難しい。いずれにせよ下川津B類の影響が認められるとすれば、異例なものとなる。山口県東部では庄内～古墳時代初頭のまとまった資料が極めて少ないので、類例を待って判断したい。

壺（Fig.33－68・69, PL.28）

68～69は壺の胴部である。68は外面にタテミガキが施され、内面はケズリ、ヨコハケの後にヨコミガキが施される。69は体部外面に左上がりのハケが施される。内面にはヨコハケ、タテハケが施される。

山陰系甕（Fig.34－70～82, PL.30）

70～72は口縁部の破片である。70は外面にヨコナデが施され、屈曲部が鋭く突出する。内面にはヨコナデが施され、屈曲部以下は右から左方向のケズリが施される。71は外面にヨコナデが施されるが、屈曲部の突出はやや甘い。内面はヨコナデで屈曲部以下は右から左方向のケズリである。72は口唇部が上方にわずかにつまみ出され、やや内側に巻き込む。外面はナデで屈曲部が下に鋭く突出する。内面はヨコナデである。

73は口縁部と胴部上半がわずかに残る。口唇部が外側につまみ出される。口縁部外面にはヨコナデが施され、屈曲部が突起状に張り出す。口縁部内面にはナデ、胴部内面には右から左方向のケズリが施される。外面全体に煤が付着する。

74～78は口縁部の破片である。74は口縁部が直線的に外反し、ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面に煤が付着する。内外面とも風化が激しい。75は口縁部が緩やかに外反し、ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面には煤が付着している。内外面とも風化が激しい。76は口縁部が緩やかに外反する。内面下半はヨコナデによるくぼみが目立つ。ヨコナデにより屈曲部が下方に突起状に張り出す。内外面にヨコナデが施される。77は口縁部が直線的に外反する。ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面に煤が付着する。78は口縁部が緩やかに外反する。屈曲部が鋭く突起状に張り出す。外面に煤が付着する。

79・80は胴部である。79は口縁部を欠くが、内面に屈曲を残している。水平ないし、やや右上がりのタタキ（1条2mm　7mm/3本）の後、タテハケが施され、口縁部下はヨコナデが施される。外面全体に煤が付着する。内面下半には左から右方向にケズリが施される。上半にはケズリの後左上がりのハケが施され、指頭痕が残る。他とは異なる灰白色系の胎土、口縁部内面の屈曲から山陰系甕と判断したが、異なる可能性もある。

80も口縁部を欠くが内面に屈曲を残す。外面はヨコハケの後、タテハケ、ナデが施され、煤が付着する。内面は上半が右から左へタテハケの後、ナデが施され指頭痕が残る。下半はナデが施される。

81・82は胴部片である。81は櫛描波状文が施される。風化が激しいが、6条確認できる。内面は左から右方向のケズリが施される。82は8条以上の櫛描波状文の直下に11条単位の櫛描波状文が施される。内面には左から右へのケズリが施される。以上の山陰系甕は、中川編年のⅥ期中相・新相にほぼ併行するものであろう[10]。

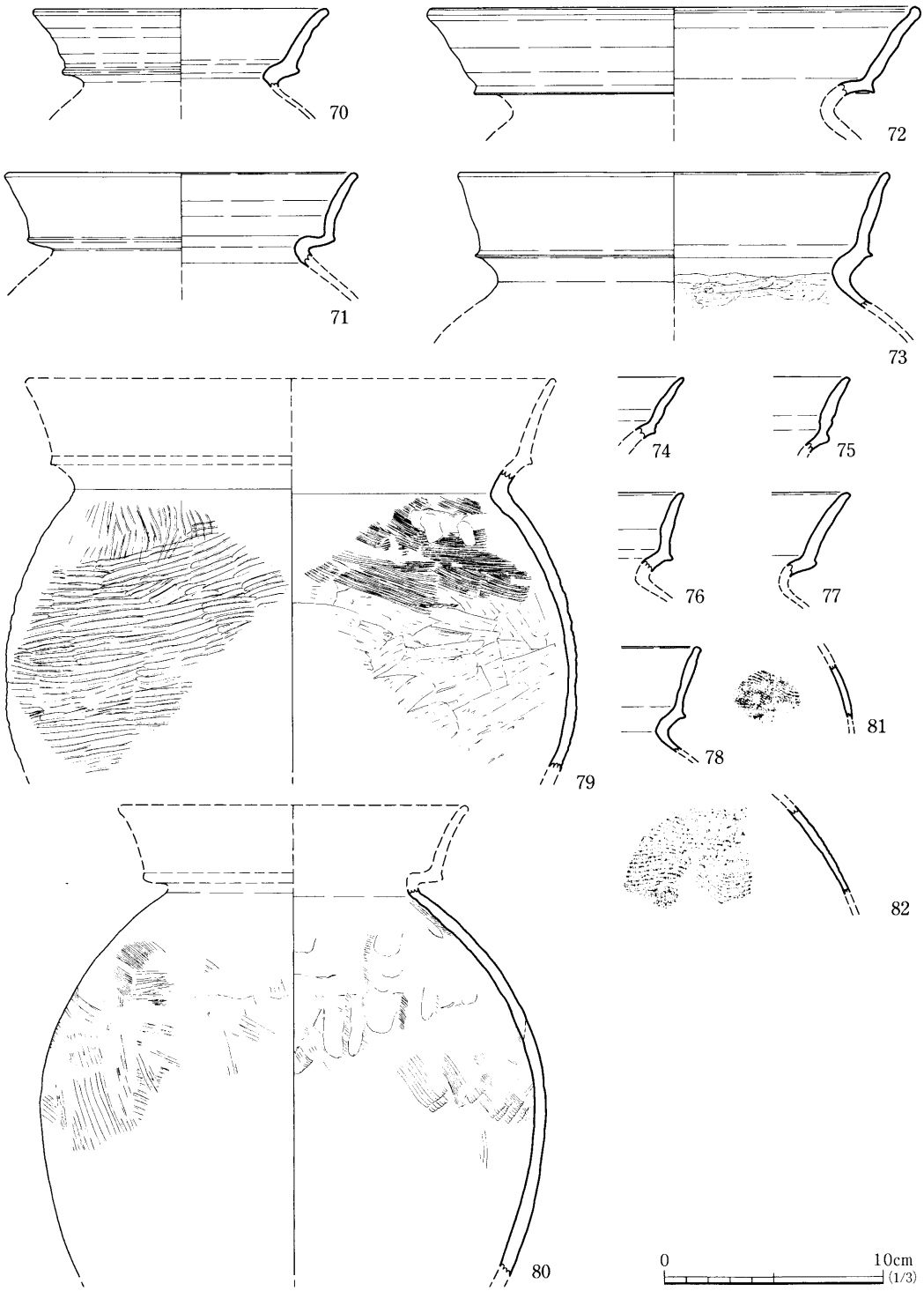


Fig.34　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(2)

タタキ甕 (Fig.35－83～110, PL.31・32)

タタキを有する甕を一括してまとめた。タタキ調整の記述は年報XIにしたがい、タタキ1条の凹み幅と3条の幅を一単位として記述する。胴部片は内面の調整等によって上下傾きを決定したが、異なる可能性もある。

83～85は口縁部である。83は外面が右上がりのタタキ（1条3mm　1.1cm/3本）で、内面は右から左のケズリ。84は外面が右上がりのタタキ（1条1.5mm　7mm/3本）の後、上半部はヨコナデ。内面はヨコナデ。85は外面が右上がりのタタキ（1条 3mm　1.3cm/3本）。内面はヨコハケ後ヨコナデ。

86～110は胴部片である。86は外面が平行ないし右上がりのタタキ（1条2.5mm　1cm/3本）で内面は左から右方向のケズリ。87は外面が左上がりのタタキ（1条2mm　7mm/3本）で内面は右上がりのケズリ。88は外面が右上がりのタタキ（1条2mm　7.5mm/3本）、内面はナデで、接合痕が残る。89は外面が平行タタキ（1条2mm　6.5mm/3本）で内面はヨコハケ後ナデ。90は外面が平行タタキ（1条2mm　7mm/3本）の後、タテハケ。内面はナデ。91は外面が右上がりのタタキ（1条1.5mm　6.5mm/3本）で内面はタテハケ後、ヨコハケ。92は外面が平行タタキ（1条3mm　1.2cm/3本）の後、タテハケ。内面は右上がりのハケ。93は外面が平行タタキ（1条2mm　7.5mm/3本）で内面は左上がりのハケ。94は外面が平行タタキ（1条1.5mm　6.5mm/3本）で内面は左上がりのケズリ後ナデ。95は外面が平行タタキ（1条2mm　9mm/3本）で内面はヨコハケ後ヨコナデ。96は外面が平行タタキ（1条2mm 1.2cm/3本）で内面は下から上方向のケズリの後、ヨコハケ。97は外面が平行タタキ（1条2.5mm　1.2cm/3本）で内面は左上がりのハケ。98は外面が平行タタキ（1条1.5mm 6.5mm/3本）で内面はナナメハケ後ナデ。99は外面が右上がりのタタキ（1条2mm 8mm/3本）で内面が左上がりのケズリ後ナデ。100は外面が平行タタキ（1条2mm 1.4cm/3本）後ナデで内面は左上がりのハケ。101～103は同一の可能性が高い。101は外面が平行タタキ（1条3mm　1.3cm/3本）で内面はヨコハケ後タテナデ。104は外面が平行タタキ（1条2.5mm　1cm/3本）で内面はナデ。105は外面が平行タタキ（1条2mm 9mm/3本）で内面はヨコハケ。106は外面が平行タタキ（1条1.5mm　6mm/3本）で内面はナデ。107は外面が左上がりのタタキ（1条2mm　8.5mm/3本）で内面はナデ。108は外面が左上がりのタタキ（1条1.5mm　5.5mm/3本）で内面はヨコハケ。109は外面が平行タタキ（1条1mm 4mm/3本）で内面は左上がりのハケ。110は外面が平行タタキ（1条2mm　7mm/3本）で内面は左上がりのハケ。

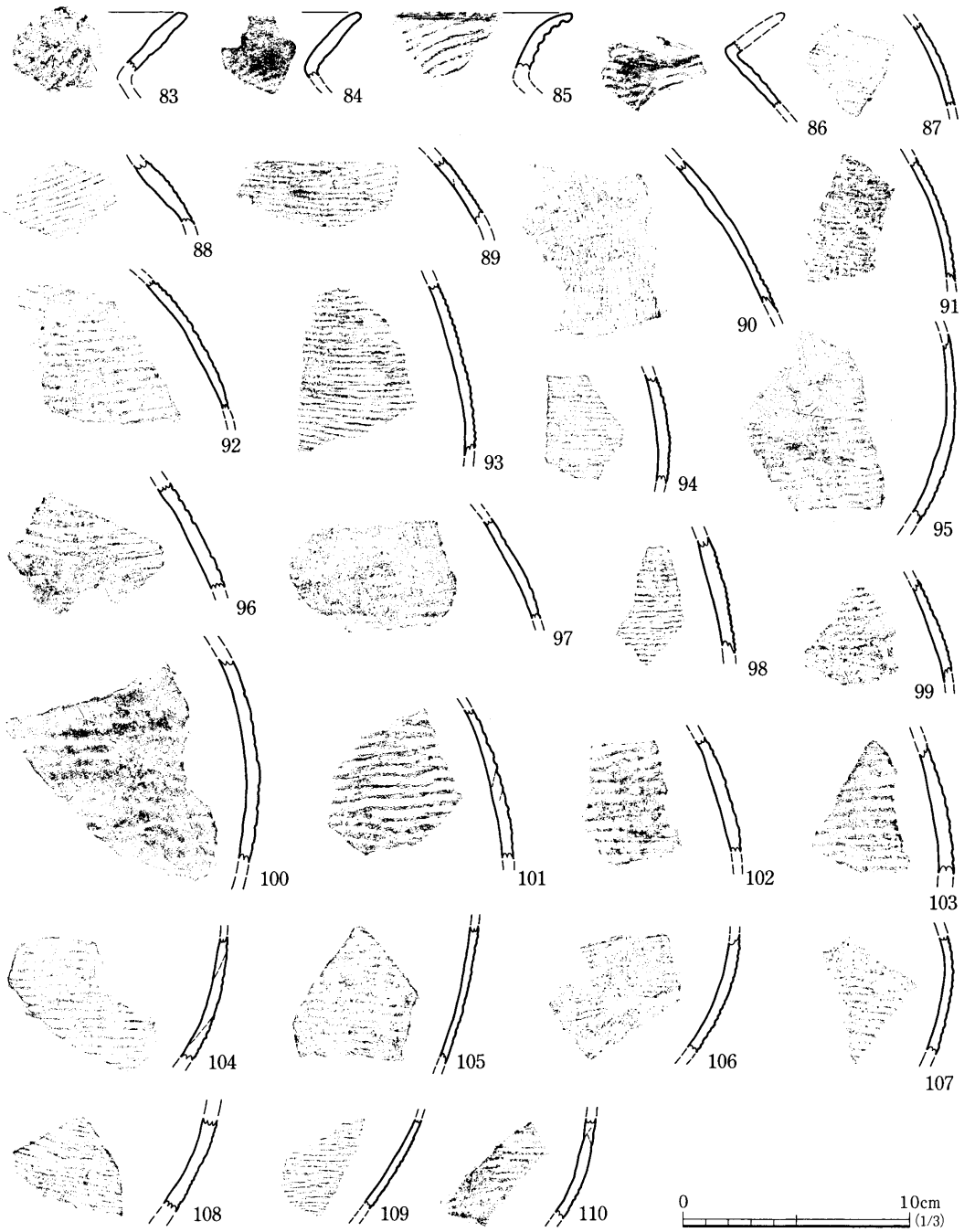


Fig.35　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(3)

庄内系甕（Fig.36－111, PL.33）

111は庄内系甕である。外面には煤が付着している。口縁部は短く直線的に外反し、口唇部を上につまみ上げる。口縁部内面はヨコナデで、胴部との境には鋭い稜線が形成される。胴部外面には平行タタキ（1条2mm　8mm/3本）が、内面は右から左方向のナデが施される。胴部器壁は4.5mmを測る。

山口県内において庄内系甕は綾羅木郷遺跡[11]、吉田馬場遺跡[12]で出土しており、他にも散発的に出土しているようである。綾羅木郷遺跡を除くと、内面のケズリがなく、器壁が厚いため、搬入品とは考えにくい。なお、従来庄内系甕とされてきた、口唇部を丸くおさめ、胴部にタタキを持ち、内面にハケを施す球形の甕は、布留系甕を模倣した伝統的Ｖ様式系の甕と考えられる[13]。

在地系長胴甕（Fig.36－112, PL.33）

112は口縁部が「く」の字状に短く外反する。胴部の張りは少なく長胴である。口縁部及び胴部外面に右上がりのタタキ（1条3.5mm　1.5cm/3本）が下から上、左から右方向に施される。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は下から上へヨコハケが施される。胴部中位に粘土紐接合痕が観察でき、器壁は6mmを測る。

このタイプの甕はいわゆる伝統的Ｖ様式系の甕と呼ばれるものだが、本例のように頸部のすぼまりが少なく、長胴で胴があまり張らないものは、伝統的Ｖ様式系甕の影響を受けて、従前の在地系の甕が外面にタタキを残したものと理解できる。山口県内では柳瀬遺跡LS005[14]で一括出土例がある。弥生時代終末期に出現し、古墳時代初頭まで残存するものと考えられる。口縁部形態には「く」の字に外反するものと後期後半と同様な舌状口縁がある。タタキのくぼみ幅は3～5mm程度と庄内甕に比べて太く、ハケによってタタキを消すものも多い。内面は粗いハケ調整で器壁は5～7mm程度と厚く、小さな平底を特徴とする。

甕（Fig.36－113～115, Fig.37－116, PL.33）

113～116は甕の胴部である。いずれも内外面の調整によって傾きなどを判断したもので誤っている可能性もある。113は風化のため単位幅がはっきりしないが、平行タタキの後、ヨコハケ、タテハケが施される。内面調整はナデである。

114は外面に平行タタキ（1条1.5mm　9mm/3本）の後、タテハケが施され、タタキが消される。内面は下から上へヨコハケが施される。器壁は5mmを測る。115は大型の甕で外面に平行タタキ（1条3mm　1.2cm/3本）が施された後、タテハケによりタタキが消される。内面は左上がりのハケの後、タテナデによりハケを消している。器壁は6mmを測る。

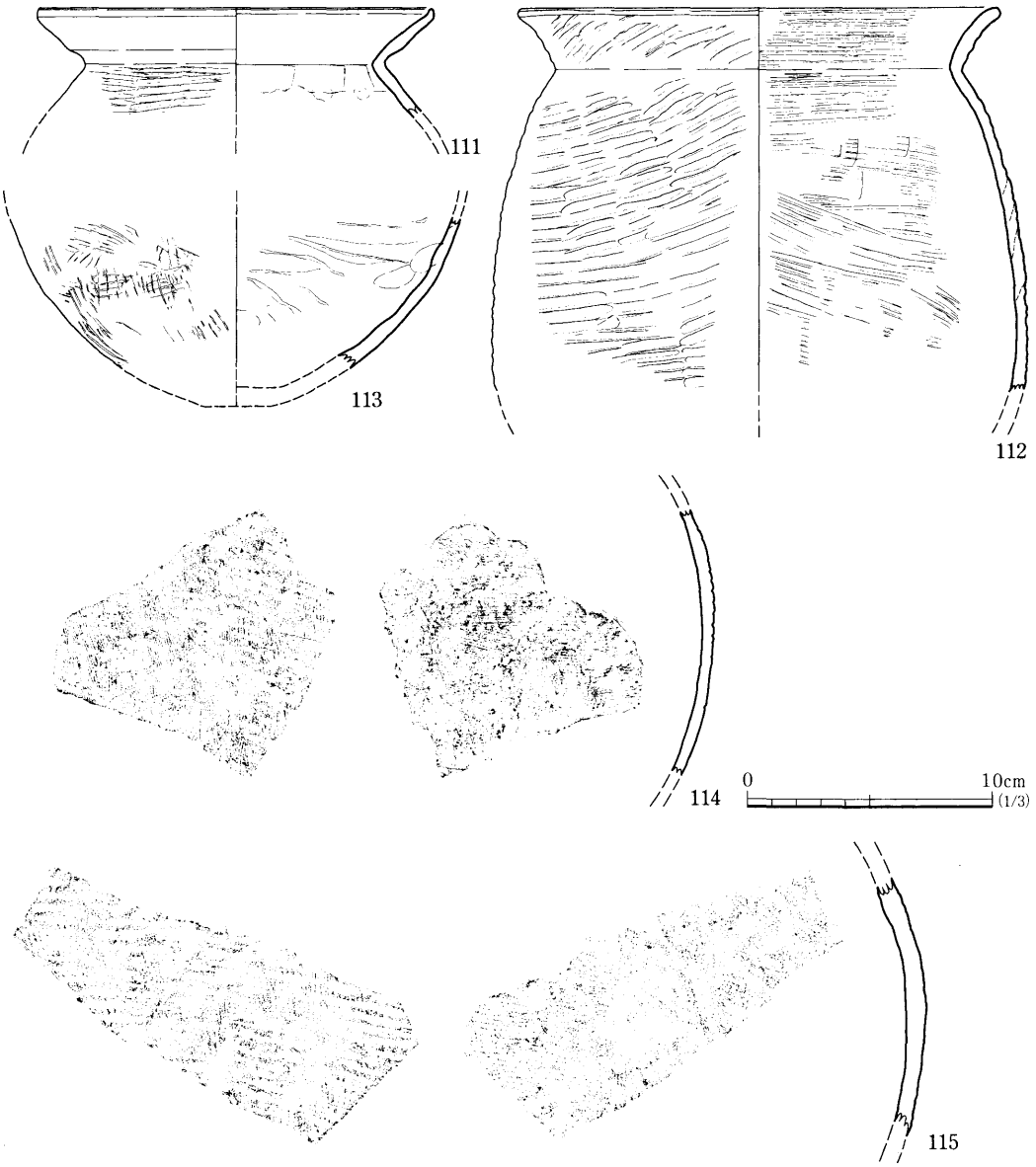


Fig.36　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(4)

116は外面に平行タタキ(1条1.5mm　8mm/3本)の後に左上がりのハケが施される。内面にはヨコハケが施される。器壁は9mmである。

113～116の甕から、Fig.35のうち、タタキの凹み幅、器壁の厚さ、内面調整から85・90・92・97・100～103・104は在地系長胴甕もしくは伝統的Ⅴ様式系甕、その他は布留系系甕を模倣した伝統的Ⅴ様式系の甕と考えられる。

甕 (Fig.37－117～127, PL.34)

ここでは胴部外面がハケ調整の甕をまとめた。117・118・120は口縁部のみ残存するもので胴部にタタキが施されていた可能性もある。117は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲し、内面には稜線を持つ。口唇部は面を持ち、口縁部外面は左上がりのハケ、内面はヨコハケが施される。全体的に風化が激しい。118は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコハケ、胴部との境にはタテハケが施される。内面はヨコハケ後ナデが施される。119は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコハケ、胴部外面はタテハケが施される。口縁部内面はヨコハケが施される。胴部内面は風化が激しいが、ケズリの可能性が高い。120は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面は左上がりのハケ、内面はヨコハケが施される。

121は口縁部が舌状に外反し、胴部はやや肩が張る。内面には口縁部の粘土帯接合痕が明瞭に残る。口唇部は面を持つ。口縁部外面はタテハケの後、ヨコハケ、口縁部内面はタテハケの後、ヨコハケが施される。

122は口縁部は「く」の字に外反し、胴部は肩が張る。口唇部は丸くおさめ、胴部外面には左上がりのハケ、口縁部はヨコナデが施される。外面全体に煤が付着している。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は左上がりのケズリが施され、器壁が4.5mmとやや薄く仕上げられている。

123は布留系甕の口縁部である。口縁部の中位がやや膨らみ、やや内湾しながら外反する。口唇部は面を持つ。口縁部外面は左上がりのハケ後、ヨコナデが施される。胴部との境にはわずかにタテハケが残る。口縁部内面はヨコハケが施される。河川の下限を示す土器であり、第1層から出土した。

124は口縁部上半のみの破片である。口唇部には面を持つ。口縁部外面はタテハケ後、ヨコナデが施される。口縁部内面は風化が激しく、調整は不明。

125は胴部の上半と下半が直接接合しないが、同一個体と判断して図上復元した。口縁部は「く」の字に外反し、胴部中位が張り出す。上半は欠損する。口縁部内面には、稜線がみられる。口縁部外面はタテハケ後、ヨコハケ、胴部外面はタテハケ及び左上がりのハケが施され、煤が付着する。口縁部内面はケズリの後、ナデ、胴部内面はヨコハケ、左上がりのハケが施される。

126・127は布留系甕もしくは山陰系甕の胴部片と考えられる。内面のケズリにより器壁は薄く仕上げられている。両者は同一個体の可能性が高く、他にも同様な破片がある。いずれも内外面の調整によって上下、傾きを判断したので異なる可能性もある。

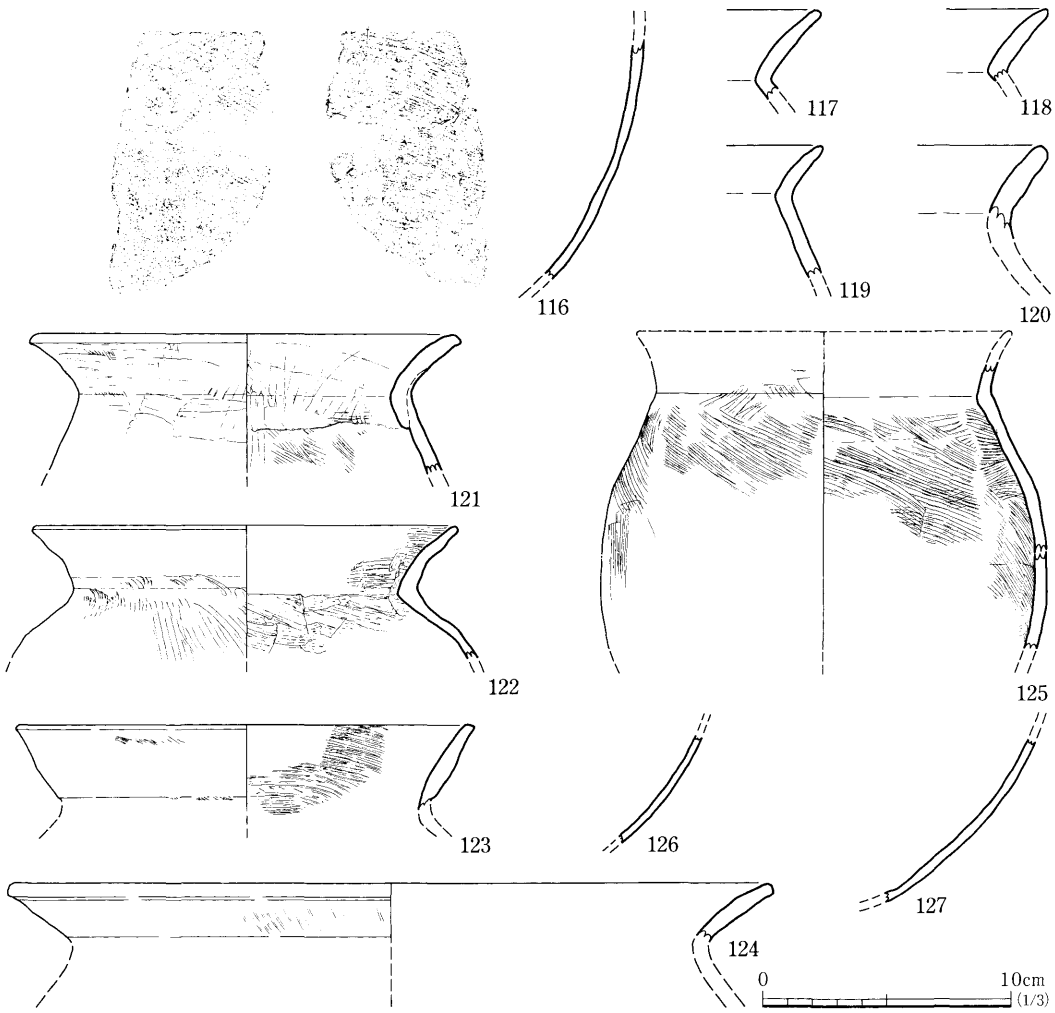


Fig.37　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(5)

126は外面がタテナデで、内面は下から上へのケズリである。器壁は3mmで外面に煤が付着する。127は胴部下半から底部にかけての破片であり、外面はタテナデで、煤が付着する。内面は上半が上から下へのケズリである。下半は指頭痕が顕著にみられる。器壁は3mmである。

高坏（Fig.38－128～137, PL.35）

128～130は坏部である。128は上端を欠き、外へあまり広がらない。外面はタテミガキで下半との境にはヨコナデが施される。内面はタテハケ後ナデが施される。下半との境は明瞭でタテハケが施されている。129は上半が外へ大きく開く。口唇部は丸くおさめる。外面はヨコハケの後、放射状にタテミガキが施される。内面はタテハケが施される。130は有段高坏の坏部として復元したが、脚部の可能性もある。口縁部は屈曲部から外へ大きく開く。口唇部はヨコナデによりわずかに上下に突出し、屈曲部もヨコナデにより、下方に突出する。内外面にはヨコミガキが施される。

131～137は脚部である。131は中実の脚部で、中心部に坏部との接合面がわずかに残っており穿孔がみられる。内外面ともナデが施される。132は脚部の中心部分が剥離しており、中実であったと考えられる。外面にはわずかにタテミガキが残る。133は脚部の上端が中実になる。裾部は屈曲して開き、2孔一組の透かし孔がある。3方透かしと考えられる。

134～137は小型高坏の脚部である。134は内面にシボリ痕が残る。風化が激しい。135は脚部が短く、裾部、坏部が屈曲して開く。脚部外面には下から上方向のケズリが施され、裾部外面にはタテハケ、裾部内面にはヨコハケが施される。136は裾部である。風化しているが、外面にはタテミガキが残る。円形透かし孔があり、5方透かしと考えられる。内面はヨコハケが施される。137は裾部で端部はヨコナデによって内湾している。外面はタテハケ後、タテミガキが施される。円形透かし孔の下部が残存する。

鉢（Fig.38－138～141, PL.35）

138は直口の鉢で外面下半に左から右へのケズリが施される。風化が激しい。139は小形丸底鉢である。口縁部は外反し、緩やかに胴部が張り出す。外面は風化のため調整は不明。内面は左から右方向のケズリの後、ヨコハケが施される。140は口縁部と胴部が接合しないが、同一個体と考えられるため、図上復元したものである。口縁部は短く外反する。胴部は肩が張り、底部は尖り気味の丸底である。外面は底部が左上がりのタタキ、胴部は右上がりのタタキが施される。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面はヨコミガキが施され、底部内面にはユビオサエが残る。141は直口の鉢である。外面上半には煤が付着しており、下半部は被熱のため、一部は赤橙色に変色している。口縁部外面はヨコナデが施される。胴部内面は上半はナデで、下半は右から左へのケズリの後、下から上へのケズリが施される。

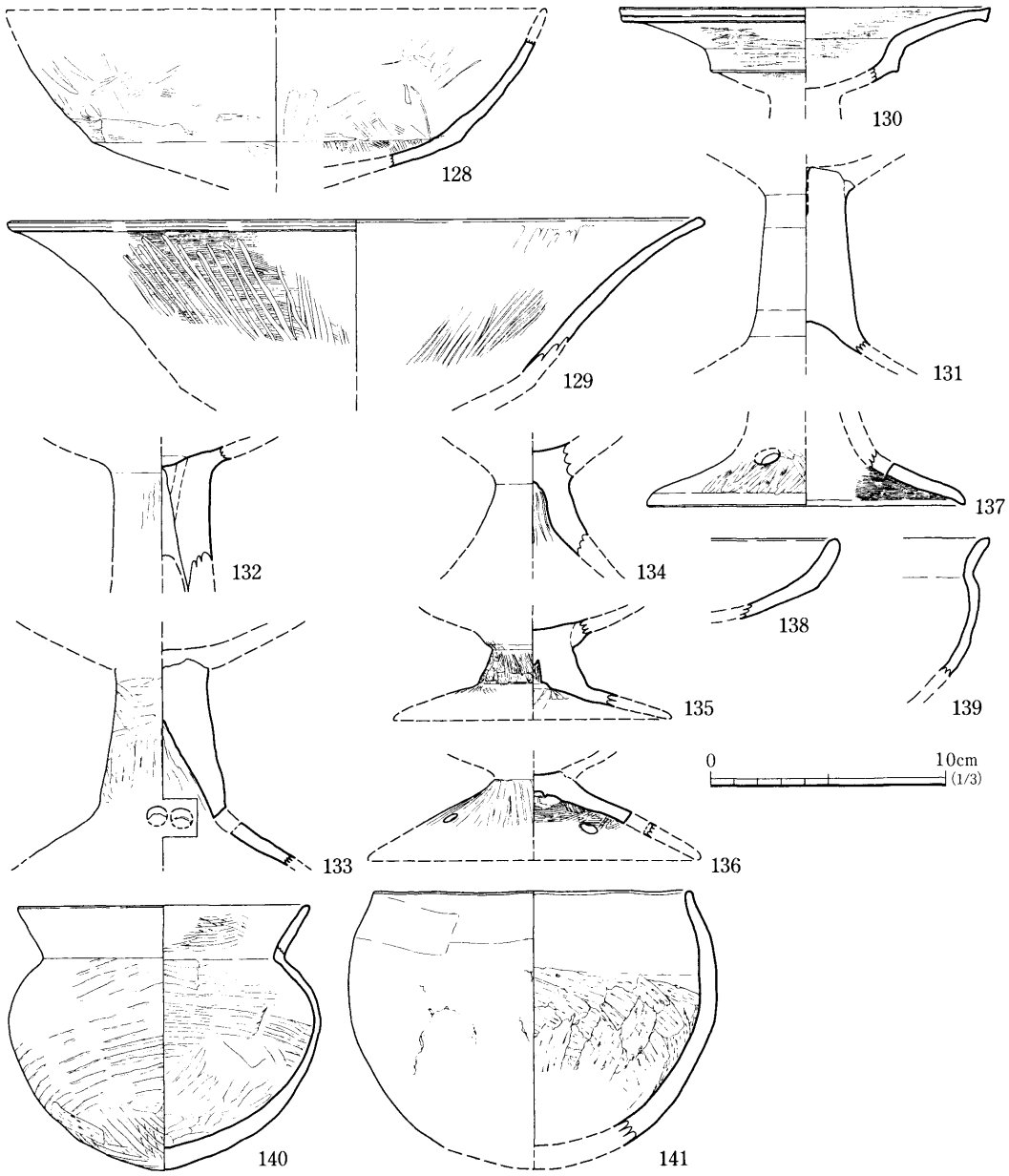


Fig.38　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(6)

底部（Fig.39－142～154, 40－155～175, 41－176・177, PL.36～39）

底径が縮小傾向にあるもの、もしくは丸底化の傾向がある壺、鉢、甕の底部である。弥生時代後期～終末期のものも識別が困難なためここに含めて記述する。142～154は壺もしくは鉢の底部と考えられる。148は接合しないが、同一個体と考えられるため、図上復元

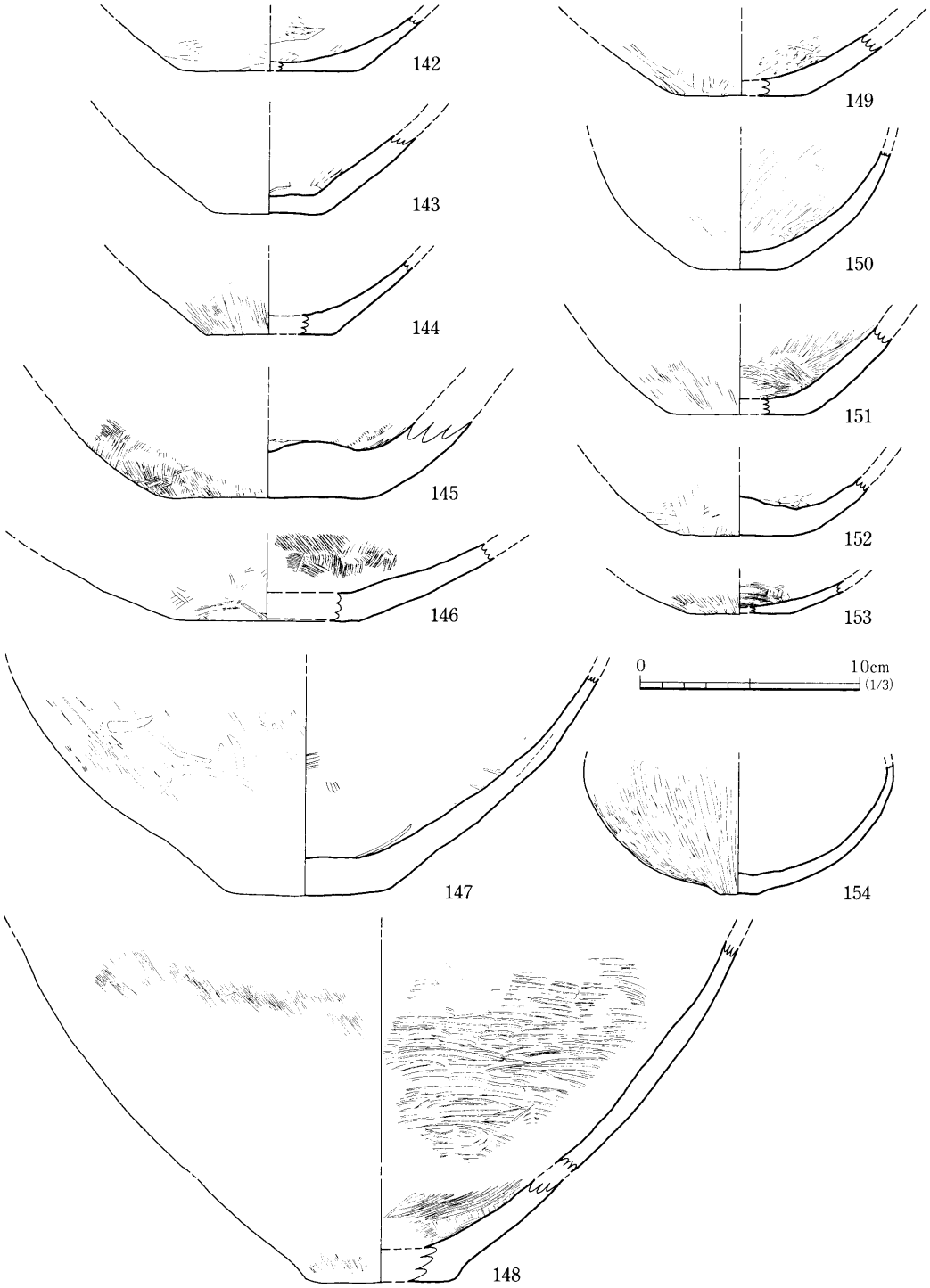


Fig.39　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(7)

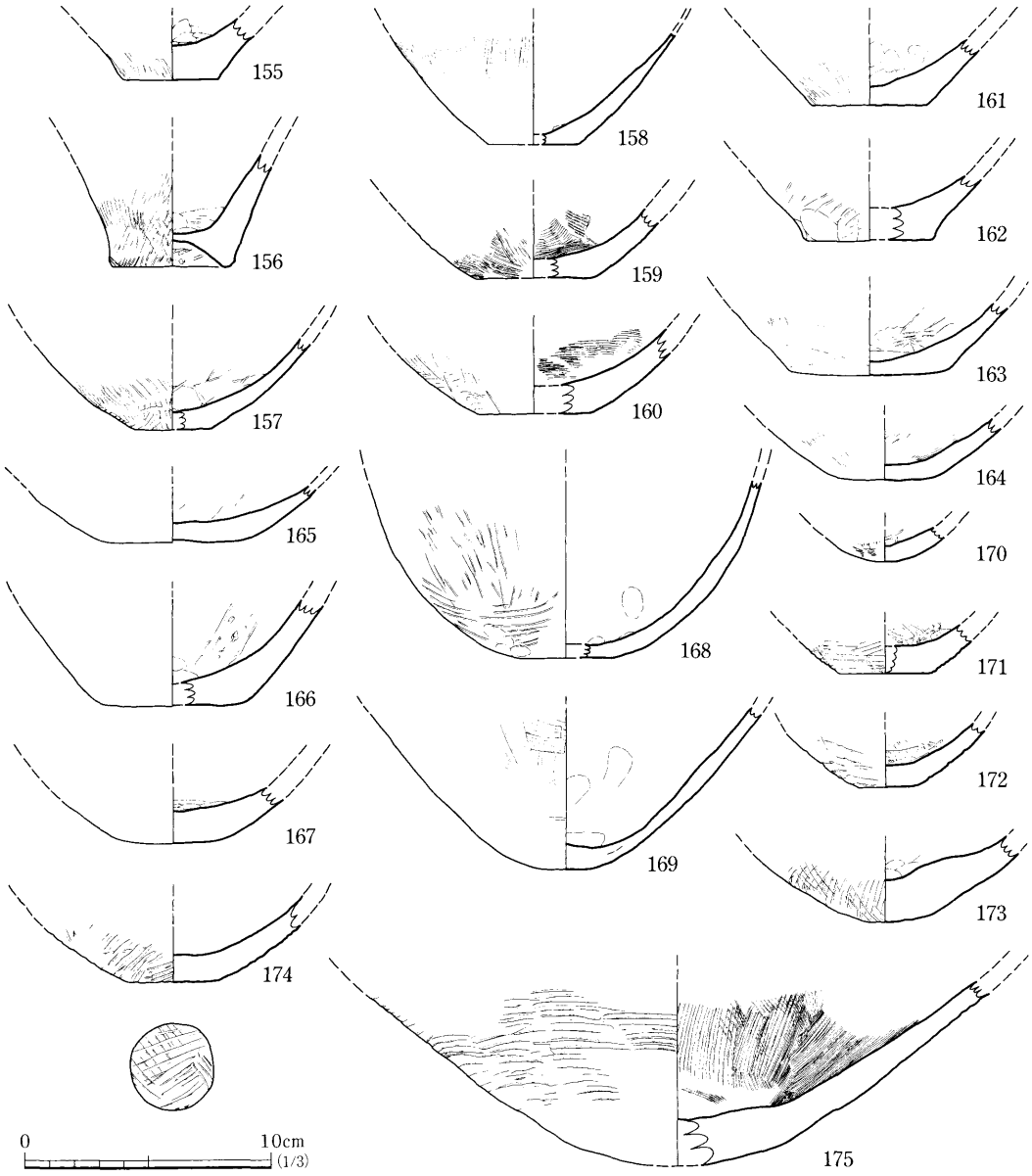


Fig.40　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(8)

した。複合口縁壺の底部の可能性が高い。

155～177は甕の底部である。煤が付着し、被熱のため赤橙色に変色したものが多い。169・170は丸底である。170は外面がヨコハケ後タテハケ、内面はユビオサエ、ナデが施される。171～175は外面にタタキを施し、173・175は丸底である。内面は171・172がケズリ、173・174はナデで、175はタテハケが施される。

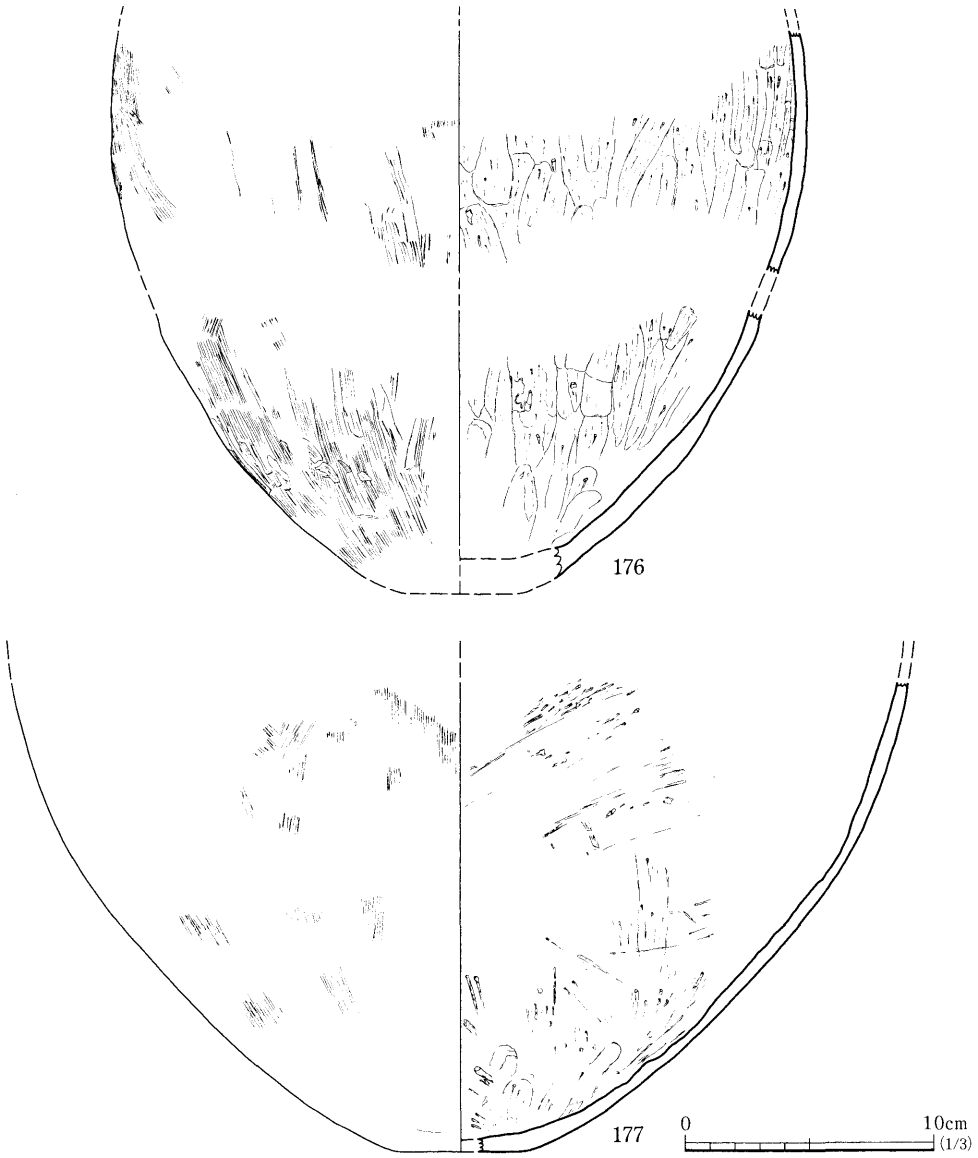


Fig.41　Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(9)

176は接合しないが同一個体と考えられるため、図上復元した。底部は欠損しているが、丸底気味の小さな平底と考えられ、胴部は緩やかにすぼまる。外面にはタテハケ後ナデが施され、煤が付着している。内面は下から上方向の荒いケズリの後、ナデが施される。177は痕跡化した平底で、胴部が大きく外へ張り出している。外面はタテハケ後ナデが施される。内面は下から上方向のケズリで、底部内面には指頭痕が残る。

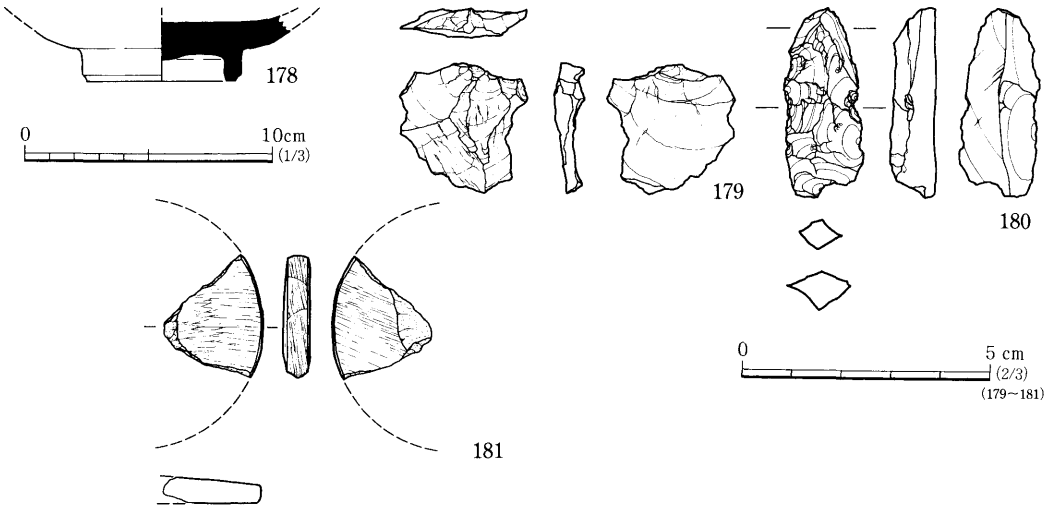


Fig.42　Aトレンチ河川出土磁器・石器・石製品実測図

磁器 (Fig.42－178, PL.39)

178は青磁碗の底部である。全面に施釉している。内底面の釉はカキ取られ、露胎となる。内外面に貫入がみられる。高台畳付は側面が削られることにより、やや幅が狭くなっている。表採遺物で近世以降のものと考えられる。

石器・石製品 (Fig.42－179～181, PL.39)

Aトレンチでは弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が主体を占めているため、石器の出土量は少ない。

179は調整剥片である。背面5枚、腹面1枚の剥離面より構成される。背面の剥離面は全て同方向から打撃しており、特に新しい3面は打点も近接している。このことから、石器製作の際の外形を整えるための調整で生じた剥片である可能性がある。石質はサヌカイトである。

180は石鏃の未製品である。素材剥片の形状は不明だが、表がその腹面になると考えられる。右先端部には折り取りによる剥離面がみられ、調整加工の剥離面も大きく、かなり加工の度合いは高い。裏の調整は1ヶ所だけであるが、剥離面は大きい。石質は黒曜石である。

181は角閃石安山岩製の紡錘車の破片である。中心部は欠損している。復元径は2.6cm、最大厚5.5mmで、表・裏及び側面に二次研磨の痕跡が明瞭に残る。

2　Bトレンチ・配線出土遺物

Bトレンチ及び配線では縄文時代晩期の河川、弥生時代後期の住居跡、弥生時代後期から終末の土坑、溝、近世の水田暗渠を検出した。出土遺物には縄文時代晩期の土器、弥生時代中期から終末の土器、ガラス小玉、古墳時代初頭の土器、近世の陶磁器と弥生時代の石器などがある。以下、時代を追って説明を行う。

(1) 河川出土遺物

縄文時代晩期の土器は河川の肩部や堆積土から出土している。鉄分が付着し、保存状態は不良なものが多い。出土土器はいずれも岩田四類ｃに相当する晩期中葉の土器である。

深鉢（Fig.43－182～184, 44－185, 45－186・187, PL.40～42）

182は外反する口縁部である。口唇部は丸くおさめるが、風化のため、刻目の有無は不明である。内外面とも風化が著しく、調整は不明。他にも接合しないが同一個体と考えられる破片がある。

183は口縁部～胴部である。直口でバケツ状にすぼまる。口唇部は面取りをしている。外面は右から左方向の二枚貝条痕が下から上へ施される。内面は左から右方向の二枚貝条痕が下から上へ施される。全体的に鉄分の付着が激しい上、極めて脆いため、採拓を行うことができなかった。岩田四類ｃに伴うものと考えられる。

184は頸部～胴部である。頸部から胴部にかけて張り出す。外面は横方向の二枚貝条痕が施される。頸部と胴部の境には二枚貝による2条の沈線がみられるが、左側では条痕によって消されている。内面は左から右方向の二枚貝条痕の後にナデが施される。

185は頸部～胴部である。胴部下半は接合しない同一個体から図上復元している。頸部は胴部にかけて張り出し、胴部はバケツ状にすぼまる。緩やかに立ち上がる口縁部を持つものと推測される。頸部外面は右から左方向の二枚貝条痕が施され、胴部は縦もしくは左上がりの二枚貝条痕の後、ナデが施される。頸部内面は右から左方向の二枚貝条痕が施され、胴部内面上半は、二枚貝条痕の後ナデが施される。下半は左上がりの二枚貝条痕が施される。

このように二枚貝条痕をナデ消すのは岩田四類ｃでも新しく位置づけられ、近畿地方の篠原式の中～新段階[15]、九州の黒川式の新相段階に併行する土器と考えられる。山口県内では岩田四類ｃの出土例が増えつつあるが、新相については出土例が少ない。吉田遺跡においては、農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査で、該期の河川から深鉢が出土しているほか[16]、養護学校敷地では土坑から浅鉢と深鉢の底部が出土しているが[17]、大半は小破片で

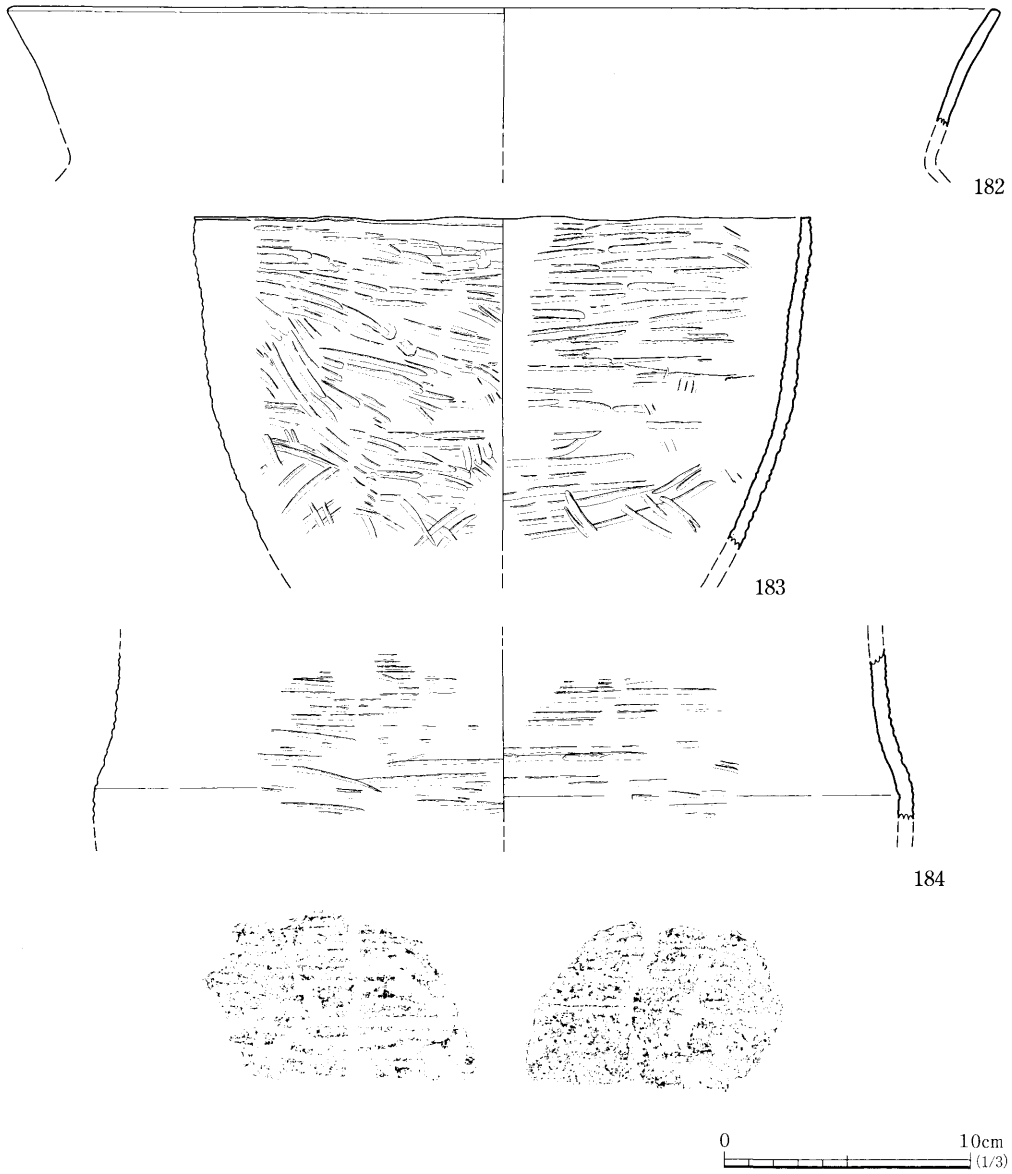


Fig.43　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(1)

ある。本例のように頸部から胴部の形態がわかるものは少なく、後述するFトレンチ出土遺物とともに貴重な類例を加えることができた。

186は頸部～胴部である。頸胴部界の屈曲部がわずかしか残っていないため、径と傾きについては検討の余地がある。頸部から胴部上半にかけては横方向の二枚貝条痕が施され、胴部下半は右下から左上へ二枚貝条痕が施される。内面は横方向の二枚貝条痕後ナデであ

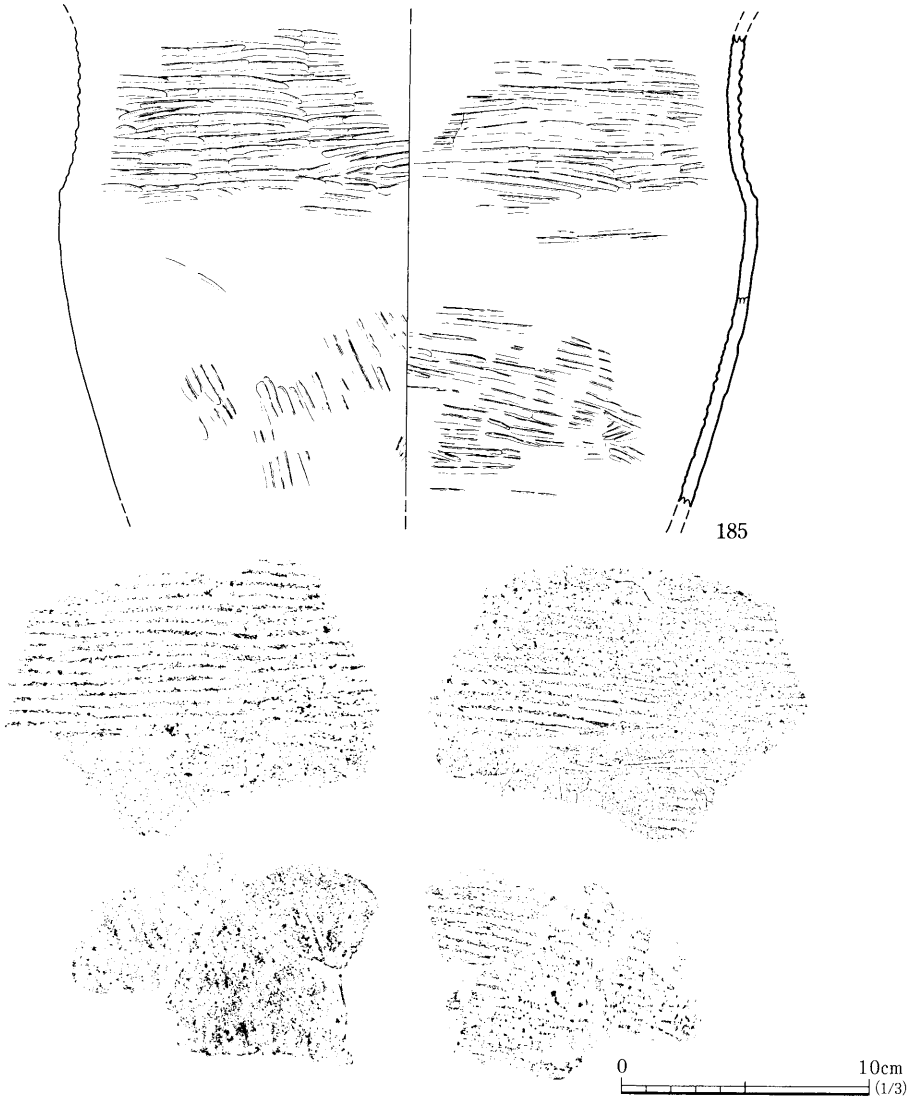


Fig.44　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(2)

る。風化が激しいため、採拓を行っていない。

187は胴部下半である。他に接合しないが同一個体と考えられる破片がある。外面は風化が激しいため、二枚貝条痕がわずかに観察できるにすぎない。内面はナデである。

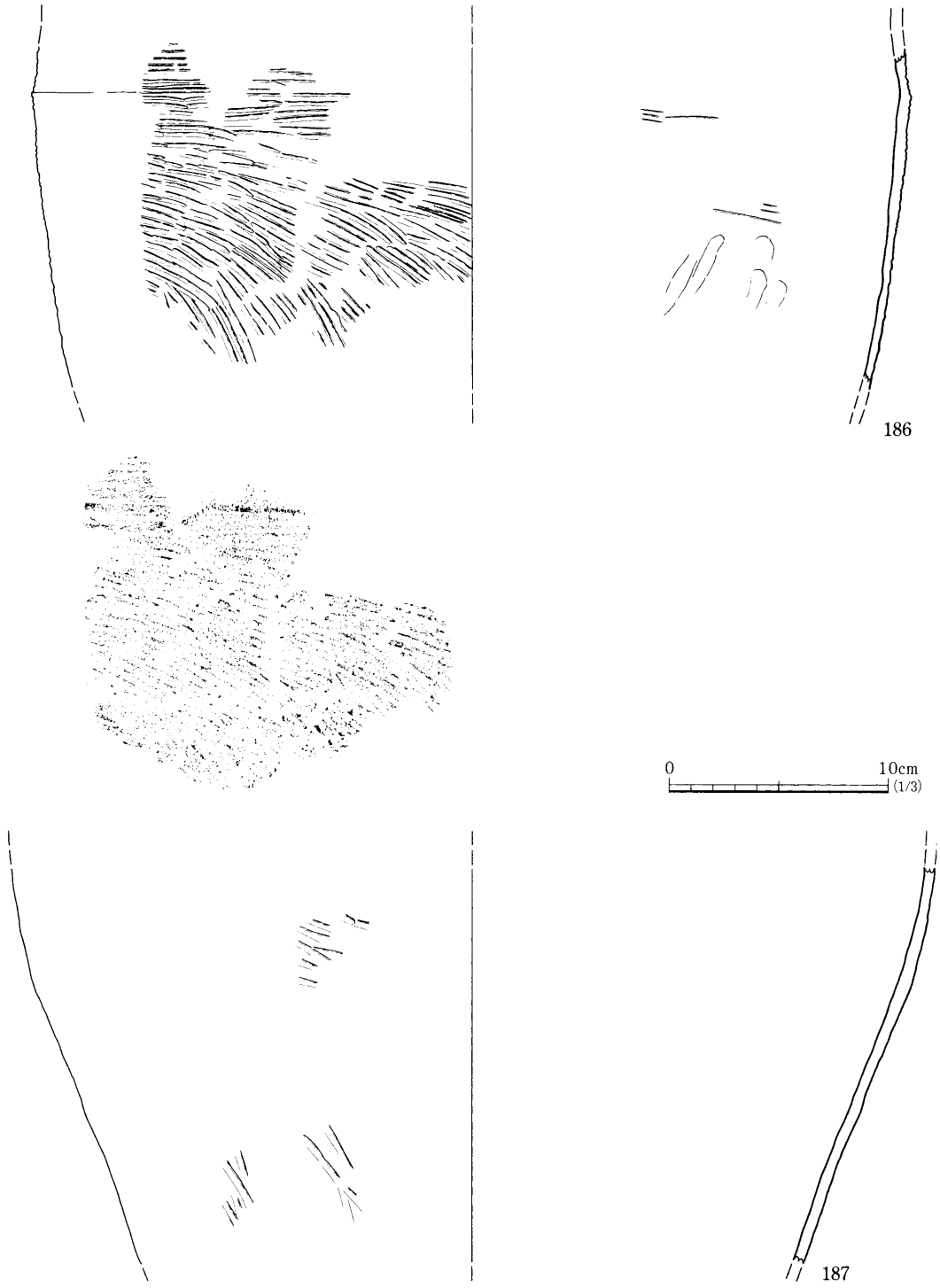


Fig.45　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(3)

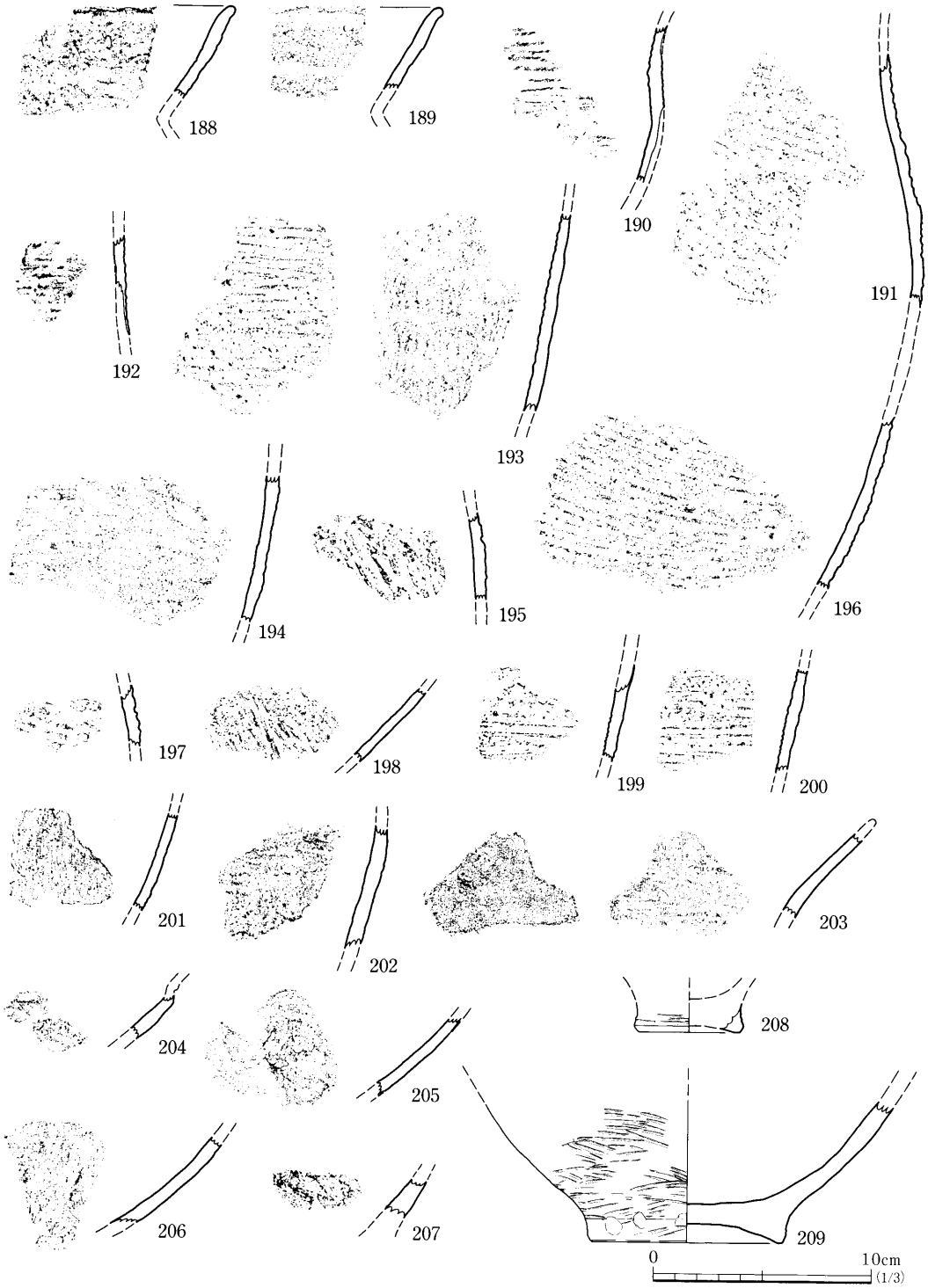


Fig.46　Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(4)

深鉢口縁部・頸部（Fig.46－188～192・196, PL.43）

188は口縁部の破片である。先端はヨコナデにより、やや外に折れ曲がる。口唇部は丸くおさめる。内外面とも横方向の二枚貝条痕の後、ナデである。鉄分の付着が著しい。189も同様に先端はヨコナデによりやや外に折れ曲がり、口唇部は丸くおさめる。外面の風化が激しく調整は不明。内面は横方向の二枚貝条痕後ナデである。

190は深鉢の頸部～胴部の破片である。頸部は胴部にかけて張り出し、胴部は緩やかにすぼまる。頸部外面は横方向の二枚貝条痕が施され、内面も同様に横方向の二枚貝条痕が施される。185と同一個体の可能性が高い。胴部外面は風化が激しく、調整は不明。胴部内面は横方向の二枚貝条痕後ナデである。

191・196は接合はしないが、土器の色調・胎土・焼成、出土状況などから同一個体として図上復元した。頸部から胴部にかけて緩やかに張り出し、バケツ状にすぼまる。外面は左上がりの二枚貝条痕が施される。鉄分の付着が著しい。内面は横方向の二枚貝条痕後、ナデである。

192は頸部の破片である。外面には横方向の二枚貝条痕が施される。内面はナデである。

深鉢胴部片（Fig.46－193～195, 197～202, PL.43）

193は外面が縦方向及び左上がりの二枚貝条痕後ナデである。内面は横方向の二枚貝条痕が施される。194は内外面とも横方向の二枚貝条痕後ナデである。風化が激しい。195は外面に左上がりの二枚貝条痕が施される。内面はナデである。197は外面に横方向の二枚貝条痕が施される。内面はナデである。198は外面が左上がりの二枚貝条痕で内面が横方向のミガキである。199・200は左上がりの二枚貝条痕後ナデ、内面は横方向の二枚貝条痕が施される。風化が激しい。201は外面が左上がりの二枚貝条痕後ナデで内面もナデである。202は内外面とも横方向の二枚貝条痕後ナデである。

浅鉢（Fig.46－203～205, PL.44）

203は口縁部で、口唇部を欠く。外面がヨコミガキ、内面が二枚貝条痕後ナデである。204は屈曲部が残る。外面がヨコミガキ、内面がヨコナデである。205・206は胴部片で、205は外面がミガキか。内面はヨコミガキである。206は内外面ともナデである。

底部（Fig.46－207～209, PL.44）

207・208は浅鉢、209は深鉢の底部である。207は内外面にナデを施す。208はやや上底で横方向の二枚貝条痕が施される。209は上底で、外面は右から左へ横方向の二枚貝条痕が施される。内面は風化で不明。

(2) 第1号竪穴住居跡出土遺物

土器・石器（Fig.47－210～218，PL.45(1)～(3)）

210は鋤先口縁の壺である。口縁部の一部が欠損する。内外面は風化が激しい。傾きは異なる可能性もある。弥生時代中期後半～後期初頭と考えられる。211は壺の口縁部である。口縁部下半に紐孔を持つ。212・213は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕の口縁部の破片である。214・215は弥生時代後期前半の高坏の口縁部である。214は直線的に短く外反し、内面には段を持つ。口唇部は欠損している。215は中程まで垂直に立ち上がり、外反する。

216・217は使用痕のある礫及び剥片である。216は扁平な素材剥片を使用している。表は先端部が剥離しており、左側縁部に研磨痕がある。裏は全体的に磨滅している。石質は結晶片岩である。柱穴3出土。217は扁平な素材剥片を使用している。表は先端部に使用による剥離があり、裏にも上部及び先端部に使用による剥離がある。また、左右の側縁部の角が細かく剥落していることから、楔形石器と同様に使用されたものと考えられる。石質は結晶片岩である。柱穴5出土。218は紡錘車である。直径は3.85cm、孔径は0.5cmである。全体的に丁寧な研磨が施されており、裏には欠損部分にも丁寧な研磨痕が残る。石質は滑石である。

ガラス小玉（Fig.47－219～237，PL.93）

Bトレンチでは遺構埋土の水洗選別を行った。その結果、第1号竪穴住居跡の埋土からは植物遺体の他に19点のガラス小玉を検出した。これらについて、色調、大きさ、外部形態、紐孔形態から観察する。色調には、淡い水色、濃い紺色、淡い青緑色の3種類がみられる。大きさは、小口部長径で2.5～4.7mmの範囲に分布し偏差は見られない。外部形態は、小口部径と側部長の比率により分類する。側面長／長径が0.6未満となり側面長が比較的短く環状になるものを外形1、側面長／長径が0.6以上となり側面長が比較的長く円柱状になるものを外形2とする。さらに側面長／長径が1前後で球状になるものを外形2の特殊形として外形3とする。紐孔形態には、正円形に近いもの、楕円形のもの、やや角張り円弧の一部が潰れて平坦部分を形成し、アルファベットのDのような形態をなすものの3種類がみられる。それぞれ紐孔C1、紐孔C2、紐孔Dとする。

色調が淡い水色のものは、220・223・225・226・230・231・234・235・237。濃い紺色のものは、219・221・224・227～229・232・233。淡い緑青色のものは、222・236である。

外部形態が外形1のものは、219・222・224・227・228・230・233・234・236・237。外

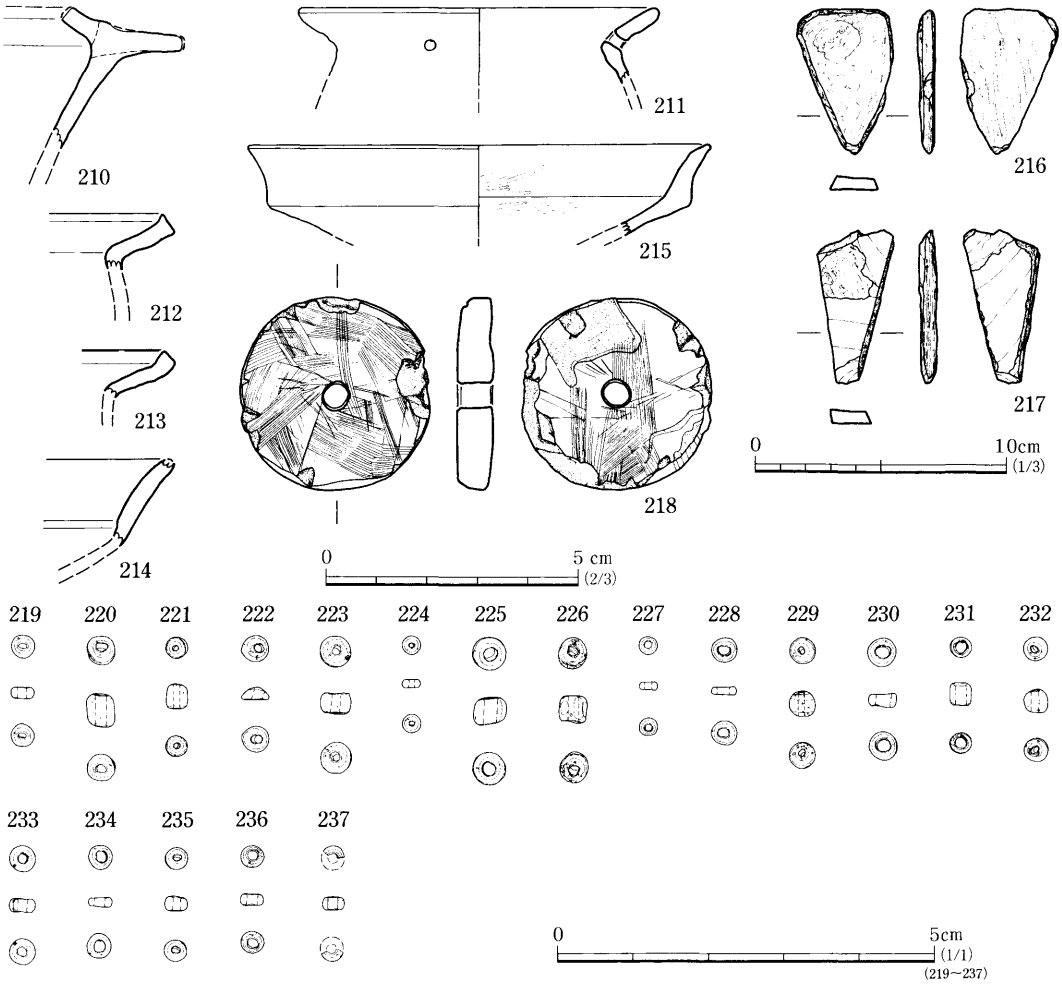


Fig.47　Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土遺物実測図

形2のものは、220・221・223・225・226・231・235。外形3のものは、229・232である。

紐孔形態が紐孔C1のものは、221・227・231。紐孔C2のものは、219・222・224・225。紐孔Dのものは、220・223・226・228～230・232・233～236である。

表面が平滑なものは220・221・225・228・229・231・232・235・237である。このうち221・225・229・232は特に平滑性が高く、研磨仕上げを行った可能性が高い。

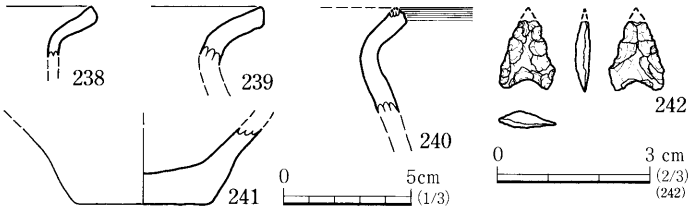
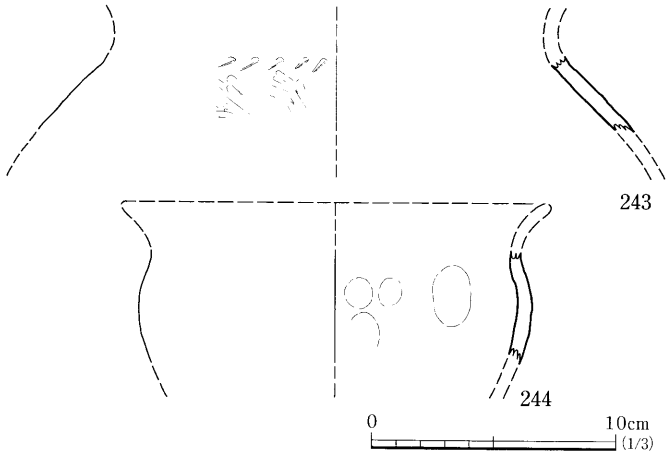


Fig.48　Bトレンチ第2号竪穴住居跡出土遺物実測図



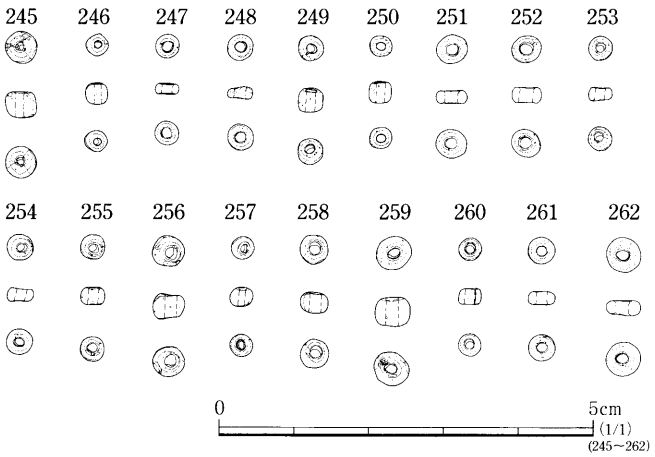


Fig.49　Bトレンチ第3号竪穴住居跡出土遺物実測図

(3) 第2号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.48－238～242, PL.45 (3)(4))

238～240は甕の口縁部である。238は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。柱穴4出土。239～241は後期前葉の甕である。240は口唇部に2条の擬凹線を持つ。241は甕の底部で、丸底化傾向にある。内外面とも風化が激しい。242は凹基式の石鏃である。先端が欠損しており、風化が激しい。石質はサヌカイトである。

(4) 第3号竪穴住居跡出土遺物

土器 (Fig.49－243・244, PL.45 (4))

243は壺の頸部である。上半に刺突が施される。外面には斜方向のミガキが施される。244は甕の胴部である。外面には煤が付着する。風化が激しい。ともに弥生時代後期前半と考えられる。

ガラス小玉 (Fig.49－245～262, PL.94)

色調が淡い水色のものは、253・255・256・258・259。濃い紺色のものは、246～252・254・257・260～262。淡い緑青色のものは、245である。

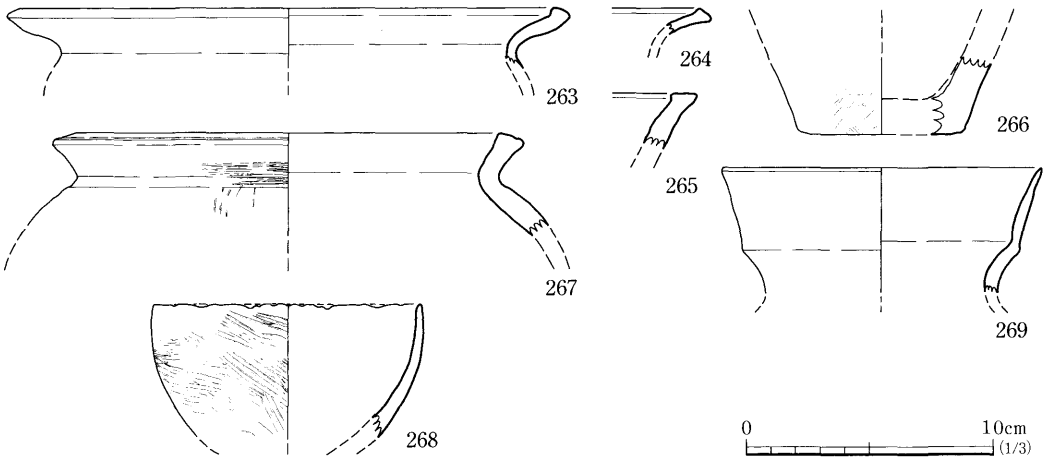


Fig.50　Bトレンチ第4号竪穴住居跡出土遺物実測図

外部形態が外形1のものは、247・248・251～254・261・262。外形2のものは、245・246・249・250・255・256・258～260。外形3のものは、257である。

紐孔形態が紐孔C1のものは、258・260・261。紐孔C2のものは、246・248～252・254。紐孔Dのものは、245・247・253・255～257・259・262である。

表面が平滑なものは、246・247・250～253・257・260・261である。このうち、246・250・257は特に平滑性が高く、研磨仕上げを行った可能性が高い。

(5) 第4号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.50－263～269, PL.46(1))

263・264は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。内外面ヨコナデで、口唇部はつまみ上げて外傾させる。264は柱穴4出土である。265は高坏の坏部である。内外面ともナデで口唇部は面をとり、内側には段を持つ。弥生時代中期後半と考えられる。柱穴5出土。266は甕の底部である。外面は斜方向のハケが施される。内面は剥落しており、調整は不明。柱穴4出土。弥生時代前期か。267は甕の口縁部である。口縁部は短く外反し、胴部は肩が張る。口唇部は面をとり、外傾させる。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコナデ、胴部内面はナデである。弥生時代後期中葉と考えられる。268は鉢である。直口で口唇部は丸くおさめる。外面は左上がりのハケが施される。内面はナデである。弥生時代後期以降のもので、時期が下る可能性もある。柱穴4出土。

269は古墳時代前期の山陰系の甕と考えられる。屈曲部から口縁部が直線的に外反する。内外面とも風化が激しい。遺構埋土の最上層から出土したもので、流れ込みによるものと考えられる。

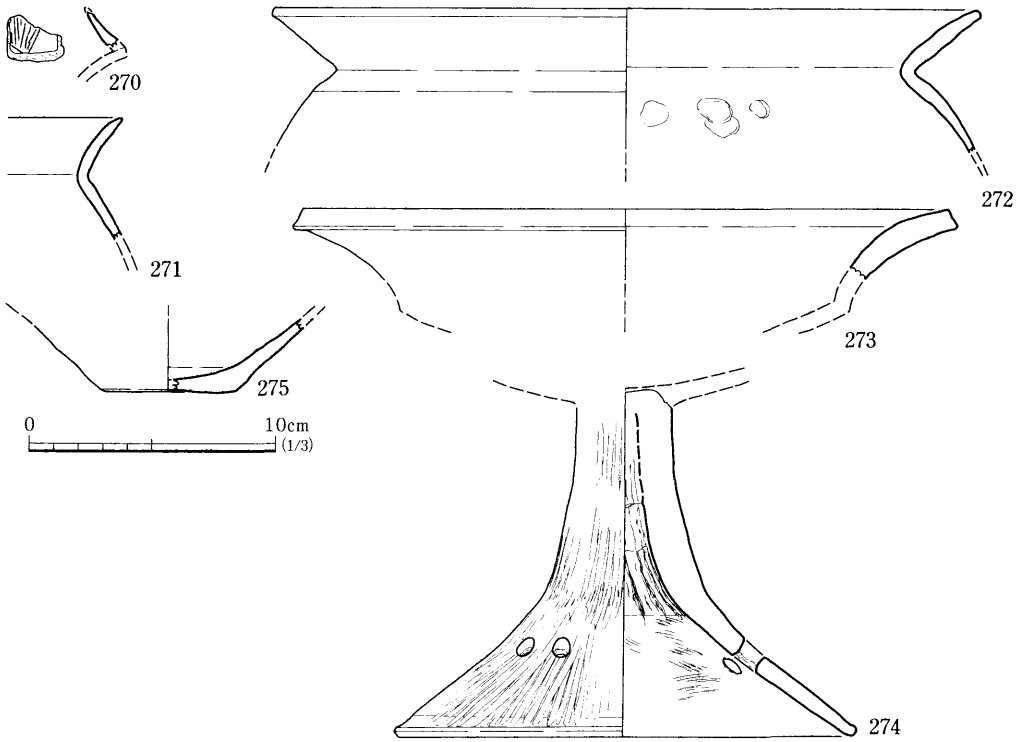


Fig.51　Bトレンチ第1号土坑出土遺物実測図

(6) 第1号土坑出土遺物（Fig.51－270～275, PL.46 (2)）

270は複合口縁壺の口縁部である。口唇部、屈曲部ともに欠損しているが、外面には鋸歯文が施される。内面はナデである。271・272は弥生時代後期後半の甕の口縁部である。271は「く」の字に外反する。口唇部は丸くおさめる。風化が激しく、内外面の調整は不明。272は口縁部が「く」の字に外反し、胴部は肩が張る。口唇部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケの後ナデ、胴部内面はナデで、指頭痕が残る。273は高坏の坏部である。上半は大きく開き、口唇部は面をとる。風化が激しいが、外面にわずかにヨコナデが観察できる。274と同一の可能性がある。274は高坏の脚部である。上部は坏部との接合面で剥離している。外面はタテハケ後タテミガキで、2孔一組の透かし孔を2方向から施す。端部にはヨコナデが施される。脚部の内面には粘土の溜まりがみられるほかシボリ痕が残り、一部はナデにより消される。裾部内面はヨコハケが施される。275は甕底部である。薄い小さな平底で、丸底化傾向にある。風化が激しく内外面の調整は不明。以上の出土遺物は弥生時代後期後半におさまる。

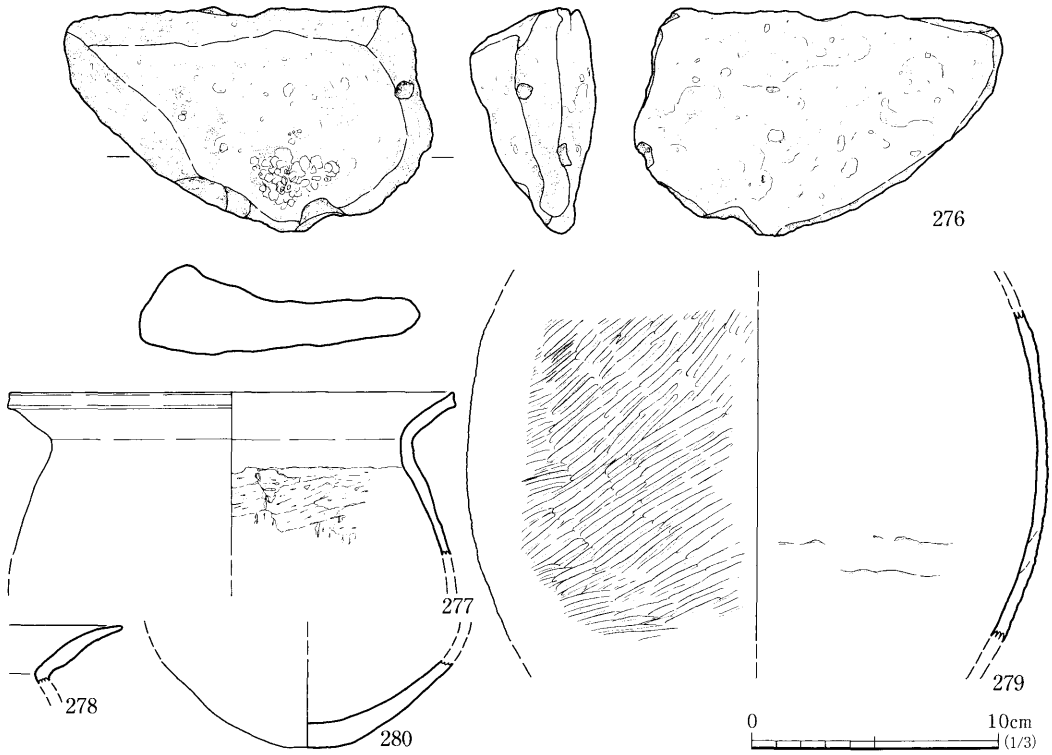


Fig.52　Bトレンチ第2・3号土坑出土遺物実測図

(7) 第2号土坑出土遺物 (Fig.52－276, PL.46 (3))

276は凹石である。円礫を用いており、表には中心部からやや下よりに使用によるくぼみがある。裏は自然面をそのまま残している。石質は凝灰岩である。

(8) 第3号土坑出土遺物 (Fig.52－277～280, PL.47 (1))

277は甕の口縁部～胴部である。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は外へ張り出す。口唇部はヨコナデによりくぼみ、上につまみ上げる。外面は風化が激しく、調整は不明。胴部内面は下半が下から上へのケズリで、上半が左から右へのケズリが施される。278は甕の口縁部である。「く」の字に外反する舌状の口縁部で、接合痕が残る。279は甕の胴部で外面に右上がりのタタキ(1条2.5mm　9mm/3条) が施される。内面はヨコナデで粘土帯接合痕が2ヶ所みられ、これで上下傾きを判断した。280は甕の底部である。丸底の底部で内外面は風化のため、調整は不明。以上の出土遺物は弥生時代後期後半～終末におさまる。

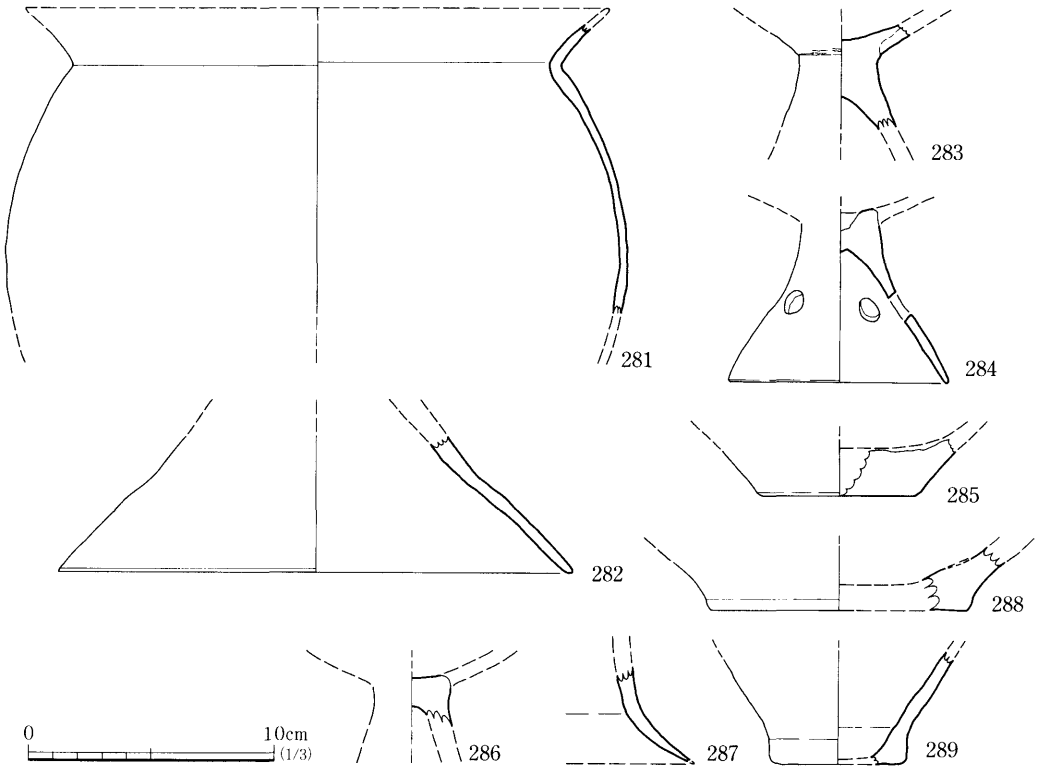


Fig.53　Bトレンチ第4・6号土坑出土遺物実測図

(9) 第4号土坑出土遺物 (Fig.53－281～285, PL.47 (2))

281は甕の口縁部～胴部である。口縁部上半は欠損している。口縁部は「く」の字に外反し、胴部は強く張り出す。内外面とも風化が激しく調整は不明。282は高坏の脚部である。内外面とも風化が激しく調整は不明。283は小型高坏の坏部～脚部である。脚部と坏部の間にはハケが残る。内外面とも風化が激しい。調整は不明。284は小型器台の脚部である。脚部は坏部との接合面で剥離している。脚部と坏部との接合は円盤充填技法による。285は壺の底部である。外面はナデが施される。内面は剥離している。281・282は弥生時代後期後半、283・284は古墳時代前期、285は弥生時代中～後期と考えられる。

(10) 第6号土坑出土遺物 (Fig.53－286～289, PL.48 (1))

286は高坏の脚部である。坏部との接合面で剥離している。外面はナデで、脚部内面にはシボリ痕がわずかに残る。287は高坏の脚部である。風化が激しい。288は壺の底部である。外面はナデで、内面は風化で不明。289は甕底部で、底面の器壁は薄い。

286・287は古墳時代前期、288・289は弥生時代中期後半～後期のものであろう。

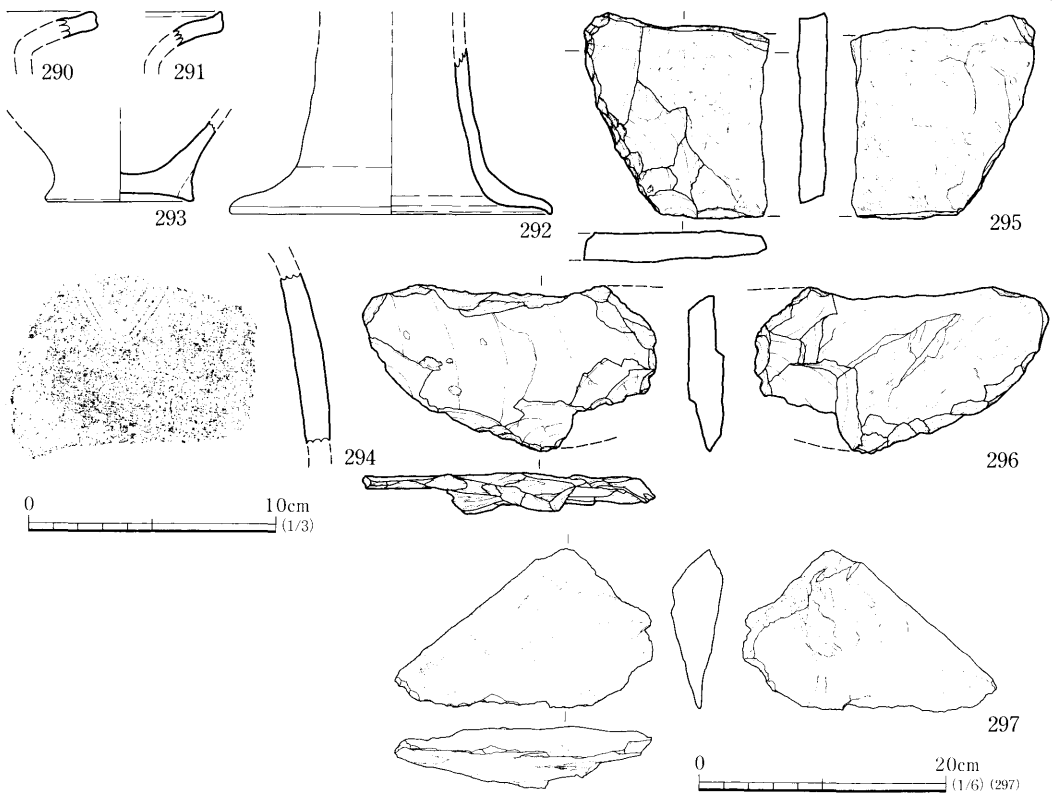


Fig.54　Bトレンチ落ち込み1出土遺物実測図

(11) 落ち込み1出土遺物

(Fig.54－290～297, 55－298～300, PL.48 (2)～(3), 49, 50 (1))

290・291は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。292は弥生時代中期の高坏の裾部である。端部はナデにより下方へ突出させる。内外面とも風化が激しい。293は弥生時代中期の甕の底部である。器壁は薄く上げ底で、内外面ともナデである。294は壺の胴部と考えられる。5条単位の櫛描波状文が施される。弥生時代後期か。

295は石包丁の未製品の可能性がある。平坦な素材剥片を使用しており、表は下縁部に調整が施され、外形を整えている。中央から欠損したため廃棄された可能性が高い。石質は結晶片岩である。296は石包丁の未製品である。平坦な素材剥片を使用しており、外縁部に調整を施して外形を整えている。表右下端部を欠損している。石質は結晶片岩である。297は大型刃器である。上面を研磨した砥石状の石の端部を剥離した剥片を使用している。下端部の鋭い縁辺を刃部として使用しており、刃こぼれがみられる。裏は主要剥離面を残す。石質は熔結凝灰岩である。

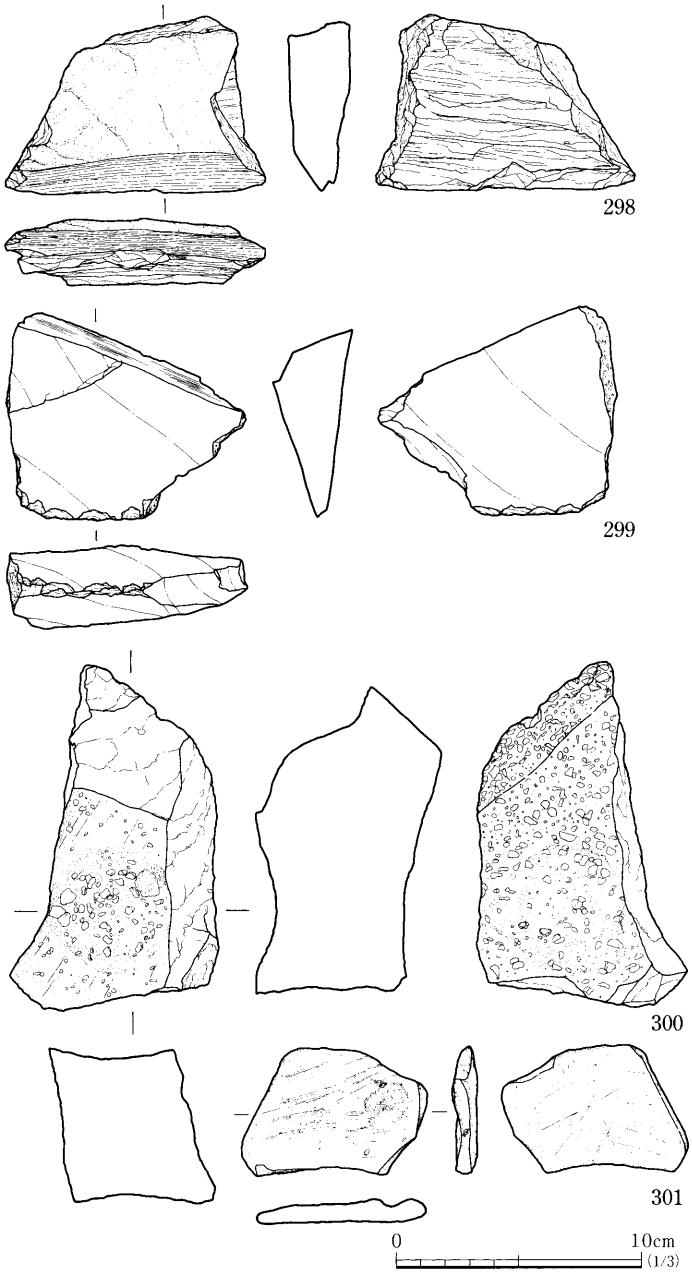


Fig.55　Bトレンチ落ち込み１、土坑８出土遺物実測図

298は刃器である。節理に沿って剥離した素材剥片を使用する。表は左側縁部の下半部を平坦に剥離し、下縁部を節理方向に研磨して刃部にしている。裏も下縁部に調整剥離を加えて刃部としている。石質は結晶片岩である。299は刃器である。上面を研磨した砥石状の石の端部を剥離したと考えられる素材剥片を使用している。表・裏とも使用による刃こぼれがある。石質は熔結凝灰岩である。300は凹石である。上面を研磨した砥石状の石を使用しており、砥石の再利用の可能性がある。背面には中央部に円形のくぼみがある。腹面には研磨はみられないが、使用による円形の浅いくぼみがある。石質は安山岩である。

(12) 土坑８出土遺物 (Fig.55－301, PL.50 (2))

301は角閃石安山岩製紡錘車の未製品である。板状の扁平な転礫を使用している。表は右端部に1ヶ所くぼみをつくり、横方向の研磨を施している。裏には不定方向の研磨が施される。全体的に風化している。

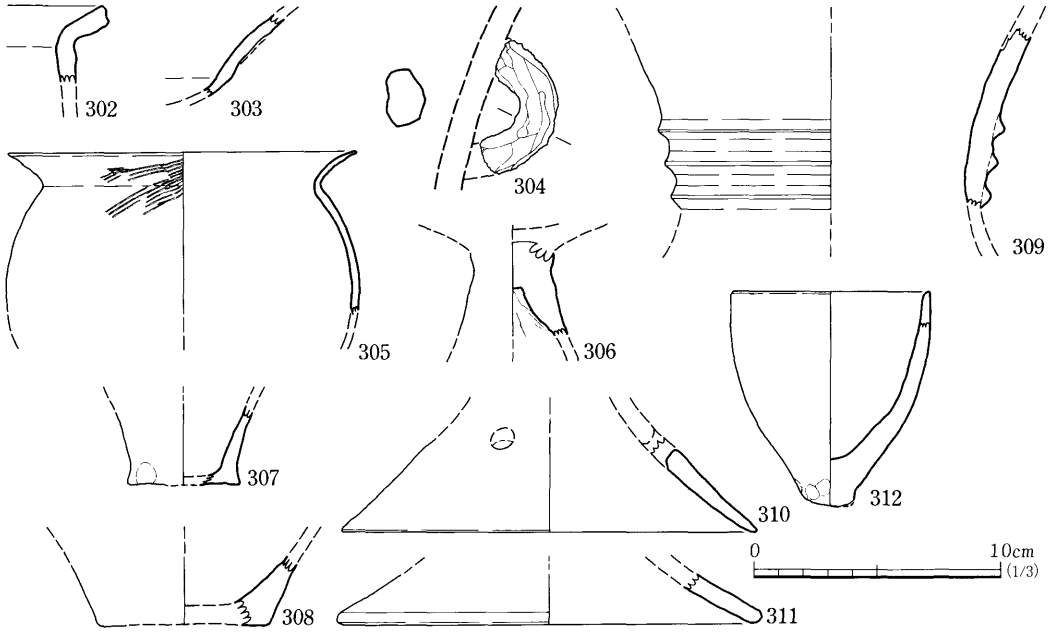


Fig.56　Bトレンチ第1・2号溝出土遺物実測図

(13) 第1号溝出土遺物 (Fig.56－302～308, PL.51 (1))

302は甕の口縁部である。ヨコナデにより口唇部が凹む。口縁部には強いヨコナデが施される。303は高坏の坏部である。風化が激しいが屈曲部がわずかに残る。304は鉢の把手である。指頭痕が顕著に残る。下半部は欠損している。遺跡保存地区第9号竪穴住居跡から同様な把手が出土している[18]。305は伝統的Ⅴ様式の甕である。小型・球胴で、外面には口縁部から体部にかけて右上がりのタタキ（1条2mm　8mm/3本）が施されている。風化が激しく、内面の調整は不明。306は小型高坏の脚部である。風化が激しい。307・308は甕の底部である。307は底部側面がやや外に張り出し、指頭痕が残る。いずれも風化が激しい。302～304は弥生時代後期、305・306は古墳時代前期、307・308は弥生時代中～後期と考えられる。

(14) 配線トレンチ第2号溝出土遺物 (Fig.56－309～312, PL.51 (2))

309は垂下口縁壺の頸部である。3条以上の断面三角形の貼付突帯を持つ。310・311は高坏の裾部である。310は円形透かし孔を持つ。風化が激しい。311は端部を丸くおさめる。風化が激しい。312は小型の鉢である。口縁部は接合しない同一個体から図上復元したものである。底部側面に指頭痕、胴部内面下半にナデを残すほかは風化が激しく、調整は不明。309は弥生時代中期、310～312は弥生時代後期と考えられる。

(15) 配線トレンチC区落ち込み1出土遺物 (Fig.57－313～335, PL.52・53)

最下層 (灰黒色砂礫土)

313は弥生時代中期の垂下口縁壺の頸部である。胴部には断面三角形の2条の貼付突帯を持つ。風化しており、内外面の調整は不明。314・315は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕の口縁部である。内外面ヨコナデで端部を垂直につまみ上げる。316は壺の口縁部である。口唇部に面を持ち、3条の擬凹線を持つ。317は第3層出土土器であるが、316と同一個体と考えられる。肩の張る胴部片で2条の沈線が施され、その上下にはハケ原体による右上がりの刺突が施される。弥生時代後期初頭のものと考えられる。318は磨製石斧の頭部である。全体的に丁寧な研磨が施されている。表の左側と下半を欠損しており、左側の欠損部の下は研磨によって若干変形している。石質は輝石安山岩である。

下層 (青灰色砂礫土)

319は小型壺の胴部～底部である。胴部はあまり張らず、底部は厚く、わずかに上底である。胴部外面にはヨコミガキ、底部側面にはタテミガキが施され、指頭痕が残る。内面はユビオサエの後、ナデである。320は高坏の脚部である。裾部の端部は沈線が1条施される。外面はタテミガキ、内面はナデである。いずれも弥生時代中期後半と考えられる。

中層 (暗灰黄色粘土)

321・322は甕の底部である。323は壺の胴部で外面は丹塗りされている。324は甕の口縁部である。短く外反し、口唇部には1条の沈線が施される。325は口縁部が「く」の字に外反する甕である。風化しており調整は不明。弥生時代後期後半と考えられる。

中層 (黒色粘土)

326は高坏の坏部である。上半は短く外反し、接合面で剥離している。外面にはタテハケを残す。327・328は高坏の脚部である。ともに外面にタテミガキが施される。328は坏部との接合に円盤充填技法が用いられる。内面にシボリ痕を残す。329は壺の底部である。底面は剥離している。内外面ともナデが施される。330は土玉である。焼成前に中心部から左側に途中まで穿孔した後、再度右寄りに穿孔する。

上層 (黒灰色粘土)

331は甕の底部である。丸底で風化が激しく内外面の調整は不明。

(16) 配線トレンチD区落ち込み出土遺物 (Fig.57－332・333, PL.53 (1))

332は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。333は甕の底部で側面にタタキを残す。弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

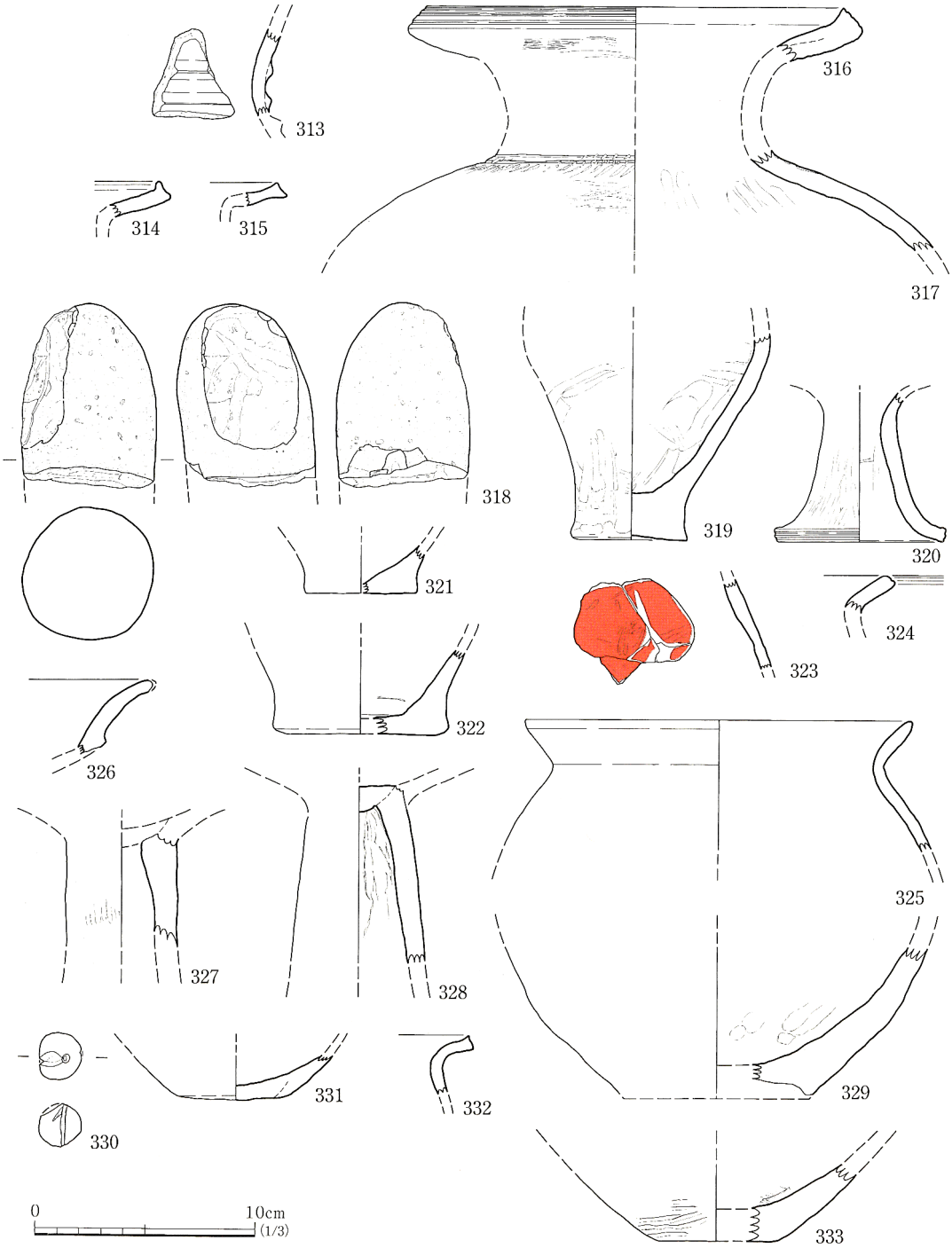


Fig.57　配線トレンチ落ち込み１出土遺物実測図

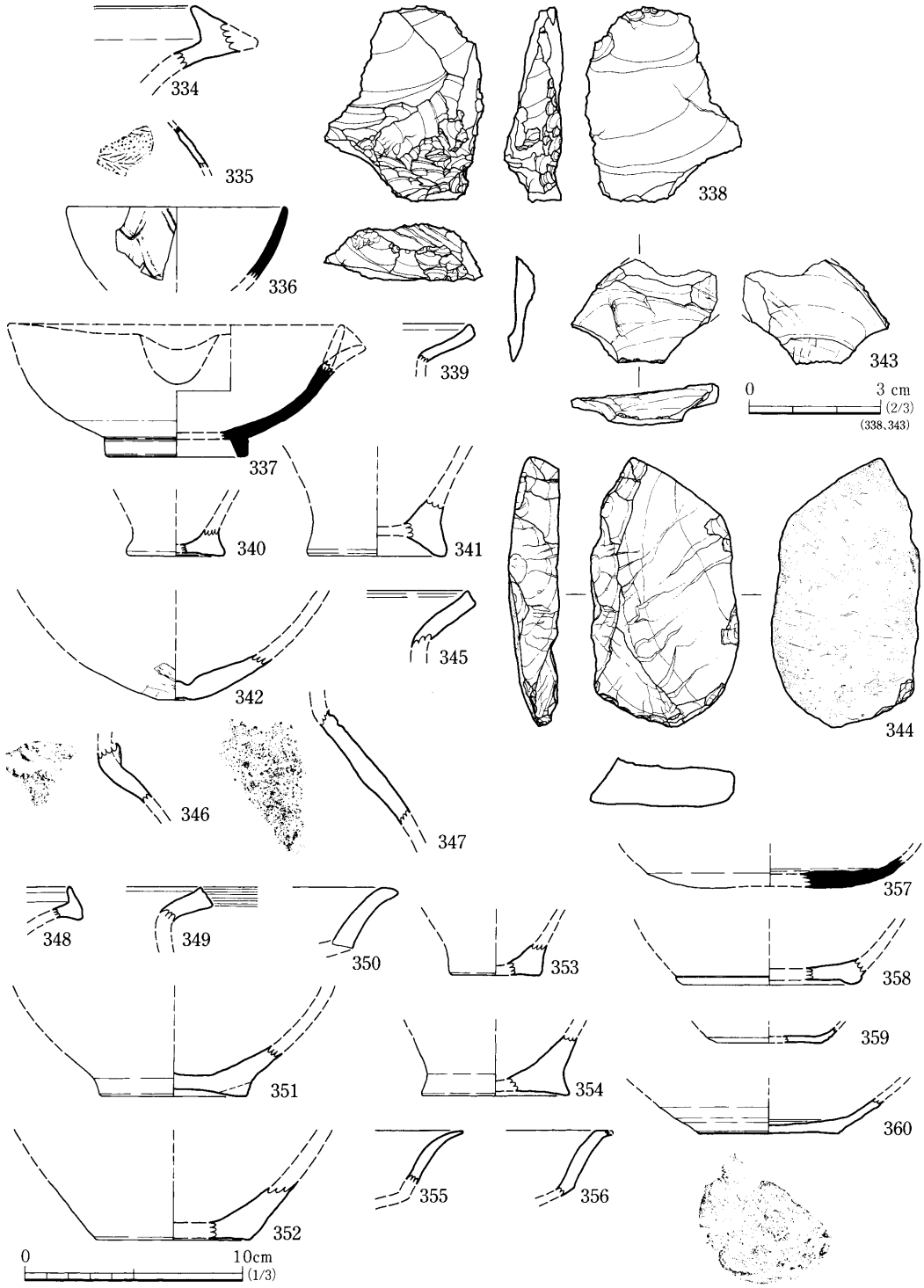


Fig.58　Bトレンチ暗渠・遺構検出時出土遺物実測図 (1)

(17) 暗渠出土遺物 (Fig.58－334～338, PL.54 (1) (2))

334は複合口縁壺である。屈曲部を欠損している。混入と考えられる。335は瓦質土器の壺の破片と考えられる。外面には風景画を型押しする。336は肥前系染付でいわゆるくらわんか碗である。二重編目文を染め付ける。337は萩焼の片口である。片口の下部のみ残存し、高台は鋭く削り込まれる。藁灰釉を内面と外面の胴部半まで施す。幕末以降のものと考えられる。338は姫島産黒曜石の剥片である。背面は上方及び左下方から大きく剥離され、右下縁は階段状の剥離を生じる。腹面に主要剥離面を残す。混入と考えられる。

(18) 遺構検出時出土遺物 (Fig.58－339～360, 59－361～366, PL.54 (3)・55)

Bトレンチの遺構検出はトレンチを四分割し、北東隅をG－1、南東隅をG－2、北西隅をG－3、南西隅をG－4に分割して行った。以下各グリッドの出土遺物について述べる。

G－1出土遺物

339は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。ヨコナデにより口唇部をつまみ上げる。340・341は弥生時代中期の甕の底部である。底部は外側に張り出し、上底である。

G－2出土遺物

342は土師器甕の底部である。外面はケズリが施され、底面は凹む。343は剥片である。下縁部に使用痕がみられる。石質は安山岩である。344は使用痕のある剥片である。表の左側縁に調整を加え、外形を整えている。下縁部に使用痕がある。裏は円礫面である。石質は流紋岩である。

G－3出土遺物

345は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。口唇部をヨコナデによりつまみ上げる。346・347は弥生時代後期の壺の頸部である。346は1条の貼付突帯を持つ。突帯には押圧が施される。347は頸部に棒状工具による刺突が2段施される。348は弥生時代後期の複合口縁壺で、口縁下端に1条沈線が施される。風化が激しい。349は弥生時代後期前半の甕口縁部で、口唇部に3条の擬凹線が施される。350は弥生時代後期前半の高坏坏部で、上半が外反する。接合面で剥離している。外面には縦方向のミガキが施される。351・352は弥生時代中期の壺底部、353・354は弥生時代中期の甕の底部である。風化が激しい。355・356は古墳時代中期の高坏の坏部である。いずれも風化が激しい。357は古墳時代後期の須恵器蓋坏の坏底部である。底面に回転ヘラケズリが施される。358は土師器埦の底部で、低いカマボコ状の高台がつく。359・360は土師器皿の底部である。糸切底で、

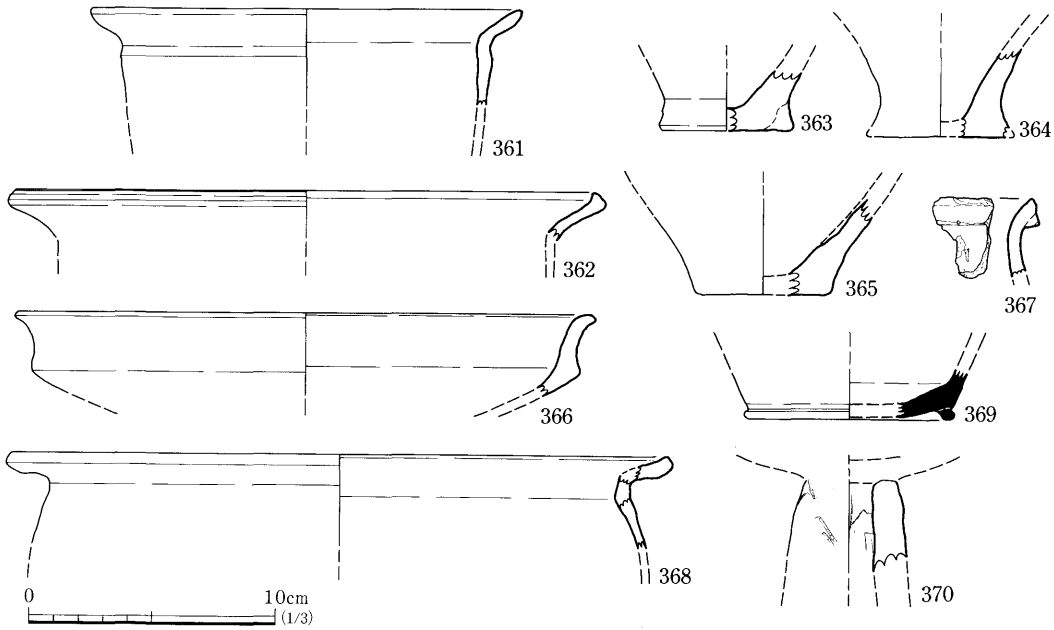


Fig.59　Bトレンチ遺構検出時出土遺物実測図(2)、配線トレンチ撹乱・表土掘削時出土遺物実測図

いずれも風化が激しい。

G－4出土遺物

361・362は弥生時代中期の甕の口縁部で、361は口縁部に強いヨコナデが施される。362は跳ね上げ口縁の甕で、ヨコナデにより口唇部をつまみ上げる。363～365は甕の底部である。363・364が弥生時代中期、365が弥生時代後期と考えられる。366は高坏の坏部である。上半が屈曲して短く外反する。内外面にヨコミガキの痕跡が残る。弥生時代後期前半と考えられる。

(19) 撹乱、表土掘削時出土土器 (Fig.59－367～370, PL.55)

367は縄文時代晩期の刻目突帯文深鉢の口縁部片である。口唇部に接して断面三角形の貼付突帯を持ち、突帯上には極小の刻目が施される。配線トレンチA2区撹乱出土。

368は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。「く」の字に外反し、口唇部をつまみ上げる。風化が激しく調整は不明。配線トレンチC区表土掘削時出土。

369は須恵器坏の底部である。貼付高台でやや外に張り出す。その特徴から9世紀中頃のものと考えられる。配線トレンチC区表土掘削時出土。

370は土師器高坏の脚部である。坏部の接合面で剥離する。外面には右上がりのハケが残り、部分的に面をなす。配線トレンチD区表土掘削時出土。

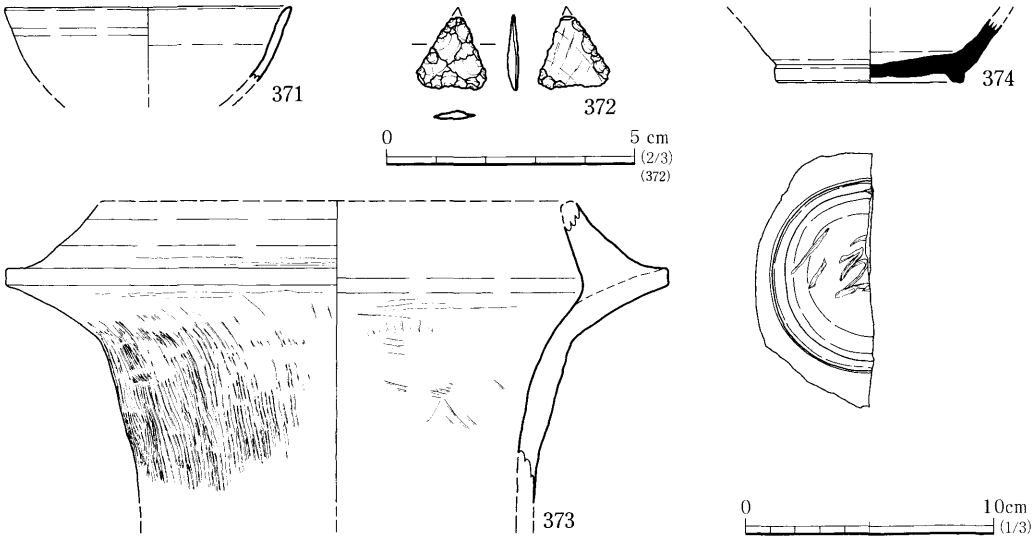


Fig.60　配線トレンチE区・G区出土遺物実測図

(20) 配線トレンチE区包含層出土遺物 (Fig.60－371・372, PL.56 (1)(2))

包含層から遺物が出土した。371は土師器埦の口縁部である。内外面はナデで、口唇部は丸くおさめる。風化が激しい。372は平基式の石鏃である。背面は調整の度合いが大きいが、腹面は右側縁をわずかに整えるのみで素材面を多く残している。石質はサヌカイトである。

(21) 配線トレンチG区出土遺物 (Fig.60－373・374, PL.56 (1)(3))

G区では河川から遺物が出土した。373は弥生時代後期の複合口縁壺である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、立ち上がりが接合面で一部剥離している。口唇部を欠く。頸部外面はタテハケ、口縁部外面にはヨコナデが施される。頸部内面はタテハケ及びヨコハケ後ナデで、口縁部内面はヨコナデが施される。

374は須恵器坏の底部である。やや低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けていることから、9世紀前半以降のものと考えられる。底面はヘラ描による文字がみられるが、右半分は欠損している。この文字は現状では「位」に最も近いが、「領」の可能性も考えられる。字がほぼ完結していることから、欠損している右側にももう1字あった可能性が高い。「位」と「領」では「領」の方が類例が多く、郡司の官職名である「大領」「少領」などに使用された場合が多い。仮に「領」であれば、大学会館前庭部[19]、神郷大塚遺跡[20]では官衙的遺物が出土していることから、官職名を記した可能性がある[21]。

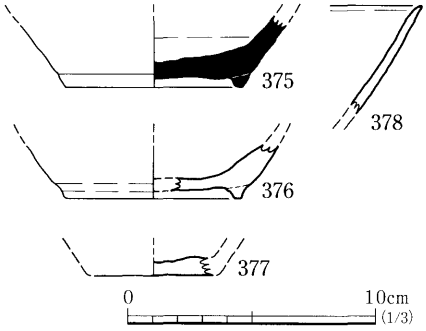


Fig.61　Cトレンチ出土遺物実測図

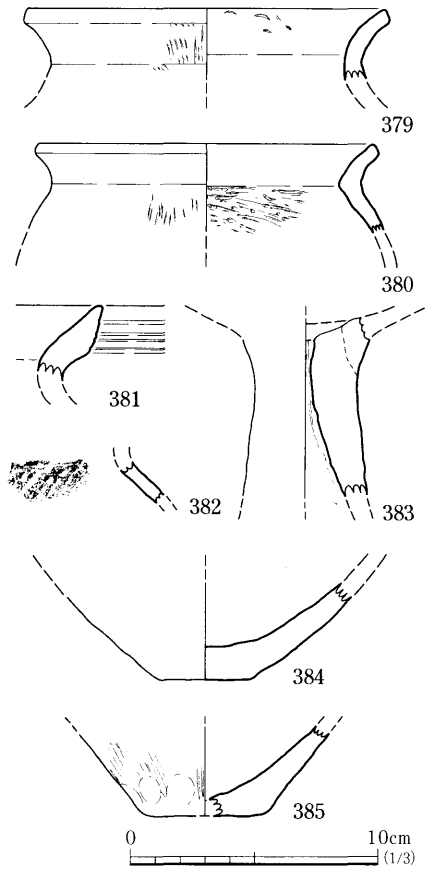


Fig.62　Eトレンチ出土遺物実測図

3　Cトレンチ出土遺物

(Fig.61－375～378, PL.56(4))

375は須恵器坏底部である。やや低い貼付高台が底部と胴部の境の屈曲部につく。底部にはヘラ切り痕が残る。9世紀前半以降のものと考えられる。水田溝出土。376は土師器埦の底部である。形態が375と極めて近似しており、須恵器を模倣したものであろう。遺物包含層出土。377は土師器坏の底部で、底面にはヘラ切り痕を残す。溜池状遺構出土。378は土師器埦の口縁部である。風化が激しい。第1号土坑出土。

4　Eトレンチ出土遺物

(Fig.62－379～385, PL.56(5))

E区では包含層から弥生時代後期前半の土器が出土した。379は壺の口縁部である。口縁部はあまり開かない。外面はタテハケ後ヨコミガキ、内面はヨコナデで、爪跡が残る。380は甕の口縁部である。口縁部は短く外反し、体部が張る。口縁部内外面はヨコナデである。体部外面はタテハケ、体部内面は右下から左上へケズリが施される。381は山陰系甕の口縁部である。口縁部には擬凹線を4条施す。口縁部内外面にはヨコナデが施される。風化が激しい。382は甕の頸部である。板状工具によって右上がりの刺突が施される。風化が激しい。383は高坏の脚部である。弥生時代後期のものと考えられる。内面にはシボリ痕が顕著に残る。上面は坏部との接合面で剥離する。風化が激しい。384は甕の底部である。底部はやや厚手の小さな平底である。外面は風化が激しく調整は不明。内面はタテハケ後ナデである。385は甕の底部である。外面はタテハケで、内面はナデである。

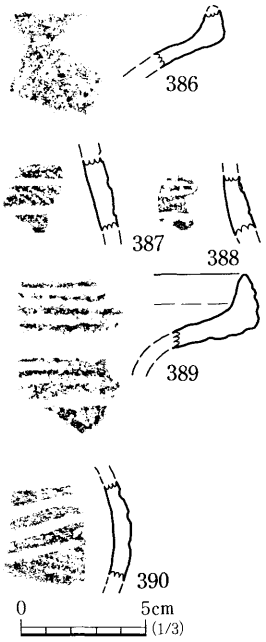


Fig.63　Fトレンチ河川出土縄文時代後期土器実測図

5　Fトレンチ出土遺物

Fトレンチでは縄文時代の河川から、下層では縄文時代後期、上層では縄文時代晩期を中心とする土器が出土した。なお、河川を掘り込んだ水田暗渠及び河川上面包含層からも、本来河川堆積土中に含まれていた縄文土器が出土しており、河川出土土器と共に掲載している。詳細は観察表を参照されたい。

(1) 縄文時代後期（Fig.63－386～390, PL.57）

386～388は磨消縄文系土器で、岩田2類、月崎上層2類に相当する九州の西平系土器と考えられる。386は深鉢の口縁部である。無文で外反する口縁部と立ち上がりを持つ。口唇部は欠損している。内外面ともナデである。387は有文深鉢の胴部である。3条の沈線をもち、ＲＬの縄文が施される。風化が激しい。388は有文深鉢の胴部である。3条の沈線を持つ。沈線間には巻貝の刺突による擬縄文が施される。内面は風化が激しく、調整は不明。389は深鉢の口縁部である。立ち上がり部分に3条、その下に3条の凹線が施される。風化が激しい。岩田3類bに相当する九州の御領系の土器と考えられる。390は深鉢、もしくは鉢の胴部である。3条の右上がりの沈線が施される。下地に施された貝殻条痕が観察できる。晩期初頭に下る可能性もある。

(2) 縄文時代晩期

縄文時代晩期深鉢（Fig.64－391, 65－392, 66－393～399, PL.58・59）

391は深鉢の口縁部～胴部である。寸づまりの形態で、口径と器高がほぼ等しくなると考えられる。口縁部と胴部の境で屈曲し、口縁部は直線的に外反する。口唇部は面をとり、無文である。胴部外面、口縁部外面には右から左方向の二枚貝条痕が施される。口縁部と胴部の境は二枚貝条痕の後にナデが施される。口縁部内面は右から左方向の二枚貝条痕が施された後、ナデにより入念に条痕が消されている。胴部内面は右から左へ二枚貝条痕が施された後、ナデが施される。以上の特徴は寸づまりである点を除けば、岩田四類cの新相に相当する。

392は深鉢の口縁部～底部である。接合しない同一個体の口縁部、胴部、底部を図上復元した。寸づまりの形態で、口径が器高を上回る。緩やかに口縁部が外反し、尖底の底部

Fig.64　F トレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (1)

に続く。口唇部はヨコナデにより丸くおさめ、余った粘土が口縁部下にはみだす。胴部外面・口縁部外面には右から左方向のケズリが施され、煤が付着する。口縁部と胴部の境に

Fig.65　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (2)

は半裁竹管状の工具によってC字状の刺突が部分的に施される。体部内面はナデで、口縁部内面にもC字状の刺突が施される。このようなケズリ調整、C字状の刺突には突帯文土器成立直前の岡山県の谷尻式[22]に代表される瀬戸内の強い影響がうかがえる。山口県内では、

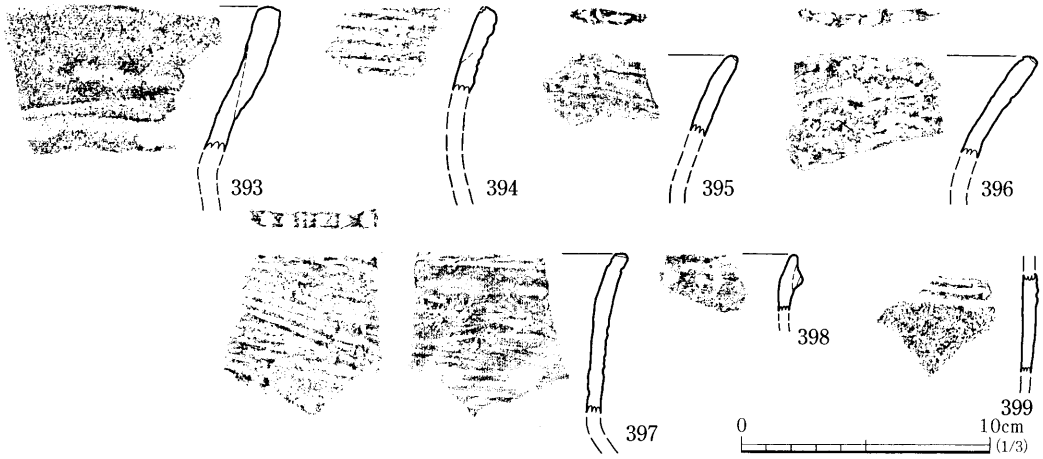


Fig.66　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (3)

山口市毛割遺跡1号土坑[23]で胴部にC字状の刺突を持つ深鉢が出土している。

393は口縁部に段を持つ。口縁部外面は二枚貝条痕後ナデである。394は口唇部が無文である。口縁部外面は二枚貝条痕、内面は二枚貝条痕後ナデである。395～397は口唇部に刻みを持つ。395は縦長のV字刻みの左右に横長のO字刻みを施す。396は逆D字、O字刻みが施される。395・396の内外面は二枚貝条痕後ナデである。397は口唇部に二枚貝によるO字刻みが施される。内外面には横方向の二枚貝条痕が施される。398は刻目突帯文土器深鉢の口縁部である。口唇部は丸くおさめ、わずかに下がった位置に低い断面三角形の貼付突帯を持つ。突帯上にはO字刻みを持つ。399は深鉢の胴部片で、3条の沈線が施され、上部の2条がやや曲線を描くことから、岩田4類cの波頭部の一部と考えられる。小片のため他器種の可能性もある。

浅鉢・壺 (Fig.67－400～409, PL.60)

400・403・407は、口唇部を丸くおさめるか面取りを行うものである。400は口縁部に1条の沈線を持つ。外面は右から左方向への二枚貝条痕の後、タテミガキが施される。内面はヨコミガキである。401は口縁部に立ち上がりを持つ。402は口縁部内面に沈線を持つ。404・405は口縁部の内面に粘土紐を付加して玉縁状に肥厚させる。406は剥離しているが、口縁部の内面を方形に肥厚させる。408は体部で屈曲する浅鉢の胴部で、抉りによる段がある。409は壺の胴部と考えられる。胴部には浅いヘラ描沈線が施される。内面はナデである。小片のため他器種の可能性もある。

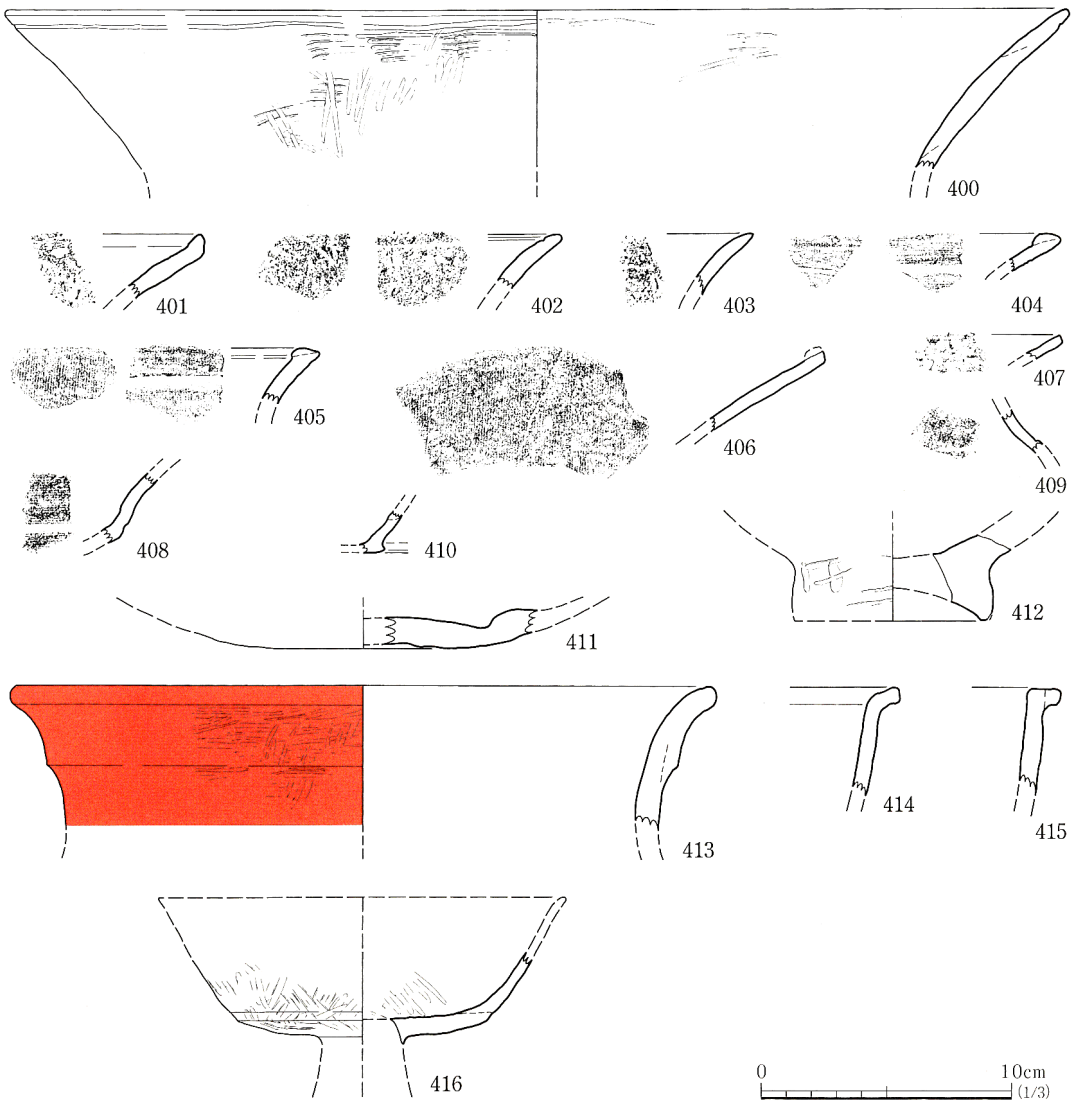


Fig.67　Fトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図（4）、弥生時代前期土器・土師器実測図

底部（Fig.67－410～412，PL.61）

410・411は浅鉢底部、412は深鉢底部である。いずれも風化が激しい。

（3）弥生時代以降（Fig.67－413～416，PL. 62（1））

413は弥生時代前期初頭の大型壺の口縁部で、口縁部に段を持ち、外面に丹塗りを施す。内面は風化が激しく調整不明。414・415は弥生時代前期末～中期初頭の甕、416は古墳時代中期の高坏で、河川上面に堆積する包含層から出土した。

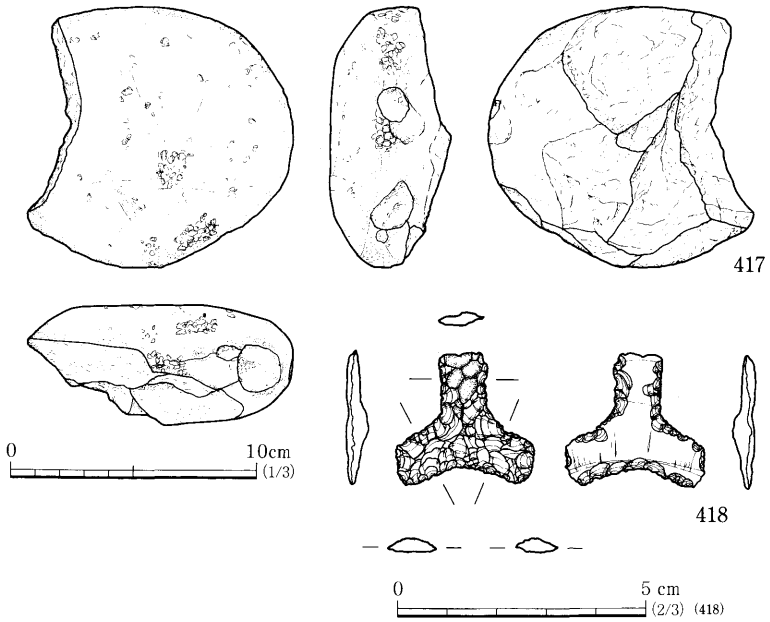


Fig.68　Fトレンチ河川出土石器実測図

敲石（Fig.68－417, PL.62 (2)）

417は敲石である。円礫を使用している。表は全体的に研磨が施され、中心部と縁部に敲打痕がある。表の左側約1/4を欠損する。側面にも敲打痕を残す。裏は大半を剥離している。石質は輝石安山岩である。

三脚石器（Fig.68－418, PL.63 (3)）

418は三脚石器で、表にはほぼ全面に調整剥離が施される。表面はやや風化している。裏の側縁部には調整剥離が施されている。石質は黒曜石である。

6　小結

(1) 縄文時代

Fトレンチで検出された縄文時代の河川から縄文時代後期の西平系土器、御領系土器と、上層からは岩田四類cの新相に相当する縄文時代晩期中葉の深鉢や浅鉢が出土した。これらに伴って磨石や三脚石器が出土した。また、Bトレンチから検出された縄文時代晩期の河川からも、深鉢を中心とする縄文時代晩期中葉の土器が出土した。

近年、県内では下関市の吉田川下流域で吉田馬場遺跡[24]、大判遺跡[25]、松ヶ坪遺跡[26]、柳瀬遺跡などの晩期の遺跡の調査例が増加し、編年案も出されている[27]。しかし、小片が多く一

括性に欠けるため、その内容はなお検討の余地があろう。Fトレンチ河川出土土器は数は少ないが、時期の異なるものを差し引くと、谷尻式の影響を受けた深鉢（392）、口唇部に刻みを持つ深鉢（395～397）、椀形、皿形の浅鉢（400・402・403）、口縁部内面を肥厚させる浅鉢（404～406）の組み合わせが想定できる。晩期中葉終末に比定され、九州の黒川式終末、愛媛県の持田式[28]、岡山県の谷尻式、近畿地方の篠原式新段階との併行関係が考えられる。

(2) 弥生時代

Fトレンチの河川からは、突帯文土器の深鉢の口縁部（398）や弥生時代前期初頭の丹塗磨研の大型壺（413）が出土した。同様な壺の口縁部は、Fトレンチから北西に約500m離れた第Ⅰ地区B区[29]でも出土している。またFトレンチの南西約1kmには前期初頭の遺構・遺物の検出された小路遺跡[30]が所在する。調査地一帯に前期初頭の遺構・遺物が展開している可能性があり、今後の周辺の調査が期待される。

また、Aトレンチの河川からは前期～終末期の土器が出土した。前期～中期の土器は少なく、後期～終末期の土器が多い。Bトレンチ・配線トレンチでは、弥生時代後期の第1号竪穴住居跡から19個、第3号竪穴住居跡からは18個、合計37個ものガラス小玉が出土した。ともに、竪穴住居跡1棟あたりの出土数としては県内最多である。竪穴住居跡からは中期後半～後期の土器が少量出土し、周辺の土坑からは後期後半～終末の土器、落ち込みからは中期後半～後期後半の土器が出土した。

(3) 古墳時代

Aトレンチと配線トレンチF区からは古墳時代前期を下限とする河川が検出され、土器が多数出土した。弥生終末期～古墳時代初頭の土器は、直口壺（63・67）、山陰系の甕（70～82）、庄内系甕（111）、布留系甕（123）、タタキを持つ在地系の甕（112）、ハケ仕上げの在地系甕（121・122）、高坏（128～136）、鉢（138～141）などの組み合わせが考えられる。このうち、外面にタタキをもち、口縁端部をつまみ上げる庄内系の甕は県内でも類例が少なく、貴重な例を加えることとなった。これらの土器群は第Ⅰ地区A区で検出された古墳時代前期前半の土器群[31]と様相が近似する。時期的にも湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区土器捨て場跡出土土器[32]とほぼ同時期のものであろう。

(4) 古代

Cトレンチでは古代の土器を含んだ落ち込みが検出されている。また、配線トレンチの包含層からは底面にヘラ書きによる文字を持つ9世紀後半の須恵器の坏が出土した。文字

は「位」もしくは「領」と考えられ、職名、人名、地名などを記した可能性が高い。大学会館前庭部では、墨で「冨」と書かれた9世紀後半の坏底部がが出土している。近年、第２学生食堂敷地では、9世紀後半の大溝と掘立柱建物跡が2棟検出され、9世紀後半を中心とする官衙的施設の存在が考えられている[33]。また、調査地から南に約600ｍ離れた神郷大塚遺跡では、8世紀～13世紀の掘立柱建物15棟、柵列6、土坑5基や多数の柱穴が検出されている。出土遺物には土師器、須恵器のほか緑釉陶器、製塩土器、鞴羽口、金属滓などがあり、金属製品の生産を行っていたと想定されている[34]。これらとの関連が注目されよう。

［注］

1）潮見　浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』第18号、1960年）

2）藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64巻4号、1979年）

3）中川　寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」（『島根県考古学会誌』第16号、1996年）

4）渡辺一雄編『突抜・馬場遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第87集、1985年）

5）村岡和雄編『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第42集、1978年）

6）乗安和二三編『羽波遺跡・片山遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第121集、1989年）

7）村岡和雄編『宮ヶ久保遺跡』（『阿東町埋蔵文化財調査報告』第1集、1998年）

8）山口県教育委員会『防府市右田・一丁田遺跡、徳山市的場・宮ノ馬場遺跡、徳山市久米市遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第19集、1974年）

9）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」（(財)香川県埋蔵文化財調査センター、本州四国連絡橋公団『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7　下川津遺跡－第2分冊－』、1990年）

大久保徹也氏に土器を実見していただき、御教示を得た。

10）前掲注3文献

11）伊東照雄編『綾羅木郷遺跡Ⅰ』（『下関市埋蔵文化財調査報告』27、1981年）

12）水島稔夫編『吉田馬場遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』43、1992年）

13）久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」（『庄内式土器研究XIX』、1999年）

14）濱崎真二編『柳瀬遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年）

15）家根祥多「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」（『縄文時代晩期前葉－中葉の広域編年－文部省科学研究費（総合Ａ）研究成果報告書』、1994年）

16）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内

遺跡調査研究年報XII』、1994年）

17）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年）

18）山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅰ　山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年）

19）杉原和惠「墨で文字を書きこんだうつわ－既刊の報告補訂－」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』1989年）

20）杉原和惠編『神郷大塚遺跡』（『山口市埋蔵文化財調査報告』第38集、1991年）

21）人文学部橋本義則教授に実見していただき、ご教示を得た。

22）平井　勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」（『古代吉備』第10集、1988年）

23）山口市教育委員会編『毛割遺跡』、（『山口市埋蔵文化財調査報告』第18集、1983年）

24）前掲注12文献

25）水島稔夫・濱崎真二編『大判遺跡・埴生口遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』46、1994年）

26）濱崎真二編『松ヶ坪遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』51、1994年）

27）濱崎真二「Ⅳ－1　吉田川下流域の縄文晩期の土器」（濱崎真二編『柳瀬遺跡』『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年）

28）真鍋昭文編『持田町3丁目遺跡』（愛媛県埋蔵文化財センター、1995年）

29）山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅱ　第2章　吉田遺跡第Ⅰ地区Ｂ区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1993年）

30）縄田　潔・菅波正人編『小路遺跡』（『山口市埋蔵文化財調査報告』第27集、1988年）

31）山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅱ　第1章　吉田遺跡第Ⅰ地区Ａ区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1993年）

32）山口市教育委員会『山口市字楠木町　湯田中学校造成地　湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』、1975年、付篇Ⅲ参照

33）山口大学埋蔵文化財資料館平成10年度調査　山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内第2学生食堂の増築及び改修に伴う発掘調査」（『月刊文化財発掘出土情報』99年9月号、1999年）

34）前掲注20文献

Tab.2　出土遺物観察表（土器）

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	Aトレンチ 河川2区	中層	縄文土器 深鉢	胴部				①浅黄色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
2	Aトレンチ 河川2区	中層	縄文土器 浅鉢	口縁部～胴部				①暗灰黄色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を少量含む	
3	Aトレンチ 河川2区	中層	縄文土器 浅鉢	口縁部				①暗灰黄色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	全面風化が激しい 左上り条痕がかすかに残る
4	Aトレンチ 河川1区	中層	縄文土器 浅鉢	底部		(8.0)		①灰白色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
5	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生土器 甕	胴部				①灰黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい 煤が付着
6	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 長頸壺	頸部				①丹塗り ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
7	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(27.1)			①灰色・鉄分付着②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
8	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(28.4)			橙色	1～5㎜の砂粒を含む	北部九州系
9	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(28.6)			①灰黄色 ②黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
10	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 広口壺	口縁部	(23.8)			浅黄橙色	2㎜前後の砂粒を含む	北部九州系 内外面の風化が激しい
11	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 垂下口縁壺	口縁部	(31.5)			灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	
12	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 垂下口縁壺	頸部				①黄橙色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
13	Aトレンチ 河川2区	透水管撹乱	弥生土器 在地系壺	口縁部～頸部	(18.8)			浅黄色	1～4㎜の砂粒を含む	在地系 口縁部穿孔、棒状浮文
14	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 垂下口縁壺	胴部				①灰白色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
15	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 甕	胴部	(35.8)			①黄橙色 ②橙色	1～3㎜の砂粒を含む	瀬戸内系
16	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 甕	口縁部	(21.1)			①にぶい黄橙色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
17	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 甕	口縁部	(19.4)			①にぶい橙色 ②淡橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
18	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 甕	口縁部				①にぶい黄橙色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
19	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 甕	口縁部				①にぶい黄橙色 ②黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
20	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 甕	口縁部	(21.0)			①暗灰黄色 灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
21	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(19.0)			①灰黄色 ②黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
22	Aトレンチ 河川2区	撹乱	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(26.7)			①灰白色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
23	Aトレンチ 河川1区	排水溝撹乱	弥生土器 鉢	口縁部～胴部	(15.0)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
24	Aトレンチ 河川2区	撹乱	弥生土器 鉢	口縁部				淡黄色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
25	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生土器 高坏	坏部				①褐灰色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	
26	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 高坏	坏部				①浅黄橙色 ②橙色	1㎜前後の砂粒を含む	外面の風化が激しい
27	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 器台	口縁部～胴部	(18.1)			①丹塗り ②灰白色	2～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
28	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 甕	底部		(7.4)		①にぶい黄橙色 ②灰白色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	風化が激しい
29	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生土器 壺	底部		(6.5)		①灰色 ②灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい 内面が剥落
30	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 壺	底部		(8.8)		①浅黄色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
31	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 甕	底部		(7.2)		浅黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	底部が剥落
32	Aトレンチ 河川1区	排水溝撹乱	弥生土器 甕	底部				①灰白色 ②灰黄色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
33	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 甕	底部		(9.5)		①灰黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	

出土遺物観察表

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
34	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 甕	底部		(5.4)		①にぶい橙色 ②黒褐色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	
35	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 広口壺	口縁部	(16.2)			にぶい黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
36	Aトレンチ 河川2区	表採	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(14.4)			灰白色	微砂粒を含む	
37	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(20.6)			灰黄色	微砂粒を含む	
38	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	外面の風化が激しい
39	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄橙色 ②灰白色	2㎜までの砂粒を含む	
40	Aトレンチ 河川1区	給水管掘乱	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰白色 ②黒褐色	1～2㎜の砂粒を含む	外面に櫛描波状文
41	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(22.8)			橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
42	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(26.8)			灰白色	2～3㎜の砂粒を含む	45と同一個体か
43	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄橙色 ②にぶい黄橙色	1～10㎜の砂粒を含む	
44	Aトレンチ 河川1区	撹乱	弥生土器 複合口縁壺	頸～胴部				①灰白色 ②灰黄色	1～5㎜の砂粒を含む	
45	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 複合口縁壺	頸～胴部				淡黄色	1㎜前後の砂粒を含む	胴部中央に突帯貼付痕 42と同一個体か
46	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(11.6)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	外面の風化が激しい
47	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(18.0)			黒褐色	2～3㎜の砂粒を含む	外面に煤が付着
48	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 甕	口縁部	(14.7)			①暗灰黄色 ②淡黄色	2～3㎜の砂粒を含む	山陰系 外面に5条の擬凹線
49	Aトレンチ 河川1区		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	擬凹線2条
50	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(21.0)			灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	
51	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 高坏	坏部	(10.2)			①黒褐色 ②淡橙色	1㎜前後の砂粒を含む	
52	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 高坏	坏部	(31.2)			灰白色	2㎜前後の砂粒を含む	
53	Aトレンチ 河川1区	排水溝掘乱	弥生土器 高坏	坏部	(32.6)			①浅黄橙色 ②灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	
54	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生土器 高坏	坏部				①黄橙色 ②灰黄橙色	2㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
55	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 高坏	坏部				淡黄色	2～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
56	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 高坏	脚部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	円形透かし穴
57	Aトレンチ 河川1区		弥生土器 高坏	脚部				①橙色 ②浅黄色	1～5㎜の砂粒を含む	中央部穿孔
58	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生土器 高坏	坏部				①灰黄橙色 ②橙色	微砂粒を多量に含む	外面の風化が激しい
59	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 高坏	脚部		(11.8)		①淡黄色 ②明黄褐色	1～5㎜の砂粒を含む	円形透かし穴
60	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 高坏	裾部		(15.0)		①灰白色 ②浅黄橙色	1～5㎜の砂粒を含む	円形透かし穴
61	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生土器 高坏	裾部		(17.9)		①灰黄色 ②一部黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
62	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生土器 鉢	口縁部	(11.2)			①灰黄橙色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒及びわずかに12㎜の砂粒を含む	口唇部未調整
63	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 直口壺	口縁部～胴部	(11.2)			①浅黄橙色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	外面の頸部及び胴部に煤が付着
64	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 広口壺	口縁部	(17.1)			灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	
65	Aトレンチ 河川1区		土師器 広口壺	口縁部～胴部	(14.4)			淡黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
66	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 壺	口縁部～胴部	(15.1)			にぶい赤橙色	1～2㎜の砂粒を含む	東部瀬戸内系か

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
67	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 直口壺	胴部				①淡橙色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
68	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 壺	胴部				①灰白色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
69	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 壺	胴部				①淡黄色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
70	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 甕	口縁部	(13.2)			淡黄色	1㎜前後の砂粒を多量に含む	山陰系
71	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部	(15.5)			浅黄橙色	微砂粒を多量に含む	山陰系
72	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部	(21.8)			淡黄色	微砂粒を多量に含む	山陰系 内面ケズリ
73	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部～胴部	(19.4)			にぶい黄橙色	微砂粒を多量に含む	山陰系 内面ケズリ、外面に煤付着
74	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
75	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部				浅黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
76	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 甕	口縁部				灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	山陰系
77	Aトレンチ 河川1区	中層上面	土師器 甕	口縁部				①黒褐色 ②浅黄橙色	1㎜前後の砂粒を多量に含む	山陰系 外面に煤付着
78	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	口縁部				①黒褐色 ②灰白色	微砂粒を多量に含む	山陰系 外面に煤付着
79	Aトレンチ 河川1区	下層 (河床上面)	土師器 甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
80	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 甕	胴部				灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
81	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 甕	胴部				①浅黄橙色 ②灰黄色	1㎜以内の砂粒を含む	山陰系、外面櫛描波状文、内面ケズリ
82	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器 甕	胴部				①橙色 ②灰黄色	1㎜以内の砂粒を含む	山陰系、外面櫛描波状文、内面ケズリ
83	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	口縁部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
84	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	口縁部				①黒褐色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
85	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	弥生～土師器 タタキ甕	口縁部				灰黄色	1～2㎜の砂粒をわずかに含む	
86	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
87	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
88	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
89	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①暗灰黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
90	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰黄色	1～5㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
91	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
92	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				淡黄褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
93	Aトレンチ 河川1区		弥生～土師器 タタキ甕	胴部				淡黄褐色	1～5㎜の砂粒を含む	
94	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
95	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
96	Aトレンチ 河川1区	給水管攪乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①淡黄色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
97	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①明赤褐色 ②橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
98	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
99	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	

出土遺物観察表

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
100	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黄灰色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
101	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	102・103と同一個体か
102	Aトレンチ 河川2区	透水管撹乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	101・103と同一個体か
103	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①にぶい赤褐色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	101・102と同一個体か
104	Aトレンチ	表採	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
105	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
106	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①にぶい赤褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
107	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
108	Aトレンチ 河川2区	透水管撹乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
109	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
110	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
111	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 庄内系甕	口縁部～胴部	(15.4)			灰白色	2～3㎜の砂粒を多量に含む	庄内系 外面に一部煤付着
112	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 在地系長胴甕	口縁部～胴部	(19.2)			①灰黄色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に一部煤付着
113	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
114	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①淡黄色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
115	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				橙色	微砂粒を含む	
116	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②浅黄橙色	1～4㎜の砂粒を含む	
117	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器　甕	口縁部				灰黄色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
118	Aトレンチ 河川2区	透水管撹乱	土師器　甕	口縁部				灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
119	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	口縁部～胴部				淡橙色	2㎜以内の砂粒を含む	風化が激しい
120	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	口縁部				灰黄色	1㎜前後の砂粒を含む	
121	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	口縁部～胴部	(8.5)			灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	外面に一部煤付着
122	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	口縁部～胴部	(16.8)			灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤が付着 内面ケズリ
123	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	口縁部	(17.8)			①灰白色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	布留系
124	Aトレンチ 河川1区	給水管撹乱	土師器　甕	口縁部	(30.1)			①淡黄色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
125	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	胴部				浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
126	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	布留系もしくは山陰系、外面に煤付着、127と同一か
127	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　甕	胴部				①黒褐色 ②にぶい黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	布留系もしくは山陰系、外面に煤付着、126と同一か
128	Aトレンチ 河川1区	排水溝撹乱	土師器　高坏	坏部				①淡黄色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
129	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　高坏	坏部	(29.1)			①淡黄橙色 ②橙色	精製粘土	外面に煤付着
130	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　高坏	坏部	(15.1)			①灰白色 ②淡黄色	微砂粒を含む	脚部の可能性あり
131	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器　高坏	脚部				淡黄色	2～3㎜の砂粒を含む	
132	Aトレンチ 河川1区	下層	土師器　高坏	脚部				黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
133	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 高坏	脚部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	2孔一組の透かし穴
134	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 高坏	脚部				浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
135	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器 高坏	脚部				黄橙色	赤色斑粒を含む	
136	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 高坏	脚部				浅黄橙色	精製粘土	円形透かし穴
137	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 高坏	脚部		(13.4)		灰白色	微砂粒を含む	円形透かし穴
138	Aトレンチ 河川2区	中層	土師器 鉢	口縁部～胴部				黄橙色	2～3㎜の砂粒を含む	
139	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 小形丸底鉢	口縁部～胴部				淡黄色	1～3の砂粒を含む	
140	Aトレンチ 河川1区	中層	土師器 鉢	口縁部～底部	(12.3)	(11.3)		淡黄色	精製粘土に1㎜以下の砂粒を少量含む	外面にタタキ痕
141	Aトレンチ 河川2区	下層	土師器 鉢	口縁部～底部	(13.4)			①淡黄色 ②灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	一部被熱 煤付着
142	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 壺	底部		(8.0)		①淡赤橙色 ②にぶい黄橙色	微砂粒を含む	風化が激しい
143	Aトレンチ 河川2区	透水管掘乱	弥生～土師器 壺	底部		(4.8)		灰白色	1～7㎜の砂粒を含む	風化が激しい
144	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(6.0)		灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
145	Aトレンチ 河川1区	給水管掘乱	弥生～土師器 壺	底部		(8.6)		淡黄色	1～4㎜および9㎜の砂粒を含む	
146	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生～土師器 壺	底部		(8.2)		黄橙色	1～5㎜の砂粒を含む	
147	Aトレンチ 河川跡1区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(7.5)		黄橙色	1～5㎜の砂粒を含む	
148	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(6.8)		灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	一部被熱
149	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(5.6)		灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
150	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 鉢	底部		(3.8)		①灰白色 ②灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
151	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(6.0)		①浅黄色 ②黒褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
152	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 壺	底部		(5.6)		①黒褐色 ②黄灰色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
153	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(5.0)		①浅黄橙色 ②灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	
154	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 壺	底部		(14.0)		①浅黄橙色 ②にぶい橙色	1～2㎜の白色砂粒を含む	
155	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(3.8)		①淡赤橙色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	被熱
156	Aトレンチ 河川2区	透水管掘乱	弥生～土師器 甕	底部		(5.2)		灰黄色	1～5㎜の砂粒を含む	
157	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(3.2)		黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
158	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(3.7)		①淡赤橙色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	被熱
159	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(4.8)		灰黄色	1～5㎜の砂粒を含む	
160	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(4.6)		灰黄色	微砂粒を含む	風化が激しい
161	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(4.6)		①灰白色 ②淡黄色	1～4㎜の砂粒を含む	
162	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生～土師器 甕	底部		(5.2)		①淡黄色 ②浅黄橙色	1㎜前後の砂粒を多量に含む	風化が激しい
163	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(6.2)		黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
164	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(3.8)		①淡赤橙色 ②灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	被熱
165	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(6.0)		①灰白色 ③黒褐色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい

出土遺物観察表

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
166	Aトレンチ 河川1区	下層	弥生～土師器 甕	底部		(6.2)		灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
167	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(2.5)		①淡黄色 ②黄灰色	1～6㎜の砂粒を含む	風化が激しい
168	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(3.6)		①灰黄色 ②淡黄色	微砂粒を含む	煤が付着
169	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(2.0)		浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
170	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(0.9)		黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
171	Aトレンチ 河川2区	透水管撹乱	弥生～土師器 甕	底部		(3.6)		①淡赤橙色 ②灰褐色	1～3㎜の砂粒を含む	外面にタタキ痕
172	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(2.2)		①黄橙色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面にタタキ痕
173	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(1.1)		①灰黄色 ②黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	外面にタタキ痕
174	Aトレンチ 河川1区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(3.5)		①灰白色・一部赤変 ②灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	外面にタタキ痕
175	Aトレンチ 河川2区	中層	弥生～土師器 甕	底部		(2.4)		①淡黄色 ②にぶい黄橙色	2.5㎜以内の砂粒を含む	外面にタタキ痕
176	Aトレンチ 河川2区	下層	弥生～土師器 甕	底部				①灰白色 ②明褐灰色	1～5㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
177	Aトレンチ 河川2区	下層 (河床上面)	弥生～土師器 甕	底部		(5.0)		①灰黄色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
178	Aトレンチ	表採	磁器 碗	底部		(6.0)		素地 白色 釉調 緑灰色	精良	青磁 内外面貫入
182	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部	(39.6)			灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	全面風化
183	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部～胴部	(24.8)			①暗褐色 ②明黄褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
184	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～胴部				①にぶい橙色 ②褐灰色	1～2㎜の砂粒を含む	内面の風化が激しい
185	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	190と同一個体か
186	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～胴部				①暗黄灰色 ②灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	
187	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①淡黄色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
188	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部				①明黄褐色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
189	Bトレンチ 河川肩部		縄文土器 深鉢	口縁部				明黄褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
190	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	185と同一個体か
191	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄褐色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	196と同一個体
192	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄色 ②淡黄色	1㎜前後の砂粒を含む	
193	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄色 ②黄灰色	微砂粒を含む	
194	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰白色 ②灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
195	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	
196	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄褐色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	191と同一個体
197	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄褐色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
198	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
199	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	
200	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰白色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
201	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①黄灰色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み　法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
202	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①明黄褐色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
203	Bトレンチ 河川肩部	暗灰色砂礫層	縄文土器 浅鉢	口縁部				①黄灰色 ②褐灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
204	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①明黄褐色 ②褐灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
205	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①明黄褐色 ②褐灰色	微砂粒を含む	
206	Bトレンチ 河川肩部	シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①淡黄色 ②明黄褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
207	Bトレンチ 河川肩部	シルト層	縄文土器 浅鉢	底部				①明黄褐色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	
208	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 浅鉢	底部		(4.6)		黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	
209	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色シルト層	縄文土器 深鉢	底部		(8.7)		①にぶい黄橙色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
210	Bトレンチ SB-1		弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(42.4)			灰色	1～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
211	Bトレンチ SB-1 周溝		弥生土器 壺	口縁部	(14.0)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	口縁部に紐孔
212	Bトレンチ SB-1		弥生土器 甕	口縁部				①浅黄橙色 ②淡黄色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	被熱 風化が激しい
213	Bトレンチ SB-1		弥生土器 甕	口縁部				灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
214	Bトレンチ SB-1	ド層	弥生土器 高坏	口縁部				淡赤橙色	1～3㎜の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
215	Bトレンチ SB-1		弥生土器 高坏	口縁部	(18.2)			①淡黄色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒と雲母を含む	内面ヘラミガキ
238	Bトレンチ SB-2 Pit-4		弥生土器 甕	口縁部				①淡黄色 ②灰白色	2～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
239	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
240	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	口縁部				①灰黄色 ②黄灰色	1～4㎜の砂粒を含む	口唇部に2条の擬凹線
241	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	底部		(5.4)		灰白色	1～5㎜の砂粒を多量に含む	風化が激しい
243	Bトレンチ SB-3		弥生土器 壺	頸部				灰黄色	1～4㎜の砂粒を含む	
244	Bトレンチ SB-3		弥生土器 甕	胴部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい 煤付着
263	Bトレンチ SB-4		弥生土器 甕	口縁部	(21.9)			①灰黄色 ②淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
264	Bトレンチ SB-4 Pit-4		弥生土器 甕	口縁部				①淡赤橙色 ②橙色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
265	Bトレンチ SB-4 Pit-5		弥生土器 高坏	坏部				灰黄色	1～4㎜の砂粒を含む	
266	Bトレンチ SB-4 Pit-4		弥生土器 甕	底部		(6.8)		①淡黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
267	Bトレンチ SB-4		弥生土器 甕	口縁部	(17.0)			淡黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
268	Bトレンチ SB-4 Pit-4		弥生土器 鉢	口縁部～胴部	(10.8)			淡黄色	1～4㎜の砂粒を含む	被熱 煤付着
269	Bトレンチ SB-4		土師器 甕	口縁部	(12.9)			①黄灰色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	山陰系 風化が激しい　混入か
270	Bトレンチ SK-1		弥生土器 複合口縁壺	口縁部				淡黄色	1㎜前後の砂粒を含む	山形文 風化が激しい
271	Bトレンチ SK-1		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
272	Bトレンチ SK-1	上層	弥生土器 甕	口縁部	(28.0)			灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
273	Bトレンチ SK-1	遺構面清掃時	弥生土器 高坏	坏部	(25.8)			浅黄色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい 274と同一個体か
274	Bトレンチ SK-1	上層	弥生土器 高坏	脚部		(18.2)		灰白色	1～5㎜の砂粒を含む	2孔一組の透かし穴　風化が激しい　273と同一個体か
275	Bトレンチ SK-1	上層	弥生土器 甕	底部		(5.4)		①暗灰黄色 ②黒褐色	1～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい

出土遺物観察表

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み　法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
277	Bトレンチ SK-3	下層	弥生土器 甕	口縁部～胴部	(17.8)			①黄灰色 ②淡黄色	1～5㎜の砂粒を含む	
278	Bトレンチ SK-3	下層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
279	Bトレンチ SK-3		弥生土器 甕	胴部				①浅黄色 ②灰白色	微砂粒を含む	
280	Bトレンチ SK-3	上層	弥生土器 甕	底部		(1.4)		①にぶい橙色 ②灰黄色	1～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
281	Bトレンチ SK-4	上層	弥生土器 甕	口縁部～胴部				淡黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
282	Bトレンチ SK-4	上層	弥生土器 高坏	脚部		(20.7)		灰白色	微砂粒を含む	風化が激しい
283	Bトレンチ SK-4	上層	土師器 高坏	脚部				にぶい黄橙色	2㎜以下の砂粒を含む	風化が激しい
284	Bトレンチ SK-4		土師器 器台	脚部		(8.8)		浅黄橙色	微砂粒を含む	透かし穴5ヶ所 風化が激しい
285	Bトレンチ SK-4		弥生土器 壺	底部		(6.6)		①褐灰色 ②橙色	1～6㎜の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
286	Bトレンチ SK-6		土師器 高坏	脚部				淡黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
287	Bトレンチ SK-6		土師器 高坏	脚部				淡黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
288	Bトレンチ SK-6		弥生土器 壺	底部		(10.8)		灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
289	Bトレンチ SK-6	上層	弥生土器 甕	底部		(5.6)		浅黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
290	Bトレンチ SX-1	下層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
291	Bトレンチ SX-1	下層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
292	Bトレンチ SX-1		弥生土器 高坏	裾部	(13.0)			灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
293	Bトレンチ SX-1		弥生土器 甕	底部		(6.0)		①にぶい橙色 ②淡黄色	1～2.5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
294	Bトレンチ SX-1		弥生土器 壺	胴部				灰白色	1～3.5㎜の砂粒を含む	5条単位の櫛描波状文
302	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	口縁部				①黒褐色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
303	Bトレンチ SK-6		弥生土器 高坏	坏部				浅黄橙色	微砂粒を含む	風化が激しい
304	Bトレンチ SD-1	下層	弥生土器 鉢	把手				浅黄橙色	1～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
305	Bトレンチ SD-1		土師器 伝統的Ⅴ様式系甕	口縁部～胴部	(14.0)			灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
306	Bトレンチ SD-1	下層	土師器 高坏	脚部				浅黄橙色	精製粘土に1㎜前後の砂粒をわずかに含む	風化が激しい
307	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	底部		(4.5)		①浅黄橙色 ②褐灰色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
308	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	底部		(6.9)		灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
309	配線トレンチ SD-2		弥生土器 垂下口縁壺	頸部				浅黄橙色	1～2㎜の砂粒を多量に含む	風化が激しい
310	配線トレンチ SD-2		弥生土器 高坏	脚部		(16.7)		浅黄橙色	1～4㎜の砂粒を含む	円形透かし穴 風化が激しい
311	配線トレンチ SD-2		弥生土器 高坏	裾部		(17.1)		灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
312	配線トレンチ SD-2		弥生土器 鉢	胴部～底部	(8.1)	(1.9)	(8.1)	灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	
313	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 垂下口縁壺	頸部				褐灰色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
314	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
315	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 甕	口縁部				①黒褐色 ②淡黄色	1～2㎜の砂粒を含む	外面煤付着
316	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 壺	口縁部	(18.9)			淡黄色	3㎜以内の砂粒を含む	口唇部に3条の擬凹線 317と同一個体

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み　法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
317	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 壺	胴部				①淡黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒をわずかに含む	316と同一個体
319	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 壺	胴部～底部		(5.2)		①浅黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	内外面に黒斑
320	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 高坏	脚部		(7.6)		①淡黄色 ②黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
321	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 甕	底部		(5.0)		①浅黄橙色 ②灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
322	配線トレンチ C区SX-1	下層	弥生土器 甕	底部		(8.0)		①淡黄色 ②灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	
323	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 壺	胴部				①丹塗り ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	北部九州系
324	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 甕	口縁部				①黄灰色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	外面煤付着
325	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 甕	口縁部～胴部				①淡黄色 ②灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
326	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 高坏	坏部				浅黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	
327	配線トレンチ C区SX-1	上層	弥生土器 高坏	脚部				にぶい橙色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	被熱 風化が激しい
328	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 高坏	脚部				橙色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	
329	配線トレンチ C区SX-1	中層	弥生土器 壺	底部		(8.5)		①淡橙色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
331	配線トレンチ C区SX-2	上層	弥生土器 甕	底部		(3.5)		淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい 外面に黒斑
332	配線トレンチ D区SX	上層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
333	配線トレンチ D区SX	上層	土師器 甕	底部		(5.0)		①灰黄色 ②灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	
334	Bトレンチ 暗渠1	清掃時	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
335	Bトレンチ 暗渠1		瓦質土器 壺	胴部				灰白色	精良	風景画型押し
336	Bトレンチ 暗渠1		磁器 碗	口縁部～体部	(9.8)			素地 白色 釉調 灰色	精良	肥前系染付
337	Bトレンチ 暗渠1	清掃時	陶器 片口	体部～底部		(6.6)		素地 灰色 釉調 灰白色	精製粘土	萩焼 外面の釉は体部下半まで
333	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				浅黄橙色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
340	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(4.5)		灰白色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい　上底
341	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(6.4)		浅黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	上底
342	Bトレンチ G-2	遺構検出時	土師器 甕	底部		(1.7)		①浅黄橙色 ②褐灰色	1～2㎜の砂粒を含む	外面ケズリ 風化が激しい
345	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
346	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	頸部				淡黄色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	1条の貼付突帯 風化が激しい
347	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	頸部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	2段の刺突文 風化が激しい
348	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				淡黄橙色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
349	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	口唇部に3条の擬凹線 風化が激しい
350	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 高坏	坏部				淡黄色	微砂粒と3～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
351	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	底部		(6.8)		淡黄色	2～4㎜の砂粒を多量に含む	底部貼付　風化が激しい
352	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(7.2)		灰白色	1～4㎜の砂粒を含む	風化が激しい
353	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(4.3)		①浅黄色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
354	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(6.7)		①淡黄色 ②黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい

出土遺物観察表

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
355	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器　高坏	坏部				浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい
356	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器　高坏	坏部				浅黄橙色	1～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
357	Bトレンチ G-3	遺構検出時	須恵器　蓋坏　坏	底部		(7.5)		青灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
358	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器　埦	底部		(8.5)		淡黄色	精製粘土	
359	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器　皿	底部		(4.8)		灰白色	精製粘土	糸切底 内面に炭素吸着
360	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器　皿	底部		(6.5)		淡黄色	精良	糸切底
361	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　甕	口縁部	(17.1)			灰白色	金雲母と赤色斑粒をわずかに含む	風化が激しい
362	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　甕	口縁部	(23.2)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	風化が激しい
363	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　甕	底部		(5.4)		淡黄色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
364	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　甕	底部				淡黄色	1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
365	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　甕	底部		(5.4)		淡黄色	1～2㎜の砂粒を含む	風化が激しい
366	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器　高坏	坏部	(22.9)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
367	配線トレンチ A2区	撹乱	縄文土器　深鉢	口縁部				橙色	1～3㎜の砂粒を含む	貼付突帯
368	配線トレンチ C区	表土掘削時	弥生土器　甕	口縁部	(26.4)			①橙色 ②灰白色	1～2㎜の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
369	配線トレンチ C区	表土掘削時	須恵器　坏	底部		(8.5)		青灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
370	配線トレンチ D区	表土掘削時	土師器　高坏	脚部				橙色	1～2㎜の砂粒を含む	
371	配線トレンチ E区	遺物包含層	土師器　埦	口縁部	(11.6)			灰白色	精製粘土	
373	配線トレンチ G区　河川	下　層	弥生土器　複合口縁壺	口縁部～頸部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
374	配線トレンチ G区	写真清掃時	須恵器　坏	底部		(7.6)		青灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
375	Cトレンチ 水田　溝		須恵器　坏	底部		(7.2)		青灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
376	Cトレンチ 北西端	遺物包含層	土師器　埦	底部		(7.2)		①淡黄色 ②灰白色	1㎜以内の微砂粒を含む	
377	Cトレンチ 溜池状遺構		土師器　坏	底部				黄橙色	微砂粒を含む	
378	Cトレンチ SK-1		土師器　埦	口縁部				浅黄橙色	精製粘土に1㎜前後の砂粒を含む	風化が激しい
379	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器　壺	口縁部	(14.4)			淡黄色	1～2㎜の砂粒を少量含む	
380	Eトレンチ 北半	遺物包含層	弥生土器　甕	口縁部	(13.4)			淡黄色	1～2㎜の砂粒を少量含む	
381	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器　甕	口縁部				灰白色	微砂粒を多量に含み1～6㎜の砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
382	Eトレンチ 北半	遺物包含層	弥生土器　甕	頸部				灰白色	微砂粒を含む	
386	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器　高坏	脚部				灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
384	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器　甕	底部		(3.6)		灰黄色	1～4㎜の砂粒を含む	
385	Eトレンチ	遺物包含層	弥生土器　甕	底部		(5.2)		灰黄色	2㎜以内の砂粒を含む	
386	Fトレンチ 河川	縄文晩期堆積土下層	縄文土器　深鉢	口縁部				灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
387	Fトレンチ 河川	縄文晩期堆積土下層	縄文土器　深鉢	胴部				暗灰黄色	1～2㎜の砂粒を含む	縄文RL
388	Fトレンチ 河川	縄文晩期堆積土上層	縄文土器　深鉢	胴部				①黄灰色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	巻貝による擬縄文

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
389	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				灰黄色	1㎜前後の砂粒を含む	6条の凹線
390	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 深鉢	胴部				灰黄色	2㎜以内の砂粒を含む	3条の沈線 風化が激しい
391	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部～胴部	(36.8)			暗褐色～にぶい褐色	1～5㎜の砂粒を含む	
392	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部～底部		(1.0)	(26.1)	①灰黄褐色 ②黒褐色	1～9㎜の砂粒を含む	
393	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む	
394	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～2.5㎜の砂粒を含む	外面に煤付着
395	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～9㎜の砂粒を含む	外面に煤付着 口唇部刻目あり
396	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				①淡黄色 ②黒褐色	1㎜前後の砂粒を含む	口唇部刻目あり
397	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～2㎜の砂粒を含む	外面に煤付着 口唇部刻目あり
398	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				①灰黄色 ②黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
399	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 深鉢	胴部				淡黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
400	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 浅鉢	口縁部	(42.0)			①黒褐色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
401	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 浅鉢	口縁部				浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	
402	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	
403	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
404	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	外面に貝殻条痕を残す
405	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
406	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
407	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	精良	内面に剥離痕
408	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 浅鉢	胴部				黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
409	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 壺	胴部				黄灰色	1～2㎜の砂粒を含む	
410	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	底部				①黄灰色 ③灰黄色	微砂粒を含む	
411	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	底部		(7.4)		浅黄色	1～2㎜の砂粒を含む	
412	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	底部		(7.8)		①黄褐色 ③暗灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む	風化が激しい 内面に煤付着
413	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 壺	口縁部	(27.5)			①丹塗り ③淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む	外面丹塗り
414	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 甕	口縁部				浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	混入か
415	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 甕	口縁部				浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む	混入か
416	Fトレンチ 河川	上面包含層	土師器 高坏	坏部				浅黄色	1～2㎜の砂粒を含む	混入か

Tab.3　出土遺物観察表（土製品）

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大径(cm)	最大孔径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	色調	備考
330	配線C区 SX-1	黒色粘土	土玉	2.1	0.2	1.9	7.3	灰黄色	精製粘土に1～2㎜の砂粒をわずかに含む

Tab.4　出土遺物観察表（石器・石製品）

法量（　　）は現存値

遺物番号	出土遺構	層　位	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	備　考
179	Aトレンチ 河川1区	最下層（河床上面）	調整剥片	2.6	2.6	0.6	2.6	サヌカイト	
180	Aトレンチ 河川1区	下　層	石　鏃	3.8	1.6	0.95	4.4	黒曜石	未製品
181	Aトレンチ 河川2区	中　層	紡錘車	径(2.6)		0.6	2.6	角閃石安山岩	
216	Bトレンチ SB-1　Pit-3		礫	5.7	3.8	0.7	18.8	結晶片岩	使用痕あり
217	Bトレンチ SB-1　Pit-5		剥　片	6.1	3.0	0.7	15.2	結晶片岩	使用痕あり
218	Bトレンチ SB-1		紡錘車	最大径3.85	孔径0.5	0.7	17.8	滑　石	
242	Bトレンチ SB-2		石　鏃	(1.4)	(1.1)	0.35	0.3	サヌカイト	
276	Bトレンチ SK-2	上　層	凹　石	9.1	14.7	5.0	592.9	凝灰岩	
295	Bトレンチ SX-1		石庖丁	8.1	7.4	1.2	120.4	結晶片岩	未製品か
296	Bトレンチ SX-1		石庖丁	6.7	11.7	1.6	102.8	結晶片岩	未製品か
297	Bトレンチ SX-1	下　層	大型刃器	13.0	20.3	3.8	771.2	熔結凝灰岩	
298	Bトレンチ SX-1		刃　器	7.1	10.4	2.5	214.5	結晶片岩	
299	Bトレンチ SX-1	下　層	刃　器	8.3	9.6	3.2	231.4	熔結凝灰岩	
300	Bトレンチ SX-1	中　層	台　石	14.0	8.4	7.5	940.7	安山岩	
301	Bトレンチ SK-8		紡錘車	5.15	7.5	1.0	39.7	角閃石安山岩	未製品
318	配線トレンチ C区SX-1	下　層	磨製石斧	(8.3)	(6.0)	6.1	468.0	輝石安山岩	
338	Bトレンチ 暗渠		剥　片	4.4	3.6	1.3	15.5	姫島産黒曜石	
343	Bトレンチ G-2	遺構検出時	剥　片	(2.4)	(3.4)	0.95	4.2	安山岩	使用痕あり
44	Bトレンチ G-2	遺構検出時	剥　片	12.2	6.7	2.4	236.5	流紋岩	使用痕あり
372	配線トレンチ E区	遺物包含層上面	石　鏃	1.4	1.4	0.2	0.3	サヌカイト	
417	Fトレンチ 河川		敲　石	10.5	10.7	4.8	720.8	輝石安山岩	
418	Fトレンチ 河川	縄文晩期堆積土	三脚石器	2.6	2.8	0.5	2.0	黒曜石	

Tab.5　出土遺物観察表（ガラス小玉）

遺物番号	出土遺構	層　位	小口長径(mm)	小口短径(mm)	最大孔径(mm)	側面長(mm)	重量(g)	外部形態	色　調	紐孔形態	備　考
219	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.1	3.0	1.1	1.5	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	気孔管がある
220	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.6	1.6	4.5	0.08	形態2	淡水色	紐孔D	
221	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.9	2.8	0.8	3.3	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C1	小口面に大きな不純物がある
222	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.6	3.4	1.4	1.7	0.02	形態1	淡緑青色	紐孔C2	断面形が三角形状になる
223	Bトレンチ SB-1	水洗選別	4.2	4.1	1.3	2.9	0.07	形態2	淡水色	紐孔D	熔着痕跡がある
224	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.4	2.4	0.8	1.1	0.02	形態1	濃紺色	紐孔C2	
225	Bトレンチ SB-1	水洗選別	4.4	4.4	1.8	3.6	0.08	形態2	淡水色	紐孔C2	
226	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.7	1.4	3.6	0.06	形態2	淡水色	紐孔D	気孔管がある 表面の凹凸が激しい

遺物番号	2出土遺構	層　位	小口長径（mm）	小口短径（mm）	最大孔径（mm）	側面長（mm）	重量（g）	外部形態	色調	紐孔形態	備　　考
227	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.5	2.4	1.0	1.1	0.01	形態1	濃紺色	紐孔C1	
228	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.4	3.2	1.7	1.2	0.02	形態1	濃紺色	紐孔D	
229	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.5	3.4	1.0	3.4	0.05	形態3	濃紺色	紐孔D	
230	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.7	2.1	1.8	0.03	形態1	淡水色	紐孔D	
231	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.9	2.7	1.6	3.0	0.03	形態2	淡水色	紐孔C1	器壁が薄く環状になる
232	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.2	3.1	1.2	3.1	0.05	形態3	濃紺色	紐孔D	
233	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.5	3.4	1.3	1.8	0.04	形態1	濃紺色	紐孔D	気孔管がある
234	Bトレンチ SB-1　Pit-2	水洗選別	3.3	3.2	1.6	1.3	0.02	形態1	淡水色	紐孔D	
235	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.0	2.9	1.1	2.0	0.03	形態2	淡水色	紐孔D	
236	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.1	2.9	1.6	1.6	0.03	形態1	淡緑青色	紐孔D	
237	Bトレンチ SB-1	水洗選別				1.8	計測不能	形態1	淡水色	不明	欠損品
245	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.3	4.2	1.1	3.5	0.08	形態2	淡緑青色	紐孔D	
246	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.0	2.8	1.1	2.9	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C2	
247	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.2	3.1	1.5	1.4	0.02	形態1	濃紺色	紐孔D	
248	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.6	3.4	1.5	1.6	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
249	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.5	3.4	1.4	3.2	0.05	形態2	濃紺色	紐孔C2	
250	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.1	2.7	1.3	2.8	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C2	
251	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.2	3.8	1.7	1.8	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
252	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.0	3.6	1.8	2.1	0.04	形態1	濃紺色	紐孔C2	
253	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.3	3.1	1.3	1.8	0.02	形態1	淡水色	紐孔D	
254	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.6	3.5	1.3	2.0	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
255	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.4	3.2	1.3	2.4	0.02	形態2	淡水色	紐孔D	
256	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.3	4.0	1.7	3.4	0.07	形態2	淡水色	紐孔D	
257	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.1	3.0	1.2	2.7	0.03	形態3	濃紺色	紐孔D	
258	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.9	3.8	1.7	2.8	0.05	形態2	淡水色	紐孔C1	
259	配線トレンチ A1区　SB-3	水洗選別	4.8	4.4	1.7	3.9	0.10	形態2	淡水色	紐孔D	しわ状の収縮痕がある
260	配線トレンチ A1区　SB-3	水洗選別	3.1	2.9	1.3	2.1	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C1	
261	配線トレンチ A1区　SB-3	水洗選別	3.6	3.6	1.4	1.8	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C1	
262	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.6	4.6	1.7	2.1	0.06	形態1	濃紺色	紐孔D	

第３章　吉田構内第２屋内運動場新営に伴う発掘調査

１　調査の経過

吉田構内の北西部にあって、陸上競技場の北東部、第１体育館、第１武道場に挟まれた三角形の空地に、第２屋内運動場の新営が計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では、平成5年8月3日より8月18日まで試掘調査を実施している。調査の詳細は年報XIIIで報告しているが概略を採録する。

試掘調査では体育館新営予定地の四隅に6.0m×6.0mのトレンチを設定した。北東隅をＡトレンチ、南東隅をＢトレンチ、北西隅をＣトレンチ、南西隅をＤトレンチとしたが、Ａトレンチで大溝を1条検出したが他のトレンチでは顕著な遺構・遺物は検出できなかった。大溝は西肩のみの検出であったが、溝の側部に２段または３段の段掘りがなされていること、溝幅は推定約4m、深さが約60cmであることなどの所見を得た。出土遺物としては、弥生土器、須恵器、砥石などが挙げられる。このうち須恵器は、口径に対して器高の高い、埦状の坏であるが、中村浩氏の陶邑編年でいうⅢ型式１段階のものと考えられた。新営予定地には古代の大溝があることが判明したのである。以上のような試掘調査成果に基づき埋蔵文化財資料館運営委員会は、新営工事に際して事前の発掘調査が必要であると判断した。

その後、平成５年度の補正予算の決定により、工事計画が急遽具体化することとなった。体育館新営工事は平成６年度中の竣工予定となり、事前発掘調査をグランド照明施設新設に伴う発掘調査に引き続いて、平成6年7月16日から10月18日までのおよそ3ヶ月に渡り、新営予定地に南北22m、東西33m、総面積726㎡の調査区を設定して実施した。発掘調査の結果、弥生時代・弥生時代から古代にかけて・近世から近代にかけての大小の溝を検出した。なお、平成６年の夏は記録的な猛暑となり、現場作業員確保などに困難が生じた。

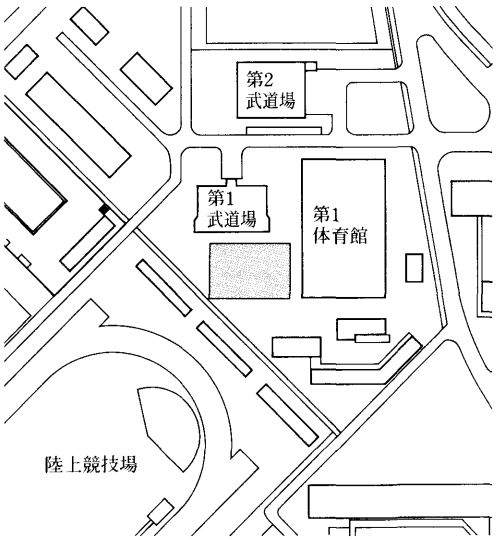


Fig.69　調査区位置図

2　層序（Fig.71）

第Ⅰ層：表土・造成土　　第Ⅱ層：水田耕土

第Ⅲ層：水田床土　　第Ⅳ層以下：地山

第Ⅰ層は表土及び本学統合移転のための造成土層である。土質、堆積厚ともに不均一で調査区の北東部分では埋め立てと掘削がくり返された痕跡を残す。厚さは、北東隅で最も薄く約40cm、北西隅で最も厚く約140cmである。第Ⅱ層、第Ⅲ層は本学統合移転直前まで耕作されていた水田に関連する土層である。第Ⅱ層は上中下の3層に分かれるが、大部分で造成時の削平を受けており下層しか残っていない。調査区北西の約1/4部分は、水田耕作面が一段約20cm低くなっているため第Ⅱ層上層の残りが良好で約15cmの堆積をみる。第Ⅲ層は調査区北西部の一段低い部分だけでみられる。第Ⅳ層は黄緑灰色または青灰色シルトの地山である。地山は調査区の北東隅で最も高く、南東部に向かってなだらかに低くなっている。地山上面が遺構検出面となる。調査区北西の約1/4の部分では遺構検出面も一段約20cm低くなる。シルト層以下は基本的には黒茶灰褐色粘質土になるが、場所によっては砂層になるなど地山堆積状況は必ずしも一様ではない。

3　遺構と出土遺物

(1) 概要（Fig.70, PL.63・64）

遺構は調査区の全域に渡って分布する。検出遺構の大半は溝で、そのほとんどを調査区に斜行して検出した。調査区は方位にそって設置しており、遺構は北から約45°東に振れて配置していることがわかる。北から南への流水が想定できるものが多い。

溝は、大溝・小溝という名称により区別する。大溝は、北東－南西方向のもの2条と、このうちの一つに取り付く北東－南西方向のもの1条を検出した。大溝２では、杭列や底面に杭痕列を検出した。調査区の北側、第１体育館と武道場の間に設置した配線等埋設部分調査区で大溝２の延長を確認している。小溝は、北東－南西方向のもの7条、北西－南東方向のもの2条を検出した。このほかにも、調査区南西隅で、北西－南東方向の近世用水路を検出した。溝以外の遺構としては、貯蔵穴、大土坑を検出した。

出土遺物は、近世用水路から陶磁器がまとまって出土した以外は、いずれの遺構でも小片が主体で、出土状況も散漫であるため遺構の正確な時期決定を困難にしている。最大の問題は、大溝・小溝出土の弥生土器である。全て流れ込みと考えることも可能であるが、新しい時期の遺物が見られないことから遺構の時期として積極的に評価した。

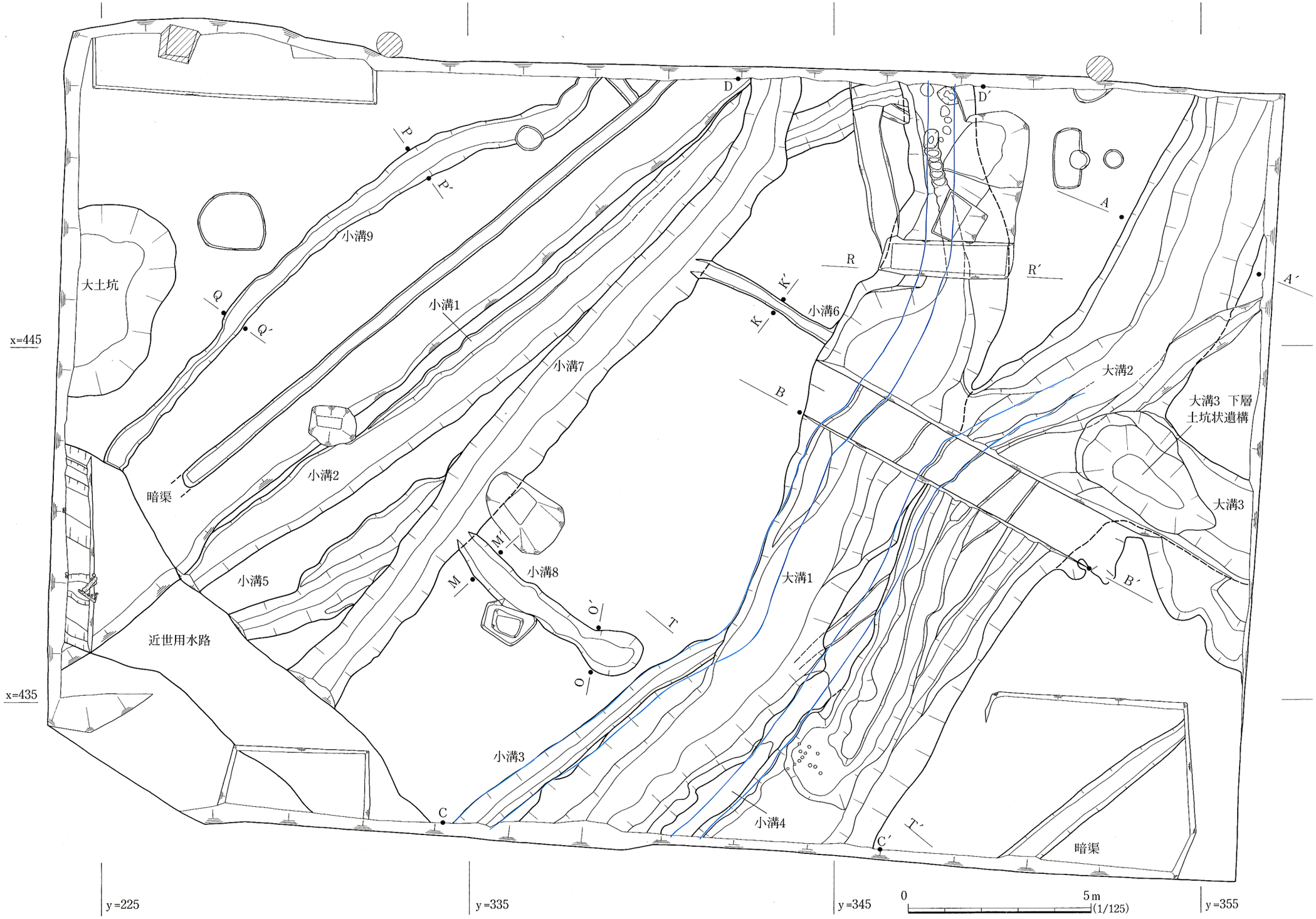
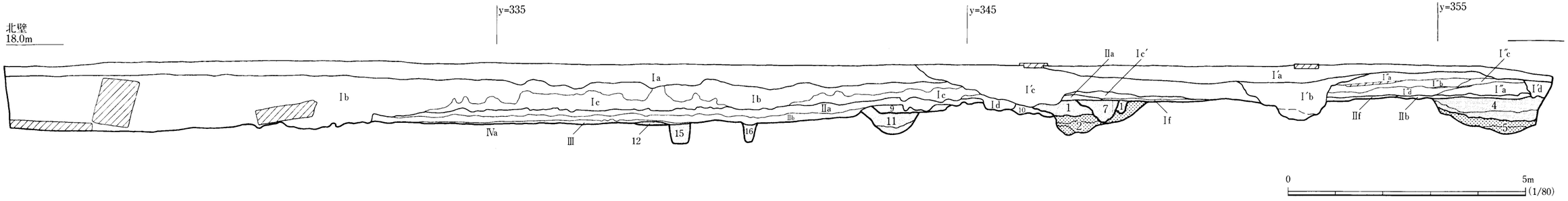


Fig.70　調査区遺構配置図



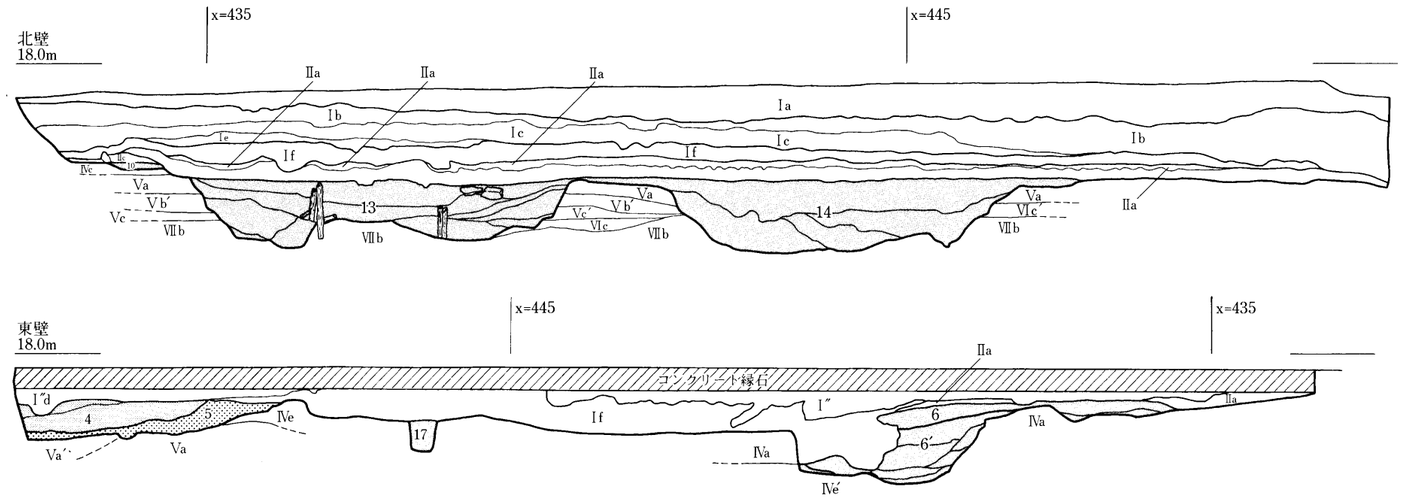


Fig.71　調査区壁面土層断面図

基本層序

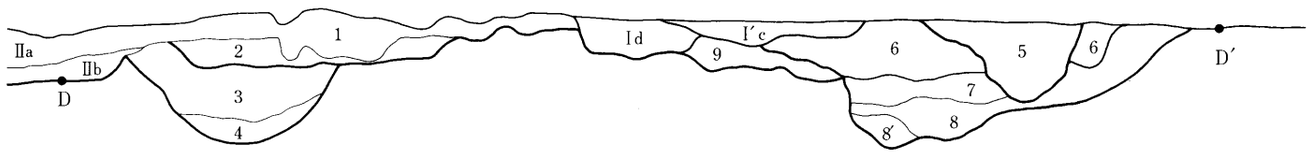
Ⅰa	表土・造成土	暗茶褐色土（山土ブロック、バラス、灰・白灰色粘土ブロック混）
Ⅰb	造成土	暗黄褐色土（山土ブロック、白灰色粘土混）
Ⅰc	造成土	明黄茶色土（山土）
Ⅰc'	造成土	明黄褐色土（山土）
Ⅰd	造成土	黒褐色土（黄灰色シルトブロック混）
Ⅰe	造成土	暗灰褐色土
Ⅰf	造成土	黒褐色土（黄茶・青灰色シルトブロック混）
Ⅰ'a	表土・造成土	茶褐色土（マサ土、バラス混）
Ⅰ'b	造成土	暗褐色土（バラス、黄灰・灰色シルトブロック混）
Ⅰ'c	造成土	黒褐色粘土、山土、灰茶色土ブロックの混合土
Ⅰ'd	造成土	バラス、グリ石
Ⅰ'd'	造成土	バラス、グリ石、マサ土
Ⅰ"a	造成土	マサ土
Ⅰ"b	造成土	グリ石
Ⅰ"c	造成土	灰褐色土
Ⅰ"d	造成土	白灰色土
Ⅱa	水田耕土	暗灰色粘質土（水田耕土1）
Ⅱb	水田耕土	暗灰緑色粘質土（水田耕土2）
Ⅱc	水田耕土	暗灰色粘質土（水田耕土3）
Ⅲ	水田床土	暗灰黄色粘質土

Ⅳa	地山	青灰色シルト
Ⅳa'	地山	暗青灰色シルト
Ⅳb	地山	黄灰色シルト
Ⅳc	地山	青灰色粗砂
Ⅳd	地山	暗茶灰色砂礫
Ⅳe	地山	暗灰色砂礫
Ⅳe'	地山	灰茶色砂礫
Ⅴa	地山	黒褐色粘質土
Ⅴa'	地山	暗灰茶色粘質土
Ⅴb	地山	茶褐色シルト
Ⅴb'	地山	黄茶色粘質土
Ⅴc	地山	黒灰色粘質土
Ⅴc'	地山	黒褐色粘質土
Ⅵa	地山	明青灰色シルト
Ⅵb	地山	黄灰色粘質土
Ⅵc	地山	暗黄灰色砂質土
Ⅵc'	地山	暗黄灰色砂礫
Ⅶa	地山	青灰色粘土
Ⅶb	地山	青灰色粘質土（砂混）
Ⅶb'	地山	暗黄青灰色粘質土（砂混）
Ⅷa	地山	黄灰色粘土
Ⅷb	地山	暗黄灰色粘質土

遺構埋土

1	大溝1上層上部埋土
2	大溝1上層下部埋土
3	大溝1下層埋土
4	大溝2上層埋土
5	大溝2下層埋土
6	大溝3埋土
6'	大溝3下層土坑状遺構埋土
7	小溝3埋土
8	小溝4埋土
9	小溝2埋土
10	小溝5埋土
11	小溝7埋土
12	小溝9埋土
13	近世用水路埋土
14	大土坑埋土
15	撹乱土（暗渠埋土）
16	撹乱土（暗渠埋土）
17	撹乱土（暗渠埋土）

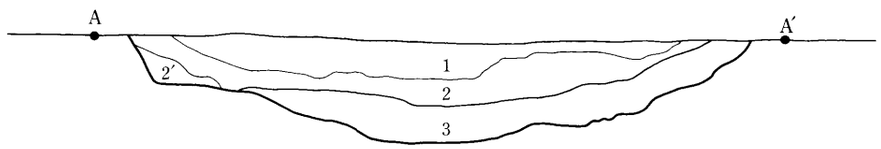
DD′断面
17.5m



DD'断面土層

1	小溝1埋土	暗灰色粘質土（Ⅱa）
2	小溝2埋土	黒褐色砂質土
3	小溝7埋土上層	黒灰色粘質土
4	小溝7埋土下層	灰褐色粘質土
5	小溝3埋土	黒褐色粘質土
6	大溝1上層上部埋土	黒褐色粘質土（黄褐色礫少量混）
7	大溝1上層下部埋土	黒褐色砂質土（黄褐色砂礫混）
8	大溝1上層下部埋土	黒灰色粘質砂
8'	大溝1上層下部埋土	褐灰色粘質砂
9	小溝5埋土	黒褐色粘質土

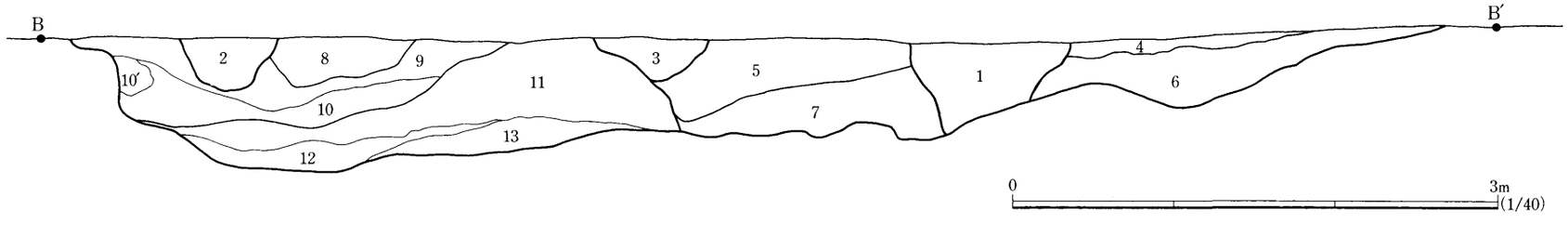
AA′断面
17.5m



AA'断面土層

1	大溝2上層埋土	暗灰褐色土（砂礫、シルトブロック混）
2	大溝2上層埋土	黒褐色粘質土
2'	大溝2上層埋土	黒褐色粘質土（砂礫混）
3	大溝2下層埋土	黒灰・茶灰色砂礫互層

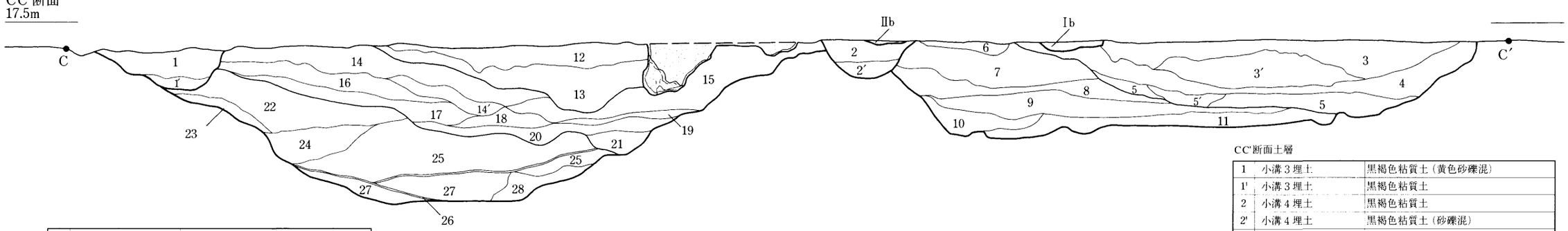
BB′断面
17.5m



BB'断面土層

1	暗渠埋土	撹乱土
2	小溝3埋土	黒褐色粘質土
3	小溝4埋土	黒茶褐色粘質土
4	大溝2上層埋土	暗灰褐色砂質土
5	大溝2上層埋土	黒褐色粘質土
6	大溝2下層埋土	暗灰・茶灰色砂質土互層
7	大溝2下層埋土	黒灰・茶灰色砂礫互層
8	大溝1上層上部埋土	黒褐色粘質土
9	大溝1上層下部埋土	暗灰黄褐色粘質土
10	大溝1上層下部埋土	暗灰褐色砂質土
10'	大溝1上層下部埋土	暗灰黄褐色粘質土（黄・白色砂礫混）
11	大溝1下層埋土	暗灰褐色砂礫
12	大溝1下層埋土	黒灰色粘質砂
13	大溝1下層埋土	灰黄茶色粗砂

CC′断面
17.5m



CC'断面土層

1	小溝3埋土	黒褐色粘質土（黄色砂礫混）
1'	小溝3埋土	黒褐色粘質土
2	小溝4埋土	黒褐色粘質土
2'	小溝4埋土	黒褐色粘質土（砂礫混）
3	大溝2上層埋土	黒褐色粘質土（小礫混）
3'	大溝2上層埋土	黒茶褐色粘質土（小礫やや多い）
4	大溝2上層埋土	暗灰褐色粘質土（小礫を含まない）
5	大溝2上層埋土	暗灰褐色砂質土
5'	大溝2上層埋土	黒褐色粘質土
6	大溝2下層埋土	暗灰褐色粘質土
7	大溝2下層埋土	黒茶褐色粘質土（小礫混）
8	大溝2下層埋土	暗灰茶色砂
9	大溝2下層埋土	灰黄色砂礫
10	大溝2下層埋土	黒灰色粘質砂
11	大溝2下層埋土	黒灰色砂礫

12	大溝1上層上部埋土	黒褐灰色粘質土（砂礫混）
13	大溝1上層上部埋土	黒褐色粘質土（小礫混）
14	大溝1上層下部埋土	黒灰色砂礫土（黄色礫多量混）
14'	大溝1上層下部埋土	黒灰色砂礫土
15	大溝1上層下部埋土	黒褐色粘質土（淡黄色礫混）
16	大溝1上層下部埋土	暗褐色砂礫土
17	大溝1上層下部埋土	明黄灰色粘質砂
18	大溝1上層下部埋土	黒灰色粘質砂
19	大溝1上層下部埋土	暗灰色礫
20	大溝1上層下部埋土	黒灰色粘質砂
21	大溝1上層下部埋土	暗灰色粘土及び砂

22	大溝1下層埋土	黄灰色シルト
23	大溝1下層埋土	暗黄灰色粘質土
24	大溝1下層埋土	暗灰黄色シルト
25	大溝1下層埋土	灰色砂礫
26	大溝1下層埋土	黒褐色炭化物層
27	大溝1下層埋土	灰色砂
28	大溝1下層埋土	暗灰色粘土

Fig.72　大溝1・2土層断面図

(2) 大溝

大溝１（Fig.70・72，PL.64・65(1)(2)・66）

調査区中央やや東よりに位置する北東－南西方向の溝である。検出面での遺構規模は幅約3.5m、深さ68～90cm、調査区内での検出長は約25mを測る。検出範囲に大型のコンクリート塊が設置されており調査に支障を来した。調査小区を設定し北壁～RR'ラインを０区、RR'ライン～BB'ラインを１区、BB'ライン～TT'ラインを２区、TT'ライン～南壁を３区とした。土層は複雑である。南壁（CC'断面）で整理すると、上層上部・上層下部・下層の３つのまとまりに捉えることができ、掘り直しを示すと考えられる。上層上部は黒褐色粘質土を基本とする埋土、上層下部は黒灰色系統の土・砂・礫の互層である。下層は灰色系統の土層で、粘土・シルト・砂・礫の互層となる。比較的粒子の細かい埋土を主体とする上層と、砂礫を主体とする下層では土質に隔絶がある。北壁（DD'断面）では下層を確認していない。これには二つの可能性が考えられる。一つは、上流側となる北壁付近では、上層溝に削られて下層が消滅した可能性で、もう一つは、上層と下層は１区付近で流路を異にする別遺構である可能性である。しかし１区に所在したコンクリート塊による撹乱のため、精査を行うことができず、この点についての所見を得ることができなかった。このため今回は２・３区で上下層として認めうる点にしたがった。

溝底の標高は、上層上部が北壁で16.98m、BB'断面で16.88m、南壁で16.76mである。上層下部では、北壁で16.55m、BB'断面で16.60m、南壁で16.40mである。下層では、BB'断面で16.36m、南壁で16.00mである。以上より、概ね北から南への流水を想定できる。

遺物は各層から出土するが散漫で、集中部分は特にみられない。大部分が弥生土器で時期のわかるものでは後期のものが多い。下層を中心に少量の縄文時代晩期の土器が出土する。新しい時代のものを含まない。磨滅した小片がほとんどで、詳しい時期を特定できるものは少ない。石器では、砥石、擦敲石、剥片が出土しているがやはり少量である。このように、遺物の出土状況は、この溝の機能期間を正確に把握するには不十分で全てが流れ込みの可能性さえある。敢えて出土遺物から積極的に位置付けを行うとしても、埋没時期の上限を示唆するにとどまる。またこの溝は大溝２に先行する遺構である。これらを考え合わせ、大溝１上層は弥生時代になってから掘削され、弥生時代後期中には埋没していたといえる。また、下層の砂礫層を中心として縄文土器が出土していることから、縄文時代晩期の河川を改修して溝を敷設した可能性も考えられる。この溝には、耕作に伴う用水路としての機能を想定できる。

大溝２・大溝３（Fig.70・72，PL.64・65(3)(4)・67）

大溝２は調査区東半に位置する北東－南西方向の溝で、試掘調査Ａトレンチで検出していたものである。大溝２の検出面での遺構規模は幅約4m、深さ40～74cm、調査区内での検出長約21mを測る。大溝１・２の検出範囲には、一辺約1.5mの正方形のコンクリート塊が約5m間隔で4個配置されており、調査に支障を来した。調査小区を設定し、北壁～AA'ラインを０区、AA'ライン～BB'ラインを１区、BB'ライン～TT'ラインを２区、TT'ライン～南壁を３区とした。溝の断面形は北側で弧形、南側で底面の広いＵ字形である。試掘調査では、溝の西側部の一部にテラス状の平坦部を作る段掘りの溝として検出している。今回の調査では、２・３区では溝の東・西側部ともにこのような段掘りは認められなかった。また、この溝の南半では、井桁状に配置された杭列を検出し、溝底一面には、杭跡列と考えられる遺構を検出した。土層を南壁（CC'断面）で整理すると、上層と下層の大きく２つのまとまりとして捉えられる。上層と下層の間には不整合面が見られ掘り直しがなされたと考えられる。埋土は、上・下層ともに黒褐色・暗灰褐色のものが主体となり、上層の土質は細かく、下層の土質は粗い。下層最下部では砂礫が堆積する。土層堆積はAA'断面、BB'断面では比較的単純であり、複雑なCC'断面とは様相を異にする。溝の断面形はAA'断面、BB'断面、CC'断面の３つの土層断面で著しく異なるが、これに関して有効な説明をなし得ない。あたかも別遺構のようであるが、杭痕列を溝底面のほぼ全面に検出したことで同一遺構であることを確認した。

溝底の標高は、上層が北壁で16.82m、BB'断面で16.65m、南壁で16.75mである。下層は、北壁で16.60m、BB'断面で16.52m、南壁で16.55mである。概ね、北から南への流水を想定できる。出土遺物は土器、石器ともに大溝１とはぼ同様の状況である。ただし、大溝２では、試掘調査で須恵器が出土しており、これから大溝２の埋没時期の上限は古代以降と判断できる。掘削時期は、大溝２は大溝１埋没後に掘削されていることをBB'断面の土層で確認していることから、弥生時代後期が上限となる。

大溝３は、大溝２の中程でこれに取り付く溝である。北東－南西方向の溝で、取り付き部分南側の溝肩部に小規模の崩れがあることから、大溝３側から大溝２に流れ込んでいた可能性が高い。底面の標高は16.62mと大溝２上層底面とほぼ対応する。底面の一部が土坑状にくぼむ。このくぼみは大溝３下層土坑状遺構として後に述べる。大溝３は遺物の出土は散漫であった。大溝２・大溝３とも、大溝１同様の耕作に伴う用水路としての機能を想定できる。

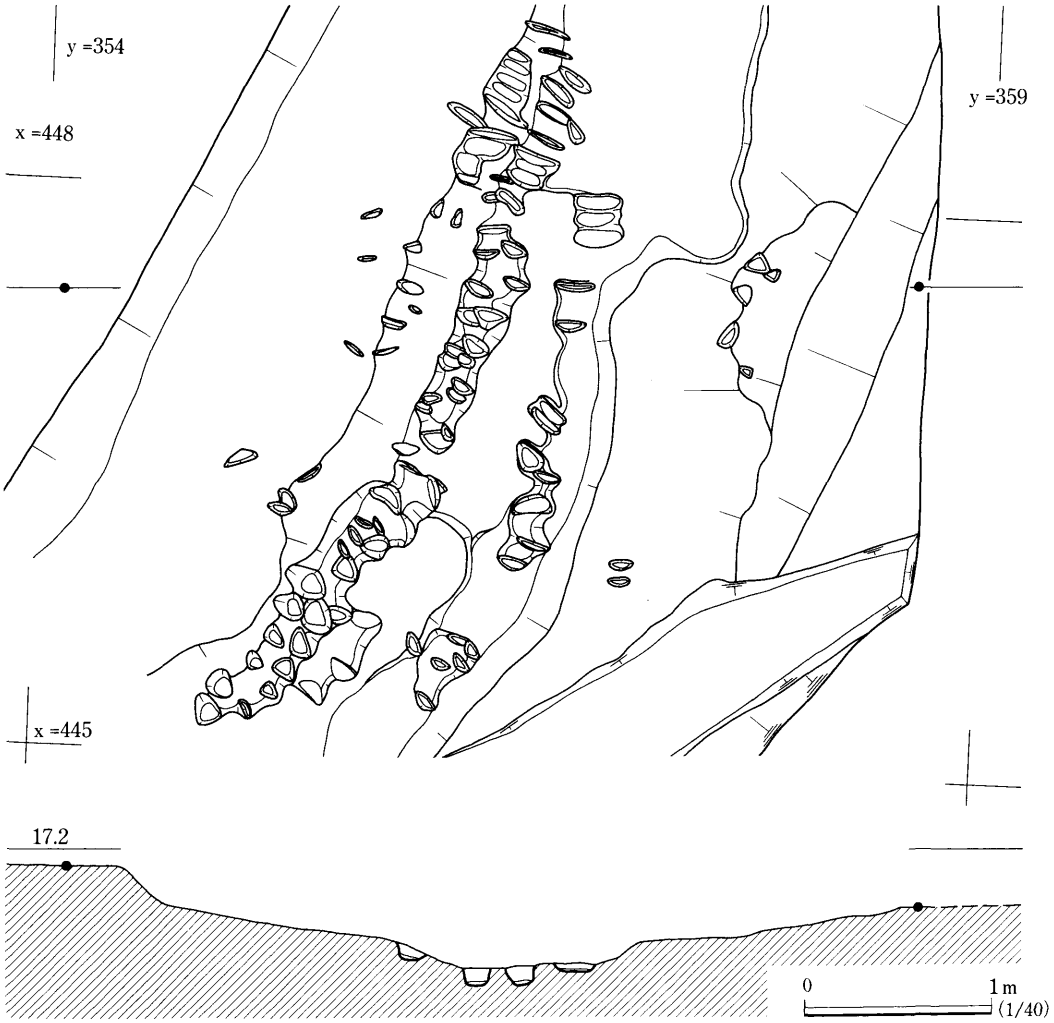


Fig.73　大溝２北半杭跡列実測図

大溝２杭跡列（Fig.73, PL.68・69）

大溝２の底面で杭跡列と考えられる遺構を検出した。暗黄茶色シルトの地山に、溝最下層埋土の砂質土が充填しているため明確に検出できた。杭跡は、平面形が長軸約10～25cm、短軸約6cmの長楕円形を呈し深さは約2～6cmである。これが法則性を持って配列する。大溝北半では並行して4条の列がみられるが、西から2条目の列が最も規則正しい。南半には3条の列が並行している。本遺構は杭跡列としたが、杭根の残存はなく、現検出面からでは杭として機能するための深さも不十分であるという問題点もあり、鋤跡などの可能性を残す。遺構の正確な評価には類例の集積を含めなお検討を要する。

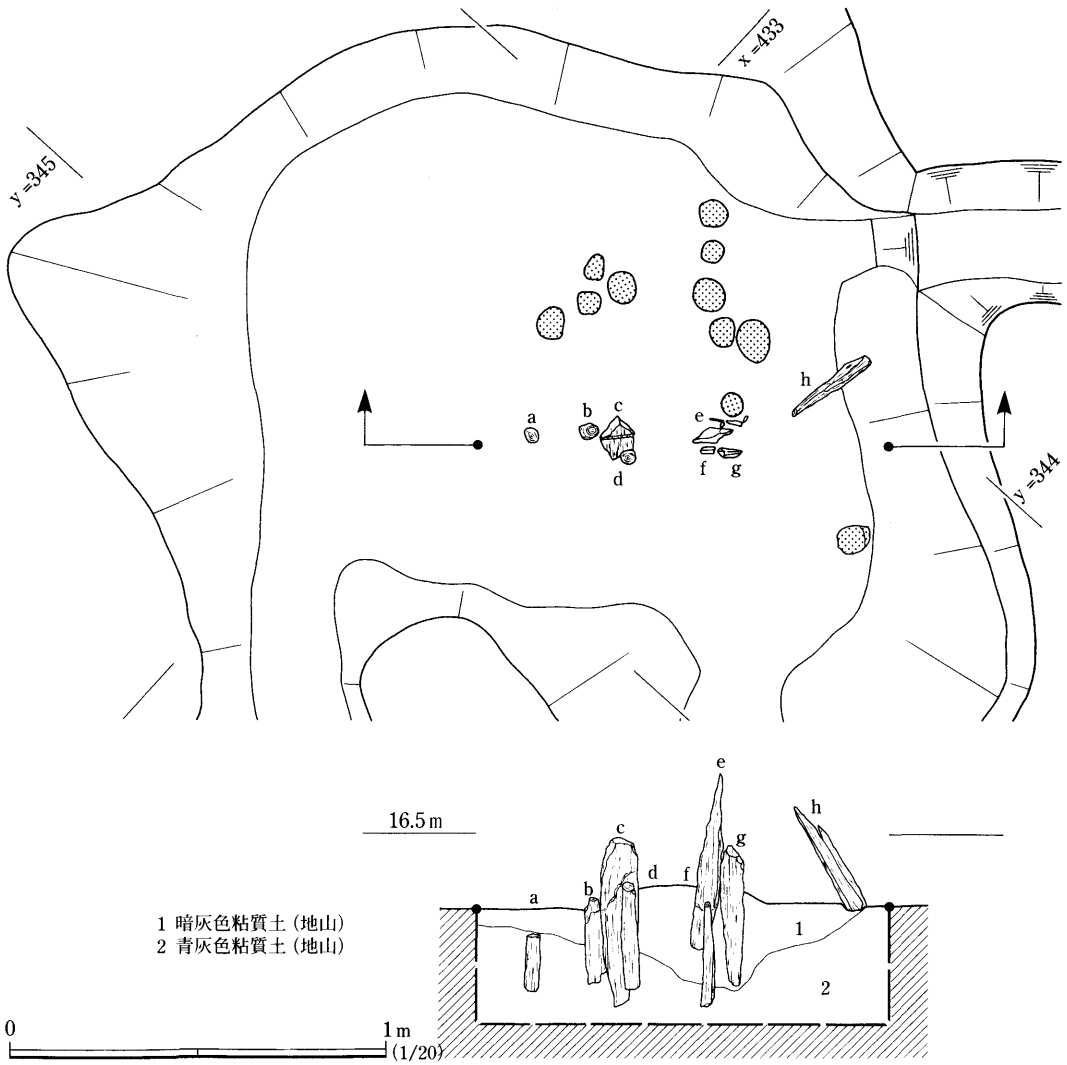
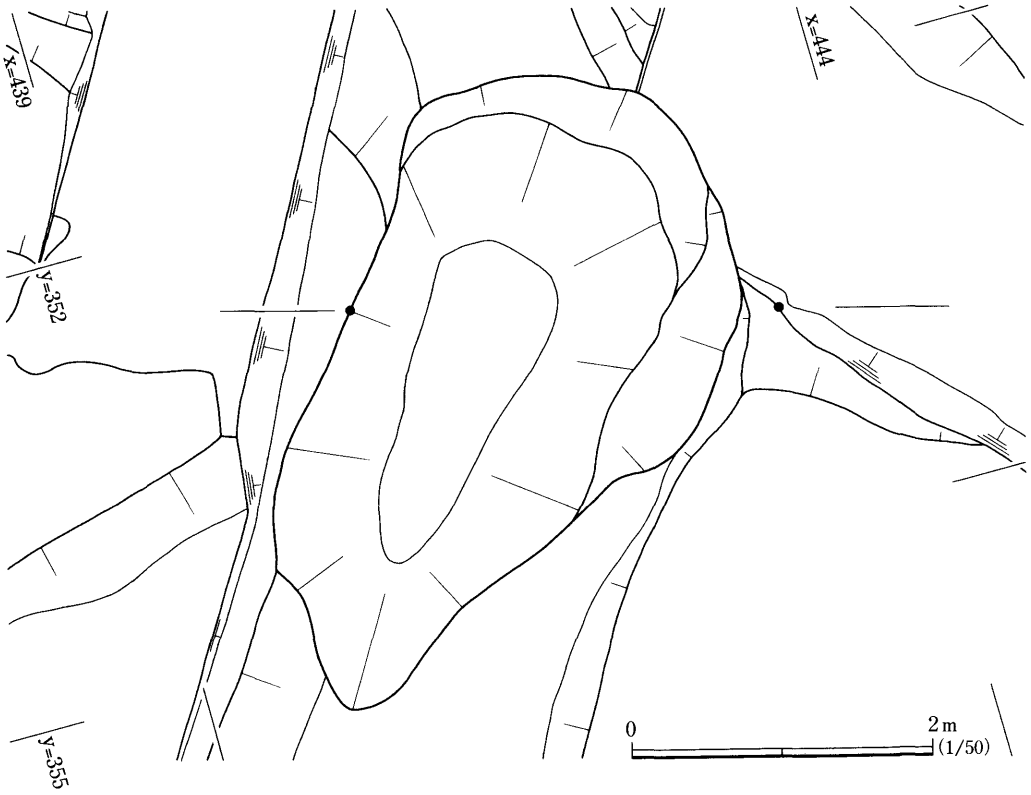
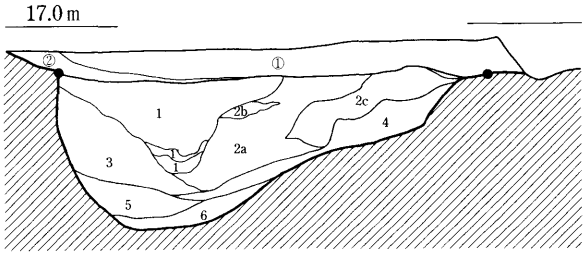


Fig.74　大溝２杭列実測図

大溝２杭列（Fig.74, PL.70）

大溝２南半で杭列を検出した。杭根は8本で北西－南東方向に並ぶ。b～d、e～gの杭は密集しており、それぞれ3本1単位で機能した可能性があり、2つの単位は約30cmの間隔を持つ。杭には直径4cm程度の丸木と、幅5～10cmの割木があり、検出面からの深さは約30cmを測る。杭列の南側では杭痕跡を検出した。いずれも直径6～9cmの円形で、深さは3～5cmと極めて浅い。杭根及び杭痕跡の検出面は、本来の溝底面であるシルトが抉れて粗砂堆積を形成する。堰のような施設の存在も考えられる。





大溝３下層土坑状遺構埋土
1　黒灰色粘土砂礫互層
1'　黒灰色粘質砂
2　黒灰色粘質砂
2'　暗灰色粗砂
2''　黒灰色砂礫
3　黒灰色粘土
4　暗灰黄色砂
5　暗灰青色粘土
6　暗灰色砂

大溝３埋土
①　中層：黒灰褐色粘質土
②　下層：暗灰色砂礫

Fig.75　大溝３下層土坑状遺構実測図

大溝３下層土坑状遺構（Fig.75，PL.71）

大溝３の底面で検出した。平面形は長径約4.5m、短径約2.4mの不整楕円形の土坑で、大溝３底面からの深さは約１m、最下部の標高は15.68mを測る。土層堆積は大溝３とは不整合面を持ち、しかも土坑状遺構南西部の埋土上に杭跡があり、両者の機能期間と埋没時期に時間的な隔絶があったことが明瞭にわかる。遺構埋土は粗砂層と粘質シルト層の互層となり、所々に樹木の枝・葉などの植物遺体を含む黒褐色土層が見られた。遺物は、弥生時代前期から後期の土器が出土した。弥生時代の遺構と考えられる。

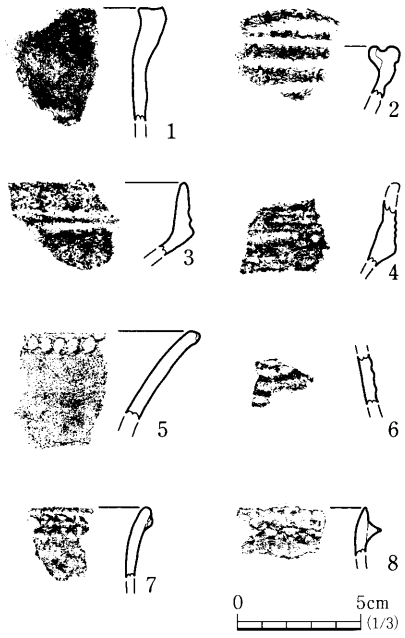


Fig.76　大溝出土縄文土器実測図

大溝出土縄文土器（Fig.76, PL.77 (1)）

1～5・7・8は口縁部、6は胴部の小片である。1が大溝３、2が大溝２で他は大溝１からの出土である。総じて磨滅が激しい。1は薄い器壁に内側から粘土を貼り足しユビオサエでやや外方に張り出し、口唇部をナデて平坦に収める。外面ナデ。2は外面に2条の沈線、口唇部に1条の沈線を施す。3は外反する口縁内側へ粘土を継ぎ足し屈曲部を作り出す。粘土の接合部位を挟んで上下に2条の沈線を施し屈曲部を強調する。4の屈曲部も3と同様の手法と考えられるが磨滅のため不明瞭である。5の器壁は薄く外面ナデ、内面には二枚貝による横方向の条痕を施す。端部外側には巻貝による刻目を施す。7は薄い器壁に粘土紐を貼り付け断面カマボコ形の低い突帯とし、巻貝による刻目を施す。突帯は端部先端よりやや下がった位置に作らる。内面には貝殻条痕を施す。8も7と同様に突帯を作るが、相違点は断面三角形の高い突帯で刻目の原体も貝ではないと考えられる点である。

大溝出土弥生土器（Fig.77, PL.77 (2)・78）

9・10は大溝１、11～13・15・16は大溝２、18～20は大溝３、17・21は大溝３下層土坑状遺構からの出土である。9は小型の甕である。器壁が薄く円形の底部を持つ。10は高坏の坏部である。内外面ともに風化が激しい。11は高坏の脚部である。器壁は裾部に向かって薄く、全体に細身で均整のとれたプロポーションを形成する。風化が激しい。坏部との結合部に特徴があり、粘土の剥離状況から、脚部頂部に粘土を覆い被せるようにして脚部と一連で坏部を作ったと考えられる。12は高坏の坏部である。内面は丁寧なミガキ、外面はナデを施す。13は壺の底部。14は甕の口縁部で大溝１・大溝２にまたがる撹乱よりの出土である。15・16は甕の底部である。

17は甕の口縁部である。右下から左上へのハケの後、口縁の下位をナデ消した上で6条のヘラ描沈線を施す。内面には右上がりのミガキを施す。18は高坏の坏部である。内外面ともミガキの後ナデを施す。19は壺の口縁部である。外面には頸部から肩部にかけて放射状にミガキを施す。内面には指頭痕が残る。20は高坏の脚部である。11に比べ、器壁は全

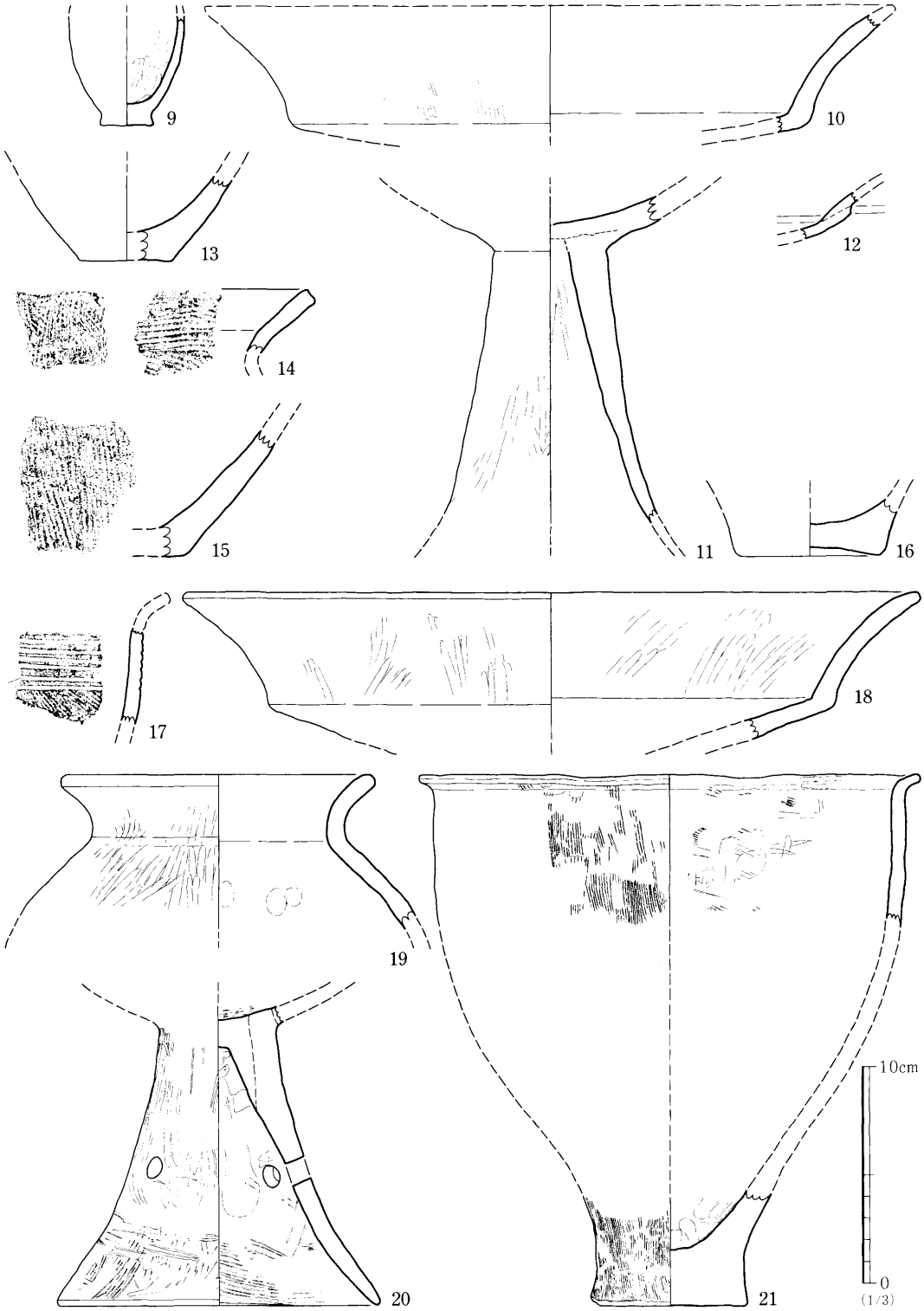


Fig.77　大溝１・２・３及び大溝３下層土坑状遺構出土弥生土器実測図

体的にやや厚く、太めで重心の低いプロポーションである。外面上半には丁寧なミガキ、裾部は目の粗いハケの後ナデを施す。内面には、中空部の頂部に棒状の工具を回転させて粘土塊を押し広げた痕跡が明瞭に残る。内面裾端部から約5cmはハケの後ナデを施す。円形の透かし孔が3つ見られ、復元すると全部で5方向の透かし孔があったと考えられる。21は如意形口縁を持つ甕である。接合点はないが、図上復元している。外面には下から上へのタテハケを施し、口縁の屈曲部の下をヨコナデする。内面はケズリの後ナデを施す。

大溝出土石器（Fig.78, PL.79）

22・23・28～30は砥石である。22は横断面正方形で側部の4面を砥面として使用する。石材は硬質のため使用痕は残らないが、左側面以外の3砥面の平面性は比較的高く、よく使用していることがわかる。上端部にはあばた状の敲打痕がみられる。折損部の稜にも潰れが見られ、折損後敲石に転用したことがわかる。中型の粗粒砥石である。23は長方体状で、側部の4面を使用する。表・裏の砥面は特に平面性が高く、長軸方向の反り、短軸方向のくぼみもほとんどない。稜には打撃による潰れがみられ敲石としての使用を想定できる。石材は硬質で使用痕などはみられない。中型の粗粒砥石である。28は破片である。砥面は1面見られ、小片のため平面性は確認できないが、明瞭な使用痕が観察できる。浅いＶ字状の切れ込みを形成しており、この中央部から放射状の線状痕が刻まれる。小ないし中型の中粒砥石である。29は平板状で、表・裏・下端部の3面を砥面とする。平面性は比較的高い。被熱したようで、破損面は赤褐色化し、表層は風化が著しく白色化して脆くなる。使用痕は見られない。小型の中粒砥石である。30は表の1面は明瞭な砥面で、長軸方向には反りがあるが短軸方向にはほぼ平坦である。左側部下半の平坦面も砥面の可能性が強く、面の反りはほとんど無く、短軸方向にはややふくらむ。小型の中粒砥石で手に持っての使用が想定できる。あるいは土器の表面調整での使用も考えられる。

24は磨石・敲石である。本来の楕円球形が半分程度に折損している。全面を擦っており平滑で、磨石としての使用が主体であったと考えられるが、上端部と裏にはあばた状の敲打痕が見られ敲石としても使用されていたことがわかる。折損部の稜にも潰れが見られ、この利用形態は折損後も変わらなかったと考えられる。裏は擦りによる使用が著しく平坦面を形成する。この平坦面の上半分、折損後の石器形態からすれば裏の中心部にあばた状の敲打痕が集中する。磨石として使用する際に圧搾物の滑り止めを目的とした意図的な打痕とも考えられ注目される。25は台石の破片と考えられる。変形の三角錐状で、台石の角の頂部が欠けたものであろう。全体に被熱し白赤色化している。

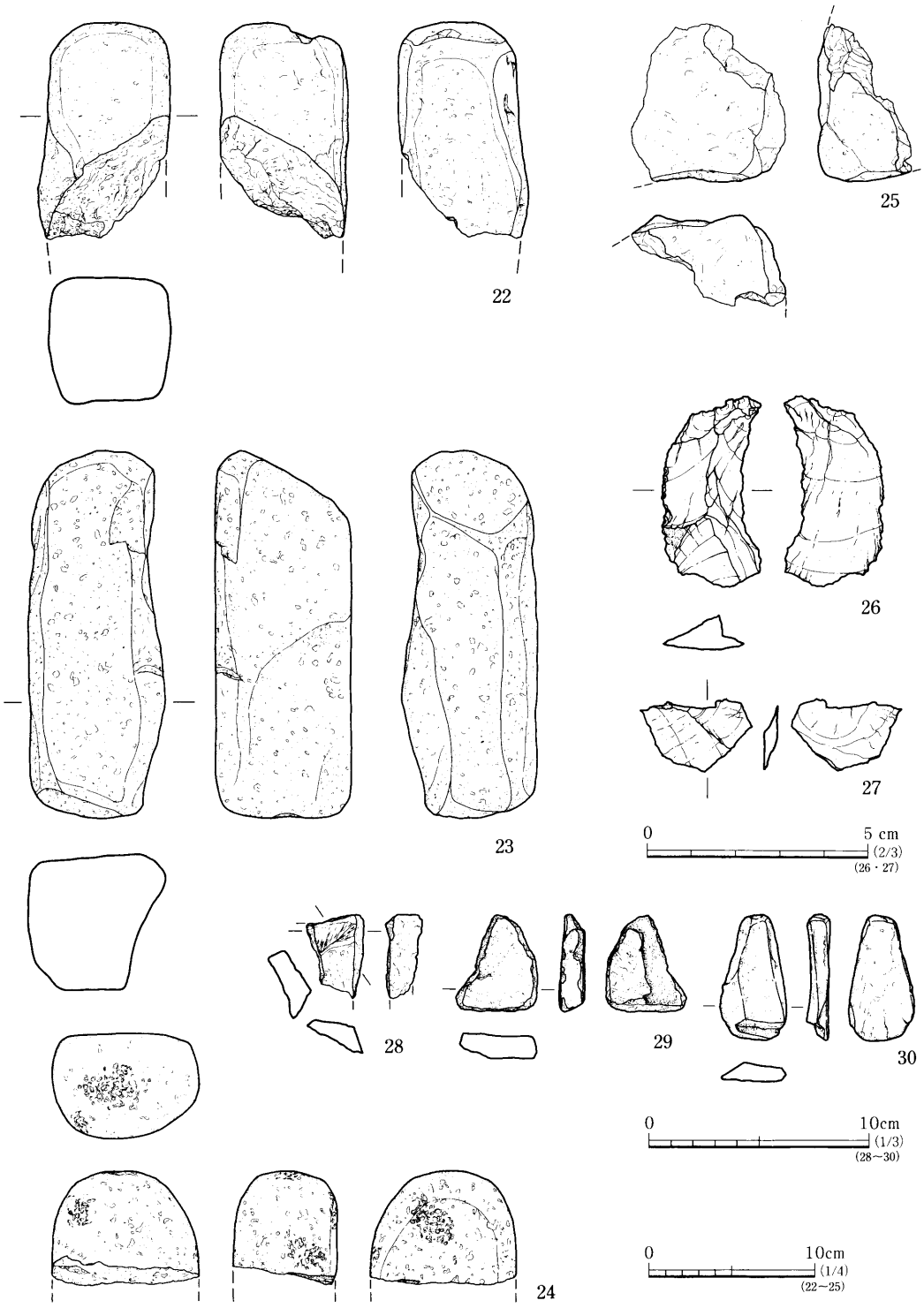


Fig.78　大溝出土石器実測図

26・27は剥片である。26は縦長の剥片である。上端部に主要剥離面側からの2回の剥離調整が行われており、これによって打面が失われている。背面には他に4面の素材剥離面がみられる。上方向からのものが2面、下方向からのものが1面、最も古い左方向からのものが1面である。この剥片が剥離された石核では、90度ないし180度の打面転移を行いながら、連続的な剥片剥離作業が行われた可能性が高い。左側縁辺には使用によるものか微細な剥離痕が連続している。27は横長の剥片である。背面には左上方からの剥離面があり、これが打面を取り去っているが、この剥離自体が剥片の剥離と同時であると考えられる。剥離調整、使用痕などはみられない。

(3) 小溝

小溝としたものには、幅40cm程度の小規模なものから幅1.5m程度の中規模のものまで含めている。これらの小溝からの出土遺物はそのほとんどが小片で数も少ないため、遺構の時期を細かく特定できない。そこで、遺構の重複による相対的な前後関係とこれを基にした大まかな時期の把握にとどまった。基準となるのは、小溝７、小溝５、大溝１の重複関係である。

小溝７は小溝５に先行する遺構で、小溝５は大溝１上層下部と同時期になる可能性が高い。小溝５・小溝７の出土遺物は、ほとんどが小片ではあるが全て弥生土器と考えられる。これらのことを考え合わせると、小溝５・小溝７は弥生時代の遺構と判断できる。埋土の状況から考えて、小溝６は小溝５と、小溝８は小溝７と同時期と考えられる。小溝９も弥生時代の遺構であろう。小溝３は大溝１が、小溝４は大溝２が埋没した後の遺構である。小溝１、小溝２からは陶器が出土しており、近世以降の時期が考えられる。このように、現状で把握できる遺構の時期は非常に大まかにならざるを得ない。下の表にまとめる。

Tab.6　小溝一覧表

遺構名	方　向	幅(cm)	深さ(cm)	検出長(cm)	流水方向	推定時期
小溝１	北東－南西	40～50	14	13.0	南西→北東	近代～現代
小溝２	北東－南西	140	20	16.5	北東→南西	近世～近代
小溝３	北東－南西	90	37～44	24.5	南西→北東	古墳時代～中世
小溝４	北東－南西	90	30	14.5	南西→北東	古代～中世
小溝５	北東－南西	120	17～38	24.5	北東→南西	弥生時代
小溝６	北西－南東	40	8	4.0	北西→南東	弥生時代
小溝７	北東－南西	150	50～71	22.5	北東→南西	弥生時代
小溝８	北西－南東	80	10	6.0	不明	弥生時代
小溝９	北東－南西	40～110	17	17.5	南西→北東	弥生時代

小溝1（Fig.70・81, PL.72・73）

調査区の西半部分に位置する。溝底の標高は、調査範囲のほぼ中央部で17.10m、北壁付近で17.05mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。小溝2の上部に位置し小溝2が埋没した後に敷設されている。遺構配置図は小溝2を掘り上げた段階のため、ほとんど図示し得ていない。出土遺物は陶器碗が1点出土している他は小片ばかりで数も少なく、正確な時期決定には不十分であるが、埋土の状況を考えあわせると近代から現代にかけての溝と判断できる。

小溝2（Fig.70・81, PL.72・73）

調査区西半部分に位置し、流路は小溝1とほぼ重なる。溝底の標高は、調査区北壁土層で17.05m、近世用水路に削平される南端部分で17.00mを測ることから、北東から南西方向への流水が想定できる。出土遺物は小片ばかりで数も少なく、正確な時期決定には不十分であるが、埋土の状況を考えあわせると、近世から近代にかけての溝と判断できる。

小溝3（Fig.70・72, PL.72・73）

調査区東半部分の西寄りに位置する。大溝1の上部、西肩部分に位置する。溝底の標高は、調査区南壁土層で16.93m、BB'ライン上で16.82mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。遺物は出土しておらず、遺構の重複、埋土の状況から、大溝1埋没以後すなわち古墳時代以降で近世以前と考えられる。

小溝4（Fig.70・72, PL.72・73）

調査区東半部分の西寄りに位置する。大溝2の上部、西肩部分に位置する。BB'ライン以南を中心に検出した。検出長約14.5m、溝底の標高は、調査区南壁部分で17.05m、BB'ライン上で16.78mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。この溝は本来、北方向に伸展していたと考えられるが、撹乱によって遺構の検出は不可能であった。遺物は出土しておらず、遺構の重複、埋土の状況から、大溝2埋没以後すなわち古代以降で近世以前と考えられる。

小溝5（Fig.70・79・81, PL.72・73）

調査区西半部分に位置する。小溝7の上部に位置しており、小溝7が埋没した後に新規に敷設された溝と考えられる。検出範囲の大部分で2つの溝はほぼ完全に重複するが、調査区外へ向かっての流路の伸展方向が小溝7とは異なる。溝底の標高は、調査区北壁土層で16.97m、近世用水路の掘削によって削られている南端部分付近で16.90mを測り、北東から南西方向への流水が想定できる。調査区北壁付近で大溝1から枝分かれし、約3m西方向

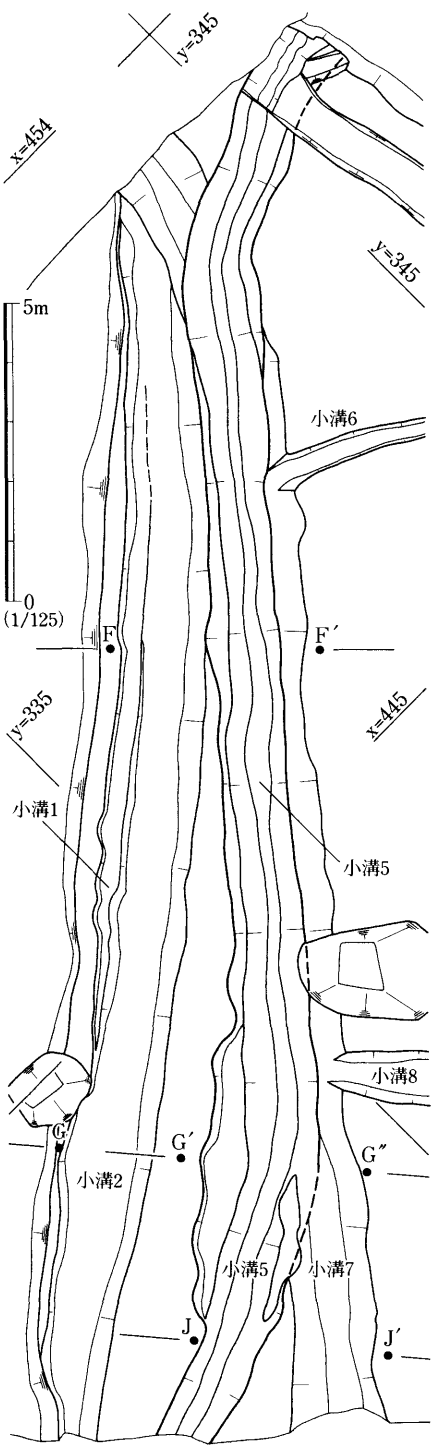


Fig.79　小溝５平面図

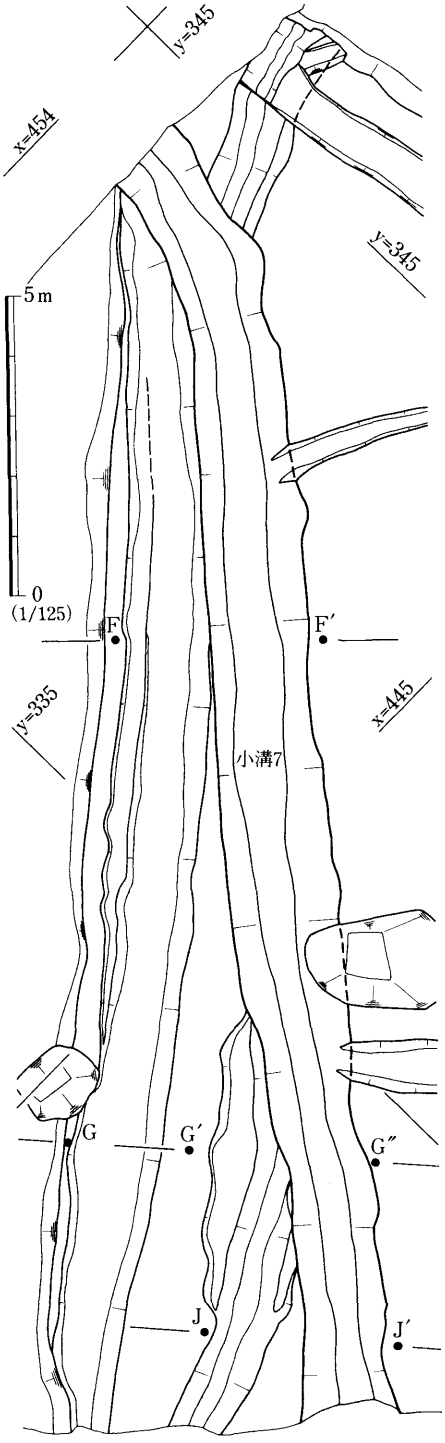


Fig.80　小溝７平面図

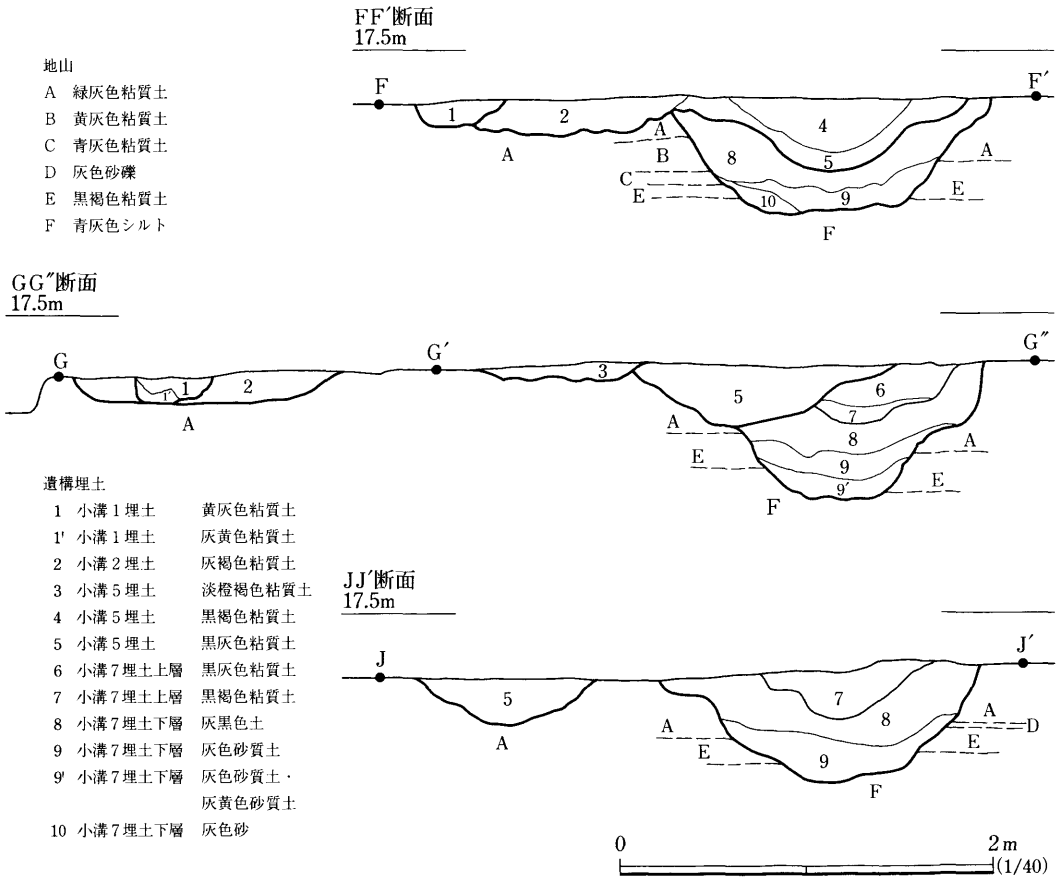


Fig.81　小溝5・7土層断面図

に伸展した後に、やや東よりに方向を変えて南流している。

出土遺物は少ないものの埋土の下半部分、特に溝底付近に集中し、上半部分ではほとんど出土しなかった。いずれも弥生土器の小片で、遺物からの時期判断は困難である。調査区北壁土層から大溝1上層下部とほぼ同時期であったことが判断できる。

小溝6（Fig.70・82, PL.72・73）

調査区中央部の北半に位置し、小溝5と東側の大溝1を連結する可能性がある。溝底の標高は、小溝5と分岐する部分で17.14m、大溝1との交差部分で17.08mを測ることから、小溝5から大溝2への流水が考えられる。遺物は出土していない。

小溝7（Fig.70・80・81, PL.72・73）

調査区西半部分に位置する。小溝5と重複し下位に位置する。溝底の標高は、調査区北壁付近で16.64m、近世用水路の掘削によって削られている南端部分で16.60mを測り、北東

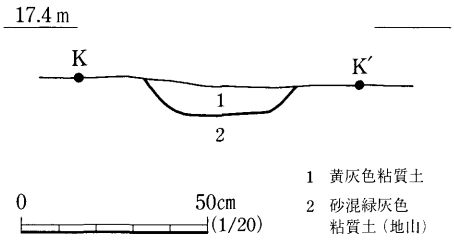


Fig.82　小溝６土層断面図

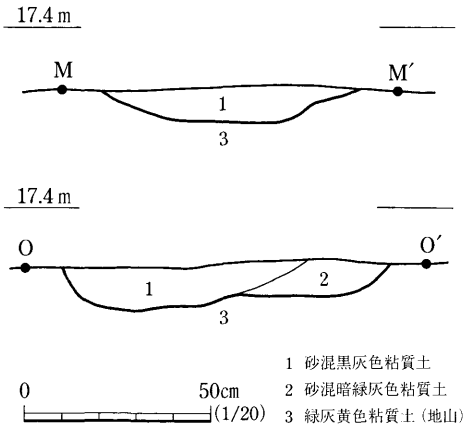


Fig.83　小溝８土層断面図

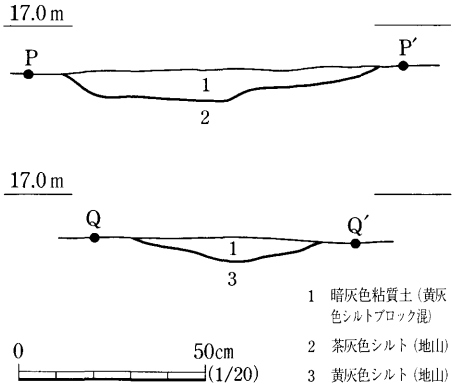


Fig.84　小溝９土層断面図

から南西方向への流水が想定できる。この溝は、調査区北壁付近でほぼ真南に約3m伸展した後に、やや西向きに曲折しそのまま南西方向に延びている。埋土は大きく上層と下層に分けることができる。下層の方が色調が淡くやや灰色が強くなるが、土質に大きな差はみられないため、溝の掘り直しは想定していない。

出土遺物は少ないものの埋土の下半部分、特に溝底付近に集中し、上半部分ではほとんど出土しなかった。いずれも弥生土器の小片であり、遺物からの時期判断は困難である。小溝５・大溝１に先行する遺構であるが、埋土の色調・土質から考えて大ききな時間差は考えにくい。

小溝８（Fig.70・83, PL.72・73）

調査区中央部の南半に位置し、小溝７から分岐し、東に延びる。南東側は削平により遺構が消滅している。溝底の標高は、小溝７から分岐するあたりで17.16m、大溝の側で17.12mを測り、小溝７の側から東の方向への流水が考えられる。遺物は出土していない。

小溝９（Fig.70・84, PL.72・73）

調査区の北西部分に位置し、北半部分はやや蛇行する。溝底の標高は、調査区北壁付近で16.70m、近世用水路の掘削によって切られれている南端部分付近で16.74mを測り、南から北への流水を想定できる。近・現代の水田耕作によって、上部はかなり削平されており残存状態は悪いが、溝底面の標高は小溝５と同程度である。少量の弥生土器が出土するが小片ばかりである。

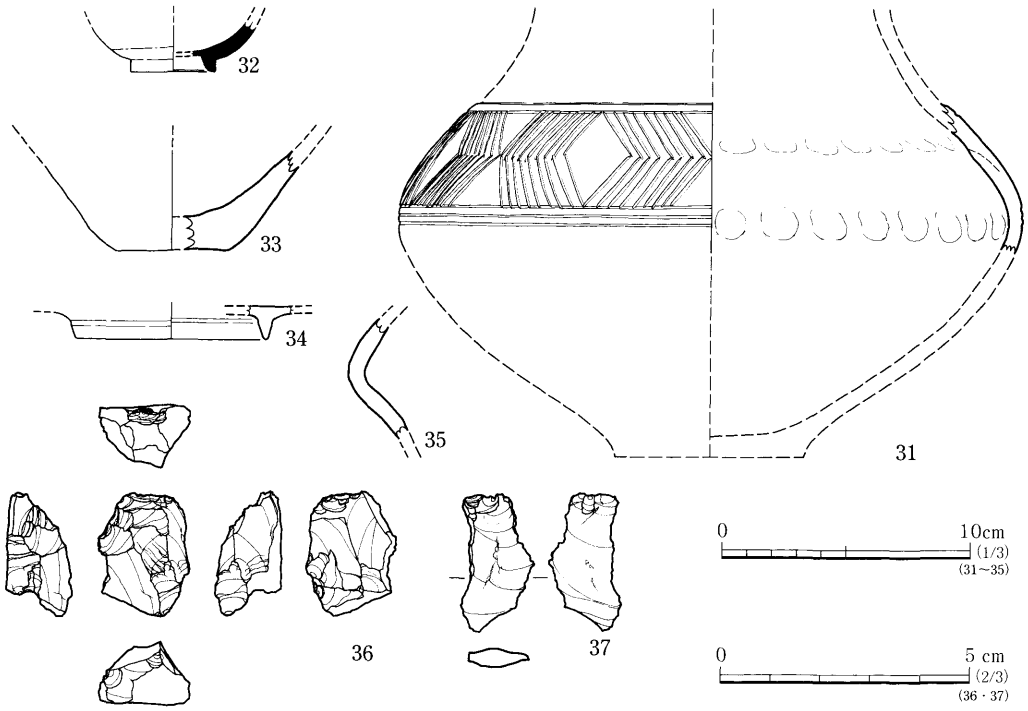


Fig.85　小溝等出土遺物実測図

小溝出土遺物（Fig.85, PL.80）

31は小溝７出土の前期弥生土器の胴部上半の破片である。肩部に段を持ち、この直下と胴部最大径の位置に沈線による区画を行い文様帯とし、ヘラ描沈線による無軸羽状文を施す。内面には上下2列の指頭痕と意図して施したのではないがヘラ状工具による幅2～3mmの沈線が2条認められる。山口盆地内では、小路遺跡第12号溝に次ぐ古手の様相を持つ前期弥生土器である。32は小溝１出土の陶器碗である。高台内のケズリは深く底部は薄い。藁灰釉を施し、見込みには貫入がみられる。底部露胎。33は小溝５出土の甕底部である。内外面ともに風化が激しい。34は小溝９出土の土師質土器の高台である。35は小溝９出土の弥生土器である。壺の口縁部と考えられるが内外面ともに風化が激しい。36は小溝５出土の楔形石器である。残核を素材とする。左側縁から表への3枚の剥離面が石核としての最終作業面で、左側縁上半部がこの打面である。上下縁辺には使用による潰れが顕著であるが、剥離調整は行っていない。37は縦長の剥片である。磨滅と風化が激しい。左右の側縁に自然面を残しており、薄い板状の原礫を石核とした剥片か、または目的剥片剥離の早い段階で生成した剥片であることがわかる。

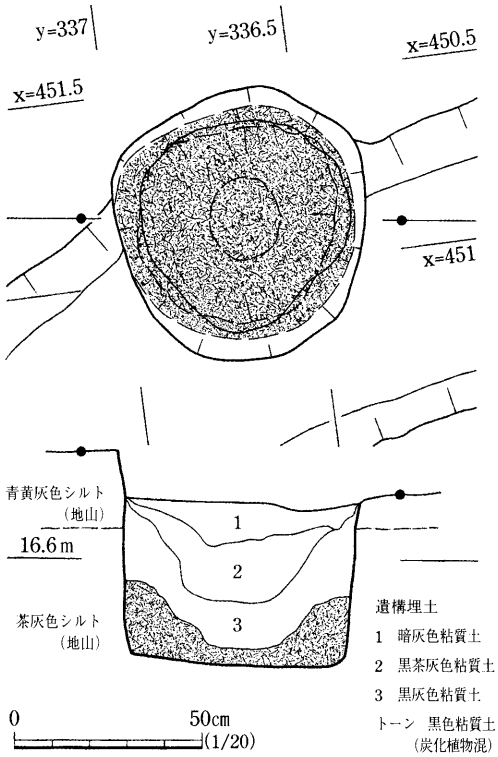


Fig.86　貯蔵穴実測図

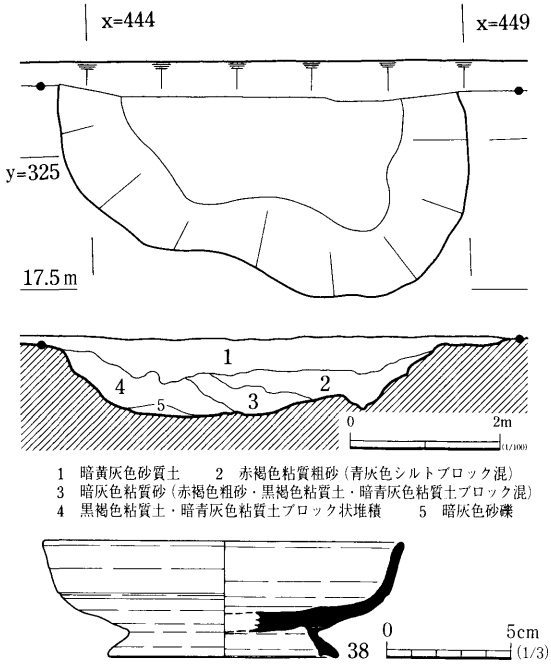


Fig.87　大土坑及び出土土器実測図

(3) その他の遺構

貯蔵穴 (Fig.86, PL.74)

小溝９と重複しており調査区北壁から約2mの位置で検出した。小溝９との前後関係は確認できなかった。長径73cm、短径66cmと平面正円に近く、現存で55cmの深さを測る。底が平坦なビーカー状の穴である。穴底には、炭化した植物が層を成して堆積していた。堆積状況は穴の中心部では薄く5cm程度、外縁部では厚く18.5cm程度となる。このため炭化物上面は中心部がくぼむ擂り鉢状を呈する。出土遺物はなく遺構の正確な時期は不明であるが、状況から判断して縄文時代の貯蔵穴の可能性が考えられる。

大土坑 (Fig.87, PL.75(1)・81(1))

近世用水路のすぐ北側で、調査区西壁に接して約半分を検出した。南北5.5m、東西約4.8mの平面楕円形と推定できる。現存で約1.0mの深さを測る。近世用水路と同時に埋められており、用水溜池のような機能が想定できる。調査範囲内には、近世用水路との間に堰などの施設は検出できなかった。遺構に伴うものではないが、遺構南東部の底面から、須恵器坏が出土している。胎土は精良で、体部は緩く屈曲し、屈曲部外面に沈線を施す。ハの字形に張り出した背の高い高台を持つ。丁寧な作りである。7世紀末の年代があてられよう。

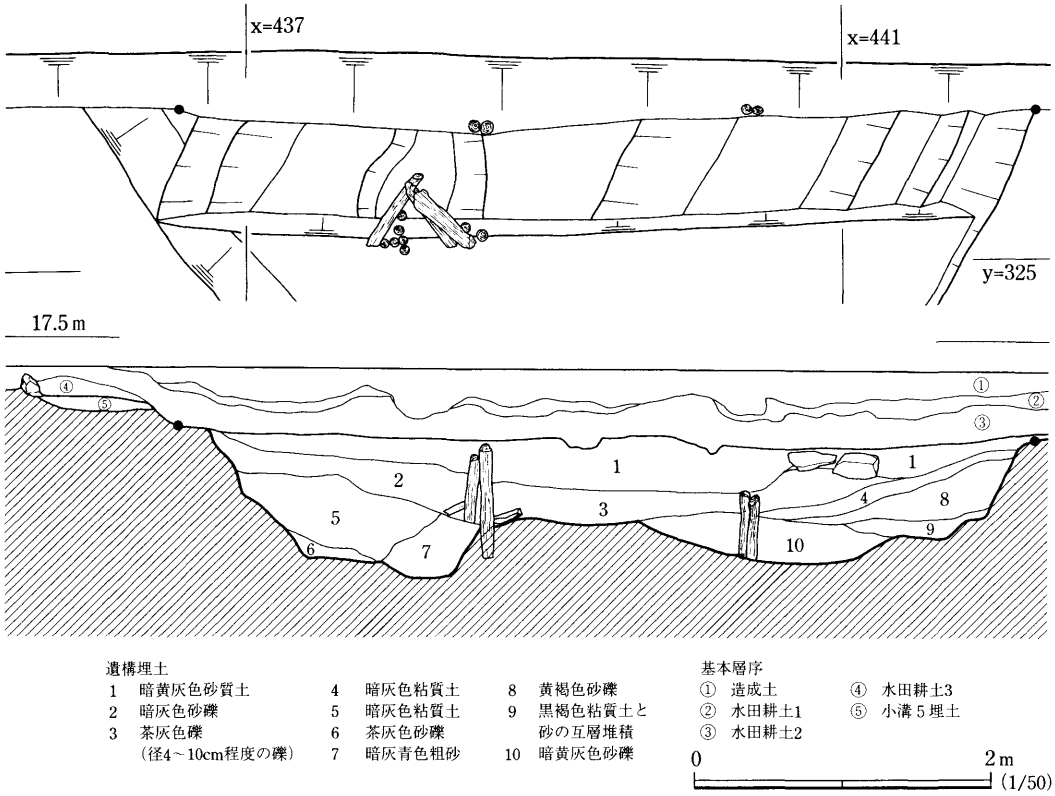


Fig.88　近世用水路実測図

近世用水路（Fig.88, PL.75(2)）

調査区の南西隅部分に位置する北西－南東方向の溝である。幅約2.5～4m、検出面からの深さ約1.1mを測る大規模なもので、調査区内で長さ約11.5mを検出した。断面形は逆台形を呈し木杭の設置がみられる。多量の近世陶磁器が出土したことから近世用水路とした。調査当初、本学統合移転直前まで機能していた溝と考えていたため、調査区西壁際を部分的に調査するにとどめた。出土遺物は18世紀後半から19世紀末を中心とする。

調査区西壁で土層断面を観察すると、用水路南肩の上部が、統合移転直前の水田区画の段差によって削平されていることが明瞭に観察できる。また、埋土4層以後と5層以前の堆積は不整合面を形成しており、改修が行われていることがわかる。検出した木杭は、打ち込まれている深さから、改修と同時あるいは以後に設置されたと考えられる。これらの木杭の南東側には、用水路に取り付くと考えられる小溝2があることから、取水口を伴う堰が設置された可能性を想定できる。潅漑用水路の幹線として機能していた可能性が高い。報告する遺物は2～4層で出土した。

近世用水路出土土器・粗陶器（Fig.89～91, PL.81(2)・82(1)・92(1)）

39は瓦質土器足鍋の脚部である。握り締め後ナデ。胎土は砂粒（石英・長石）を含み、外面・断面とも2.5Y8/3（淡黄色）、ただし風化のため表面が失われ、元の色調をとどめない。40は甕の口縁部。粗製であるが堅牢で須恵質に近い。口径40cm以上。内外面ナナメハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ。砂粒（石英・長石）を含み、5Y～7.5Y6/1（灰色）。

41・42は土師質陶器の甕である。41は復元口径29.0cm、外面横方向ケズリ、内面ヨコハケ・ナナメハケ後ヨコミガキ、口縁部ヨコナデ。胎土は砂粒（石英・長石）をわずかに含

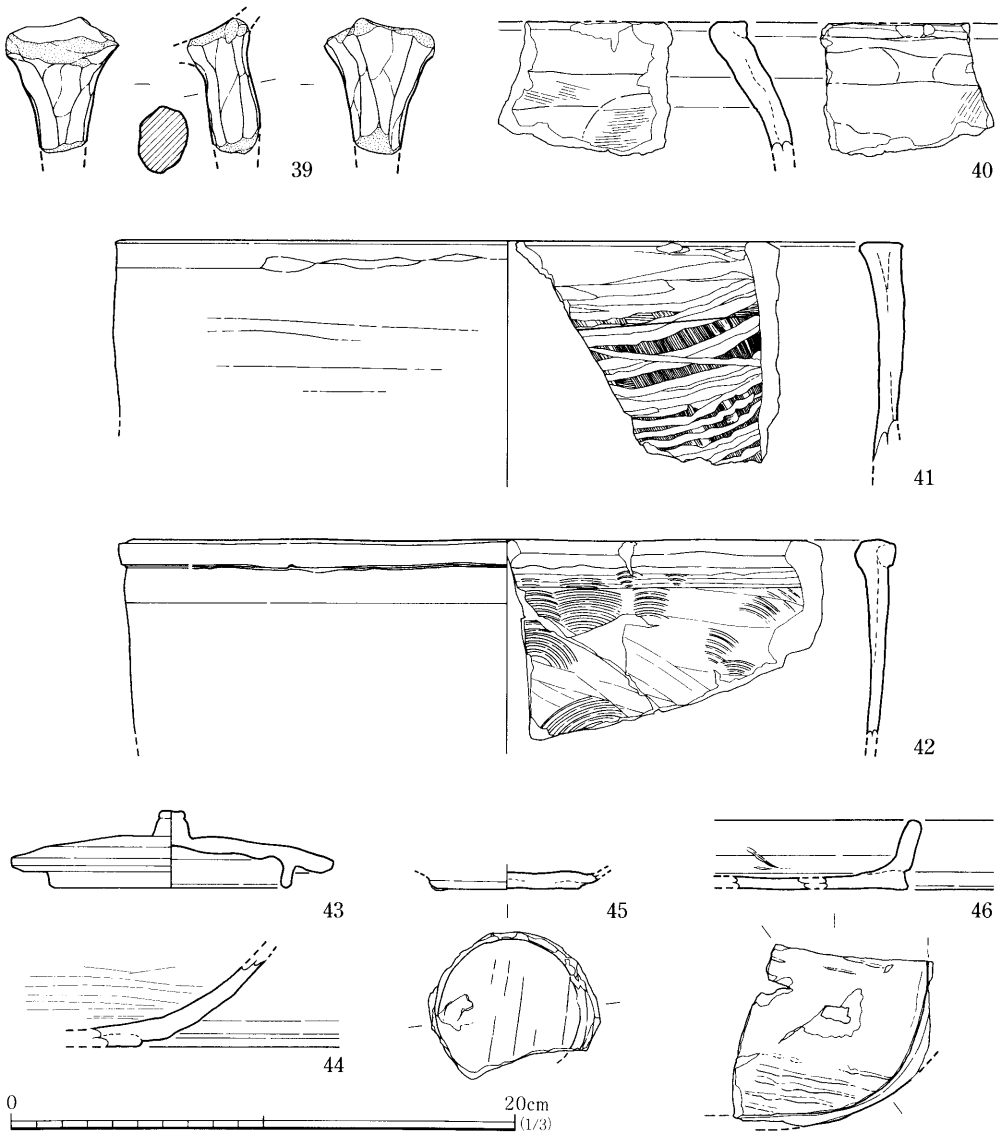


Fig.89　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（1）

み、7.5YR8/4（浅黄橙色）を呈する。42は復元口径29.7cm、体部は叩き締め後ナデ、内面に同心円状の当て具痕を残す。口縁部ヨコナデ。色調は外面・断面10YR8/4（浅黄橙色）、内面10YR6/4（にぶい橙色）である。41・42ともに19世紀、在地産。

43は土師質土器の蓋である。内面中央に型押し時の指痕を放射状に残したまま口縁部を貼り付け、円に沿ってナデを施す。円はやや不整である。在地産。44は土師質土器の底部小片。外面ヨコナデ、内面ヨコミガキ、外底面未調整。胎土は微砂粒（石英・長石）を少量含み、外面10YR6/4、内面・断面10YR7/3（にぶい黄橙色）。45は土師皿の底部。外底面回転ヘラ起こし、板目を残す。内底面ヨコナデ後一方向ナデ。胎土は微砂粒（長石）を少量含み、色調10YR7/4（にぶい黄橙色）。46は土師質陶器の盤で、平面形は長円形または隅丸方形と考えられる。体部は、底部と接合後ヨコナデ、ただし接合部付近は未調整。内底面不定方向ナデ、外底面は未調整で板目を残す。胎土は少量の砂粒（石英・長石）を含み、色調7.5YR7/4（にぶい橙色）。粗製ではあるが焼成良好、硬質な仕上りをみる。

47～52は土師質あるいは瓦質の大型粗陶器で、いずれも在地産である。47は埋設して使用する大型甕の口縁部で、口径70cm以上に復元できる。口縁端部から外面にかけてヨコナデ、外面に沈線を1条施す。内面に同心円状の当て具痕とナナメハケを残す。胎土は

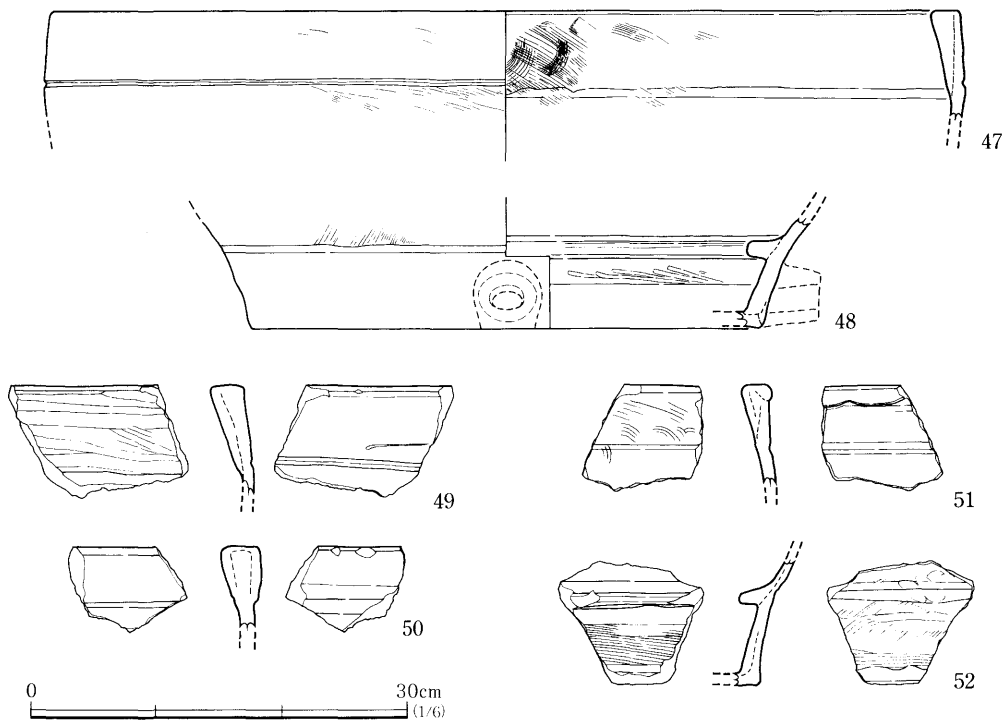


Fig.90　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（2）

7.5YR7/3（にぶい橙色）で、砂粒（石英・長石）を含む。48は風呂甕の底部である。復元底径41cm、内面に踏板を受けるための突起を貼り付ける。外面上部ナナメハケ、外面下部と内面ヨコナデ、外底面未調整。胎土は粗砂粒（石英・長石）を含み、色調は外面7.5YR6/4（にぶい橙色）、断面・内面10YR8/4（浅黄橙色）。図上で排水口を推定復元した。

49～51は口縁部小片、径は算出できない。49は土師質で、微砂粒（石英・長石）を含む胎土。内外面ヨコナデ、外面に凹線1条。色調10YR8/3（淡黄色）、外面は一部赤変し2.5Y6/4（にぶい橙色）となる。50は瓦質、通称「黒焼き」である。胎土は微砂粒（石英・長石）を含む。内外面ともヨコナデ、外面に凹線1条。51は土師質で、粗砂粒（石英・長石）を含む。叩き締めた後外面ヨコナデ、内面ナナメハケとナデ。口縁の折り曲げ方は不整で粘土がはみ出す。外面にくびれ状の凹線1条。52は土師質、風呂甕の底部小片である。48と同様、内面に突起をもつ。胎土は粗砂粒（石英・長石）を含む。外面ヨコナデ、煤が付着する。外底面は未調整。内面ナナメハケ後、突起を貼り付けヨコナデ。色調は外面5YR

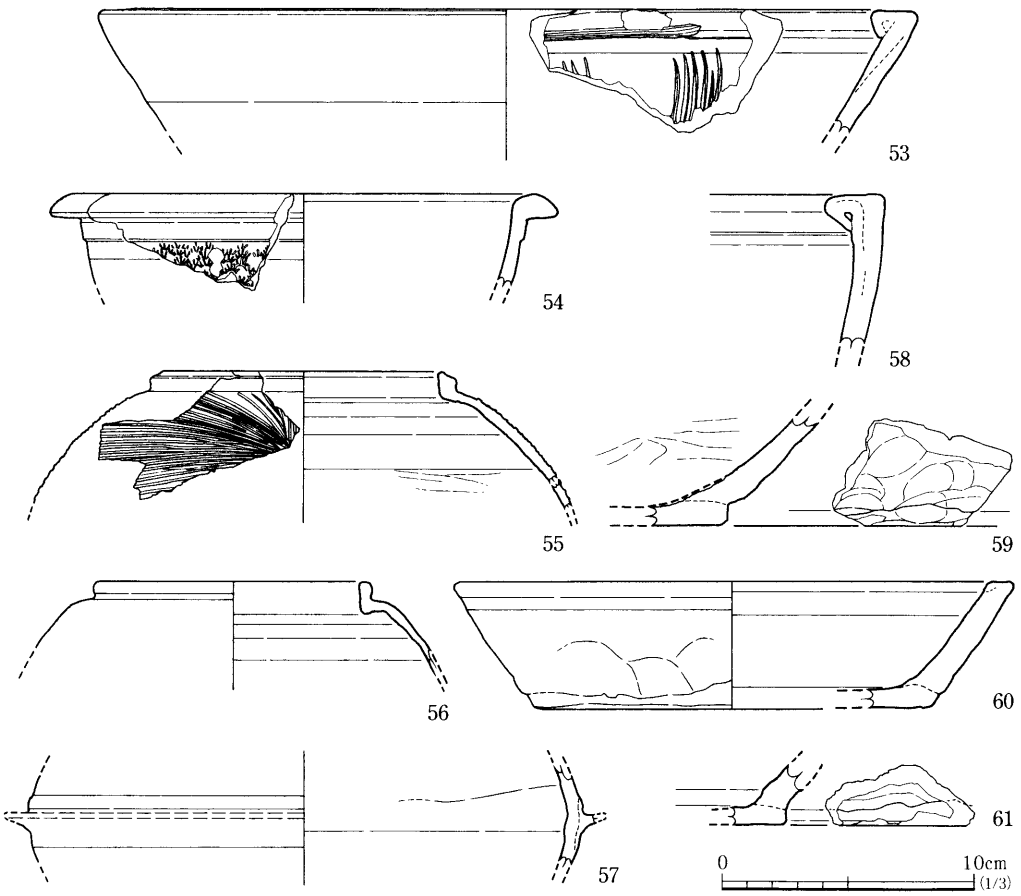


Fig.91　近世用水路出土土器・粗陶器実測図（3）

～7.5YR6/4（にぶい橙色）、断面・内面10YR7/4（にぶい橙色）を呈する。

53は瓦質土器の擂鉢である。復元口径29.5cm。外面ヨコナデ後不定方向ナデ、指痕を残す。内面ヨコハケ後、6条単位の擂目を刻む。口縁部は折り曲げて断面逆三角形におさめ、ヨコナデを施す。一部強いヨコナデ。外面・断面2.5Y6/1（黄灰色）、内面2.5Y2/1（黒褐色）、微砂粒（石英・長石）を含む。54は瓦質土器。型押しで外面に模様を浮き出させる。内外面N3/0（暗灰色）、断面2.5Y8/3（淡黄色）を呈し、胎土には砂粒を含まない。植木鉢か。

55は瓦質土器、土瓶もしくは釜と推定し復元した。短く立ち上がる口縁をもち、復元口径は11.1cm。外面型押しにより放射状の模様を浮き出させる。内面はやや雑なヨコナデ。口縁部ヨコナデ。胎土は微砂粒（石英・長石）をわずかに含み、外面5Y2/1（黒色）、内面5Y5/1（灰色）、断面2.5Y6/3（にぶい黄色）。在地産。56は55と似た器形で、土師質。復元口径10.3cmで土瓶と考えられるが、器壁が薄い。胎土は微砂粒（石英・長石）を少量含み、外面・断面10YR8/3（浅黄橙色）、内面7.5YR7/4（にぶい橙色）、口縁部立ち上がり付近7.5YR7/4（にぶい橙色）を呈する。在地産。57は土師質の羽釜で、最大内径20.8cmに復元できる。胎土は精緻な粘土で、わずかに砂粒（石英・長石）を含む。外面は鍔を貼り付けた後ヨコナデ、下半はナデで煤N2/0（黒色）が付着する。内面ヨコナデ、色調は7.5YR6/4（にぶい橙）、断面も同色である。

58は瓦質土器。小片のため口径復元不能。胎土は砂粒（石英・長石）を含み、色調2.5Y7/2（灰黄色）～8/2（灰白色）。甕か。59・61は瓦質土器の底部小片。ともに風化しており表面の残りはよくないが、体部内外面ナデ、外底面未調整である。59は外面・断面2.5Y8/2（灰白色）、内面7.5Y5/6（明褐色）、61は外面・内面5Y5/1（灰色）、断面10YR7/4（にぶい黄橙色）。60は瓦質土器の焙烙である。器高5.0cm、復元口径20.6cm。胎土は砂粒（石英・長石）・小礫（石英）を含み、色調2.5Y8/2（灰白色）を呈する。外底面に煤2.5Y3/1（黒褐色）が付着。在地産。

近世用水路出土陶磁器（Fig.92～94, PL.92(2)～94）

62～80・82は陶器である。62は高台を欠く1/5片。2.5Y8/3（淡黄色）の素地に藁灰釉2.5Y8/1～2（灰白色）を施す萩焼の皿である。内面に目跡を1ヶ所残す。19世紀。

63～65は萩焼である。いずれも浅い天目碗風の器形で、復元口径11.4～7cmと法量が近似している。63は2.5YR8/3（淡黄色）の素地に藁灰釉2.5Y8/1（灰白色）を施す。外面下半の露胎部分は5YR6/6（橙色）。復元高台径4.0cm、高台内を深く削り、底が薄い。64は素地10YR8/4（浅黄橙色）、藁灰釉10Y8/1（灰白色）、外面下半の露胎部分は7.5YR7/6（橙色）で

ある。65は素地5Y8/2（灰白色）に鉄釉7.5YR4/4（褐色）～2/1（黒色）を施す。いずれも19世紀。66は底部で、上半を欠くため全体のフォルムは不明である。素地5Y7/2（灰白色）～6/2（灰オリーブ色）、内底面に凹線を1条巡らせ、灰釉5Y8/2（灰白色）をごく薄く施す。高台は露胎である。

67は、接合点を持たない2片を図上で復元し、端反小碗とした。薄手で焼成良好、口縁部は磁器に近い質感を呈する。素地2.5Y8/3（淡黄色）、口縁部断面5Y6/1（灰色）、藁灰釉5Y6/2（灰白色）。萩焼、19世紀。68は碗の底部。復元高台径4.1cm、素地2.5Y8/3（淡黄色）に藁灰釉10Y8/1（灰白色）を施す。外面露胎部分は5YR5/4（にぶい赤褐色）～7.5YR7/4（にぶい橙色）。萩焼、19世紀。69は碗で、上半を欠く。高台径3.8cmを測り、10YR7/3（にぶい黄橙色）の素地に藁灰釉10YR8/1（灰白色）を施す。内面はロクロ目に沿って細い横縞をなす。萩焼、19世紀。70は碗の底部。高台径3.0cmとやや小ぶりである。素地2.5Y8/2～7/1（灰白色）、藁灰釉5Y8/1～8/2（灰白色）。萩焼か。19世紀。71は碗の底部小片である。復元高台径3.3cm。素地2.5Y8/2（灰白色）～8/3（淡黄色）に鉄2.5Y4/1（黄灰色）で絵付後、

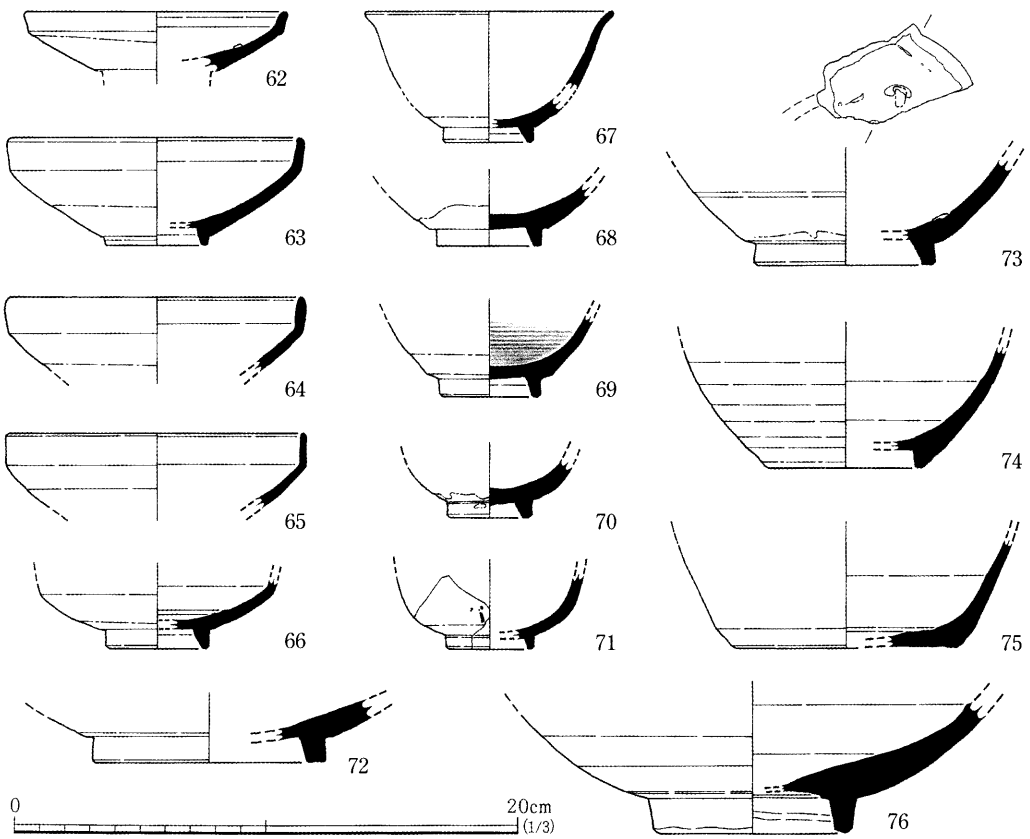


Fig.92　近世用水路出土陶磁器実測図（1）

灰釉を施し、内外面とも5Y8/1（灰白色）となる。

72は皿または鉢の底部小片で、復元高台径9.1cm。素地5Y7/2（灰白色）～2.5Y7/3（浅黄色）に、藁灰釉2.5Y8/3（淡黄色）を施す。73は鉢の体部～底部である。復元高台径7.0cm。素地10YR8/3（浅黄橙色）に透明釉を施し、施釉部分は外面・内面とも10YR5/4（にぶい黄褐色）を呈する。内面に目跡を1ヶ所認める。

74は瓶である。碁笥底で、復元底径6.1cm。素地10YR7/3（にぶい黄褐色）、外面に灰釉2.5Y5/1（黄灰色）～7/2（灰黄色）を施し、畳付を釉剥ぎする。内面は無釉。

75は底部。復元底径8.8cm、徳利か。素地N7/0（灰白色）～2.5Y8/4（淡黄色）、外面に鉄釉5YR4/1（褐灰色）を施し、内面は無釉7.5YR5/2（灰褐色）。76は鉢の体部～底部で、復元高台径7.4cm。色調は内外面とも7.5YR5/3（にぶい褐色）、断面10Y6/1（灰色）。焼締。

77・78は擂鉢である。77は口縁部で、復元口径32.4cm。素地2.5YR5/1（黄灰色）、鉄釉10YR4/1（褐灰色）～3/1（黒褐色）を施す。肥前系。78は体部～底部で、高台径9.7cmを測る。高台に重ね焼き痕が残り、内底面に砂が付着する。素地は断面アンコ状を呈し、表面

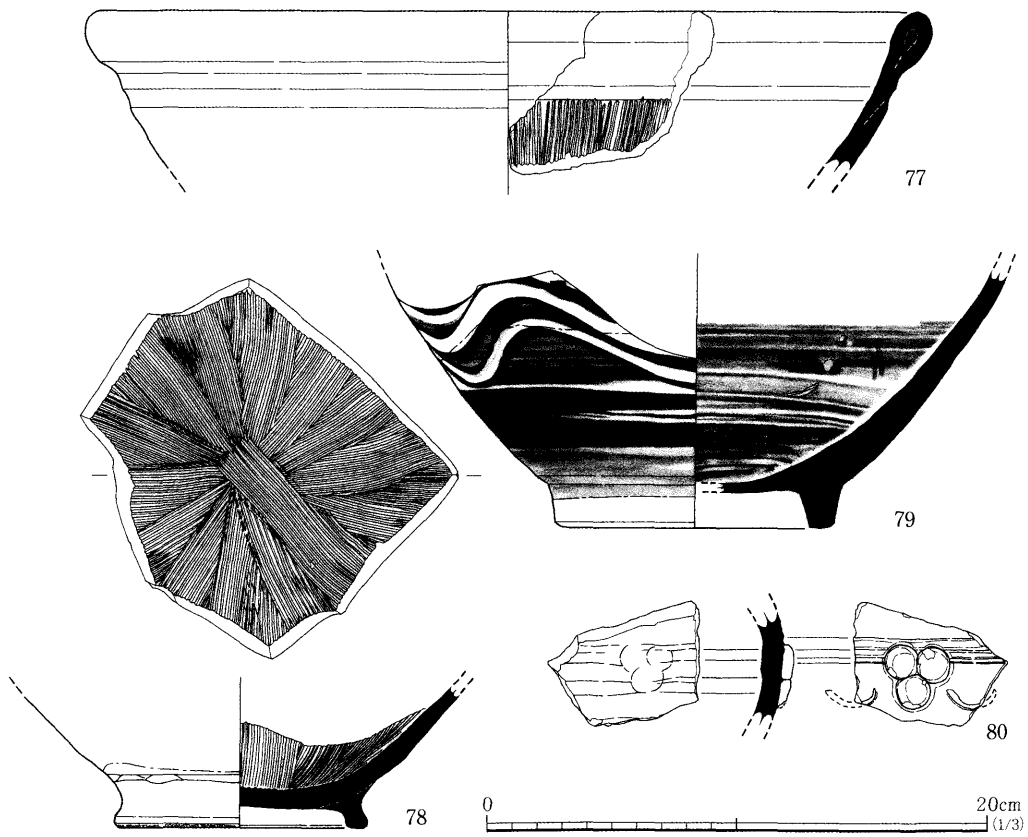


Fig.93　近世用水路出土陶磁器実測図（2）

付近は5Y4/1（灰色）、中心部は2.5Y6/1（黄灰色）。内面に鉄釉7.5YR5/2（灰褐色）を施す。釉は外面下方にも薄く及び10YR5/2（灰黄褐色）を呈する。萩焼。

79は肥前系の鉢。復元高台径10.0cm、分厚く堅牢である。いわゆる「刷毛目唐津」で、素地5YR6/4（にぶい橙色）に、白泥5Y8/1（灰白色）と鉄7.5YR5/3（にぶい褐色）～7.5YR4/1（褐灰色）の二彩を施して後、透明釉をかける。内面の布目状の痕跡は施釉前のものである。80は体部小片、壺か。凹線を3条巡らせ、貼付文とヘラ描きを施す。素地10YR8/4（浅黄橙色）～7/4（にぶい黄橙色）で、内外面とも飴釉7.5YR3/4（暗褐色）。

81・83～88・90は磁器。81は肥前産染付皿である。内面に草花文と五弁花をあしらい、高台内に渦福銘を置く。18世紀。82は肥前系陶胎染付碗で、磁胎に近い。素地5Y7/1（灰白色）。83は白磁紅皿である。素地・釉とも白色、内面と外面上半に施釉。肥前系。

84は染付碗の底部である。全面施釉。畳付は釉剥ぎし、砂が付着する。肥前系か。85は色絵。瓶の底部で、外面のみ施釉、畳付を釉剥ぎする。高台外面に圏線2.5YR4/6（赤褐色）1本。内底面に釉が飛散する。肥前系か。86～88は小片で、いずれも染付碗である。88は人工コバルトを用いており、近代以降の製品と考えられる。

89は陶胎の皿である。素地2.5Y8/3（淡黄色）に内外面とも白色不透明の釉を施す。内底

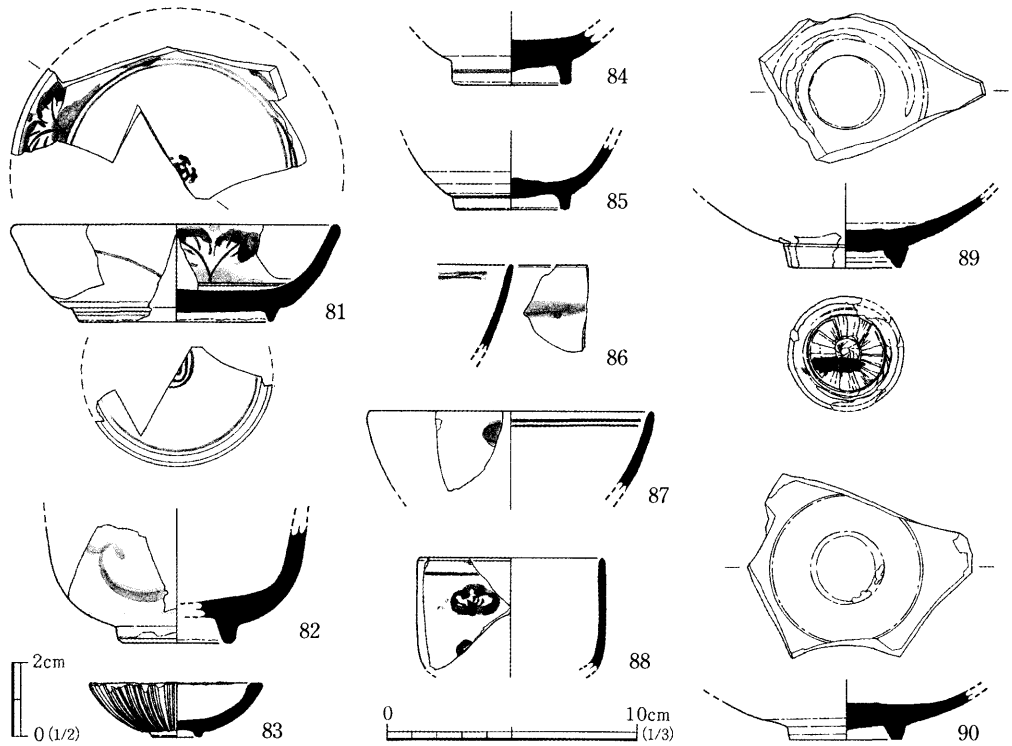


Fig.94　近世用水路出土陶磁器実測図（3）

面は蛇の目状に釉剥ぎし、重ね焼き時の癒着痕を残す。口縁部近くの器壁の薄い部位は硬質で磁胎に近く、白色となる。高台は露胎で、高台内に墨書があり「一」と判読できる。肥前系。90は89と同様の皿であるが、磁胎。素地・釉ともに白色で、内底面に砂が付着する。肥前系。

石製品・木製品（Fig.95，PL.82）

91・92は砥石である。91は硬質の石材で、表と右側部の2面の使用面は比較的平面性が高い。表には左右方向の線状の使用痕と敲打痕がみられる。破損後に敲石として利用されたと考えられる。中型の中粒砥石である。92は軟質細粒の石質で仕上砥と考えられる。表と裏が本来の使用面であったはずであるが、完全に剥落している。剥離面はリングが明瞭で打点を特定できるものもあり、意図的な剥離を行った可能性もあるが、判断は困難である。下側と右側は平坦に整形される。特に下側の面には斜方向の擦痕が見られ、切断時の鋸刃の痕と考えられる。

93は連歯の子供用の下駄である。木心より右側を使っての木取りである。歯は右側のすり減りが大きく、鼻緒の孔の左側がやや広くくぼむのは、親指の接触による摩耗のためと考えられることから右足用であった可能性を想定できる。

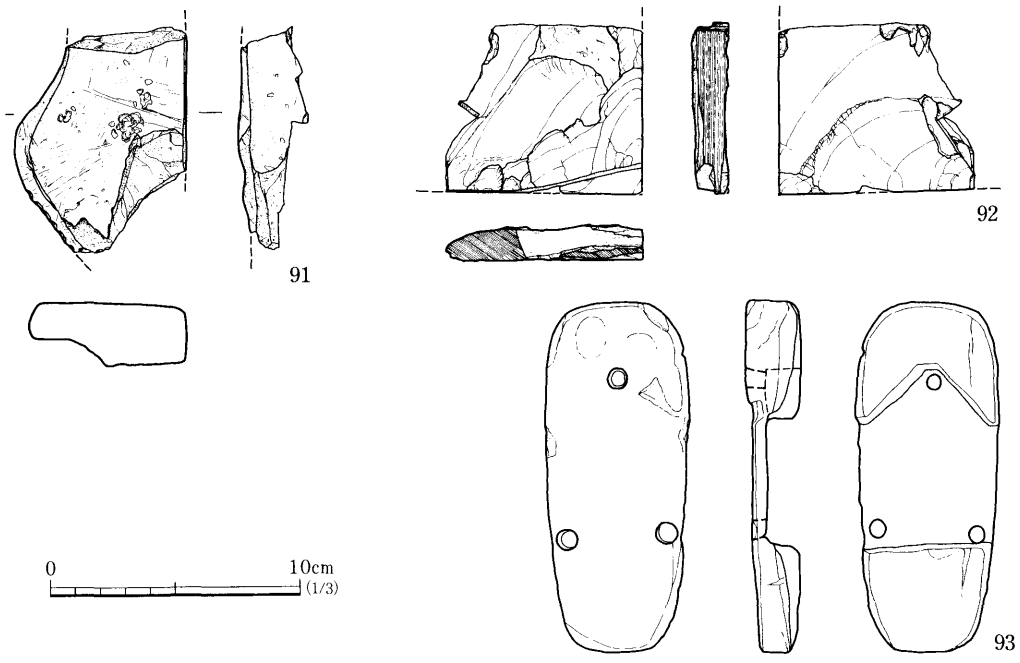


Fig.95　近世用水路出土石製品・木製品実測図

小結

今回の調査では主に水利用に関連する遺構群を検出した。時期的には大きく三つに区分できる。一つは大溝１の機能時期を中心とした弥生時代後期までの時期、二つめは大溝２の機能時期を中心とする弥生時代後期から古代にかけての時期、三つめは近世用水路の機能時期を中心とした主に18世紀以降から近代にかけての時期である。

大溝１は大溝２に、小溝７は小溝５にいずれも流路方向を同じくしてほぼ同一位置に改修されている。これらの溝は埋土の状況から、大溝１上層上部は小溝５と、大溝１上層下部は小溝７と一対で使用されたことも考えられる。水利施設の幹線と支線としての役割を果たしていた可能性もあり興味深い。大溝１の掘削時期は出土遺物が散漫なため確定はできないが、下層の粗粒砂礫堆積から突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期以来の河川を基に掘削した可能性がある。また、小溝７から古い様相を持つ前期弥生土器が出土していることから考えて、大溝１の掘削時期はあるいは弥生時代前期まで遡る可能性も考えられる。大溝１から大溝２への付け替えでは流路の重複が見られないことから、時間的な隔絶を想定する必要がある。大溝２は西肩部に３段掘りがなされていること、杭根や杭痕列などの遺構がみられることから、大溝１より人工的要素が強く基本設計の違いを見いだせる。吉田遺跡の南西約1kmに位置する小路遺跡の発掘調査では、古代の大溝が検出されており周辺地域の大規模な開墾の表徴として位置付けられる可能性が指摘されている[1)]。小路遺跡の大溝の時期は、今回調査の大溝１・大溝２の機能時期とはやや異なっている。しかし特に大溝２は流路方向が山口盆地で想定されている条里地割[2)]の主軸方向と概ね一致することから、大溝の存続時期の下限及び遺構の性格を考える上で、小路遺跡の大溝の位置付けは参考となる。

大溝３は大溝２に取り付く溝としているが、下層土坑状遺構から弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土していることから、大溝１との関連を考慮しておくことも必要である。

近世用水路は出土遺物から考えて、概ね18世紀以降に機能していたことが考えられる。吉田遺跡では関連する時期の遺構として、本部裏給水管埋設に伴う発掘調査[3)]で検出した近世大溝が挙げられる。この溝の掘削とともに行われたと考えられる現在の大学本部付近の開墾の契機を、本部２号館で検出された、肥前系の染付磁器碗を出土した第１号溝をめぐらせた屋敷跡と関連づけている。今回の調査で見つかった近世用水路は、本部裏の近世大溝と掘削の時期や目的が同様であった可能性が考えられる。本部裏の近世大溝は丘陵から低地へのなだらかな傾斜に交差するように流路方向を持つ。近世用水路も流路方向は、土

地の傾斜に交差している。また大溝１や大溝２とは流路方向を違えていることも興味深い。本部裏給水管の近世大溝は、本学統合移転直前まで開口していた可能性が指摘されているが、今回検出した近世用水路は明治時代以降に埋め立てられており、その後に整備された水田が本学統合移転直前まで耕作されることになる。吉田遺跡のこれまでの調査成果を考えると、この地の大規模な開墾の開始は古代・中世まで遡ろうが、17世紀後半から18世紀初頭にかけての時期に水利施設の付け替えを伴うようなさらに大規模な耕地の再編がなされた可能性は考えられることで、今後の調査により明らかにすべき問題である。

注目される遺物として、小溝７で出土した前期弥生土器が挙げられる。この土器を特徴付ける肩部の段と沈線による無軸の羽状文は県内でも最古の要素であり、吉田遺跡の弥生集落の初現を考える上で重要である。また大土坑から出土した須恵器は、丁寧な作りでその出自が気になるほか、時期的にも非常に興味深い遺物である。従来の山口県の編年観からすると７世紀中頃の年代があてられる[4]。ところが近年の研究では、実年代を繰り下げる年代観が提示され評価は定まっていない[5]。今回出土の須恵器は、遺構に伴い出土したものではないため、土器編年への直接の関連は持ち得ない。しかし、当該期の遺物はこれまでにも断片的にではあるが見つかっており、吉田遺跡にもこの時期の遺構が埋存している可能性が高く、今後の調査において遺構からの良好な状態での出土が期待される。

［注］

1) 木村忠夫「大溝について」（『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）

2) 小野忠熙『山口県の考古学』吉川弘文館、1985年

3) 山口大学埋蔵文化財資料館「本部裏給水管埋設に伴う発掘調査」（『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報』XIII、1995年）

4) 桑原邦彦　池田善文「防長地域の須恵器窯跡と編年的研究」（『山口県の土師器・須恵器』、周陽考古学研究所、1981年）のⅤ～Ⅵ期、大津郡日置町峠山２号窯跡灰原出土資料に対比できる。また、中村　浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』（柏書房、1981年）のⅢ型式２段階に該当。

5) 大林達夫「周防国府成立期の土器の年代観・序章」（『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、1999年）

Tab.7　出土遺物観察表（土器）

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	大溝3	中・下層	縄文土器　深鉢	口縁部				にぶい黄橙色	1～5㎜の長石・石英を含む	外面ナデ 後期
2	大溝2 3区	下　層	縄文土器	口縁部				①にぶい黄橙色 ②灰色	1～3㎜の長石・石英を多く含む	口唇部に1条の沈線 外面ナデ　内面ナデ　後期
3	大溝1 3区	下　層	縄文土器	口縁部				褐灰色	1㎜前後の長石・石英を含む	外面に2条の凹線 外面ナデ　内面ナデ　後期
4	大溝1 3区	下　層	縄文土器	口縁部				①にぶい黄橙色 ②褐灰色	1～3㎜の長石・石英を含む	外面に4条の凹線 外面ナデ　内面ナデ　後期
5	大溝1 2区	下　層	縄文土器　深鉢	口縁部				①灰白色 ②黒褐色	1～3㎜の長石・石英を含む	巻貝による刻み　外面ナデ 内面横方向貝殻条痕　晩期
6	大溝1 3区	下　層	縄文土器	胴部				①にぶい黄橙色 ②灰白色	1㎜前後の長石・石英を含む	外面横方向貝殻条痕 内面ナデ
7	大溝1 2区	下　層	縄文土器　深鉢	口縁部				①灰黄色 ②黒褐色	1～3㎜の長石・石英を含む	貼付突帯を貝殻で刻む 外面ナデ 内面貝殻条痕 晩期
8	大溝1 1区	下　層	縄文土器　深鉢	口縁部				①淡黄色 ②黒褐色	1～3㎜の長石・石英を含む	貼付突帯 内面ナデ　晩期
9	大溝1 0区	上　層	弥生土器　甕	口縁部 ～底部		(2.5)		淡褐色	1㎜前後の砂粒を含む	ミニチュア土器 風化が激しい
10	大溝1 0区	上　層	弥生土器　高坏	口縁部	(32.0)			にぶい橙色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	後期後半 風化が激しい
11	大溝2 1区	上　層	弥生土器　高坏	脚部				浅黄橙色	1～7㎜の砂粒を多量に含む	後期後半 内面の風化が激しい
12	大溝2 0区	下　層	弥生土器　高坏	坏部				①淡黄橙色 ②黒褐色	1～3㎜の長石・石英を含む	
13	大溝2 1区	下　層	弥生土器　壺	底部		(4.2)		①赤色 ②明赤褐色	1～5㎜の砂粒を含む	風化が激しい
14	大溝1・2 2区	撹　乱	弥生土器　壺	口縁部				①灰黄色 ②暗褐色	精製粘土に1～2㎜の砂粒をわずかに含む	
15	大溝2 2区		弥生土器　甕	底部				にぶい黄褐色	1～3㎜の砂粒を含む	内面の風化が激しい
16	大溝2	上　層	弥生土器　甕	底部		(7.2)		①黄橙色 ②黒褐色	1～3㎜の長石・石英を含む	外面被熱 風化が激しい
17	大溝3下層 土坑状遺構	1　層	弥生土器　甕	口縁部				①にぶい黄褐色 ②浅黄橙色	1～3㎜の長石・石英を含む	ヘラガキの6条沈線 前期末～中期初頭
18	大溝3	中・下層	弥生土器　高坏	坏部	(34.2)			浅黄橙色	3㎜以下の砂粒を含む	後期後半
19	大溝3	中・下層	弥生土器　壺	口縁部 ～頸部	(14.2)			①黒褐色 ②オリーブ灰色	1～3㎜の砂粒を含む	後期前半
20	大溝3	中・下層	弥生土器　高坏	脚部		(14.9)		①浅黄色 ②浅黄色	1~3㎜の長石・石英と微量のチャートを含む	後期後半
21	大溝3下層 土坑状遺構	1・4層	弥生土器　甕	口縁部 底　部	(23.1)	7.3	(24.5)	①淡黄色 ②暗灰黄色	1~3㎜の長石・石英と微量のくさり礫を含む	前期末～中期初頭 モミ圧痕
31	小溝7	9　層	弥生土器　壺	肩部				①黒色(黒斑部分か)②灰褐色	1㎜前後の長石・石英を含む	前期前半 無軸羽状文　風化が激しい
32	小溝1		陶器　碗	体部 ～底部		(3.3)		素地　灰白色 釉①灰オリーブ色　②灰白色	精緻	藁灰釉
33	小溝5	4　層	弥生土器　壺	底部		(4.6)		①明赤褐色 ②明褐白色	1～4㎜の砂粒を多量に含む	風化が激しい
34	小溝9		土師質土器	底部		(7.5)		浅黄橙色	精緻	皿か
35	小溝9		弥生土器　壺	頸部				暗褐色	1～2㎜の砂粒を含む	
38	大土坑		須恵器　坏	口縁部 ～底部	(14.4)	(9.2)	4.7	灰色	1㎜前後の砂粒を含む	
39	近世用水路	2～4層	瓦質土器　足鍋	脚部				淡黄色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	在地産
40	近世用水路	2～4層	陶器　甕	口縁部				灰色	1～3㎜の砂粒を多く含む	
41	近世用水路	2～4層	土師質陶器　甕	口縁部 ～体部	(29.0)			浅黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒をわずかに含む	在地産
42	近世用水路	2～4層	土師質陶器　甕	口縁部 ～体部	(29.7)			①浅黄橙色 ②にぶい橙色	0.5～1.5㎜の砂粒をわずかに含む	在地産
43	近世用水路	2～4層	土師質土器　蓋	つまみ～ 口縁部	(9.2)		3.0	にぶい黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒を少量含む	型押し　在地産
44	近世用水路	2～4層	土師質土器	底部				にぶい黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	在地産

出土遺物観察表

法量（　　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
45	近世用水路	2～4層	土師皿	底部		5.7		にぶい黄橙色	微砂粒を少量含む	外底面回転ヘラ起こし 板目
46	近世用水路	2～4層	土師質陶器　盤	口縁部 ～底部				にぶい橙色	0.5～2㎜の砂粒を含む	在地産　平面形は長円形または隅丸方形
47	近世用水路	2～4層	土師質土器　甕	口縁部	(73.2)			にぶい橙色	1～3㎜の砂粒を含む	在地産　埋甕
48	近世用水路	2～4層	土師質土器　甕	底部		(41.0)		浅黄橙色	1～3㎜の長石・石英を含む	在地産　風呂甕
49	近世用水路	2～4層	土師質土器　甕	口縁部				浅黄橙色	微砂粒を含む	在地産
50	近世用水路	2～4層	瓦質土器　甕	口縁部				①灰色 ②灰白色	微砂粒を含む	在地産
51	近世用水路	2～4層	土師質土器　甕	口縁部				浅黄橙色	1～3㎜の長石・石英を含む	在地産
52	近世用水路	2～4層	土師質土器　甕	底部				①にぶい黄色 ②淡黄色	1～3㎜の長石・石英を含む	在地産　風呂甕
53	近世用水路	2～4層	瓦質土器　擂鉢	口縁部 ～体部	(29.5)			①③黄灰色 ②黒褐色	0.5～1㎜の砂粒を含む	17世紀以前
54	近世用水路	2～4層	瓦質土器　鉢	口縁部 ～体部	(18.1)			①②暗灰色 ③淡黄色	精緻	外面型押し
55	近世用水路	2～4層	瓦質土器	口縁部 ～体部	(11.1)			①黒色②灰色 ③にぶい黄色	微砂粒をわずかに含む	在地産　土瓶あるいは釜か 外面型押し
56	近世用水路	2～4層	土師質土器	口縁部 ～体部	(10.3)			①浅黄橙色 ②にぶい橙色	0.5㎜程度の砂粒を含む	在地産　土瓶か
57	近世用水路	2～4層	土師質土器　羽釜	体部				①黒色 ②にぶい橙色	0.5～2.5㎜の砂粒をわずかに含む	外面に煤付着
58	近世用水路	2～4層	瓦質土器	口縁部 ～体部				灰黄色～灰白色	0.5～2㎜の砂粒を含む	
59	近世用水路	2～4層	瓦質土器	底部				①③灰白色 ②明褐色	1～3㎜の砂粒を含む	
60	近世用水路	2～4層	瓦質土器　焙烙	口縁部 ～底部	(20.6)	(15.0)	5.0	①灰白色、黒褐色②③灰白色	0.5～6㎜の砂粒を含む	在地産　型押し
61	近世用水路	2～4層	瓦質土器	底部				①②灰色 ③にぶい黄橙色	0.5～2㎜の砂粒を含む	
62	近世用水路	2～4層	陶器　皿	口縁部 ～体部	(9.2)			素地　淡黄色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀 藁灰釉　目跡あり
63	近世用水路	2～4層	陶器　鉢	口縁部 ～底部	(11.4)	(4.0)	4.2	素地　淡黄色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀 藁灰釉
64	近世用水路	2～4層	陶器　鉢	口縁部 ～体部	(11.5)			素地　浅黄橙色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀 藁灰釉
65	近世用水路	2～4層	陶器　鉢	口縁部 ～体部	(11.7)			素地　灰白色 釉　褐～黒色	精緻	萩焼　19世紀 鉄釉
66	近世用水路	2～4層	陶器	体部 ～底部		3.9		素地　灰オリーブ色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀　内面に凹線1条　藁灰釉
67	近世用水路	2～4層	陶器　碗	口縁部 ～底部	(9.4)	(3.4)		素地　淡黄色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀 藁灰釉
68	近世用水路	2～4層	陶器　碗	底部		(4.1)		素地　淡黄色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀　藁灰釉
69	近世用水路	2～4層	陶器　碗	体部 ～底部		3.8		素地　にぶい黄橙色 釉　灰白色	精緻	萩焼　19世紀　藁灰釉
70	近世用水路	2～4層	陶器　碗	体部 ～底部		3.0		素地　灰白色 釉　灰白色	精緻	萩焼か　藁灰釉
71	近世用水路	2～4層	陶器　碗	体部 ～底部		(3.3)		素地　淡黄色 釉　灰白色	精緻	灰釉
72	近世用水路	2～4層	陶器	体部 ～底部		(9.1)		素地　浅黄色 釉　淡黄色	精緻	皿または鉢　藁灰釉
73	近世用水路	2～4層	陶器　鉢	体部 ～底部		(7.0)		素地　浅黄橙色 釉　透明	精緻	灰釉　目跡あり
74	近世用水路	2～4層	陶器　瓶	体部 ～底部		(6.1)		素地　にぶい黄褐色 釉　黄灰～灰黄色	精緻	碁笥底　灰釉
75	近世用水路	2～4層	陶器	体部 ～底部		(9.1)		素地　灰白色 釉　褐灰色	精緻	壺または徳利　鉄釉
76	近世用水路	2～4層	陶器　鉢	体部 ～底部		(7.4)		①②にぶい褐色　③灰色	精緻	焼締
77	近世用水路	2～4層	陶器　擂鉢	口縁部 ～体部	(32.4)			①②褐灰～黒褐色③黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む	肥前系　19世紀

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
78	近世用水路	2～4層	陶器 擂鉢	体部～底部		9.7		①③灰黄褐色 ②灰色・黄灰色	精緻	萩焼 重ね焼き痕あり
79	近世用水路	2～4層	陶器 鉢	体部～底部		(10.0)		①③灰白色・褐灰色 ②にぶい橙色	精緻	肥前系 18世紀
80	近世用水路	2～4層	陶器	体部				素地 浅黄橙色 釉 暗褐色	精緻	壺か 外面に貼付文とヘラ描き 飴釉
81	近世用水路	2～4層	磁器 皿	口縁部～底部	(12.7)	(7.6)	3.9	素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	染付 肥前系 18世紀
82	近世用水路	2～4層	陶器 碗	体部～底部		(4.4)		素地 灰白色 釉 透明	精緻	陶胎染付 肥前系
83	近世用水路	2～4層	磁器 紅皿	口縁部～底部	(4.1)	1.3	1.4	素地 白色 釉 白色	精緻	白磁 肥前系
84	近世用水路	2～4層	磁器 碗	体部～底部		(4.0)		素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	染付 肥前系
85	近世用水路	2～4層	磁器 瓶	体部～底部		4.3		素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	色絵 肥前系か
86	近世用水路	2～4層	磁器 碗	口縁部～体部				素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付
87	近世用水路	2～4層	磁器 碗	口縁部～体部	(11.3)			素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付
88	近世用水路	2～4層	磁器 碗	口縁部～体部	(7.3)			素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付 近・現代
89	近世用水路	2～4層	陶器 皿	体部～底部		4.6		素地 淡黄色 釉 白色	精緻	肥前系 見込み蛇の目状釉剥ぎ 高台内墨書あり
90	近世用水路	2～4層	磁器 皿	体部～底部		4.5		素地 白色 釉 白色	精緻	白磁 肥前系 見込み蛇の目状釉剥ぎ

Tab.8　出土遺物観察表（石器・石製品）

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
22	大溝1・2 1区		砥石	(12.9)	7.8	7.6	170.3	凝灰岩	中型・硬質
23	大溝1 1区	上層	砥石	22.0	8.7	6.2	2304.9	結晶質凝灰岩	中型・硬質
24	大溝1 2区	下層	磨石・敲石	(6.8)	8.7	6.2	560.7	角閃石ひん岩	
25	大溝1 0区	上層	台石	(9.4)	(9.2)	(5.5)	360.3	凝灰岩	
26	大溝1 1区	上層	使用痕のある剥片	4.3	2.2	0.8	6.6	ホルンフェルス	縦長剥片
27	大溝1 2区	下層	剥片	1.7	2.6	0.3	0.9	安山岩	横長剥片
28	大溝1・2 2区		砥石	(3.7)	(2.5)	1.6	11.8	砂岩	小型・軟質・中粒砥石
29	大溝2 0区		砥石	4.4	3.7	1.1	19.7	砂岩	小型・軟質・中粒砥石 被熱
30	大溝1 3区	上層	砥石	5.7	2.9	1.0	16.9	ひん岩	小型・硬質
36	小溝5	5層	楔形石器	2.5	1.8	1.3	4.8	姫島産黒曜石	
37	表採		剥片	2.8	1.4	0.4	1.2	黒曜石	縦長剥片
91	近世用水路	2～4層	砥石	(8.9)	6.8	(2.8)	169.7	ひん岩	中型・硬質
92	近世用水路	2～4層	砥石	(6.8)	(7.8)	(1.4)	103.5	頁岩	中型・軟質・細粒砥石

Tab.9　出土遺物観察表（木製品）

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	樹種	備考
93	近世用水路	2～4層	下駄	14.0	5.5	2.2			連歯

第４章　平成６年度山口大学構内の試掘調査

第１節　吉田構内の試掘調査

１　経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田遺跡の南端に位置する経済学部講義棟の東側で、経済学部商品資料館の新営が具体化した。平成５年度の後半になって山口大学への補正予算交付が決定し、その中に経済学部商品資料館新営事業も含まれていたためである。その頃、埋蔵文化財資料館は学内環境整備事業の対応に追われており、経済学部商品資料館新営も含め平成５年度補正の年度内対応は困難な状況であった。埋蔵文化財資料館運営委員会では、ただちに委員を召集し関連部局と検討した結果、補正予算事業の次年度繰越しが決定した。

経済学部商品資料館予定地付近については、昭和55年度に経済学部講義棟の試掘調査[1]を行っていた。調査の結果、河川と考えられる砂・シルト・砂礫の互層堆積を確認している。遺構は認められず、出土遺物もわずかに土師器小片2点という状況であった。このことから経済学部講義棟付近は、弥生時代から古墳時代にかけての小規模な沼沢地あるいは谷状の落ち込みであり、遺構の希薄な地域であると想定していた。このデータから埋蔵文化財資料館運営委員会は、まず遺構の有無を確認するための試掘調査を行うことを決定した。また、補正予算の繰越しを行っており時間的余裕がないことから補正予算事業限りの特別措置として、試掘調査の結果に対する埋蔵文化財資料館館長の裁量権が与えられた。これにより、埋蔵文化財資料館運営委員会へは、事前調査対応以外ならば補正予算事業終了後に立会調査の結果とまとめて報告することが許可された。

試掘調査は、経済学部商品資料館の建物本体部分が平成6年4月4日から4月20日まで、電気ケーブルなどを埋設する共同溝部分は4月22日に補足調査を行った。

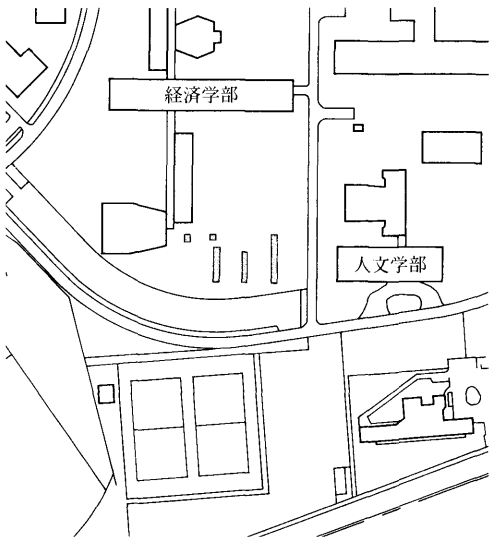


Fig.96　調査区位置図

試掘調査ではまず計画建物本体部分の西辺と東辺に、南北に長いトレンチを設定した。西辺の長さ約14m・幅2mのトレンチをＡ、東辺の長さ約20m・幅2mのトレンチをＢとする。また、河川流路方向の確認を目的としてＡ・Ｂ両トレンチの中間に設定した長さ約13m、幅1.5mのトレンチをＣとする。これらの調査とは別に、共同溝部分の東西両端に2m×2mのトレンチを設定した。東のトレンチをＤ、西のトレンチをＥとする。建物本体部分及び共同溝部分を合計した調査面積は約96㎡である。

試掘調査の結果、本学統合移転以前の水田と、時期不明（おそらく古墳時代以前）の河川を検出した他は顕著な遺構は認められなかった。また、遺物もほとんど出土しなかった。よって、事前調査には移行せず、トレンチの平面及び土層断面の図面記録を取り調査を終了した。

(2) 層序

層序はいずれのトレンチもほぼ同様な状況にある。基本層序は次の順である。

第Ⅰ層：淡赤褐色砂質土（マサ土、表土）

第Ⅱ層：茶灰色粘質土（瓦礫混じり）または黒色炭・灰（造成土）

第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（水田耕土）

第Ⅳ層：茶灰色粘質土（水田床土）

第Ⅴ層：明黄灰色・青緑灰色系のシルトまたは粘土（地山）

本調査地は現地表土である第Ⅰ層：淡赤褐色砂質土（マサ土）の下に、第Ⅱ層：茶灰色粘質土（瓦礫混じり）が厚さ約40～50cmに渡って客土されている。本学統合移転時の造成土と考えられる。その下は統合移転以前の水田層で、第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（水田耕土）、第Ⅳ層：茶灰色粘質土（水田床土）の順となる。第Ⅲ層上面の標高は20.4mである。水田床土直下に第Ⅴ層の青色あるいは黄色系のシルト層を検出した。この第Ⅴ層の上面が近代遺構と河川の検出面である。第Ⅴ層上面の標高は、Ｂトレンチの南で20.3m、北で20.0m、Ａトレンチの南で19.8m、北で19.7mである。自然地形が東から西に、また南から北に傾斜していたと考えられる。このことは河川の流路方向や位置からも肯定できる。第Ⅴ層以下は無遺物層と考えられるが、決して安定した堆積状況を示しているとはいえない。粘土や砂礫がレンズ状に互層堆積しており、第Ⅴ層以下も河川堆積土と考えられる。このような堆積状況は、網状河川によって形成される。山口大学構内では農学部連合獣医学科棟新営に伴う調査[2)]などで確認されており、扇状地地形における特徴的な堆積といえよう。

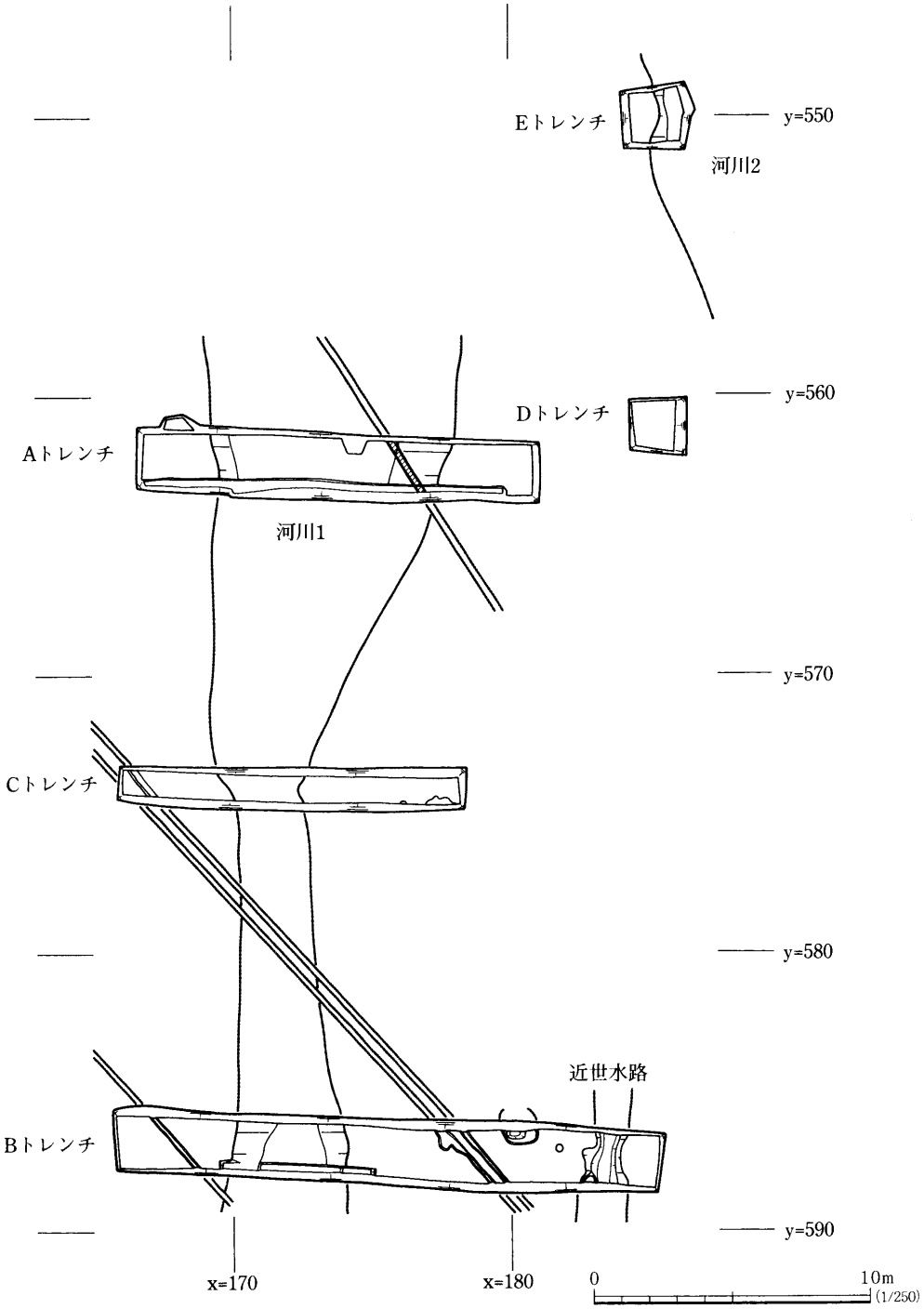
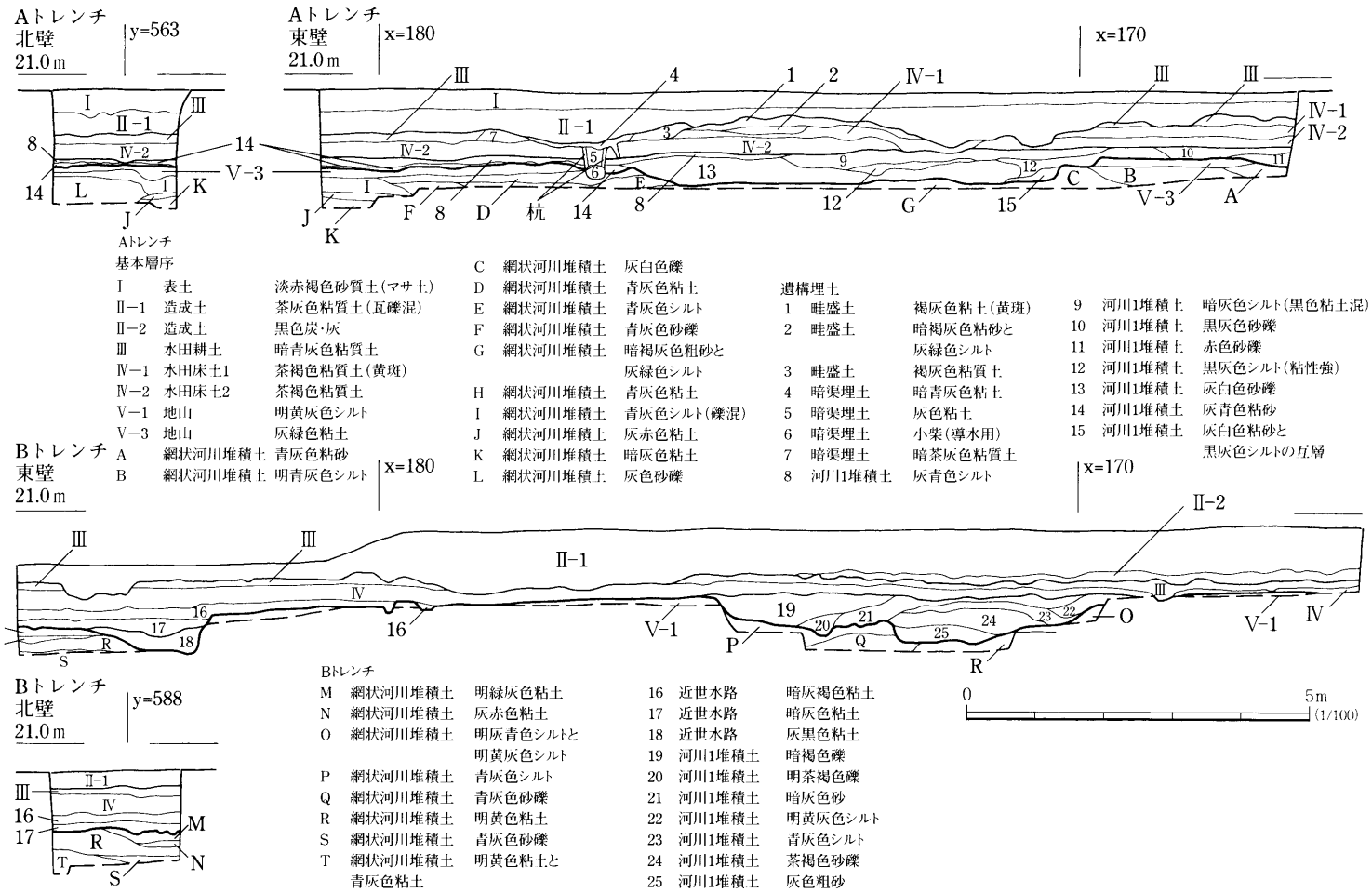


Fig.97　調査区遺構配置図



Aトレンチ
基本層序

Ⅰ	表土	淡赤褐色砂質土(マサ土)
Ⅱ−1	造成土	茶灰色粘質土(瓦礫混)
Ⅱ−2	造成土	黒色炭・灰
Ⅲ	水田耕土	暗青灰色粘質土
Ⅳ−1	水田床土1	茶褐色粘質土(黄斑)
Ⅳ−2	水田床土2	茶褐色粘質土
Ⅴ−1	地山	明黄灰色シルト
Ⅴ−3	地山	灰緑色粘土
A	網状河川堆積土	青灰色粘砂
B	網状河川堆積土	明青灰色シルト
C	網状河川堆積土	灰白色礫
D	網状河川堆積土	青灰色粘土
E	網状河川堆積土	青灰色シルト
F	網状河川堆積土	青灰色砂礫
G	網状河川堆積土	暗褐灰色粗砂と灰緑色シルト
H	網状河川堆積土	青灰色粘土
I	網状河川堆積土	青灰色シルト(礫混)
J	網状河川堆積土	灰赤色粘土
K	網状河川堆積土	暗灰色粘土
L	網状河川堆積土	灰色砂礫

遺構埋土

1	畦盛土	褐灰色粘土(黄斑)
2	畦盛土	暗褐灰色粘砂と灰緑色シルト
3	畦盛土	褐灰色粘質土
4	暗渠埋土	暗青灰色粘土
5	暗渠埋土	灰色粘土
6	暗渠埋土	小柴(導水用)
7	暗渠埋土	暗茶灰色粘質土
8	河川1堆積土	灰青色シルト
9	河川1堆積土	暗灰色シルト(黒色粘土混)
10	河川1堆積土	黒灰色砂礫
11	河川1堆積土	赤色砂礫
12	河川1堆積土	黒灰色シルト(粘性強)
13	河川1堆積土	灰白色砂礫
14	河川1堆積土	灰青色粘砂
15	河川1堆積土	灰白色粘砂と黒灰色シルトの互層

Bトレンチ

M	網状河川堆積土	明緑灰色粘土
N	網状河川堆積土	灰赤色粘土
O	網状河川堆積土	明灰青色シルトと明黄灰色シルト
P	網状河川堆積土	青灰色シルト
Q	網状河川堆積土	青灰色砂礫
R	網状河川堆積土	明黄色粘土
S	網状河川堆積土	青灰色砂礫
T	網状河川堆積土	明黄色粘土と青灰色粘土
16	近世水路	暗灰褐色粘土
17	近世水路	暗灰色粘土
18	近世水路	灰黒色粘土
19	河川1堆積土	暗褐色礫
20	河川1堆積土	明茶褐色礫
21	河川1堆積土	暗灰色砂
22	河川1堆積土	明黄灰色シルト
23	河川1堆積土	青灰色シルト
24	河川1堆積土	茶褐色砂礫
25	河川1堆積土	灰色粗砂

Fig.98　トレンチ壁面土層断面図 (1)

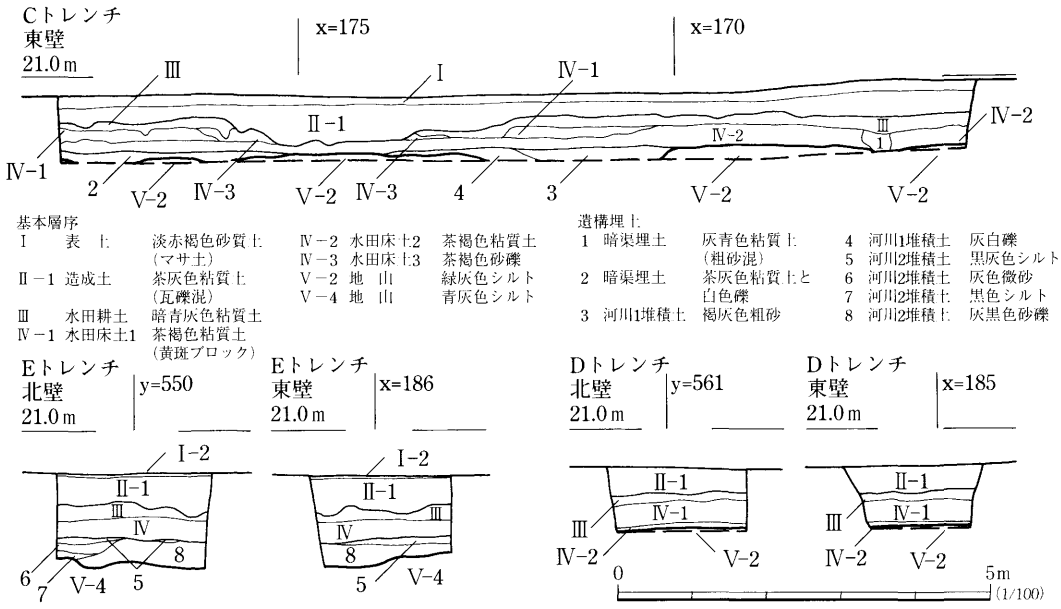


Fig.99　トレンチ壁面土層断面図 (2)

(3) 遺構・遺物

古墳時代以前のものと考えられる河川と、近世・近代の水田遺構を検出した。

河川

A・B・CトレンチとEトレンチで、流路の異なる2条の河川を検出している。前者を河川1とし、後者を河川2とする。本学統合移転前の水田などと同じ第Ⅴ層上面での検出である。

河川1はA・B・Cトレンチで検出し、東西に流路方向を持つ。検出した河川の総延長は27mである。河幅はトレンチによって異なり、Aトレンチで幅約8m、Bトレンチで幅約4m、Cトレンチで幅約3mを測る。同じく深さも異なり、検出面から Aトレンチで深さ約40、、Bトレンチで深さ約60cmを測る。

検出面からの深さは西のAトレンチよりも東のBトレンチが深いが、これは検出面の高さの影響を受けたもので、河床の標高はAトレンチが19.40m、Bトレンチが19.50mである（なお、Cトレンチは流路方向を確認するために設定しており、河床は検出していない）。東のBトレンチよりも、西のAトレンチでは河幅が広くなり、河床も深くなっている。これは河川1が東から西に流れていたことを示すものであろう。ただし、検出時の河幅については、狭い流路が幾度も切り合うことによって形成されたものと考えられ、Bトレンチ

の東壁断面では堆積土の状況からそれが明瞭に観察できた。堆積土は砂礫を主体とし、シルトなどが薄く貫入している。河床面はシルトまたは粘土であることを基本とするが、河川の堆積土と同じ砂礫層の部分があり、色調によって識別した。遺物は、時期不明の土器小片が1片出土した。

河川２はＥトレンチで検出した。Ｅトレンチはその流路内であり、南側への上がりを確認しているが、河岸ではない。また、Ｅトレンチの東側にあるＤトレンチではこの河川を検出しておらず、流路は蛇行していたと考えられる。調査範囲での深さは検出面から約30cmを測り、河床の標高は19.2mである。上面に黒灰色シルトが堆積するが、本流部分の堆積土は灰黒色砂礫、河床面は青灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

(4) 小結

試掘調査によって、経済学部商品資料館予定地には、古墳時代以前と考えられる2条の河川が埋存していることが明らかとなった。おそらく、本調査区の西隣接地で、昭和55年度の経済学部校舎新営に伴う試掘調査で検出した「沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形」は、堆積状況から判断して同一の河川であったと考えられる。

本調査区の周辺では、昭和61年度に国際交流会館新営に伴う試掘調査[3)]を行い、古墳時代以前と考えられる河幅17mの河川を検出している。この河川も本調査区のものと同じく東西に流路方向を持つ。河幅17mというのは、幾度もの流路の切り合いを示しているのであろう。吉田構内の北東部に位置する山塊から流れ出した河川が、幾筋にも流路が分かれ、網目状に流れていたことが判明した。

[注]

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年)

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1994年)

3）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年)

2　実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の北西部、正門の西側に位置する実験廃液処理施設棟の増築が計画された。この増築計画もまた、経済学部商品資料館と同じく予算の都合上、具体化はかなり先のことと考えられていた事業であった。しかし、山口大学への平成５年度補正予算交付が決定したことによって現実化した。工事は、廃液処理槽を地下深く埋設するというもので、地下3mに近い掘削が予定されていた。

当時、学内環境整備事業の対応に追われる埋蔵文化財資料館には年度内対応の余裕はなかった。埋蔵文化財資料館運営委員会では、委員を急遽召集して会議を開き、関連部局とも検討した結果、実験廃液処理施設棟増築を含めた補正予算事業の次年度繰越しが決定した。

実験廃液処理施設棟の北隣接地では、昭和55年度に汚水排水管の埋設工事が行われ、埋蔵文化財資料館が立会調査[1)]を行っている。工事は、幅約60cm、長さ25mに及ぶ汚水排水管路線を現地表下50cmまで掘削するものであったが、本学統合移転時の造成土が厚く、掘削は造成土内にとどまった。その他、九田川改修工事[2)]や正門前の環境整備工事[3)4)]の立会調査によって、構内北西部の正門周辺は比較的土地が低く、統合移転時に厚く客土されたことが判明している。また、九田川改修工事や正門前の環境整備工事の部分的な深掘りによって、付近一帯には吉田地区低地部の鍵層となる黒色粘土層の広がりを認めている。この黒色粘土層については、現在までに遺物は見つかっておらず、地山層と考えている。また、本調査地周辺は、過去の調査から遺物及び遺構の希薄な地域であることが明らかになっている。このため、埋蔵文化財資料館運営委員会は、土層堆積状況の把握を第一目的とし、遺構・遺物の有無を確認する試掘調査が必要であるとの判断を下した。これを受けた埋蔵文化財資料館では、平成6年4月25日から4月27日にかけて試掘調査を実施した。

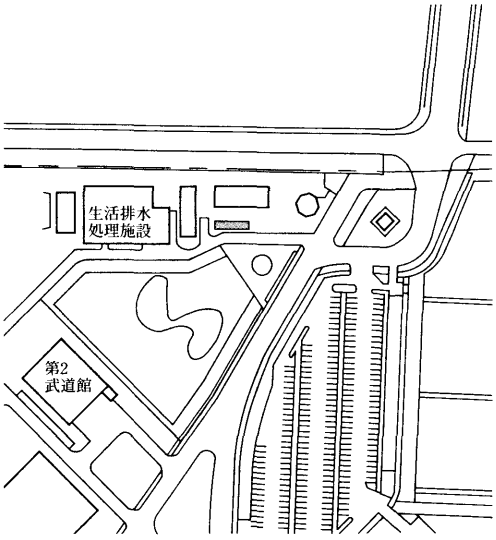


Fig.100　調査区位置図

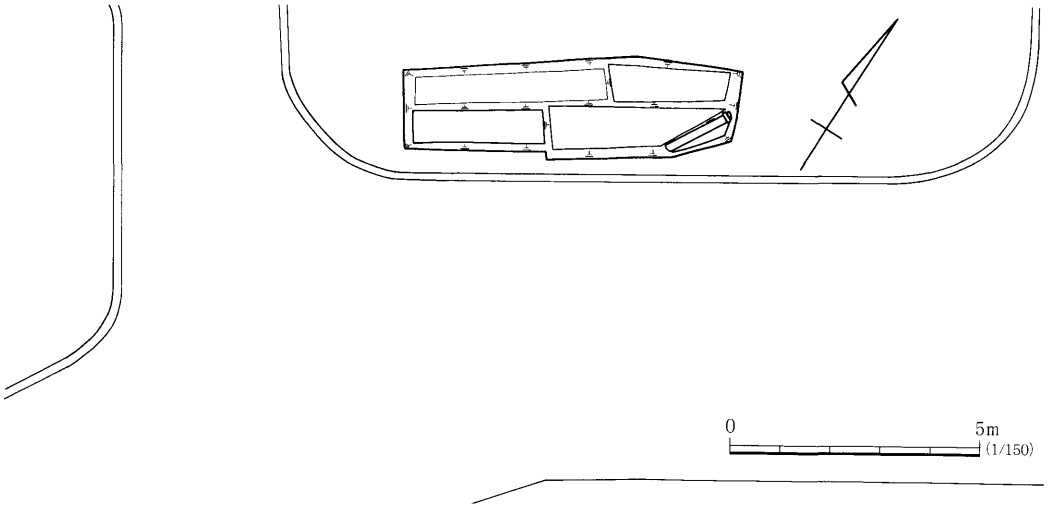


Fig.101　トレンチ設定図

トレンチは、既存の実験廃液処理施設棟の前面にある空き地部分に広く設定する予定にしていた。しかし、当初の予想通り造成土が厚く、排土処理に苦慮することになった。また、造成土部分は脆弱で、トレンチの壁が崩壊する危険があった。このため、調査は変則的な形となり、トレンチは東西長約7m・南北幅1.5mの規模に縮小した。そして、深く掘り下げるのは調査区内の北辺のみ、西側から長さ4m・幅50cmの範囲にとどめ、土層の観察をもって調査を終了した。調査面積は約10㎡である。

(2) 層序

本調査区における基本層序は、次の順である。

第Ⅰ層：マサ土（表土）

第Ⅱ層：茶褐色粘質土（造成土１）

第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（造成土２）

第Ⅳ層：暗青灰色粘土（水田耕土）

第Ⅴ層：茶灰色粘土（水田床土）

第Ⅵ層：青灰色砂礫（河川堆積土）

第Ⅶ層：明緑灰色シルト

第Ⅷ層：明茶灰色粘土

第Ⅸ層：暗褐色粘土

現在の表土層である第Ⅰ層：マサ土の下には、本学統合移転時の造成土が厚さ約1.2m、

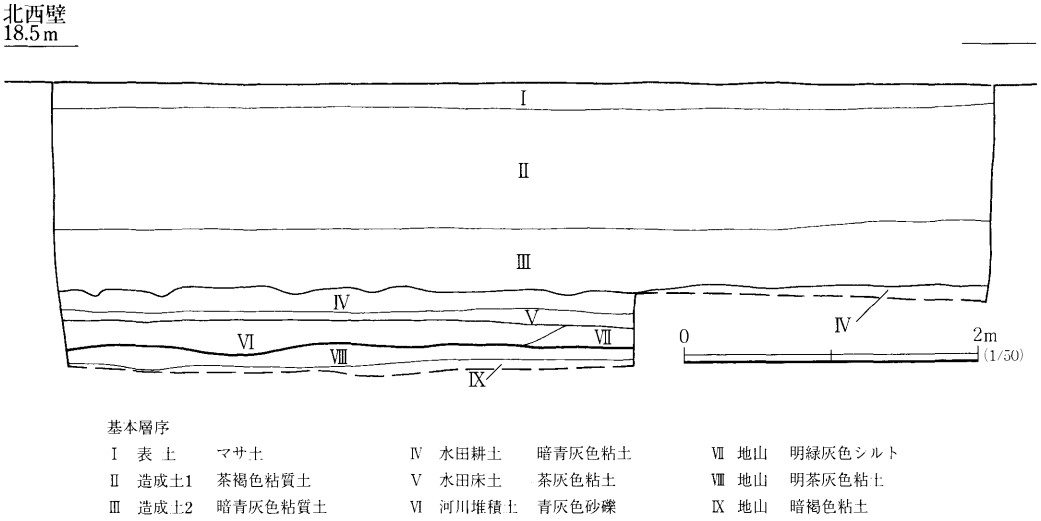


Fig.102 トレンチ壁面土層断面図

2層に渡ってみられた。その下には統合移転以前の水田耕土、床土を検出した。第Ⅳ層：暗青灰色粘土の水田耕土は厚さ約16cm、第Ⅴ層：茶灰色粘土の水田床土は約8cmである。この水田層の直下に、河川の堆積土と考えられる第Ⅵ層：青灰色砂礫と、第Ⅶ層：明緑灰色シルトを検出した。第Ⅵ層：青灰色砂礫と第Ⅶ層：明緑灰色シルトの上面標高は16.6mである。通常、この第Ⅵ層：青灰色砂礫と第Ⅶ層：明緑灰色シルトの上面が、吉田構内における弥生時代以降の遺構面になっていると考えられる。第Ⅵ層：青灰色砂礫と第Ⅶ層：明緑灰色シルトの関係を土層断面図には第Ⅶ層：明緑灰色シルトを切り込むように第Ⅵ層：青灰色砂礫を表現したが、実際には第Ⅵ層：青灰色砂礫の末端が徐々に第Ⅶ層：明緑灰色シルトに溶け込むような状態であった。おそらく両層とも河川堆積層であって、河川本流が第Ⅵ層：青灰色砂礫であり、その肩部に堆積したのが第Ⅶ層：明緑灰色シルトなのであろう。なお、第Ⅵ層：青灰色砂礫は西側に向かって落ち込んでいるようであり、河川本流は調査区外の西側にあると考えられる。河川堆積層の直下は、第Ⅷ層：明茶灰色粘土であるが、厚さは16cm程しかなく、徐々に下層の第Ⅸ層：暗褐色粘土へと変化する。第Ⅷ層：明茶灰色粘土の検出面は、標高16.5mである。

(3) 遺構・遺物

当調査区では、河川の他に顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

(4) 小結

今回の試掘調査では、河川以外には顕著な遺構・遺物の検出はなかった。しかし、吉田構内において、従来不明な点が多かった正門付近の土層データが得られたことは、大きな成果であったといえよう。特に第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土の上部に第Ⅶ層：明緑灰色シルトの堆積を確認できたことは重要である。

平成４年度に構内環境整備事業の一環として正門周辺で土木工事が行われ、埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。その際、現地表下約1.5mで黒色粘土層の広がりを確認している。この黒色粘土層は20cm程の厚みをもち、色調に褐色が混じることや乾くとパサつく土質が特徴的であった。沼沢地の泥炭層とも考えられ、吉田構内低地部の鍵層になるのではないかという期待がもたれた。しかし、この段階では、黒色粘土層がいつ形成され、吉田構内における遺構や遺物とどのような関わりを持つかは不明であった。

今回の調査で検出した第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土は、平成４年度に正門周辺で検出した黒色粘土層と同一のものであろう。色調に違いがあるが、地点によって黒色の濃淡が異なるようで、土質的には全く同じである。本調査地点においても、第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土と分層してはいるが、その変化は漸次的であり本来は同一の層形成であろう。そして、その上部に第Ⅵ層：青灰色砂礫と第Ⅶ層：明緑灰色シルトが堆積する。従来、吉田構内低地部においては、この緑色系シルト及び砂礫の上面が弥生時代以降の遺構検出面とされてきた。この層序関係が把握されたことにより、黒色粘土層の形成は縄文時代以前に遡ることが判明した。今後、理化学的な分析によって、黒色粘土層の形成時期を判定していく必要がある。

[注]

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年)

2）山口大学埋蔵文化財資料館「九田川局部改良工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1995年)

3）山口大学埋蔵文化財資料館「泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査・山口大学吉田団地環境整備（正門周辺）工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1994年)

4）山口大学埋蔵文化財資料館「泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査（信号機設置）」(『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1994年)

3　吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

平成５年度に急遽、本学に補正予算が支給され、体育器具庫の新営が決定した。当初の計画では、吉田構内の南西、遺跡保存地区の北側にある旧体育器具庫の前が予定地であった。しかし、計画予定地から遺構・遺物包含層が検出されることは、遺跡保存地区との関係[1)]からも明らかであった。また、補正予算による他の事業も山積しており、埋蔵文化財資料館が直ちに対応できる状態ではなかった。埋蔵文化財資料館運営委員会は審議を行い、計画地の変更と事業の平成６年度繰越しを要望することとなった。これを受け、関連部局で協議が行われ、計画地の変更と事業の平成６年度繰越しが決定した。

変更地については、埋蔵文化財資料館と関連部局との検討の結果、陸上競技場の北東隅が妥当との判断が下された。陸上競技場は吉田構内の西端にあり、東に隣接したサッカー・ラグビー場より一段土地が低い。これは本来の地形の傾斜とともに、グランド造成に伴う地形改変によるもので、陸上競技場の東側は斜面がカットされていると考えられた。ただし、陸上競技場の東側付近においては過去の埋蔵文化財調査例がなく、地下のデータが不足していた。そこで、埋蔵文化財資料館では体育器具庫新営予定地において、遺構・遺物包含層の有無を確認することを目的とした試掘調査を行った。

当初の試掘調査計画では、最も深い掘削が行われる新営建物の便槽予定部分にトレンチを設定し、遺構が検出された場合、建設予定地全体の事前調査に切り換える予定であった。しかし、グランド層は10cm程の厚さで、直下は地山面であり、調査区周辺における削平の著しさを物語っていた。このため、建物新営部分の北辺に沿って幅2m、長さ約30mの範囲でのトレンチ調査とした。

調査の結果、2条の河川を検出したものの出土遺物はなく、周辺に顕著な遺構が認められないことから、この試掘調査をもって調査を終了した。調査面積は約60㎡、調査期間は平成6年10月3日から10月5日までである。

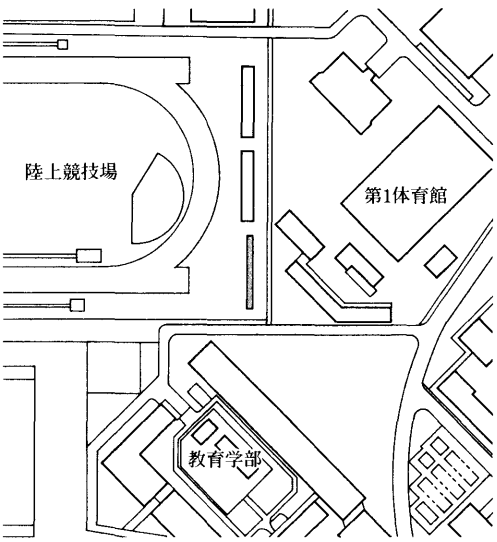


Fig.103　調査区位置図

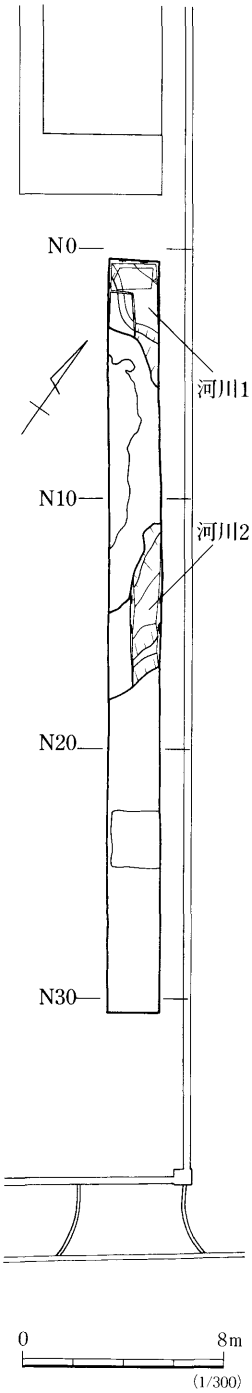


Fig.104　トレンチ設定図

(2) 層序 (Fig.105, PL.87)

本調査区における基本層序は、次の順である。

第Ⅰ層：マサ土 (表土)

第Ⅱ層：コークス透水層

第Ⅲ層：黒褐色粘土 (地山)

第Ⅳ層：明黄色粘土 (地山)

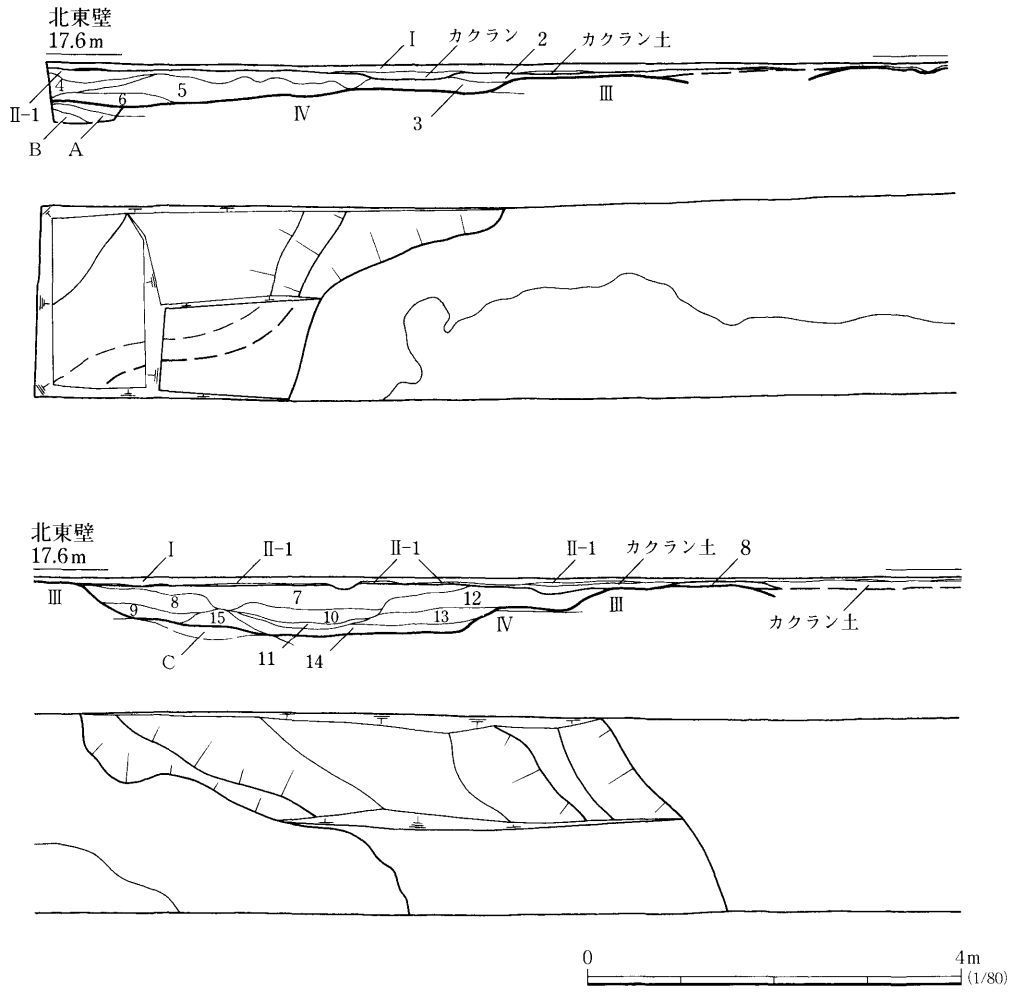
陸上競技場として使用されるために客土された第Ⅰ層：マサ土と第Ⅱ層：コークス透水層を取り除くと、第Ⅲ層：黒褐色粘土の地山が露出した。グランド層と地山層の間に、なんら堆積土が確認されない状況は、統合移転時の削平の著しさを示す。第Ⅲ層：黒褐色粘土の検出標高は17.4mである。本調査区で検出した2条の河川は、いずれもこの黒褐色粘土を切り込んでいる。ただし、削平が著しいため、本来の河川の遺構面となる土層は不明である。黒褐色粘土は厚さ約30cmで、その直下は第Ⅳ層：明黄色粘土である。また、河床面での観察から、明黄色粘土の下は砂礫層であることが判明している。

(3) 遺構・遺物

トレンチの北端と中央で2条の河川を検出した。トレンチ北端のものを河川１、中央のものを河川２とする。

河川１は南肩を検出するにとどまり、北肩は調査区外となる。検出時の河幅は3m以上である。北東から南西に流路方向を持つと考えられる。地山の黒褐色粘土を検出面とする。検出面の標高は17.40mである。河床面は、検出した最も深い位置で標高16.90mで、河床面までの深さは検出面から約50cmを測る。河川は砂と砂礫の互層によって埋没していた。河床面の地山は第Ⅳ層：明黄色粘土であるが、河川が最も深くなる調査区の南端では、青色系の砂礫層が地山となる。

河川２は東側で5.5m、西側で3.3mの河幅を持つ。北から南に流路方向を持つと考えられる。河川１と同じく地山の黒褐色粘土を検出面とし、検出面の標高も同じく17.40mである。河床面の標高は



基本層序

Ⅰ	表　土	淡赤褐色砂質土（マサ土）
Ⅱ－1	グランド層	コークス透水層
Ⅱ－2	グランド層	淡赤褐色砂質土（マサ土）
Ⅲ	地　山	黒褐色粘土
Ⅳ	地　山	明黄色粘土
A	河川堆積土	青灰色細砂
B	河川堆積土	青灰色粗砂
C	河川堆積土	青灰色砂礫

遺構埋土

1	河川1堆積土	明黄灰色砂礫
2	河川1堆積土	暗灰黄色粘土（砂混）
3	河川1堆積土	青灰色礫
4	河川1堆積土	灰褐色礫
5	河川1堆積土	灰色細砂
6	河川1堆積土	灰色砂礫
7	河川2堆積土	明黄灰色砂礫
8	河川2堆積土	青灰色砂
9	河川2堆積土	青灰色細砂
10	河川2堆積土	灰色砂礫
11	河川2堆積土	青灰色細砂
12	河川2堆積土	灰色粗砂
13	河川2堆積土	暗灰色粗砂と細砂の互層
14	河川2堆積土	灰色粗砂
15	河川2堆積土	暗灰色砂

Fig.105　トレンチ実測図(1)

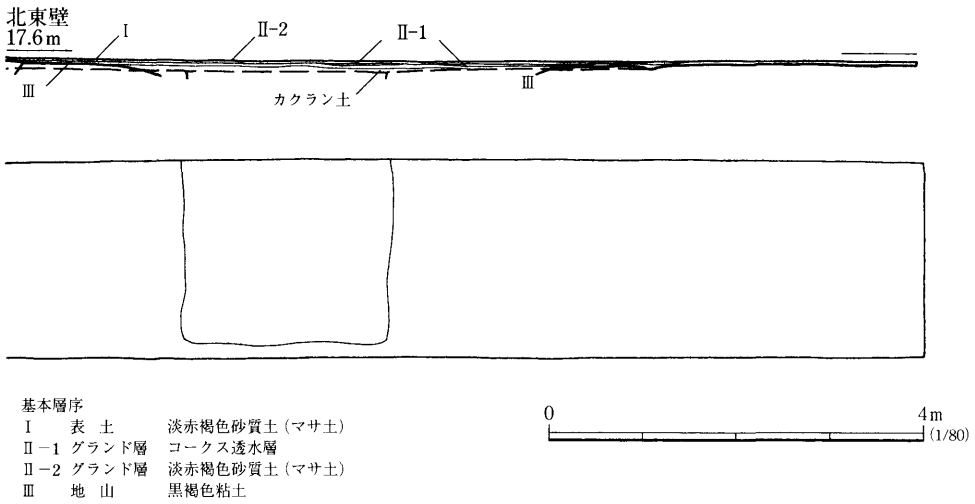


Fig.106　トレンチ実測図(2)

16.90m、深さは検出面から約50cmを測る。河川は砂と砂礫の互層によって埋没していた。土器小片1点が出土した。

(4) 小結

今回の調査は、陸上競技場において初めての本格的な調査である。当初の予想通り、陸上競技場の北東部は削平が著しく、地表から約10cmで地山の黒褐色粘土を検出し、時期不明の2条の河川を検出するにとどまった。本調査区内において、黒褐色粘土の検出標高は17.40mと一定しており、上面削平の著しさを物語っている。本来はこの黒褐色粘土の上面に青灰色シルトが堆積していたと考えるべきである。北隣接地で行われた第2屋内運動場施設新営に伴う発掘調査[2)]では、この青灰色シルトが遺構の検出面となっている。とすれば、遺構があったとしてもその大半は削平されており、深い河川の下部のみが残存したと考えるべきであろう。

［注］

1）河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」『山口大学構内遺跡発掘調査年報X』（山口大学埋蔵文化財資料館、1992年）

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内第2屋内運動場新設に伴う発掘調査」（本書P.109）

第５章　平成６年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　経済学部商品資料館仮設電柱設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年6月20日

調査面積　約5㎡

調査結果　経済学部商品資料館の新営に伴い、工事用電源を引き込むための仮設電柱の設置が必要となった。電柱は国際交流会館敷地内に2本（Ａ・Ｂ地点）、学内道路に平行して3本（Ｃ～Ｅ地点）の計5本の設置が予定された。電柱の設置には直径約50cm、深さ約1.0mの掘削を行うため、埋蔵文化財資料館が立会調査を実施した。

国際交流会館敷地は、西側に隣接した人文学部前駐車場より一段高くなっているが、これは国際交流会館建設時の造成によるものである。このため、Ａ・Ｂ地点の掘削はいずれも造成土の範囲内にとどまった。Ｄ・Ｅ地点は、ハンドボール場北辺の傾斜面にあたる。現地表下80～90cmまでは造成土であり、造成土の直下は地山であった。Ｃ地点は、厚さ約30cmの造成土の下に、約40cmの厚さで水田耕土が残されており、その直下が地山となる。

立会調査の結果、国際交流会館及びハンドボール場の周辺は、本学統合移転時に水田を削平した後、厚く客土していたことが判明した。

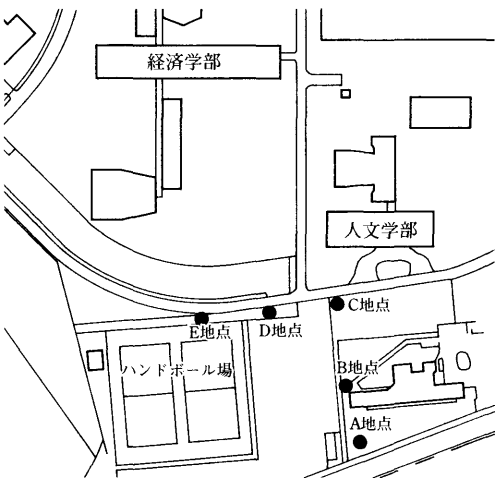


Fig.107　調査区位置図

2　人文学部前駐車場整備工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年7月27日

調査面積　約6㎡

調査結果　人文学部前駐車場の舗装整備が計画された。工事は、従来のバラス敷からアスファルト舗装にし、駐車場の周囲に排水のための側溝を設置するというものであった。U字溝の埋設には幅50cm、深さ54cmの掘削を伴った。このため、埋蔵文化財資料館が立会調査を実施したが、本地区は本学統合移転時の造成土が厚く、深さ50cm程度の掘削では旧地表すら確認することはできなかった。関連部局の了解を得て、4地点の部分的な深掘りを行い、造成土以下の土層堆積状況を確認した。

Ａ・Ｂ地点は現地表下0.9～1.0ｍまで造成土であり、その下に水田耕土の上面を検出した。Ｃ地点は現地表下約50cmまでは造成土である。造成土の下には厚さ約10cmの撹乱層があり、その直下に厚さ約20cmの水田耕土があった。地山の緑色粘土はこの水田耕土直下、現地表下約80cmで検出した。Ｄ地点は現地表下約70cmまで造成土であり、その直下に厚さ約30cmの水田耕土があった。地山の緑色粘土はこの水田耕土直下、現地表下約1.0ｍで検出した。

立会調査の結果、人文学部前駐車場は厚く客土されていることが判明した。造成土は特に北から南へと厚さを増している。また、造成土の下に水田耕土が残存していることも確認できた。

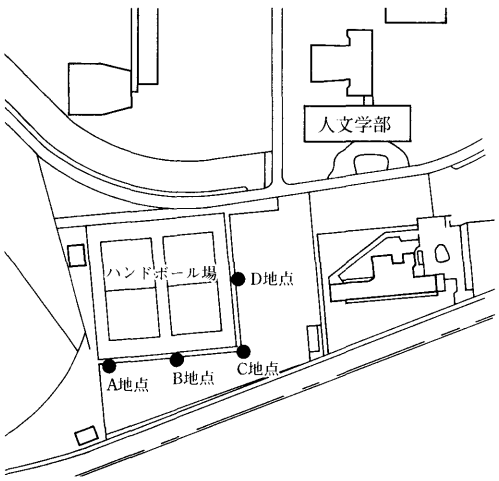


Fig.108　調査区位置図

3　テニスコート改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年9月5日

調査面積　約15m²

調査結果　工事はテニスコートを夜間も使用可能にするための照明施設を設置するものである。照明塔は小型であり、基礎部分を1.0m×1.0mの範囲で、深さ約1.0mまで掘り下げるものであった。ただし数は多く、54ヶ所の設置が予定された。このため、54ヶ所のうち、テニスコートの周囲部分となるAからOの15地点について立会調査を行い、土層の堆積状況を確認した。

立会調査の結果、テニスコートの南半側は現地表下50～80cmで地山が検出されるのに対し、北半側は現地表下1.0mまでは本学統合移転時の造成土内であることが判明した。九田川に向かって地形が落ち込むのであろう。いずれの地点においても、水田耕土が造成土直下に厚さ10～40cmで残存していた。地山は緑灰色粘土であるが厚さは10cm程と薄く、地点によっては水田耕作による削平のため緑灰色粘土が消滅し、その下の暗褐色粘土が地山面となる場合もあった。また、薄い遺物包含層の可能性のある土層を部分的に認めたが、掘削面積が狭いため明確にできなかった。

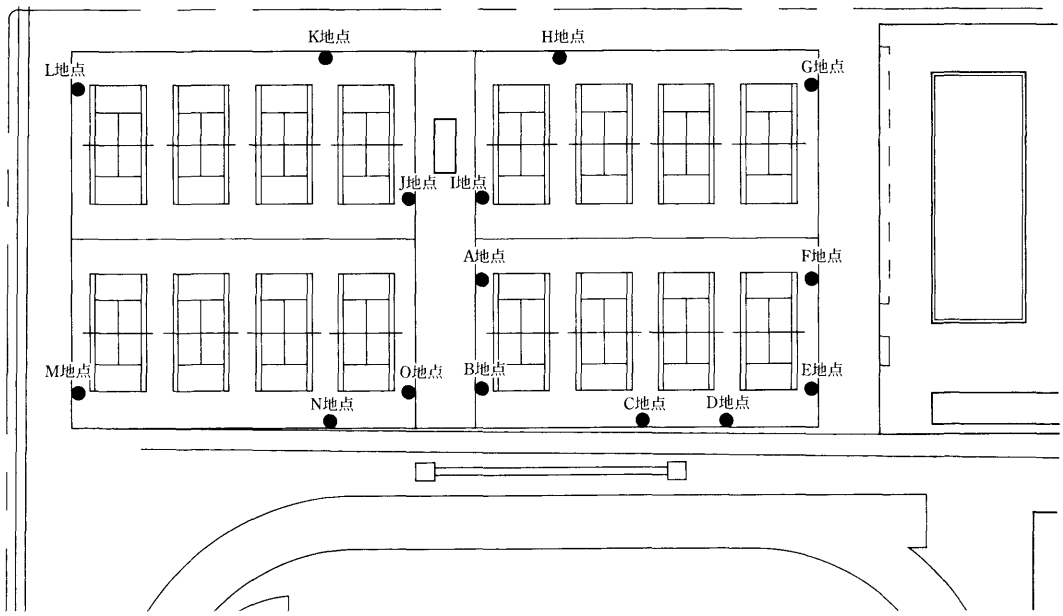


Fig.109　調査区位置図

4　教育学部附属養護学校生活訓練施設棟新営工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年9月26日

調査面積　約16㎡

調査結果　附属養護学校の生活訓練棟の新営工事に伴い、電気配線を埋設することとなった。電気配線の埋設自体は、現地表からの掘削が約50cmと浅いものであるが、作業用の縦坑であるハンドホール部分の7ヶ所は、設置のために1.5m×1.5mの範囲で深さ1.0mの掘削が必要であった。電気配線埋設の掘削については、従前の調査データから埋蔵文化財に支障のないことが予想されたため、深いハンドホール部分の7ヶ所について、立会調査により地下の状態把握を行った。

立会調査の結果、養護学校敷地内においては、浅い地点で約50cm、深い地点では厚さ1m以上に渡って客土されていることが判明した。また、造成土の直下には、水田耕土が残存していることも判明した。地山は黒～茶色系統の粘土であった。

今回の調査では、遺物包含層及び遺構は確認できなかった。ハンドホール部分の調査により、電気配線の埋設工事は埋蔵文化財に支障のないことが判明し、工事はそのまま進められた。

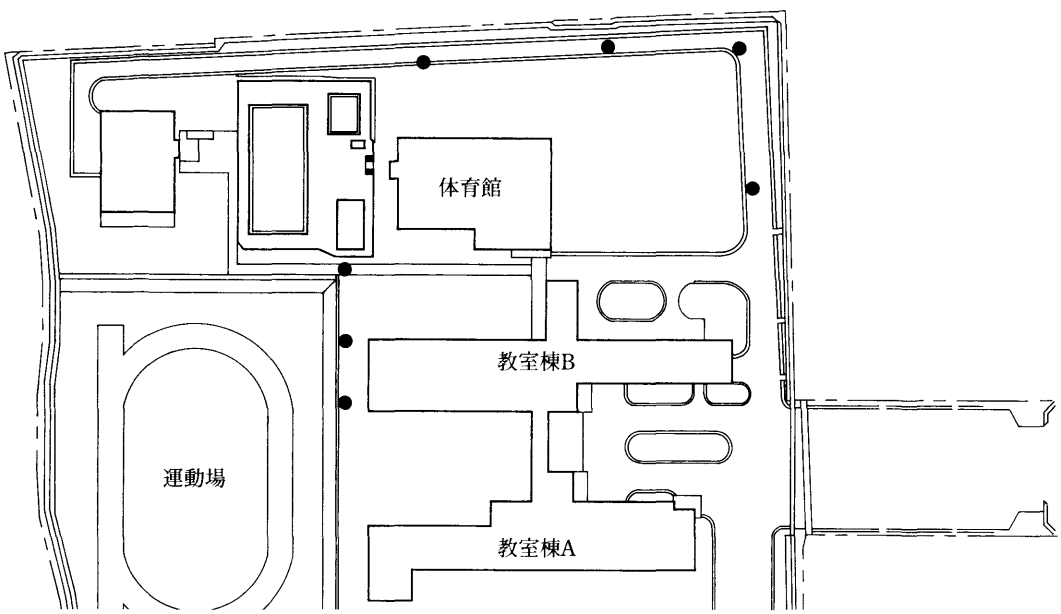


Fig.110　調査区位置図

5　教育学部附属養護学校生活排水管改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年8月2日

調査面積　約2㎡

調査結果　養護学校からの生活排水管が、市道を挟んだ大学グランド側で、劣化による漏水を起こしており、排水管を付け替えるために掘削を行うという工事であった。

この場所は、陸上競技場からラグビー・サッカー場へ向かって一段高くなる境にあたり、深さ約30cmの掘削では埋蔵文化財に影響がないものと推測された。立会調査の結果、当初の予想通り掘削は造成土内にとどまった。

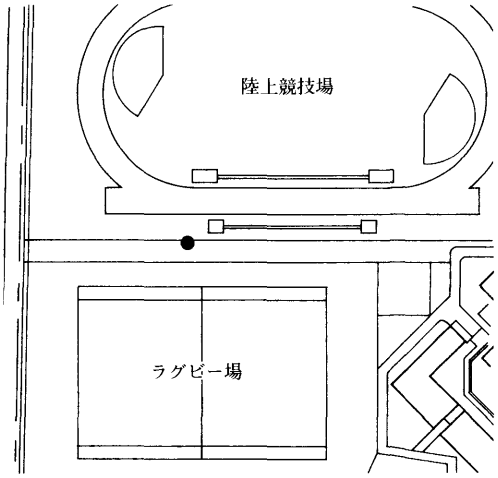


Fig.111　調査区位置図

6　陸上競技場整備（透水管埋設）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年10月7日

調査面積　約200㎡

調査結果　陸上競技場透水管工事は、グランド中央を貫く主幹と、その両脇に3本ずつ取り付いた計6本の枝部分からなる矢羽状の管路を、幅約1.0m、深さ約40cmの規模で掘削するものであった。

立会調査の結果、現地表下約15cmまではグランドのマサ土であり、工事掘削に必要な現地表下40cmは水田耕土の範囲であることを確認した。このため、埋蔵文化財に影響はなく、工事は続行された。

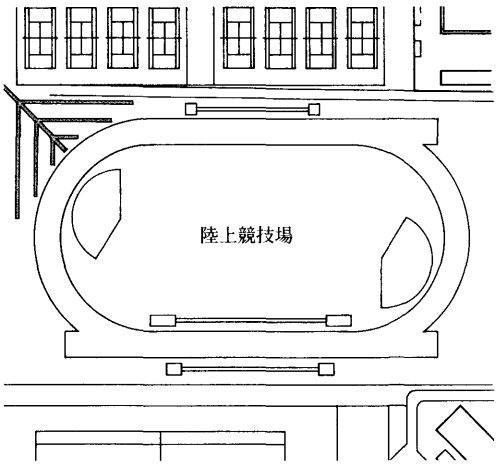


Fig.112　調査区位置図

7　ハンドボール場改修（プレハブ設置）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年10月20日

調査面積　約30㎡

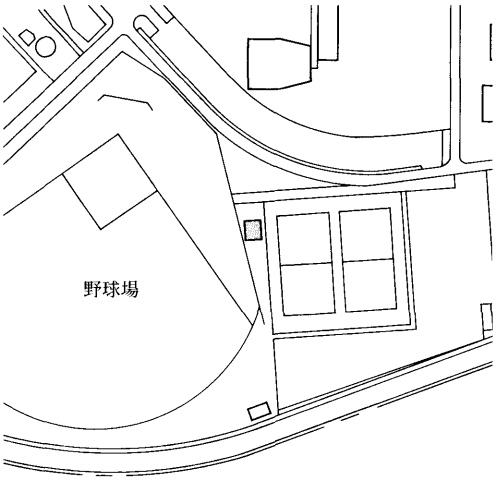


Fig.113　調査区位置図

調査結果　工事は、吉田構内の南部に所在するハンドボール場にプレハブ建物を設置するものであった。基礎工事は現地表面から45cmの掘削であり、現状でも造成土により周囲から一段高くなっているハンドボール場においては、埋蔵文化財への影響はないものと予想された。

立会調査の結果、掘削は造成土内にとどまり、工事は続行された。

8　野球場フェンス改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年10月20日

調査面積　約3㎡

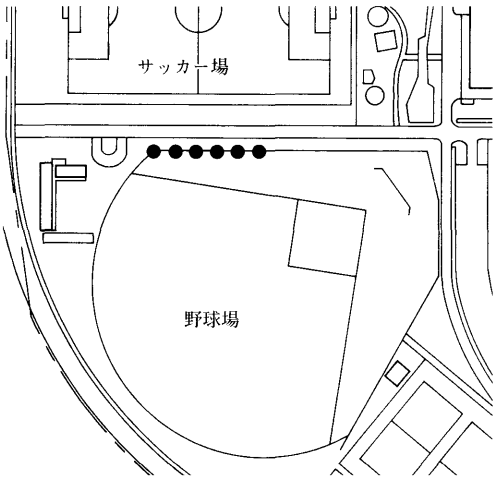


Fig.114　調査区位置図

調査結果　野球場のフェンスが老朽化のため倒壊しつつあり、付け替えが必要となった。これに伴い、支柱の基礎部分6ヶ所が付け替えられることとなった。

工事は、基礎を埋設するにあたり、現地表面から約60cmの深さまで掘削するものであった。

立会調査の結果、いずれの地点も造成土の範囲内であった。埋蔵文化財に影響はなく、工事は続行された。

9　基幹環境整備（ボイラー室配電盤設置）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年10月25日

調査面積　約4㎡

調査結果　吉田構内の北東寄りに所在するボイラー室の改装が行われるにあたり、建物外部の2ヶ所に、配電盤（アース盤）の埋設が必要となった。工事は、現地表下約1.5mの掘削を伴うものであった。

立会調査の結果、現地表下約60cmで河川堆積土と考えられる暗青色粘質土を検出した。河川は深さ約60cmを測り、その下は地山の明青灰色砂礫であった。河川から時期不明の土師器が2片出土した。

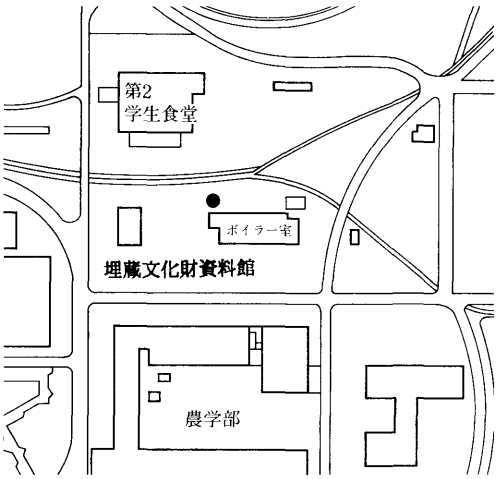


Fig.115　調査区位置図

10　九田川河川局部改良工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年10月28日・平成7年1月11日

調査面積　約100㎡

調査結果　平成５年度から行われている山口県による九田川の護岸改修工事の続きである。平成５年度の調査では、遺物も遺構も検出していない。平成６年度はテニスコート北東側からクラブハウス前までが工区となっている。

立会調査の結果、水田層の上に造成土が厚さ約1.5mに渡って存在することが明らかとなった。また、調査範囲内では、現地表下1.8～2.0mに地山の黒褐色粘土が確認できた。

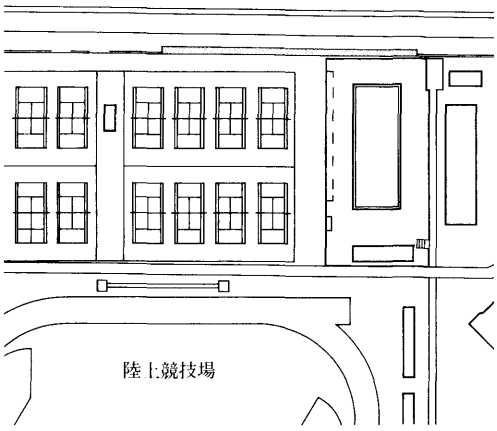


Fig.116　調査区位置図

11　第２屋内運動場仮設電柱設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年11月11日

調査面積　約0.5m²

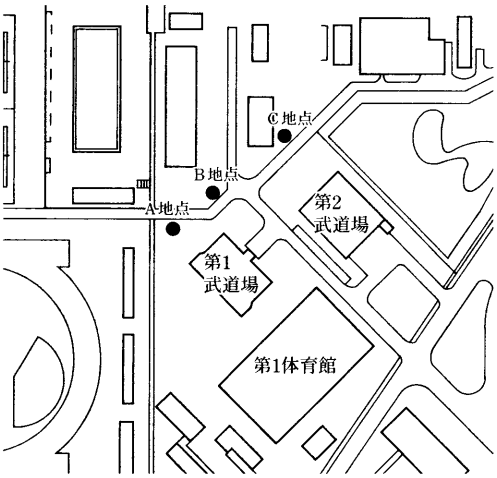


Fig.117　調査区位置図

調査結果　第２屋内運動場の新営に伴い、工事用電源を引き込むために2本の仮設電柱が必要となり、掘削を行うものであった。

現地表から約90cmほど掘削したが、本学統合移転時の造成土の範囲内であった。第２屋内運動場近辺は造成土が厚いことが推測される。

12　教養部水道管破裂修理工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年11月15日

調査面積　約2m²

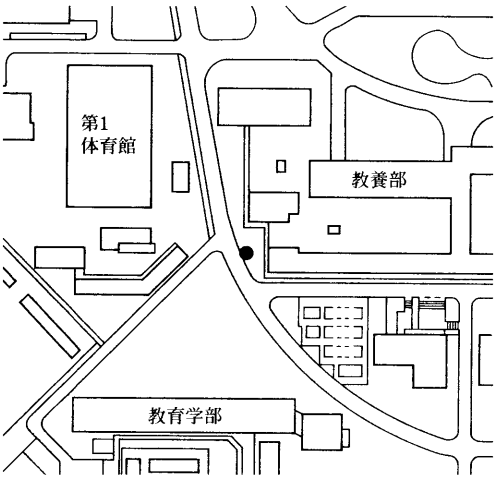


Fig.118　調査区位置図

調査結果　教養部講義実験棟の南西隅側に埋設されていた給水管が、老朽化により漏水し、道路上に水が溢れ出した。復旧工事に際して立会調査を実施した。

現地表下80cmまでは、表土及び統合移転時の造成土、約80cmから掘削深度の約1mまでは黄褐色粘土の地山を検出した。一部暗褐色粘土の部分があり、遺構埋土の可能性も考えられたが、漏水のため確定はできなかった。遺物は出土していない。

13　グランド屋外照明施設配線埋設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年12月15日

調査面積　約150㎡

調査結果　グランド照明施設の配線工事は、高圧線のため最低でも現地表下50cmの掘削が必要であった。配線は極力、側溝等の既掘削部分に沿わせる措置が取られた。

グランド南西部の県道沿いは遺物包含層が深く問題はなかったが、北西部の教育学部棟側では、防球ネット基礎の既掘削部分に沿わせたにもかかわらず、一部の地点で現地表下約10cmに遺物包含層を確認した。遺物包含層は、厚さ約25cmであった。

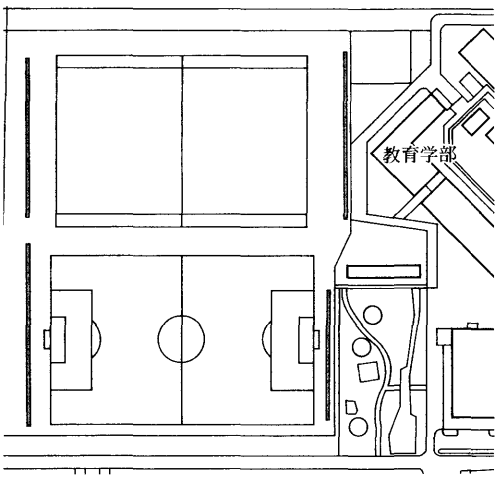


Fig.119　調査区位置図

14　公共下水道接続（教育学部附属養護学校プール排水施設設置）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年12月9日・平成7年1月20日

調査面積　約4㎡

調査結果　山口市による公共下水道整備に伴い、プール用の排水設備が更新されることになった。調査は、市公共下水道接続用枡の設置予定地を2m×2mの規模で、現地表下1.5mの掘削深度で実施した。樹木の除去も伴ったが、調査地点は養護学校敷地の北西辺の擁壁に接する部分にあたるため、工事は過去の擁壁工事による撹乱土の範囲内にとどまった。

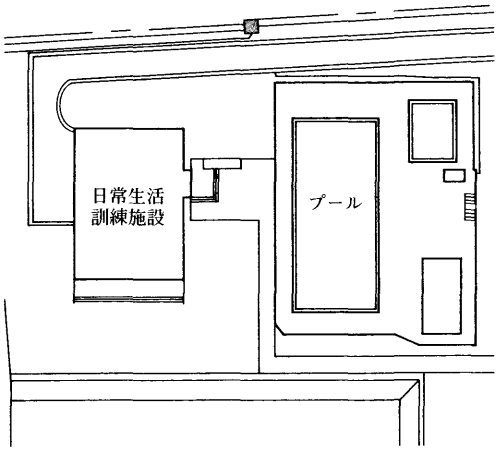


Fig.120　調査区位置図

15　サークル棟給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年12月16日

調査面積　約1㎡

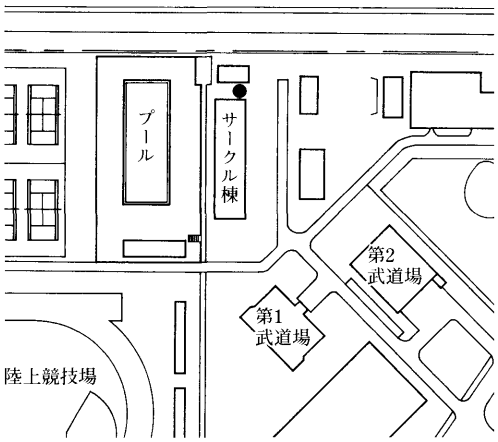


Fig.121　調査区位置図

調査結果　吉田構内北西部に所在するサークル棟の給水管が、老朽化により漏水を起こしたため、年度当初計画にはなかった給水管埋設工事が急遽行われることになった。掘削深度は現地表下約60cmであり、付近の調査状況から本学統合移転時の造成土内であることが予想された。

立会調査の結果、掘削範囲は造成土内にとどまったため埋蔵文化財には支障がないと判断し、工事は続行された。

16　プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成6年12月26日・平成7年2月15日

調査面積　約10㎡

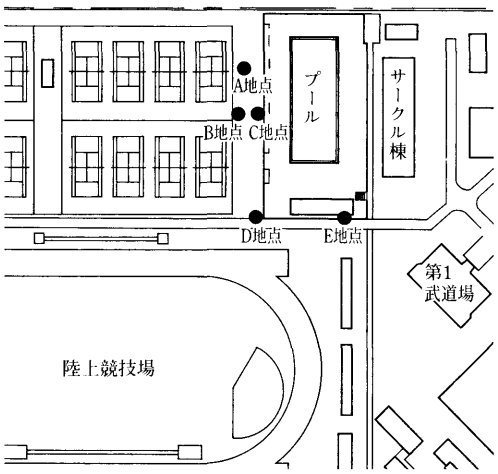


Fig.122　調査区位置図

調査結果　給水管埋設にあたり管路部分の調査を実施した。表土及び造成土の厚さは過去の工事の影響で不均一である。それ以下は概ね同様の層序を示し、約40～80cm以下で約10～15cm程度の暗灰色の水田耕土、約5cmの暗黄灰色の水田床土を経て、暗黄灰シルトまたは黒褐色土の地山となる。地山はプール側からテニスコート側に向かって若干傾斜して低くなっていると推察できる。遺構・遺物は検出できなかった。

17　公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成7年3月3日

調査面積　約6㎡

調査結果　山口市による公共下水道整備に伴い、接続に先行して、陸上競技場南西辺のテニスコート寄りに吉田構内からの雨水排水施設連結用の枡が設置されることになった。現地表下約160cmより下が河川堆積層で、上層から暗黄茶褐色粘質土、暗黄茶褐色粘質砂、暗灰色砂、黒灰褐色砂礫、青緑色粘土となる。現地表下約140cmと約180cmの付近で、弥生時代から古墳時代にかけての土器が2点出土した。

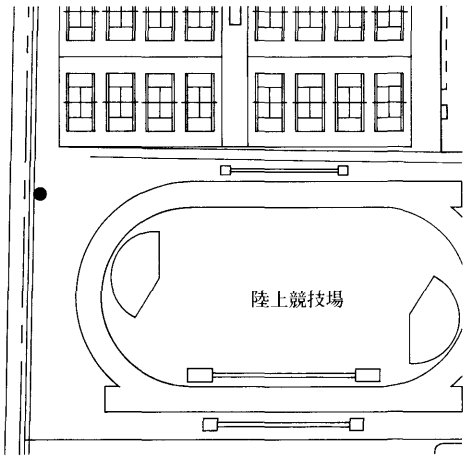


Fig.123　調査区位置図

18　教育学部スロープ設置（音楽棟）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内

調査期間　平成7年3月17日

調査面積　約10㎡

調査結果　バリアフリー化のためのスロープ設置工事である。根切り掘削は既設建物に直交し、約1m×10m、掘削深度は1mに達した。

現地表下65～100cmまでは表土及び本学統合移転時の造成土であるが、一部に約65～100cmで水田耕土及び床土と考えられる黒灰色粘質土、黄灰色粘質土を検出した。黄灰色粘質土は地山の可能性もあるが、調査範囲内は撹乱が著しく、確定は困難であった。遺構・遺物は検出できなかった。

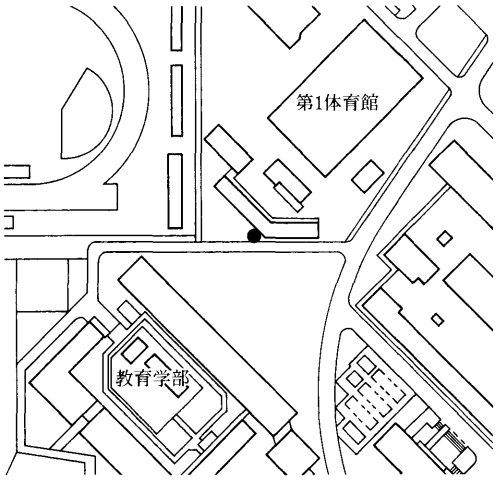


Fig.124　調査区位置図

第２節　小串構内の立会調査

医学部附属病院MRI－CT装置棟新営工事に伴う立会調査

調査地区　小串構内

調査期間　平成6年3月24日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　300㎡

調査結果　小串構内のほぼ中央部、第１中央診療棟西側に所在するMRI棟の増築が計画された。CT装置棟を北側に拡張するというものである。本地は平成元年度のMRI棟新築の際に、埋蔵文化財資料館が試掘調査を行い、二次堆積層中より削器や細石刃などが出土している[1)]。今回の増築予定地においては、MRI棟の基礎掘削及び配管掘削で、石器を包含する水田層が撹乱を受けていると予想された。また増築工事は、長さ30m、幅10mの範囲を現地表下3mまで掘削するというものであった。このため、埋蔵文化財資料館では工事掘削後に立会調査を行い、土層の堆積状況を観察した。

土層観察は、MRI棟建築時の撹乱が及んでいない北壁で行った。基本層序は以下のようになる。上層から第Ⅰ層：マサ土、第Ⅱ層：明緑灰色粘土（造成土）、第Ⅲ層：黒褐色粘質土（近世整地土）、第Ⅳ層：茶褐色粘質土、第Ⅴ層：灰青色粘土・シルト・砂の互層、第Ⅵ層：貝層、第Ⅶ層：青灰色粘土の順である。第Ⅵ層：貝層からもわかるように、近世以前には、本調査地は海浜であったと考えられる。第Ⅵ層：貝層は、最も厚い場所で約10cmであるが、西から東に向かって徐々に薄くなり、西から19mの地点で消滅する。海岸線を示すと考えられる。

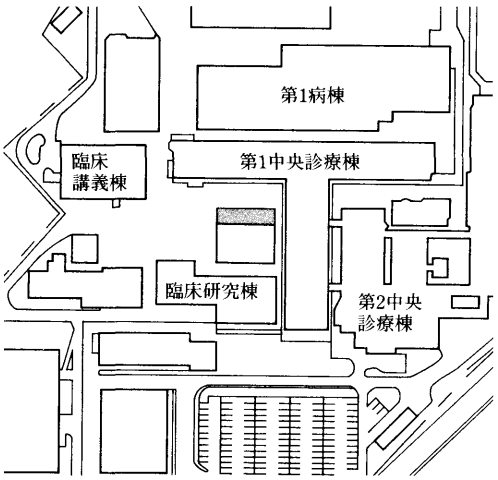


Fig.125　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』（山口大学埋蔵文化財資料館、1991年）

第3節　亀山構内の立会調査

1　教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成6年11月10日

調査面積　約3㎡

調査結果　新設給水管量水器用の桝設置地点の2m×1.5mの調査を実施した。調査地点の土層は、現地表下約60cmまでが造成土である。それ以下は地山と考えられ、約60～74cmが暗青灰色砂礫土、約74cmから掘削深度の130cmまでは茶褐色砂礫土（山土）であったが、遺構・遺物は検出できなかった。

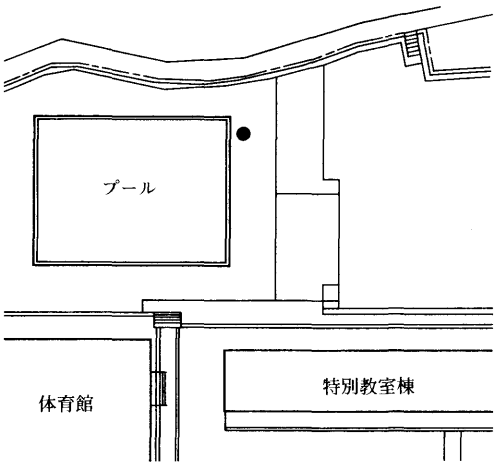


Fig.126　調査区位置図

2　教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成7年1月27日

調査面積　約7㎡

調査結果　新設給水管量水器用の桝設置地点の2m×1.5mを中心とし、あわせて管路部分の調査を実施した。

調査地点の土層は、現地表下約20cmまでが黒褐色土（表土）、約20～40cmまでが暗茶灰色土（耕土）である。これ以下は、約40～115cmが黄灰色粘土（河川堆積土）、約115～125cmが青灰色砂礫（河川堆積土）、約125～150cmが青灰色粘土（地山）となる。遺物は出土しなかった。

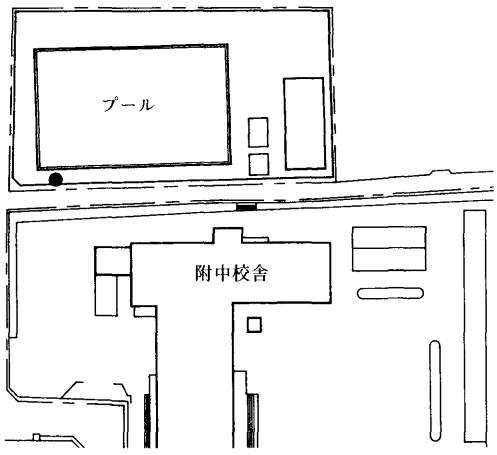


Fig.127　調査区位置図

第４節　光構内の立会調査

１　教育学部附属光小中学校プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区　光構内

調査期間　平成6年2月16日

調査面積　約19㎡

調査結果　平成５年度補正予算により、プール新営工事計画が具体化した。光構内では、工事予定地の南東側に隣接する武道場新営に伴う発掘調査で、古墳時代と中世の2面の遺構面を検出している[1)]ほか、工事予定地の北側約100mに所在する体育館の新営工事の際には、縄文時代から中世にかけての遺物包含層を検出している[2)]。したがって工事予定地全域に渡って遺物包含層が埋存する可能性が推測された。ただし新営工事は既存施設の基礎撤去後、同位置に計画されたため、地中の埋蔵文化財は既に消滅していると判断し、新営施設に付随する給排水管埋設工事に伴い必要となる新たな掘削について立会調査を行った。

調査はプール北側の量水器用の桝設置地点を中心に実施した。桝設置地点の掘削規模は約3m×2m、深度約１.8mに及んだ。この他に約1m×1m、深度約1mで2ヶ所の地点と管路部分の調査を実施した。

層序は、現地表下約30cmまでは黄褐色砂の表土、約30～40cmまでが暗茶褐色砂、約40～55cmまでが茶褐色砂、約55～110cmまでが明黄褐色砂、それ以下は白黄色砂となる。約30～55cmまでの暗茶褐色砂及び茶褐色砂には土器小片が混じり、遺物包含層と考えられる。混在の程度は、Ｃ地点付近では表土下の暗茶褐色砂でやや多めに検出したものの全般的には顕著ではなかった。出土遺物は近世陶磁器や時期不明の土器の小片で、図示できるものは含まれなかった。

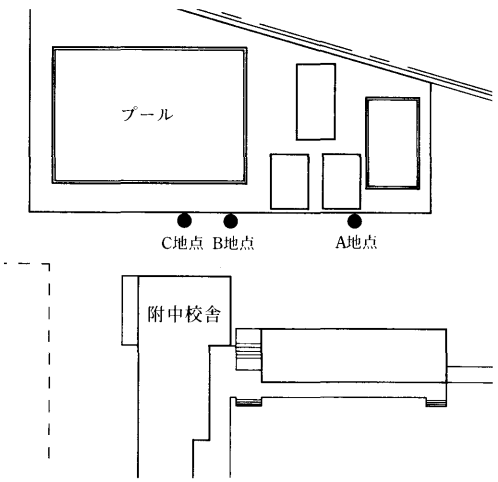


Fig.128　調査区位置図

［注］

１）山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』XII、1994年）

２）福本幸夫「御手洗遺跡」（『先史時代の光市』、1966年）

第５節　その他構内の立会調査

1　湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修工事に伴う立会調査

調査地区　山口市湯田温泉6丁目8－29（山口大学湯田温泉団地構内）

調査期間　平成7年1月13日・2月2日・2月9日

調査面積　約44㎡

調査結果　山口市による公共下水道整備に伴い、湯田宿舎下水施設もこれへの接続と併せて浄化槽、配管など既設下水道設備の改修が計画された。調査は、公共下水道接続用の大型枡が設置されるＡ地点、敷地の西端にあたるＢ地点、Ａ棟北側の配管埋設部分で敷地の北辺部分にあたるＢ地点からＣ地点に至る部分で実施した。

Ａ地点では、現地表下約62cmまでが黄赤褐色土の造成土、約62～94cmが水田耕土または床土と考えられる暗灰褐色砂質土で、これ以下が地山層と考えられる。約94～114cmが暗青灰砂質土、約114～135cmが暗灰褐色粘質砂、約135～167cmが暗灰青色粗砂でこの層の中位には黒褐色粘質土層が混在している。約167～178cmは暗灰色粘質砂、以下掘削深度の233cmまでは青灰色粘土である。遺構・遺物は検出しなかった。Ｂ・Ｃ地点の状況はほぼ均質で、現地表下約60cmまでが黄褐色土の造成土、約61～69cmが暗黄緑色土の漸移層、約69～86cmが暗灰色粘質土の水田耕土、約86～107cmが暗青灰色砂質粘土の水田床土、それ以下は暗灰色粘土の地山となる。地山は安定性が高く、Ｂ・Ｃ地点間で広範に認められたことから遺跡の立地も可能であるため、引き続き注意が必要である。

Fig.129　調査区位置図

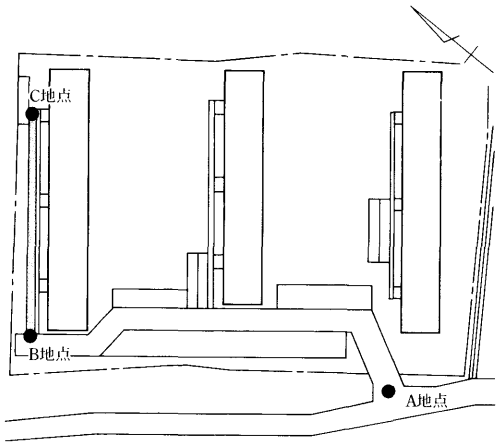


Fig.130　立会地点詳細位置図

付　　篇

付篇Ⅰ

実体顕微鏡によるガラス小玉の観察

村田　裕一

報告本編で述べられているように、グランド照明施設新設に伴う発掘調査では、Bトレンチの2棟の住居跡から合計37個という多数のガラス小玉が出土した。今回は、出土したガラス小玉について、実体顕微鏡による観察を行った。ガラス小玉の諸属性をより細かに観察し、製作上の特徴を抽出することが目的であった。本稿では、まずガラス小玉の製作工程について整理し観察の要点を確認し、次に実体顕微鏡を用いた観察により明らかとなったガラス小玉の細部の特徴について述べる。

1．ガラス小玉の製作工程と観察の要点

ガラス小玉の製作に関しては、これまで小瀬康行氏[1]、藤田等氏[2]、富樫雅彦氏・徳澤啓一氏[3]らにより具体的に研究されてきた。これらの研究では、ガラス小玉の製作技法として管切り法、鋳造法、巻き付け法などが挙げられており、それぞれの技法の内容が詳しく解説されている。これらの解説に照らし合わせると、本稿で取り扱うガラス小玉は、全て管切り法により製作されたものであることがわかる。

管切り法は、はじめに細長いガラス管を作り、これを短く切断してガラス小玉の原形を作り、これに調整を加えることでガラス小玉を作り出す方法である。実体顕微鏡を使用した精緻な観察を基にした論考として富樫雅彦氏・徳澤啓一氏[4]のものがある。ここでは管切り法が5つの製作工程として捉えられている。それぞれの工程と、そこで行われる作業内容は論文中の各所に分散して記述されているが、以下のように整理することができる。

ガラスの素材化…ガラス小玉製作のために原料を調合して素材ガラスを製造する工程
素材管成形…素材ガラスを用いてガラス管（素材管）を製作する工程
素材管整形…素材管を引き伸ばして細長いガラス管を製作する工程
原管成形…細長いガラス管を短く切断してガラス小玉の原形（原管）を得る工程
原管整形…原管に調整を加えてガラス小玉として完成する工程

以上の５工程により、ガラス小玉製作のそれぞれの段階で行われる作業内容が遺漏なく収録されている。しかし富樫・徳澤氏のいうところの「整形」の指し示す作業内容が、筆者には必ずしも「整形」即ち形を整えるにとどまらないと考えられること。「成形」と「整形」は音韻上の紛らわしさを持っていることの２点から、「成形」と「整形」の両方を用語として使用することは適切ではないと考える。また、両氏の定義する素材管成形の工程で製作される細長いガラス管を指し示す名称が設定されていないのにも不都合がある。したがって、本稿では、両氏が定義している工程とそこでの作業内容を踏襲しながら、以下のように用語を変更して解説したい。

ガラスの素材化→第１工程（素地製造工程）… ガラス小玉を製作するために成分を調合してガラスの素地（熔解ガラス）を製造する工程

素材管成形→第２工程（原材管成形工程）… 熔解ガラスを用いてガラス管（原材管）を製作する工程

素材管整形→第３工程（素材管成形工程）… 原材管を引き伸ばして細長いガラス管（素材管）を製作する工程

原管成形→第４工程（小玉原形成形工程）… 素材管を短く切断してガラス小玉の原形となるガラス管（小玉原形）を製作する工程

原管整形→第５工程（小玉原形調整工程）… 小玉原形に調整を加えてガラス小玉として完成する工程

このように整理すると、管切り法によるガラス小玉製作工程には、二つの特徴があることがわかる。一つは、全製作工程が前後二つの段階に大別できることである。前半の工程は、素材管を獲得するための第３工程までの工程で、後半の工程は素材管に調整を加えガラス小玉に仕上げるための第４工程以後の工程となる。

もう一つの特徴は、管切り法によるガラス小玉製作工程の最大の特徴と考えられるものである。それは、第５工程以外の各工程にはそれぞれで目的とされる生産物があり、各工程がそれを生産（成形）するために完結した工程であるという点である。特に、前半の工程に位置付けられる第３工程以前では、各工程で目的とされる生産物は、ガラス小玉製作の中間生産物というよりはその時点での完成品としての性格が強い。したがって、各工程では、加工対象であるガラスの外部形態のみならず内部状態が著しく変化するのである。

これは、例えば石器の製作工程のように、一連の製作工程のなかで素材に徐々に調整を加えて、最終生産物の形態に近付けて行くような製作工程とは全く異質であることがわかる。

このようなガラス小玉製作工程の特徴は、完成したガラス小玉から製作工程の復元を試みても自ずと限界が生じ、仮にガラス小玉の製作途中の生産物を観察できたとしても製作工程の作業内容は限定的にしか解明できないことを意味する。完成したガラス小玉に残された製作上の直接的な痕跡は、主に第4工程・第5工程のものであり、それ以前の工程の痕跡となると、第3工程において引き伸ばしが行われた事実を知るのみである。

したがって問題点として、第2工程で成形される原材管とその製作方法については全く不明であることが先ず挙げられる。次に、第4工程における素材管の切断方法は、折り取り、挟み切りなどの方法が推定されているものの実際の出土遺物から確定されていない点が挙げられる[5]。最後は第5工程に関連する点である。第5工程における小玉原形の切断面の処理とガラス小玉の形態を整えるための調整を目的とする作業の具体的内容として、これまでの研究において検証または想定されているのは、小玉原形を再加熱してガラスを半熔融状態にして表面張力を利用する方法（加熱調整[6]）、この表面張力に加えて小口部に押圧を加える方法（加熱押圧調整[7]）、冷却後にさらに研磨調整を加える方法（研磨調整[8]）の3種類である。しかし、加熱調整の具体的な作業内容は不明である。研磨調整の有無も個々のガラス小玉について、必ずしも確認されているわけではない。

このように細かい点では問題を残すが、管切り法が引き伸ばし→切断→調整という工程を経ることについては、これまでの研究での統一的見解となっている。何故なら、ガラス小玉内の気泡の観察から極めて合理的に説明することができるからである。ガラス小玉を顕微鏡で拡大観察すると、通常ガラス内部に多数の気泡を見ることができる。この気泡の生成は、小瀬氏の実験的研究により解明されており[9]、管切り法により製作されたことを反映するものとして重要視されている。すなわち小瀬氏は製作工程にしたがって気泡の状態が変化することを示したのである。第3工程の引き伸ばしで生じる細長い空洞である「気泡筋」は、第5工程の加熱調整のうちに分断されて「気泡列」を生じる。気泡列ははじめは極小さい気泡である「微泡」で構成されているが、加熱時間が長くなると接近した気泡同士が結合し、より大きな気泡を形成し「点在した気泡」となるとしている。小瀬氏はこのような気泡の形状変化を「気泡の3態」としてまとめた。この他に気泡がガラス小玉の表面に表れてあばた状を呈する場合がある。これを気孔と呼ぶ。これからわかるように気泡はガラス小玉観察の重要な項目である。

以上に整理した製作工程とガラス小玉の気泡と気孔の状態に注目しながら、第３工程での引き伸ばしの痕跡、第４工程での切断方法に関わる痕跡、第５工程での調整方法に関わる痕跡に注意して観察を行った。以下に特徴的な事例について解説する。

２．観察（ガラス小玉製作上の特徴）

直列する気泡（PL.91 (1)）

ガラス小玉の側部を観察すると、内部に紐孔と同方向の多数の筋を見ることができる。顕微鏡の倍率を上げると、無数の小さな気泡が整然と直列していることがわかる。微泡による気泡列である。小口径と側部長が1/1程度の円柱状で透明度の高いガラス小玉の場合は、良好に観察できる場合が多く、写真の221は特にわかりやすい例である。

表裏貫通した気泡（PL.91 (2)）

紐孔と同方向に小口部の表裏を貫通している気孔である。気孔管と呼ぶことにする。写真は219のものである。この気孔管は、小玉表裏の器面に近い部分で最大径を持ち中心部では細くなっている。気孔管は226・233の各１例とあわせて３例ほど確認した。226・233の例では気孔内に不純物が詰まっており219のような空洞状を呈してはいない。219のような気孔管は、第３工程で生じる気泡筋が、第５工程以後も残存しているものである。第５工程の加熱調整による半熔融状態とこのときの表面張力を考えると、空洞状であれば潰れてしまうであろうし、また気孔が直線的に貫通していることにも疑問が残る。226・233のように異物が詰まっていなければ、このような小さな気孔が加熱調整後も残存することは考えがたい。加熱調整時のガラス小玉の状態を考える上で重要である。

楕円形の気孔（PL.91 (3)）

通常みられる気孔は平面円形のものが一般的である。ところが写真の221の例では平面楕円形になっている。気泡筋の形態が残存したと考えられる。気孔の縁部（気孔の孔の縁）が鋭く角張っているのは、第５工程で研磨調整が行われたことを示すと考えられる。写真の気孔の右下側はアクシデンタルな剥離を起こしている。

表面の状態①（あばた状）（PL.91 (4)）

表面が半熔融したような状態に鈍くなった気孔が、ガラス小玉の表面全体に渡って分布しており全体として鈍いあばた状を呈す。濃紺色のガラス小玉に比較的多く見ることができる。写真は227の例である。第５工程の加熱調整による半熔融状態により、表面近くの気泡が気孔化したことにより生じたと考えられる。

表面の状態②（条痕）（PL.91 (5)）

表面に何条も並行する条痕がみられる場合がある。写真は250の例である。ガラスが冷えるときに表面と内部での冷え方の違いにより生じたものか、あるいは気泡列の有無など内部構造の違いによる冷え方の違いにより生じたものか、または表面の腐食により生じたものか、形成要因には３つの可能性が考えられる。顕微鏡で観察する限り、ガラス小玉表面の色調や光沢は条痕が見られないものと変わりはないことから、腐食に関わるものではない可能性が高いと考えられる。

表面の状態③（光沢・稜・つぶれた突起）（PL.91 (6)）

写真は257の小口部から側部にかけてである。表面は平滑で小口部には平坦面が形成され、側部にかけての曲面との境が明瞭で稜を形成している。小口部の平坦面は第５工程の研磨調整により形成されたものであろう。あるいは加熱押圧調整と研磨調整が組み合わされた可能性もある。さらにこの稜の近くには、イボ状の小さい突起が２ヶ所でみられる。注目すべきはこの突起が全体的に磨滅していることである。第５工程の研磨調整が行われたことを示すと考えられる。このガラス小玉は全体的にたいへん丁寧に研磨されている。

放射状に並ぶ気泡（PL.91 (7)）

小口部を観察すると、紐孔から放射状に気泡列がみられる場合がある。紐孔と同方向の気泡列が小口から側部にかけての器面にそってカーブした結果として放射状を呈しているのか、それともガラス小玉の内部で複数の気泡列が本来的に放射状に配置するのか判断が困難である。写真は221の例である。

不純物の入った気孔①（縁部が鋭い）（PL.91 (8)）

ガラスに含まれる不純物が表出し気孔を形成したものである。写真は221の例で、気孔の縁部が鋭くなっている。第５工程で研磨調整が行われたことを示すと考えられる。

不純物の入った気孔②（縁部が丸く外縁部がやや盛り上がる）（PL.91 (9)）

前出のものと同様に、ガラスに含まれる不純物が表出し気孔を形成したものである。写真は221の例で、この不純物は径約0.3mmでかなり大きい。注目すべきは、この気孔の縁部は丸く、外縁部（気孔の縁の外側）はやや盛り上がることである。気孔の縁部及び外縁部のこのような特徴は、研磨調整が行われなかったことを示していると考えられる場合がある[10)]。ところが、221のガラス小玉には先に挙げたように細長い気孔と不純物の入った気孔①が見られ、これらの気孔は縁部が鋭く研磨調整を行ったことの証拠と考えた。不純物の入った気孔②の縁部の状態と細長い気孔及び不純物の入った気孔①の縁部の状態は、同

一のガラス小玉にみられるものでありながら全く反対の作業内容を示すことになり矛盾を生じる。そこで、221のガラス小玉を全体的に見ると、表面は滑らかで気孔の縁部は鋭いものが多い。総合的に判断して、研磨調整が行われた可能性が高いと考えられる。したがって、不純物の入った気孔②は不純物が大きいために気孔縁部の研磨の妨げとなったこと、または気孔が小口曲面部にあるために研磨がかかりにくかったことが影響して盛り上がったままになっていると考えられる。一つの気孔の外縁部の盛り上がりだけでは研磨調整の有無を判断できないことを示す例である。

3．まとめ

以上、実体顕微鏡による観察に基づいて個別のガラス小玉の特徴について解説してきた。ここでは、これらの特徴をもう一度概観して、ガラス小玉製作との関わりから再編成してまとめとしたい。

第3工程での引き伸ばしを反映するものとして、直列する気泡、気孔管、細長い気孔、表面の状態②（条痕）等が挙げられる。いずれも紐孔と平行する方向に痕跡が残る。

第4工程での素材管の切断方法を反映するものは今のところ確実な例を指摘できない。かつて気泡が小口から側部にかけての器面の丸味に沿ってカーブすることを挟み切りの痕跡であるという指摘がなされたことがあった[11]。今回観察した放射状に並ぶ気泡でも気泡列が同様にカーブしていると見ることもできる。しかし、それらは概ね360°に渡り整然とした放射状を呈しており、挟み切りを反映したものであれば、挟み切られた方向に偏在するはずであり切断方法とは無関係と考えられる。拡大写真には挙げていないが、226は全体的に角張っており、第5工程の調整作業があまり入念に行われていないと見て取れる。小口部には剥離面を多数残しており、素材管からの切断作業で折り取りの方法が採用された可能性を指摘できる。

第5工程前半の加熱調整による半熔融状態を反映するものとして、表面の状態①（あばた状）がある。このような表面あばた状のガラス小玉は、小口径と側部長が1/0.6以下の環状のガラス小玉において良好に観察できる傾向がある。環状のガラス小玉は、半熔融状態の時間が長かった可能性が考えられる。気孔管は、加熱調整される際のガラス小玉に行われる前処理を示すものとして注目できる。ガラス小玉を半熔融状態にする場合、どのようにして紐孔を潰れないように確保しておくのかという点は興味深い問題である。気孔管はこれに手がかりを与える。気孔管は紐孔と比べるとはるかに孔径が小さい。半熔融状態に

あっては、当然のことながら、このような小さな気孔は閉塞してしまうはずである。にもかかわらずこのような気孔管がみられるということは、一つにはこの小玉が半熔融状態を経過しなかった可能性を考慮しなくてはならない。しかし、この小玉の外形の丸みを考えると、半熔融状態での表面張力を利用した調整作業を確実に行ったことを示す。したがって、半熔融状態にあってもこの気孔が閉塞しない状態が形成されていたということである。

ガラス小玉の紐孔を観察すると、ほとんどの場合、紐孔の内壁は歪みのない円筒状を呈している。したがって、ガラス小玉の縦断面形を見ると、紐孔の内壁は直線的となり、また小玉外形は丸味を帯びるため、D字を向かい合わせた形を呈することになる。ガラス小玉の外形が、第5工程の加熱調整で表面張力を利用して丸く整えられることを考えると、紐孔内壁側だけが直線的になるのは力学上理解し難いことである。内壁側にはガラスの膨張を許さない何らかの工夫がなされていたということが考えられる。

それではその工夫とはいったいどのようなものであったのだろうか。推測の域を出ないが、紐孔内には加熱調整時に紐孔の閉塞を防ぐことを目的とした真土が充填されていたと考える。小さなガラス小玉に行う作業であるから、そのとき一緒に気孔管にも真土が充填され、結果的に閉塞することなく残存したということは十分に起こりうることであろう。このような点を考慮して観察すると、小口側には不純物の詰まった気孔が多くみられる。

この処理の後に、軸に通したいわゆる串刺し団子のような状態ではなく、バラバラの状態で再加熱を行うのであろう。ガラス小玉の表面に熔着の痕跡が見られたり(223)、ガラス小玉同士が熔着したものが出土することがあるのはこのためであろう。

第5工程後半の調整作業として研磨調整が考えられている。細長い気孔、表面の状態③(光沢)、不純物の入った気孔①(縁部が鋭い)等は研磨調整が行われたことを示す例である。これに対して、不純物の入った気孔②(周辺部が丸く外縁部が盛り上がる)は研磨調整を行っていても、行っていないように誤解する可能性がある例として挙げた。研磨調整の有無の判断はこのように微妙であるが、気孔の他にもガラス小玉表面の状態を手がかりとして、ある程度判断することができる。ガラス小玉の表面が磨りガラスのようにきめの細かい艶消し状を呈している場合は研磨調整を行ったと考えても良さそうである。反対に、表面の状態①(あばた状)や表面の状態②(すじ)のように第5工程での半熔融状態や第3工程での引き伸ばしに起因すると考えられる痕跡をガラス小玉の表面に残している場合は第5工程で研磨調整を行っていないことを示していると言える。総じて研磨調整を行っている場合はガラス小玉の表面が整って平滑であり、行ってない場合はガラスが冷却して

固まったときの痕跡をそのままに残し飴が固まったような光沢をしている。いずれにせよ、研磨調整の有無は複数の特徴によって総合的に判断することが必要である。

以上が今回ガラス小玉の観察により抽出した製作上の痕跡である。これらの痕跡は、主に第3工程と第5工程に関わる痕跡である。第3工程に関わる痕跡は、これまで既に論考されてきており、小瀬氏により体系化されているものである[12]。一方、第5工程に関する痕跡は、従来より具体的に事例を提示することができたと考える。ただし、加熱押圧調整については確実な例を見出すことができなかった。

実体顕微鏡を使うことで初めて見ることのできるガラス小玉の表面と内部に残る様々な痕跡は、第3工程や第5工程での作業を考える具体的な手がかりになることは明らかである。特に第5工程における加熱調整の特徴や研磨調整の有無は、個々のガラス小玉で様々であり、製作地の系譜と関わる可能性もあり興味深い。今回は観察例の報告にとどまるが今後諸属性を加えて総合的に分析したい。

[注]

1）小瀬康行「管切り法によるガラス小玉の成形」（『考古学雑誌』第73巻第2号、1987年）

2）藤田等『弥生時代ガラスの研究』、名著出版、1994年

3）富樫雅彦・徳澤啓一「弥生時代におけるガラス小玉の研究－板橋区四葉地区出土の極小ガラス小玉の検討－」『東京考古』13、東京考古談話会、1995年

4）富樫雅彦・徳澤啓一前掲注3文献

5）小瀬康行（前掲注1文献）により研究略史として詳しく紹介されている。

6）小瀬康行（前掲注1文献）による実験で確かめられている。

7）富樫雅彦・徳澤啓一（前掲注3文献）により提示されている。

8）藤田等（前掲注2文献）、富樫・徳澤（前掲注3文献）により提示されている。

9）小瀬康行（前掲注1文献）

10）藤田等は「気孔の周囲にめくれた状態の有無で推測することができる」としている。（前掲注2文献、P.124）

11）柳田康雄「ガラス玉類の観察」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集、福岡県教育委員会編、1978年）

12）小瀬康行（前掲注1文献）

付篇Ⅱ

山口市内採集の縄文時代草創期石斧

小南　裕一

1　はじめに

ここで紹介する資料は、大畠富登氏が山口市内で工事中に偶然発見されたものである。大畠氏は市内の建設会社に勤務されており、遺跡の表土除去業務を通して面識があった村田裕一氏を介して平成11年2月に資料を山口大学埋蔵文化財資料館に寄贈され、調査と保管を依頼された。筆者は以前、資料館でこの資料を実見し、その特異性について村田氏と検討することがあったが、このたび資料紹介の機会を得ることができた。なお、資料は山口市大内長野で水田の造成工事中に採集されたとのことである。

2　資料の観察

資料は長さ17.9cm、幅8.1cm、厚さ2.9cm、重量586.7gを測る石斧である。石質はサヌカイトで、形態は平面形が幅広で短冊形、断面はレンズ状に近く扁平である。縦長の大型剥片を素材としており、裏面に主要剥離面が認められる。大まかな成形剥離の後、側縁部を中心に調整剥離を施し、右側縁に敲打を加える。正面ほぼ中央部に自然面もしくは節理面と考えられる部分があるが、風化が著しくいずれとも判断しがたい。刃部は両刃で、両面ともに研磨されているが、研磨方向は明確ではない。

3　資料の位置づけ

本資料は、形態・石質等から一般的な縄文時代の石斧とは異なり、その評価が問題となるが、刃部のみが研磨されていること、風化が著しいことなどから、縄文時代草創期のいわゆる神子柴系石斧である可能性が高い。山口県内では宇部市前田遺跡で神子柴系石斧が出土しているが、前田例は、平面形が長楕円形で断面形はやや厚めの三角形状を呈しており、本資料とは形態が異なる。しかし神子柴系石斧にはバリエーションがあり、本例のように平面形が幅広でレンズ状の断面形を呈するタイプも存在し、とりわけ四国地方西部に濃密に分布しているようである。また山口県内では、宇部台地上に位置する長桝、南方、

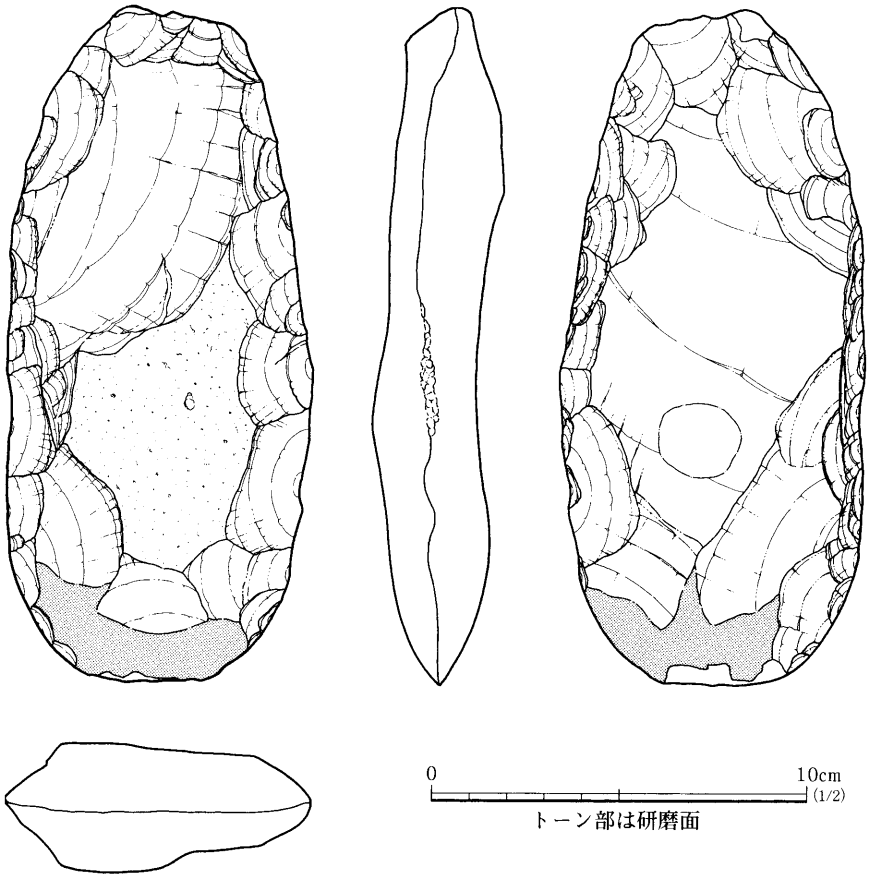


Fig.131　縄文時代草創期石斧実測図

岩上、藤尾ほかの各遺跡で細石核・細石刃が一定量出土しており、このうち藤尾遺跡では縄文時代草創期に位置付けられる船野型細石核が主体を占める。船野型細石核＋神子柴系石斧という組み合わせは大分県犬飼町市ノ久保遺跡等で確認されており、今後県内でも同様の組み合わせが検出される可能性がある。

山口県における縄文草創期関連の遺物は極めて少ない状況下で、今回紹介した資料の持つ意義は大きい。発掘調査による今後の資料増加も期待されるが、既報告資料の再検討も積極的に進めていくべきであろう。なお、本文執筆にあたり、発見者である大畠氏、資料を収蔵する山口大学埋蔵文化財資料館の諸氏、並びに杉原敏之氏、平ノ内幸治氏、吉留秀敏氏には多大なご教示・ご協力を賜った。文末ではあるが感謝の意を表したい。また参考文献の記載は、紙数の都合上省略した。ご容赦願いたい。

付篇Ⅲ

山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器

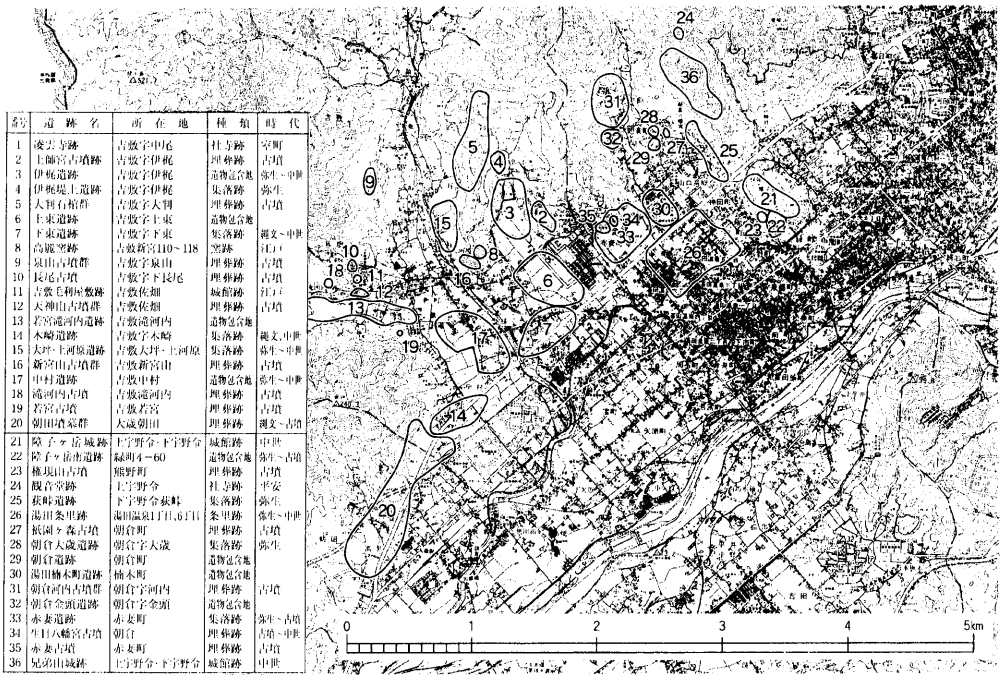
田畑　直彦

はじめに

山口県内では弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案がいくつか提出されているが、良好な一括資料が少ないため、その様相は他府県に比べて不明確である。この状況において、1974年に山口市教育委員会によって調査された湯田楠木町遺跡出土土器は、数少ない良好な資料と言える[1]。本資料は、1979年に小田富士雄氏・佐原眞氏によって長門の土井ヶ浜Ⅳ式[2]、周防の吹越式[3]に後続する庄内式併行の最古の土師器とされた[4]。その後、1981年に、山本一朗氏によって庄内式併行の防長10式終末に位置付けられた[5]。近年には豆谷和之氏により、布留式古相に位置付けられることが指摘された[6]。しかし、概報に掲載されている実測図の縮尺が小さいことなどから、資料として使用するには困難な状況にあった。今回、筆者は山口市教育委員会から再実測と報告の許可を得ることができたので、山口県内における古式土師器の基準資料として紹介し、同時期の土器についても考察する。

1　遺跡の概要

湯田楠木町遺跡は山口県の中央部、山口盆地の椹野川右岸の旧朝倉川の扇状地上に位置する。現在の国道９号線沿いは扇状地の扇端の湧水点にあたり、同９号線から南側には水稲耕作に適した低地が広がる。これらの立地を生かして、付近一帯は古くから開発が進んだ地域であった。本遺跡の西に隣接する赤妻遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、弥生時代前期の土坑、庄内併行期の住居跡などが検出されており、包含層からは弥生時代前期～終末期の土器が大量に出土している[7]。古墳時代においては、本遺跡から西に約500ｍの地点に、５世紀前半に比定される赤妻古墳が所在する。この古墳は主体部から位至三公鏡をはじめとする多くの副葬品が出土したことで知られている[8]。奈良・平安時代においては、赤妻遺跡で大量の須恵器や製塩土器、緑釉陶器が出土しており、周辺に吉敷の地名も残ることから、遺跡の一帯は古代における吉敷郡衙の有力な推定地である[9]。この他に、椹野川右岸には朝田墳墓群や下東遺跡、天神山古墳群など大規模な遺跡が多く、一



番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	凌雲寺跡	吉敷字中尾	社寺跡	室町
2	上御宮古墳跡	吉敷字伊祝	埋葬跡	古墳
3	伊祝遺跡	吉敷字伊祝	遺物包含地	弥生～中世
4	伊祝堤上遺跡	吉敷字伊祝	集落跡	弥生
5	大判石棺群	吉敷字大判	埋葬跡	古墳
6	上東遺跡	吉敷字上東	遺物包含地	
7	下東遺跡	吉敷字下東	集落跡	縄文～中世
8	高嶺堡跡	吉敷新宮110～118	堡跡	江戸
9	泉山古墳群	吉敷字泉山	埋葬跡	古墳
10	長尾古墳	吉敷字下長尾	埋葬跡	古墳
11	吉敷毛利屋敷跡	吉敷佐畑	城館跡	江戸
12	大神山古墳群	吉敷佐畑	埋葬跡	古墳
13	若宮遺跡	吉敷滝河内	遺物包含地	
14	木崎遺跡	吉敷字木崎	集落跡	縄文～中世
15	大坪・上河原遺跡	吉敷大坪・上河原	集落跡	弥生～中世
16	新宮山古墳群	吉敷新宮山	埋葬跡	古墳
17	中村遺跡	吉敷中村	遺物包含地	弥生～中世
18	滝河内古墳	吉敷滝河内	埋葬跡	古墳
19	若宮古墳	吉敷若宮	埋葬跡	古墳
20	朝田墳墓群	大歳朝田	埋葬跡	縄文～古墳
21	陶ヶ岳城跡	上宇野令・下宇野令	城館跡	中世
22	陶ヶ岳古墳遺跡	緑町4－60	遺物包含地	弥生～古墳
23	権現山古墳	熊野町	埋葬跡	古墳
24	観音堂跡	上宇野令	社寺跡	平安
25	荻峠遺跡	下宇野令荻峠	集落跡	弥生
26	湯田条里跡	湯田温泉1丁目、6丁目	条里跡	弥生～中世
27	祇園ヶ森古墳	朝倉町	埋葬跡	古墳
28	朝倉大歳遺跡	朝倉字大歳	集落跡	弥生
29	朝倉遺跡	朝倉町	遺物包含地	
30	湯田楠木町遺跡	楠木町	遺物包含地	
31	朝倉河内古墳群	朝倉字河内	埋葬跡	古墳
32	朝倉金頭遺跡	朝倉字金頭	遺物包含地	
33	赤妻遺跡	赤妻町	集落跡	弥生・古墳
34	牛王八幡宮古墳	朝倉	埋葬跡	古墳～中世
35	赤妻古墳	赤妻町	埋葬跡	古墳
36	見弟山城跡	上宇野令・下宇野令	城館跡	中世

Fig.132　山口盆地北半の主要遺跡分布図（増野編1997を一部改変）

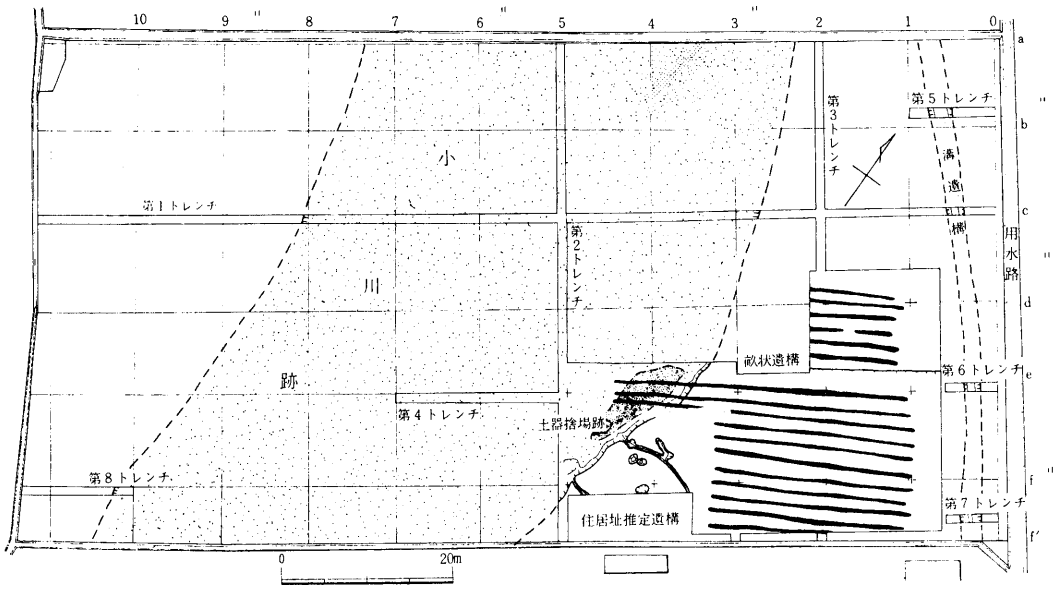


Fig.133　湯田楠木町遺跡調査区位置図（内田他1975を一部改変）

貫して山口盆地の拠点的な地域であった[10]（Fig.132）。

発掘調査では、縄文時代後～晩期から古墳時代の河川跡、古墳時代前期の住居址推定遺構と土器捨て場跡、中世の畑と推定される畝状遺構、溝などが検出された。今回取り上げる古式土師器は、河川跡の東肩から約1～5mの範囲、約40㎡の傾斜面において、河川跡の埋土である黒褐色シルト層を掘削中に検出された。出土土器には少量の須恵器も含まれていたが、小片で摩滅しており、河川跡の遺物が混入したものとされた。

2　土器捨て場跡出土土器の現況

今回、山口市教育委員会文化財保護課の収蔵庫で保管を確認できた古式土師器は、パンケース5箱分、51個体分である。そのうち、写真や実測図で概報掲載土器と判断できたものは38個体、未掲載土器が13個体である。Tab.10に「概報写真」があるものは概報の写真図版で、そうでないものは実測図で判断しているので参照されたい。概報では99個体の実測図が掲載されているが、残念ながらそのうち半数以上の所在が不明である。混入したとされる須恵器の所在も不明である。概報の記述及び未掲載土器の割合から考えると、本来、図化可能な土器は130～140個体程度存在した可能性が高い。今回の検討で、新たに接合する土器、接合はしないが、接着剤の剥離痕がみられる土器を確認した。

また、他遺構出土遺物の混入の可能性があるため、注記を検討した。注記はYK－1の調査名、土器捨て場跡の位置するE－4・5の地区名、取り上げ番号があるものが最も多い。トレンチⅥとあるFig.140－37は試掘調査時の出土と考えられる。以下、日付は5月29日から6月9日まで存在する。注記の「NO」は取り上げ番号で、日毎で番号をつけて土器を取り上げたようである。また、5月29日から6月4日までの地区名がE－4、それ以降がE－5になっており、土器の取り上げは東から順に行われたのであろう。注記で土器を分類すると以下のようになる。①YK－1（調査名）E－4・5（地区名）、NO（取り上げ番号）のあるもの、②YK－1（調査名）E－5（地区名）とあるもの、③YK－1（調査名）土器捨て場跡の注記を持つもの、④YK－1（調査名）があり、以下判読できないもの、⑤YKG－8とあり、土器捨て場跡ではない注記のあるもの、⑥注記のないもの。

このうち、他遺構の混入の可能性があるのは⑤・⑥である。⑤は8が該当する。しかし、土器捨て場跡出土土器として遺物写真がある。⑥は5・10が該当する。10は土器捨て場出土土器として遺物写真がある。以上、注記と遺物写真から、5を除くといずれも土器捨て場跡出土と考えられる。5も他と同時期であり、土器捨て場跡出土の可能性が高い。

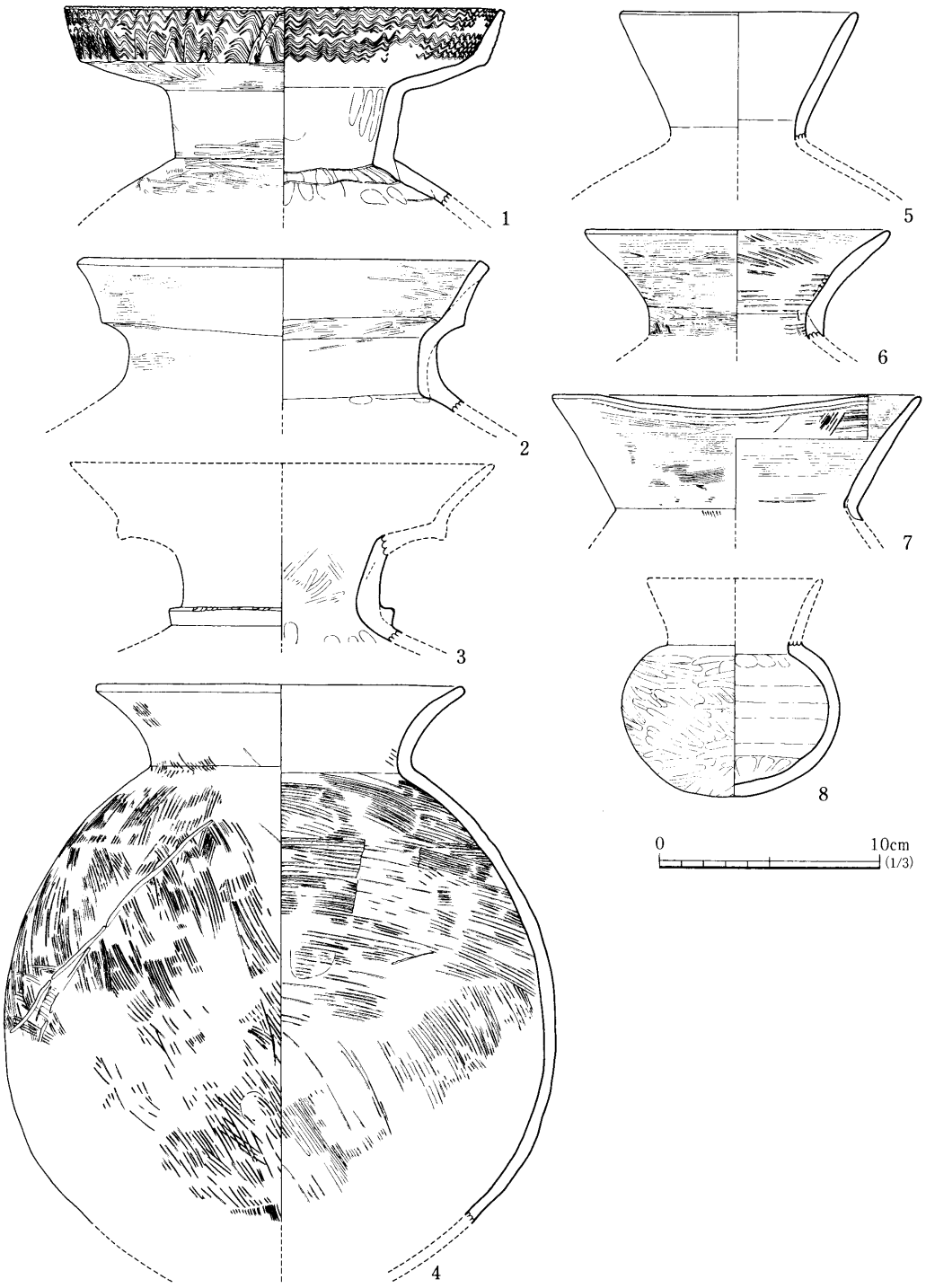


Fig.134　湯田楠木町遺跡出土の壺(1)

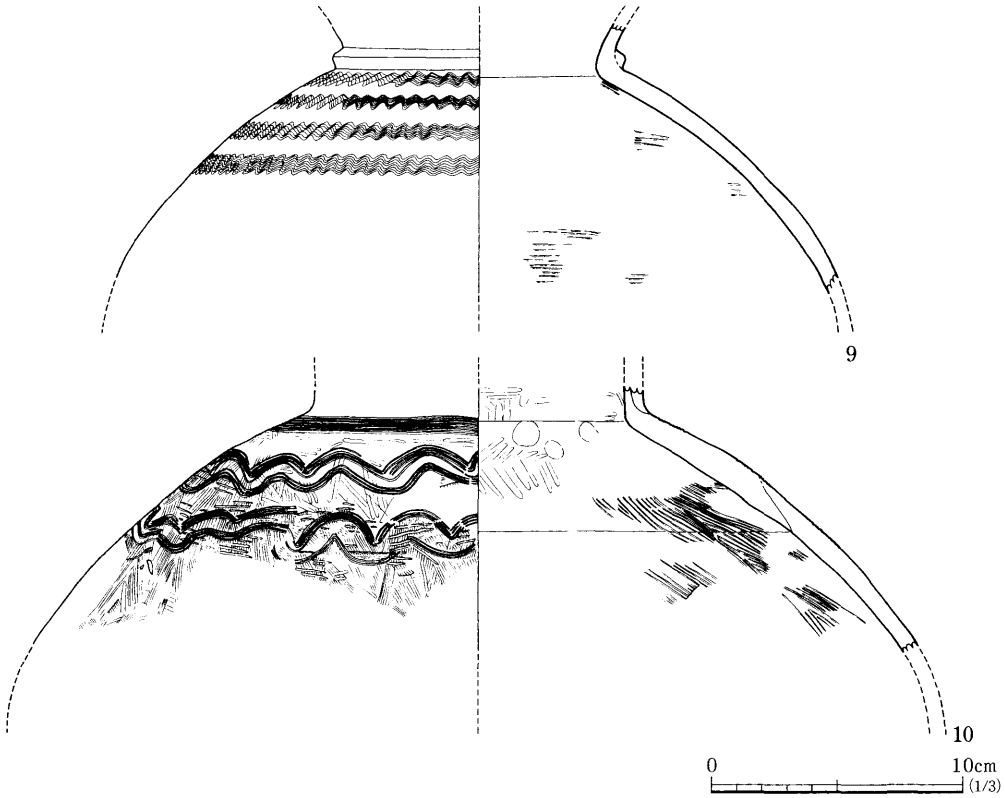


Fig.135　湯田楠木町遺跡出土の壺(2)

3　土器捨て場跡出土土器

(1) 壺 (Fig.134・135・136－1～11)

1～3は二重口縁壺である。1は口縁部内外面に4条・5条単位の櫛描文を施し、口唇部には刻みを施す。頸部～胴部外面にはヨコミガキを施す。胴部内面には粘土帯接合痕が明瞭に残り、指頭痕が認められる。2は口縁部の立ち上がりが短く、歪みがみられる。3は二重口縁壺の頸部の破片である。1条の刻目突帯を持ち、内面は外への屈曲部を残す。4は広口壺である。口縁部は大きく外反し、胴部は球形である。胴部外面にはタテハケ、内面は、上半がヨコハケ、下半が左上がりハケである。5は長頸壺、6・7は直口壺である。7は口縁部の一部が注口状になる。8は小型丸底壺の底部である。前述のように混入の可能性がある。9・10は二重口縁壺の胴部である。9は頸部に1条の貼付突帯、胴部に8条単位の櫛描文を4段施す。外面の風化が激しく調整は不明。10は胴部に左上がり及び平行タタキの後、タテハケを施す。その後、7・8条単位の櫛描波状文を2段に渡って施す。

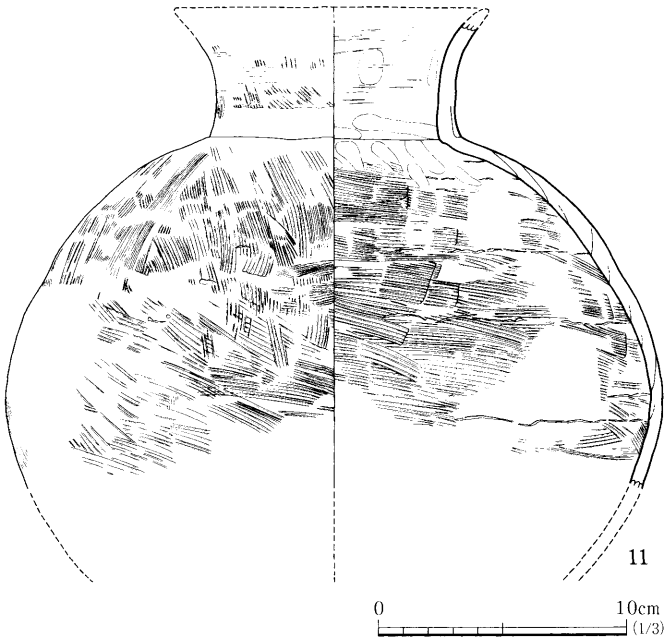


Fig.136　湯田楠木町遺跡出土の壺(3)

11は直口壺である。口縁端部が欠損している。胴部外面は左上がり及びタテハケを施す。胴部内面は接合痕が残り、ヨコハケを施す。口頸部界の内面には顕著に指頭痕がみられる。

(2) 甕

(Fig.137・138－12～25)

甕の分類は久住氏の分類[11]を参考に行った。

a　在地系甕（Fig.137－12～14）

在地系甕は舌状口縁で体部が倒卵形、ハケ仕上げの弥生時代終末の系譜をひく甕で、口縁部のヨコナデやケズリに布留系甕の強い影響が認められる。12～14は口縁部内外面にヨコナデを施す。13は口縁部の粘土帯接合痕が段状に残り、胴部外面はタテハケを施す。内面は接合痕と指頭痕が顕著に残る。

b　伝統的Ｖ様式系甕（Fig137・138－15～24）

伝統的Ｖ様式系甕は口縁部が短く、直線的に外反し、外面に平行ないし左上がりのタタキを施す。15は口縁部先端を強く折り曲げており、内面には明確な稜線を持つ。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面はタタキをわずかに残し、タテハケ、内面は右上がり及び右方向のケズリを施す。このため器壁は他と比べて薄い。口縁部のヨコナデや体部外面のタテハケ、球形の器形に布留系甕の影響を受けている。16は口縁部内外面にヨコナデを施し、胴部外面に粗い平行タタキを施す。胴部内面には茎状工具による粗いナデを施す。17・18は口縁部内外面にヨコナデを施し、口縁部内面には粘土帯接合痕が段状に残る。胴部内外面はナデを施す。19は口縁部を強く折り曲げる。球形で丸底。口縁部外面はヨコナデ。内面にはヨコハケを施す。胴部外面にタテハケを施す。内面は上方向のケズリの後、タテハケを施す。20は胴部上半に右上がりのタタキを施し、下半はタタキをナデ消す。

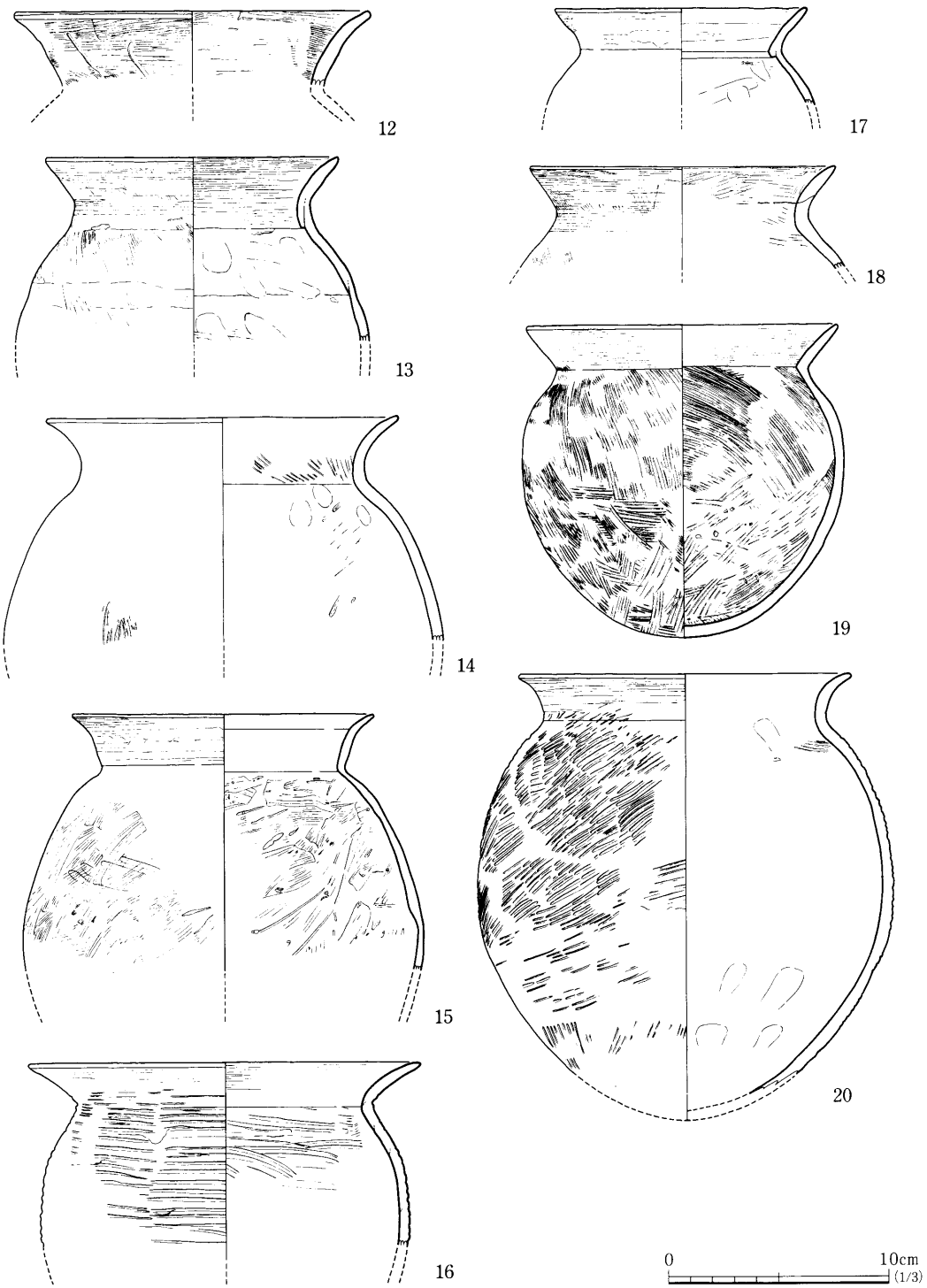


Fig.137　湯田楠木町遺跡出土の甕(1)

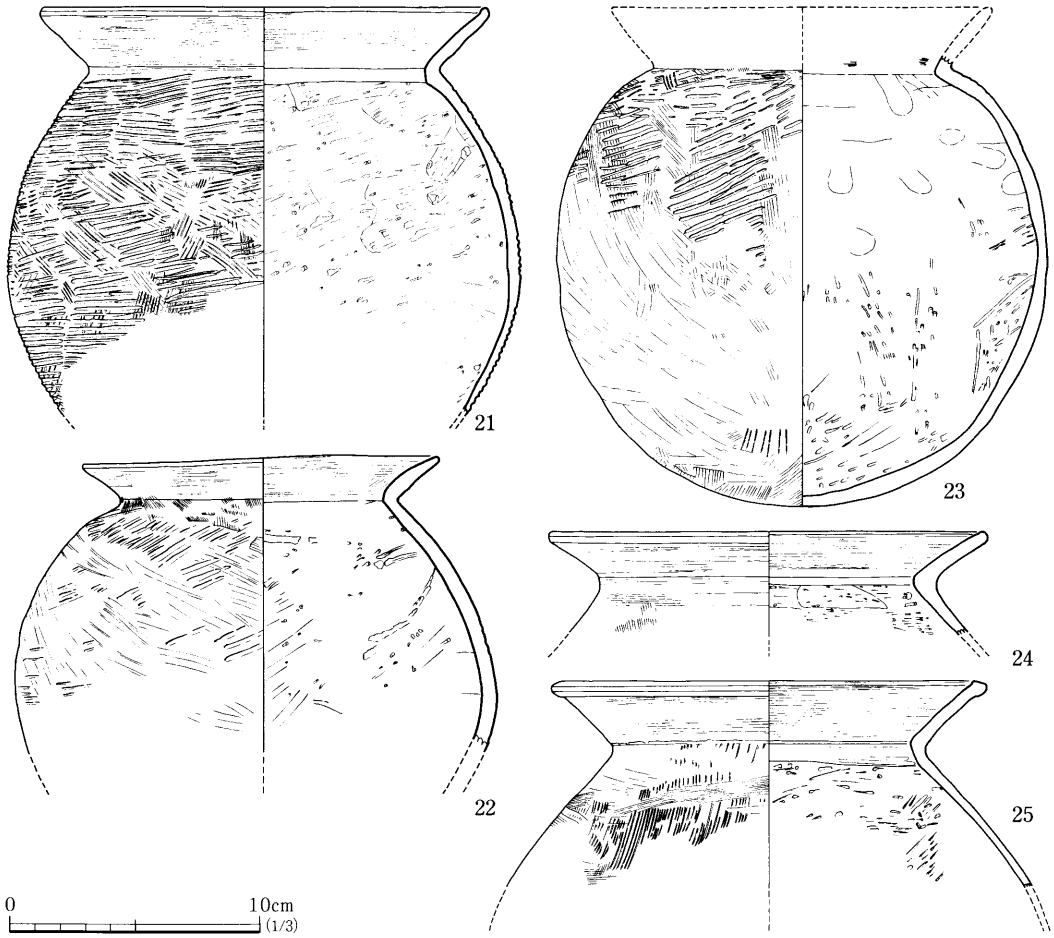


Fig.138　湯田楠木町遺跡出土の甕（2）

21は口唇部上端をわずかに肥厚させる。口縁部内外面には丁寧な回転ヨコナデを施す。胴部外面には平行ないし右上がりのタタキを施し、下半はタテハケにより消している。内面は右上がりのケズリを左から右方向に施す。22・23は右上がりのタタキを施し、タテハケ、ナデで消している。内面は右上がりのケズリを施すが、21に比べてケズリは荒く器壁は厚い。

c　布留系甕（Fig.138−25）

24・25は布留系甕である。25は口縁部の内面を肥厚させている。頸胴部界の屈曲は鋭く、口縁部内外面には回転ヨコナデを施す。胴部外面はタテハケの後ヨコハケ・ナデを施す。内面は右上がりのケズリを左から右方向に施す。今回確認した布留系甕はこの2点のみであるが、概報には他に25と同様の口縁部が3点掲載されている。

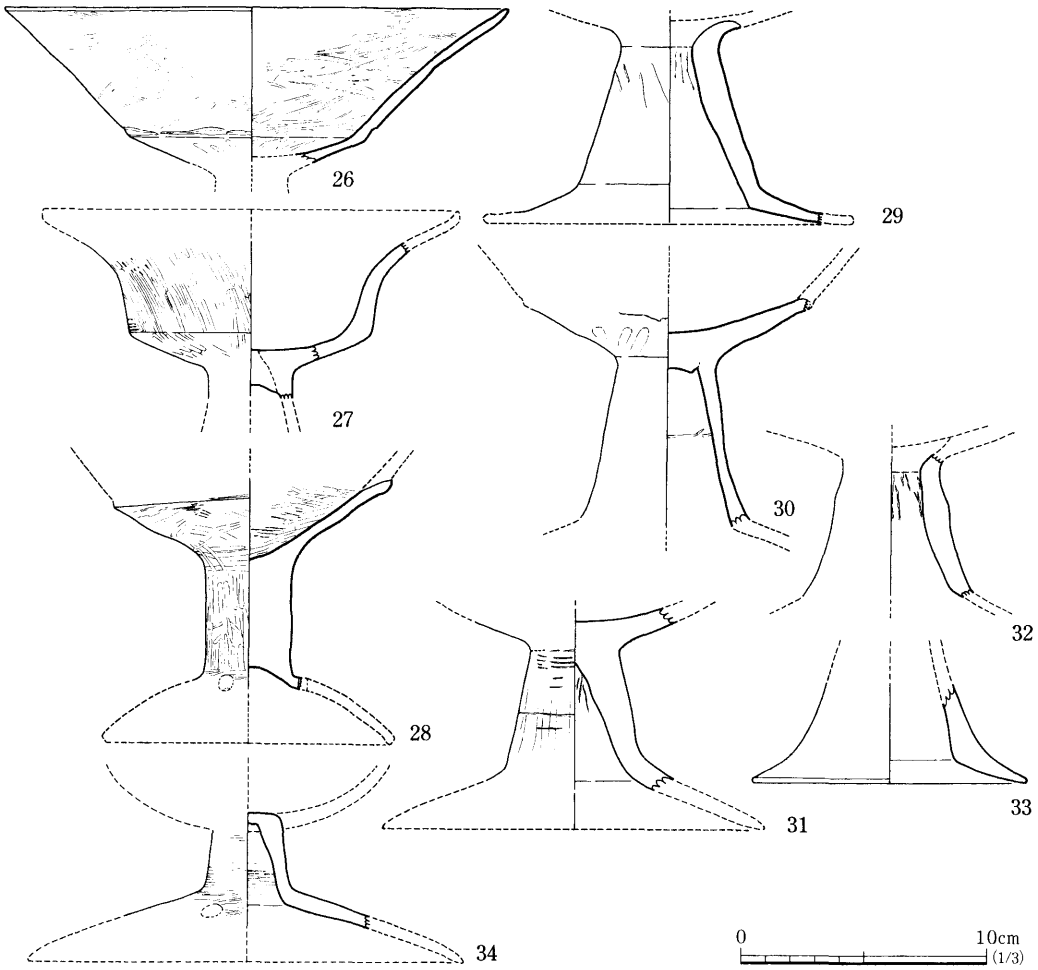


Fig.139　湯田楠木町遺跡出土の高坏

(3) 高坏 (Fig.139－26～34)

26は布留系高坏の坏部である。口縁部は大きく外反し、先端がわずかに内湾する。内外面に細かなヨコミガキを施す。精製器種B群[12]の技法であるが、胎土中には比較的砂粒を含む。概報には同様な坏部が他に2点掲載されている。27は坏部上半で屈曲する高坏である。下半は接合しない同一個体片を合成している。28は脚部が中実の伝統的V様式系高坏である。坏部上半の接合面で剥離している。29～32は坏～脚部である。いずれも風化が激しい。34は小型高坏の脚部である。坏部との接合面で剥離している。裾部に1ヶ所穿孔する。精良な胎土で、精製器種B群に相当する。33は高坏の裾部である。裾部が短く肥厚していることから、古墳時代中期の混入の可能性が高い。

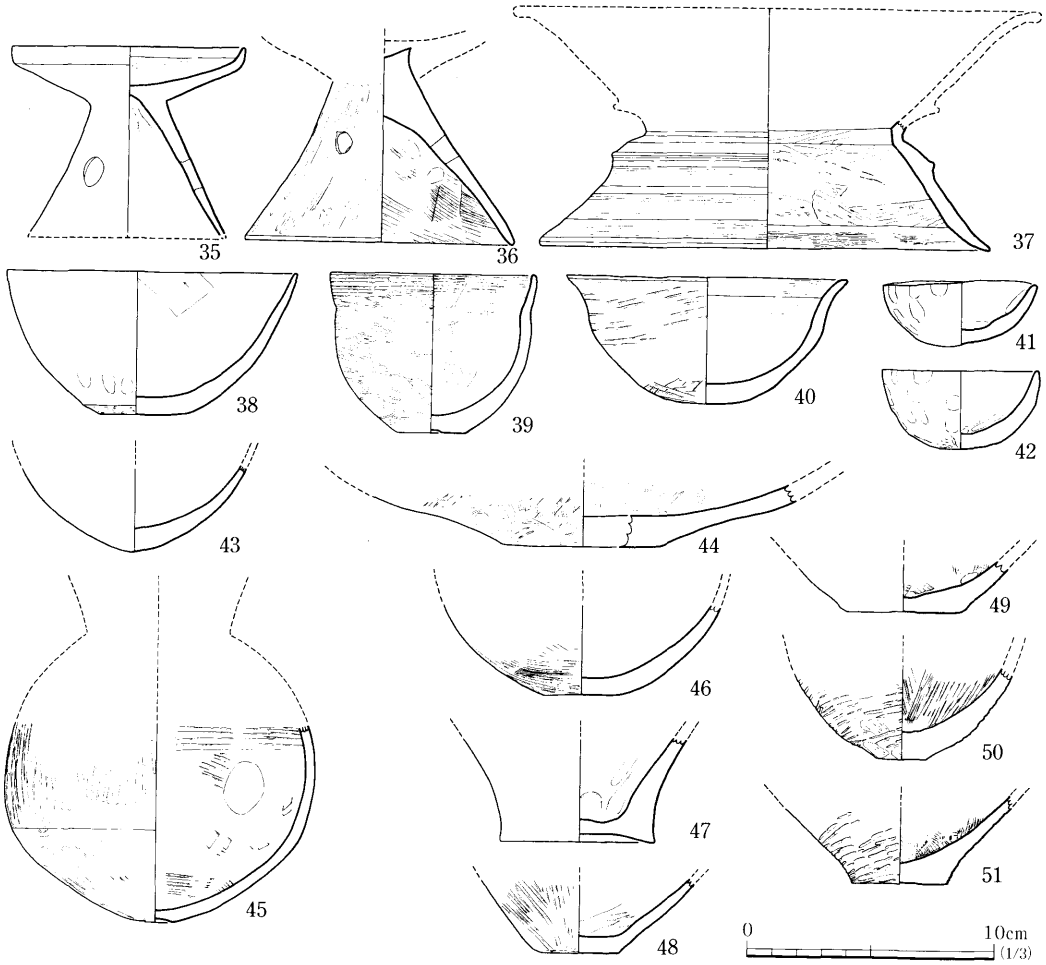


Fig.140　湯田楠木町遺跡出土の器台・底部

(4) 器台 (Fig.140－35～37)

35・36は小型器台である。35は口縁部が短く外方へ立ち上がる。脚部には1ヶ所穿孔する。精良な胎土で、内面にヨコミガキを施す他は調整は不明。その特徴から纒向編年の纒向Ⅲ式後半[13]、纒向4類[14]、布留0式[15]に併行すると考えられる。37は山陰系鼓形器台である。上半を欠損している。底径が小さく、胎土においても他の土器と特に変わらないので、在地で製作された可能性が高い。残存器高は5.3cmである。藤田憲司氏にしたがい、くびれ部の上半と下半の誤差を1：1～1：3とすると[16]、器高は10.6～12.2cmと推定できる。くびれ部径は10.5cmで、高さ/くびれ部径は1.0～1.2となり、かなり扁平である。藤田氏のⅤ期、いわゆる小谷式の段階に相当し、布留Ⅰ式、纒向4類に併行すると考えられる。

(5) 鉢 (Fig.140－38～42)

38は直口で平底の鉢、39は口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面に細かなヨコミガキを施す。精製器種B群の技法であるが、胎土中には比較的砂粒を含む。40は小型丸底鉢である。41・42はミニチュアの鉢である。手づくねで製作されたもので、内外面に指頭痕を多数残す。

(6) 鉢・壺底部 (Fig.140－43～46)

43は底部がやや尖る。壺もしくは鉢の底部と考えられる。44は大型壺の底部である。45は底部は小さく凹底で、胴部下半で屈曲して立ち上がる。外面はタテハケの後タテミガキを施す。内面はヨコハケ後ナデ。長頸壺の底部か。46は底径が小さく、壺もしくは鉢の底部と考えられる。

(7) 甕底部 (Fig.140－47～51)

47はやや上底の底部である。弥生時代中期のもので、混入であろう。48・49は、かなり明確な平底であることから在地系甕の底部の可能性もあるが、弥生時代後期の混入である可能性が高い。50・51は伝統的Ⅴ様式系甕の底部である。ともに小さな平底である。50は外面にやや右上がりのタタキを施す。内面はタテハケ及びタテミガキを施す。51は外面に右上がりのタタキ、下半は下から上へケズリを施す。内面にはタテハケを施す。

4　編年的位置とその特徴

土器は畿内系が主体で、他の系統は少量の在地系の甕と山陰系鼓形器台が1点含まれるに過ぎない。甕には伝統的Ⅴ様式系が多い。布留系の土器は甕、高坏、器台があり、伝統的Ⅴ様式系、在地系の土器に大きな影響を与えている。時期的には、小型器台や山陰系鼓形器台から、纒向3式の後半～纒向4式、纒向4類、寺沢編年の布留0式後半～布留Ⅰ式前半に併行するものと考えられる。東部では若干の混入がみられるが、下東遺跡YD－1・4[17]出土土器がほぼ同時期と考えられ、布留系の甕の影響を受けた伝統的Ⅴ様式系の甕、在地系の甕が出土している。県西部では、吉永遺跡Ⅲ－東地区SB－3・5[18]、吉田馬場遺跡A地区LD009・010[19]、秋根遺跡LD066第1層[20]、延行条里遺跡Ⅸa層[21]、秋根遺跡LK091・72・80、下七見遺跡Ⅰ第7地区SB－1・SD－02[22]出土土器が同時期と考えられ、山陰系の土器が多数出土している。

しかし、これらの資料には精製器種がほとんどなく、布留系を模倣するものと在地系や伝統的Ⅴ様式系の土器が多い。この状況において、湯田楠木町遺跡出土土器の様相は特異

である。山口盆地では前方後円墳の出現は5世紀前半の新宮山古墳[23]が最古であり、それまでは主に箱式石棺などを主体部とする方形台状墓が営まれている[24]。副葬品も鉄器や小型の鏡を持つ程度で、弥生時代以来の地域色を強く保持している。その一方で、甕のみならず、精製器種も揃った布留系の土器群の出現をどう捉えるべきであろうか。精製器種や他と明確に異なる胎土を持つものは、土器製作者の移住や搬入によるものと考えられる。山口盆地の勢力は地域色を保持しつつ、周防灘沿岸の制海権を掌握し、「正始元年」銘の三角縁神獣鏡を有する県内最古の前方後円墳である竹島御家老屋敷古墳[25]を築いた畿内系の勢力と早い段階から密接な関係にあったのであろう。

5　山口県内における弥生時代終末期～古墳時代前期の土器について

近年、西部では、土井ヶ浜Ⅳ式と秋根の間、東部では吹越式と湯田楠木町の間の庄内式新相に併行するまとまった資料が柳瀬遺跡E地区LS005[26]で出土している。在地系の甕（Fig.141－4・5）には前段階までみられた甕内面のケズリがなく、ヨコハケ・ナデを施す。外面のタタキとともにV様式系甕の影響が考えられる。伝統的V様式系甕（Fig.141－6）は胴部が球形、尖底で口縁部が短く直線的に外反する。胴部外面は、平行タタキの後、タテハケを施す。在地系高坏（Fig.141－9・10）は、吹越式・土井ヶ浜Ⅳ式のものと比べて坏部の屈曲が緩く、かつ長くなり、直線的に外反する。次段階の秋根遺跡LD066第1層出土の高坏はさらに坏部が直線的に外反し、深くなる。東部の資料が充実すれば、高坏を指標に西部と東部の併行関係が明らかにされるであろう。

この他、吉永遺跡Ⅲ－東地区SB－5では、伝統的V様式系甕がまとまって出土している（Fig.142－2～6）。底部輪台技法で、右上がりのタタキを施し、内面にヨコハケを施す。布留系甕（Fig.142－7）、高坏（Fig.142－10）は湯田楠木町遺跡出土土器と時期的にほぼ併行する土器である。ただし、西部で、湯田楠木町遺跡に併行する資料には倒卵形で平底の伝統的V様式系甕は少ない。本資料は時期的に若干先行する可能性もあるが、現段階では湯田楠木町遺跡出土土器とほぼ同時期の資料と捉えておきたい。

弥生時代終末期後半においては、西部・東部とも複合口縁壺・器台は良好な資料がなく、様相は不明である。また、庄内系甕は極めて少なく、吉田遺跡河川跡、綾羅木郷遺跡包含層[27]、吉田馬場遺跡LD009・010などから出土しているに過ぎない。これらは時期的にも湯田楠木町遺跡出土土器と併行するものと考えられる。したがって、現段階では畿内系土器は伝統的V様式系甕がみられるのみで、複合口縁壺・器台を除いた在地系土器との共伴関係

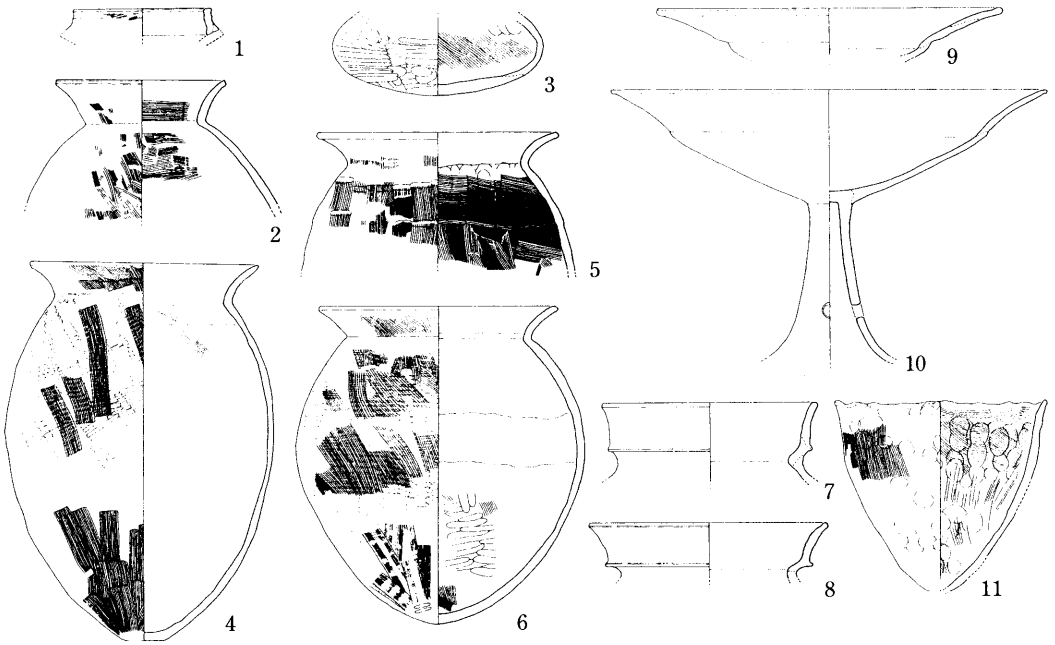


Fig.141　柳瀬遺跡LS005出土土器（S＝1/6）

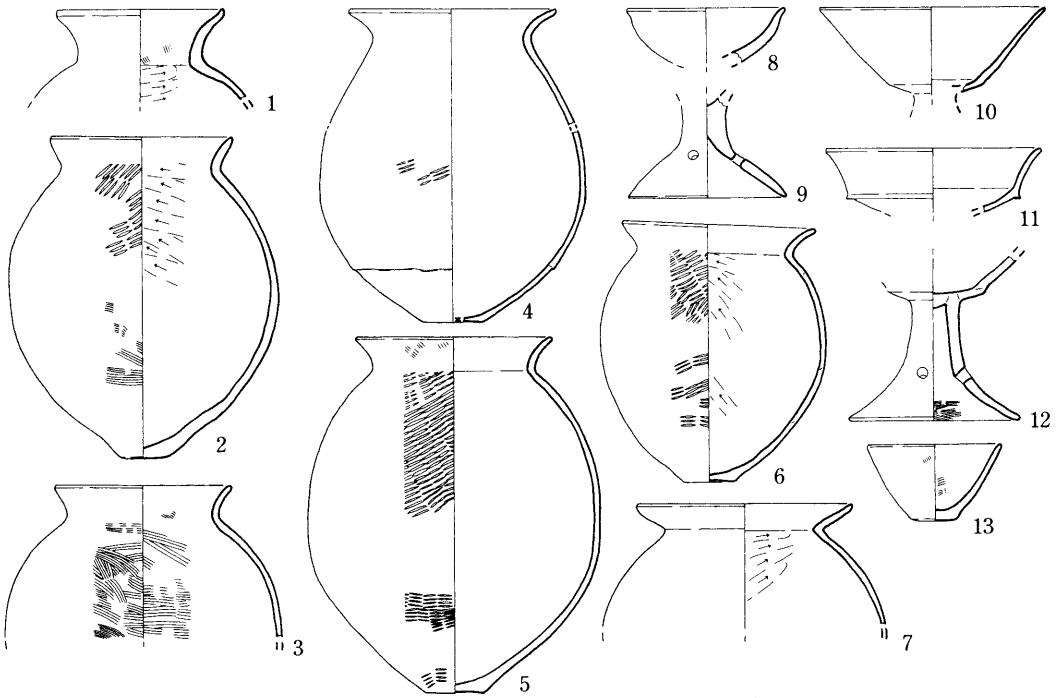


Fig.142　吉永遺跡Ⅲ－東地区SB－5出土土器（S＝1/6）

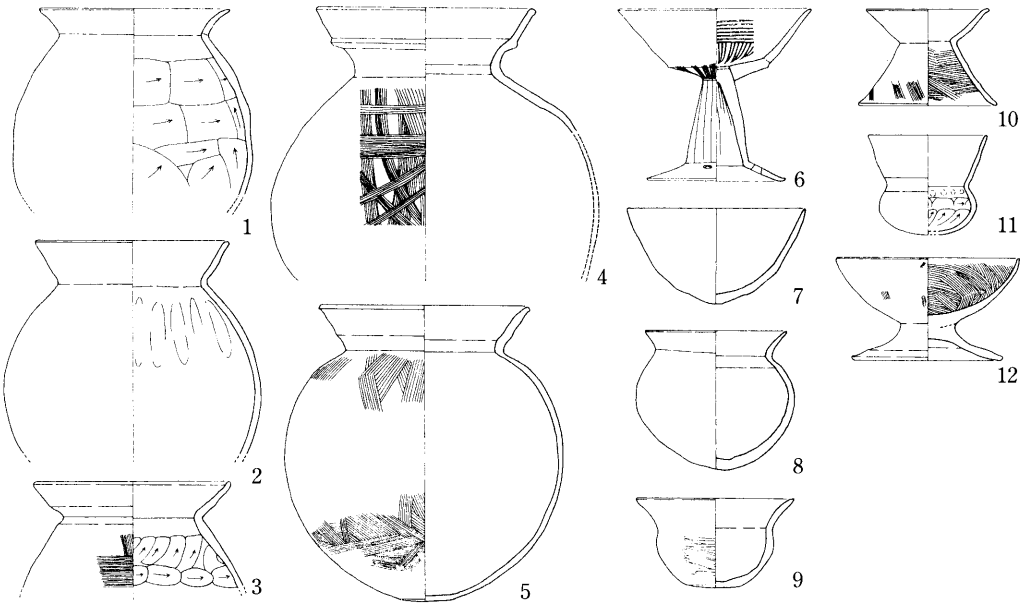


Fig.143　秋根遺跡LK093出土土器（S＝1/6）

しか確認できない[28]。遺跡によって様相が異なることが予想され、良好な資料の蓄積が望まれる。

湯田楠木町遺跡出土土器に後続するのは、秋根遺跡LK093出土土器である。布留系の脚柱状部が細長く、裾部が短く外反する布留系高坏（Fig.143－6）、X形小型器台（Fig.143－10）から、布留Ⅱ式、纒向5類に併行すると考えられる。この間を埋める布留Ⅰ式の後半に併行する良好な資料は得られていない。複合口縁壺の下限は不明だが、恐らくこの前後に消滅するのであろう。甕は布留系甕（Fig.143－3）のほか、依然として在地系甕が残存する（Fig.143－1・2・5）。山陰系二重口縁壺（Fig.143－4）は成形・調整とも雑になり、頸部が太くなる。なお、県東部では良好な資料に恵まれていない。

以上の資料から、現段階では吹越式・土井ヶ浜Ⅳ式を弥生終末Ⅰ期とし、柳瀬遺跡E地区LS005を弥生終末Ⅱ期、湯田楠木町遺跡出土土器を古墳前期Ⅰ期とし、秋根遺跡LK093出土土器を古墳前期Ⅱ期と仮称しておきたい。畿内との併行関係は弥生終末Ⅰ期を纒向2類、弥生終末Ⅱ期を纒向3類、古墳前期Ⅰ期を纒向4類、古墳前期Ⅱ期を纒向5類と考えている。詳細については、別稿を準備中である。

おわりに

以上、湯田楠木町遺跡出土土器を再報告し、加えて、山口県内の弥生時代終末から古墳時代前期の土器について若干の検討を行った。山口県内では弥生終末Ⅱ期に伝統的Ⅴ様式系の土器が流入し、古墳前期Ⅰ期に至って、布留系土器が流入する。湯田楠木町遺跡出土土器は精製器種を含む布留系土器主体の土器群であり、在地系、伝統的Ⅴ様式系甕にも布留系甕の強い影響がみられる。本資料は、山口県内のみならず、西部瀬戸内における布留系土器の出現を探る上で重要な一括資料と評価できよう。しかし、この時期を境に消滅していく複合口縁壺や器台など在地系土器の下限については不明な点が多い。また、遺跡によって土器の様相が相当に異なることが予想される。資料の増加と蓄積を踏まえ、今後さらに検討を続ける所存である。

謝辞

本稿の内容については、山口考古学談話会、古文化研究会で発表させていただく機会を得た。発表と資料の実見においては、下記の諸先生、諸氏、諸機関のお世話になった。また、挿図のトレースの大部分は鳴谷みね子氏にお願いした。記して感謝申し上げます。

石井龍彦、小田富士雄、河田聡、古賀信幸、久住猛雄、武末純一、乗安和二三、中川寧、村田裕一、豆谷和之、溝口孝司、濱崎真二、藤本有紀、吉瀬勝康、下関市教育委員会、豊浦町教育委員会、山口市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター（敬称略）

[注]

1) 内田　悟他『山口市字楠木町　湯田中学校造成地　湯田楠木町第Ⅰ地区発掘調査概報』（山口市教育委員会、1975年）

2) 金関　恕「山口県豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式土器」（『弥生式土器集成資料編』、1968年）

3) 小野忠熙、山本一朗、乗安和二三ほか『吹越遺跡第２次調査概報』（平生町教育委員会、1972年）

4) 小田富士雄・佐原　眞「2　北九州と西部瀬戸内における弥生土器編年」（『小野忠熙編　高地性集落の研究資料編』、1979年）

5) 山本一朗『防長の土師器』（『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所、1981年）

6) 豆谷和之「付篇Ⅱ　吉田遺跡第Ⅰ地区Ａ区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅺ』、1993年）豆谷和之「196　湯田楠木町遺跡」（『山口県史資料編考古１』、2000年）掲載図は筆者原図である。

7) 増野淳一編『赤妻遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第132集、1990年）、鈴木　卓編『赤妻遺跡Ⅱ』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第154集、1993年）

8）古賀真木子編『赤妻古墳』(『山口市埋蔵文化財調査報告』第67集、1997年)

9）杉原和惠編『神郷大塚遺跡』(『山口市埋蔵文化財調査報告』第38集、1991年)

10）増野晋次編『山口市内遺跡詳細分布調査吉敷・湯田地区』(『山口市埋蔵文化財調査報告』第64集、1997年)

11）久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」(『庄内式土器研究XIX』、1999年)

12）次山　淳「布留式土器における精製器種の製作技術」(『考古学研究40－2』、1993年)

13）石野博信・関川尚功編『纒向』櫻井市教育委員会

14）豊岡卓之編『纒向』補遺編（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1999年)

15）寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49、1986年)

16）藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』64巻4号、1979年）この土器については、中川寧氏、久住猛雄氏にご教示いただいた。

17）富士埜　勇編『国道９号・山口バイパス　下東遺跡・荻峠遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第30集、1975年)

18）西田　宏編『吉永遺跡（Ⅲ－東地区)』(『山口県埋蔵文化財センター調査報告』第10集、1999年)

19）水島稔夫編『吉田馬場遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』43、1992年)

20）伊東照雄・山内紀嗣編『秋根遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』22、1977年)

21）水島稔夫編『綾羅木川下流域の地域開発史』(『下関市埋蔵文化財調査報告』41、1990年)

22）村岡和雄編『下七見遺跡Ⅰ』(菊川町教育委員会、1989年)

23）谷口哲一「新宮山古墳・新宮山経塚」岩崎仁志編『平成6～8年度重要遺跡確認緊急調査報告書』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第185集、1998年)

24）山口市上ノ山古墳群の台状墓などが挙げられる。山口県教育委員会『庵河内遺跡・上の山古墳群』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第164集、1994年)

25）西田守夫「竹島御家老屋敷古墳出土の正始元年三角縁階段式神獣鏡と三面の鏡」(『ＭＵＳＥＵＭ』No.357　東京国立博物館、1980年)

26）濱崎真二編『柳瀬遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年)

27）伊東照雄編『綾羅木郷遺跡Ⅰ』(『下関市埋蔵文化財調査報告』27、1981年)

28）近年、東部でも下右田遺跡17次SL・SM地区SI1048出土土器で在地系甕と伝統的Ｖ様式系の甕の共伴が確認されている。原田光朗編『下右田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報』防府市教育委員会、1999年

Tab.10　出土土器観察表

法量（　　）は復元値

遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	概報図版番号	概報写真	注記	備考
1	壺　口縁部～胴部	(18.6)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－1	有	YK-1　E-4　NO3 740605	
2	壺　口縁部～胴部	(20.0)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－2	有	YK-1　E-4　NO10 740601	胎土分析土器
3	壺　頸部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO6	
4	壺　口縁部～胴部	(16.7)			①橙色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－11	有	YK-1　E-4　NO1	
5	壺　口縁部	(10.8)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－15		註記なし	
6	壺　口縁部	(16.8)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－6		YK-1　E-4　NO7 740529	
7	壺　口縁部	(13.8)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO2	
8	壺　頸部～底部		1.8		灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－25	有	YKG-8	土器捨て場でない注記
9	壺　頸部～胴部				橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－3		YK-1　E-4　NO16 740531	
10	壺　頸部～胴部				①淡黄橙色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－1	有	註記なし	
11	壺　口縁部～胴部				①浅黄橙色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－5	有	YK-1　E-4　NO4 740531	
12	甕　口縁	(16.2)			①淡黄色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第15図－7		YK-1　E-5　NO5 740605	
13	甕　口縁部～胴部	(13.3)			淡黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第15図－4		YK-1　E-4　NO2 740531	
14	甕　口縁部～胴部	(16.0)			①黄橙色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載か		YK-1　E-4　NO5 740531	
15	甕　口縁部～胴部	(13.8)			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第15図－10	有	YK-1　E-4　NO4 740531	15-1は15-10の誤り
16	甕　口縁部～胴部	(17.9)			①淡赤橙色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第16図－3		YK-1　E-4（Ⅳ） 740529	胎土分析土器
17	甕　口縁部～胴部	(11.5)			①灰色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第15図－15		YK-1　E-4　NO4 740531	
18	甕　口縁部～胴部	(14.0)			浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載か		YK-1　E-4　NO2 740531	
19	甕　口縁部～胴部	(14.2)			橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－13	有	YK-1　E-4　NO13 740531	
20	甕　口縁部～胴部	(15.2)			①淡黄色 ②褐灰色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－8	有	YK-1　土器捨場跡	
21	甕　口縁部～胴部	(18.0)			淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第16図－2	有	YK-1　E-5　NO27～28 740605	胎土分析土器
22	甕　口縁部～胴部	14.4			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－7	有	YK-1　NO(48?) 740609	胎土分析土器
23	甕　胴部～底部		(1.6)		灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第13図－10	有	YK-1　E-5　NO20 740605	胎土分析土器
24	甕　口縁部～胴部	(17.6)			①浅黄橙色 ②浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－8		YK-1　G-4　NO6 740531	
25	甕　口縁部～胴部	(17.3)			浅黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－7		YK-1　E-4　NO4 740531	胎土分析土器
26	高坏　坏部	20.1			灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－1		YK-1　土器捨場跡	
27	高坏　坏部				橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-5 740605	
28	高坏　坏部～脚部				①黄橙色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－5		YK-1　E-4　NO16 740603	
29	高坏　坏部～脚部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－4		YK-1　E-4　NO12 740601	
30	高坏　坏部～脚部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－6		YK-1　E-4　NO4 740605	
31	高坏　坏部～脚部				灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO13 740601	
32	高坏　脚部				淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-5 740605	
33	高坏　裾部				橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-5 740605	

法量（　）は復元値

遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	概報図版番号	概報写真	注記	備考
34	小型高坏　脚部				淡黄色	精良	未掲載		YK-1　E-4　NO10 740601	
35	小型器台 坏部～脚部	9.5			浅黄橙色	精良	第17図－10		YK-1　E-4　NO4 740531	
36	小型器台　脚部		(11.0)		①灰白色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－11	有	YK-1　E-4　NO14 740603	
37	山陰系鼓形器台 脚部		(18.3)		灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第14図－3	有	YK-1　D-12　E·4·E·3 トレンチⅥ　740516	試掘時出土土器か
38	鉢　口縁部～底部	(11.8)	2.8	5.9	灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載か		YK-1　E-45　NO38 740604	E-45はE-4·5の誤りか
39	鉢　口縁部～底部	(8.4)	2.7	6.4	淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－18	有	YK-1　E-4　NO16(1) 740603	
40	小型丸底鉢	(11.4)	1.8	5.1	浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－15		YK-1　E-4　NO16(2) 740603	
41	鉢　口縁部～底部	(6.4)	1.2	3.2	①灰白色 ②浅黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－23		YK-1　E-4　NO23 740603	
42	鉢　口縁部～底部	(6.3)	2.3	0.5	淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－22	有	YK-1　E-5　NO30 740605	
43	壺もしくは鉢 底部		0.4		黄橙色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－33		YK-1　E-4　NO6 740531	
44	壺　底部		1.4		淡黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第15図－19		YK-1　E-4　NO1 740531	
45	壺　底部		(6.4)		①灰白色 ②灰色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO6 740605	
46	壺もしくは鉢 底部		2.7		①褐灰色 ②灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－35		E-4　NO14 740601	
47	甕　底部		6.3		灰白色	1～3㎜の砂粒を含む。	第17図－29		YK-1　E-5 740605	混入／弥生時代中期
48	甕　底部		3.2		①淡黄色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO7 740601	
49	甕　底部		(4.6)		①淡黄色 ②黄灰色	1～3㎜の砂粒を含む。	未掲載		YK-1　E-4　NO7 740529	
50	甕　底部		(2.0)		①浅黄橙色 ②灰黄色	1～3㎜の砂粒を含む。	第16図－12		YK-1　E-4　NO10 740601	
51	甕　底部		3.9		①浅黄色 ②黒褐色	1～3㎜の砂粒を含む。	第16図－11	有	YK-1　以下不明	

※備考中の胎土分析土器は後に三辻利一氏によって行われたもので、いずれも山口県内のものと推定されている。

文献：三辻利一「西遺跡出土土器の蛍光X線分析」山口市教育委員会『西遺跡』

（『山口市埋蔵文化財調査報告』第21集、1986年）

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行う。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

第５条　資料館には調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部及び教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を召集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab.11　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員　（平成６年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
理学部	志磨裕彦	教授	平５．４．１～平７．３．31	委員長
人文学部	中村友博	教授	平５．６．７～平７．６．６	館長
人文学部	八木充	教授	平５．５．29～平７．３．31	委員
経済学部	及川順	教授	平５．４．１～平７．３．31	委員
教育学部	五島淑子	助教授	平６．４．１～平８．３．31	委員
医学部	福本哲夫	教授	平４．４．１～平６．３．31	委員
工学部	水田義明	教授	平５．４．１～平７．３．31	委員
農学部	宇都宮宏	講師	平５．４．１～平７．３．31	委員
教養部	森茂暁	助教授	平５．４．１～平７．３．31	委員
事務局	木村豊	事務局長	平６．４．１～平７．３．31	委員

Tab.12　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	近藤喬一	教授	考古学	平成６年度
人文学部	永尾隆志	助教授	岩石学	平成６年度

山口大学構内の主な調査

Tab. 13　山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区Ａ・Ｂ区	Ｌ～Ｎ－15	1	30？	土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠凞	年報XI
	第Ⅱ地区家畜病院新営	Ｒ－20・21 Ｓ・Ｔ－19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	①
	第Ⅱ地区		3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	Ｓ・Ｔ－10・11	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区		5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区および陸上競技場	Ｄ－19・20 Ｅ－17・19～21 Ｆ－17・18	6	1,600	杭列、弥生竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	Ｇ－21～23 Ｈ－22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	Ｈ－20 Ｉ－19～21 Ｊ－20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	Ｇ－23 Ｈ－23・24 Ｉ・Ｊ－24 Ｋ－23・24 Ｌ－23	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	Ｊ－20	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区		12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区Ｃ区 大学本部新営	Ｋ・Ｌ－14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区Ｄ区第1地点	Ｌ－13	14		近世大溝	弥生土器、木炭層	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｄ区第2地点	Ｌ－13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｄ区第3地点	Ｍ－13・14	16		土壙、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃	年報XIII
	第Ⅰ地区Ｄ区第4地点	Ｍ・Ｎ－14	17		土壙、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｄ区第5地点	Ｌ－12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｄ区第6地点	Ｍ－13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｄ区第7地点	Ｍ・Ｎ－13	20			須恵器	〃	〃	
	第Ⅰ地区Ｅ区 第２学生食堂新営	Ｍ・Ｎ－14・15 Ｏ－15	21	900	古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	年報XII
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	①
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃	
昭和53年	人文学部校舎新営	Ｍ・Ｎ－21	22	160			〃	調査担当 近藤喬一	年報X

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和54年	教育学部附属養護学校新営	A－20・21 B－19・20 C－19	23	410	溝、土壙	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	年報IX
	理学部校舎新営	N・O－19・20	24	250			〃		年報X
	農学部動物舎新営	P－19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L－14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報VIII
昭和55年	経済学部校舎新営	K－21	27	66			試掘		年報X
	農学部農業観測実験施設新営	P・Q－15	28	50	溝、土壙		事前		
	本部環境整備	E－14～16 F－15・16	29				立会		
	農学部環境整備	N－11 O－10・11 P－9・10	30				〃		
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19	31		弥生竪穴住居 土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽棟新営	H－16	32		溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J・K－19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	I－11	34				立会		
	時計塔埋設	I－14	35				〃		
	本部構内擁壁取設	K・L－13・14	36				〃		
	教養部構内擁壁取設	I－15～17 J－17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J～M－15 M・N・16	38				〃		
	農学部中庭整備	N・O－17	39				〃		
	暖房施設改修	O－16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	M－8・9	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N－8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	L・M－16	43	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報II
	大学会館新営	M・N－14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	A・B－21	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O－18	46	2			〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	L－17	47	10			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K－16	48	150			〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N－12・13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報III
	ラグビー場防球ネット新営	G－18・19 H－19・20	50	114	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N－20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	I・J－12・13 H－23	52	183			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	N－8・9	53	33			〃		
	学生部厩舎整備	M－7・8	54	1.6			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	学生部野球場散水栓取設	I－21 K－22	55	1			立会		年報III
	教養部環境整備	I－15・16 J－15 K－17・18 L－18	56	81			〃		
	学生部テニスコート改修	C－18 D－17 E－15・16 F－16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N－12	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報IV
	大学会館排水管布設	J～L－13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコート フェンス改修	B－17 C－16・17 D－16 E－15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K－19・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L－14・15 M・N－15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K・L－20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料 園排水溝修復整備	R－17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V－15～17	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備 (樹木移植)	I・J－19	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16	67	2.5		須恵器	〃		
	大学会館環境整備 (樹木移植)	M－15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		
	交通標識設置	J－20 N－14 P－18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備 (実験動物運動場設置)	Q－18	70	16			〃		
	理学部環境整備（藤棚設置）	N－21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	M－22・23 N－22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕のある剥片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設営 (電線路埋設)	J－19	74	11	包含層（河川跡か）	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S－20 T・U－19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制 (施錠ポール設置)	M－10 P－15 Q－15～17	76	12			〃		
	正門横（水田内）境界 杭設置	J－10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	L－20	78	3			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	吉田構内交通標識設置	G－23 K－9 O－22 S－20 V－17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設	B－17・18 C－18・19 D－19・20 E－20・21 F－21・22 G－22・23 H－23・24 I・J・K－24 L－23・24 M・N－23 O－22・23 P・Q－22 R－21・22 S－21 T－20・21 U－19・20 V－18・19 W・X－18	80	2,100	古墳・弥生溝、古代河川跡、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器（墨書のあるもの含む）瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	立会	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設（屋根設置および観覧席移動）	K・L－18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16	81	3			〃		
	経済学部散水線取設	L－20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E－15 F－15・16 H－15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管埋設	S－12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M－18 O－15	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L－14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K－18～20 L－18	88	78			〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L－16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K－16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	J・K－18・19	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前		年報VII
	教養部複合棟新営	J・K－17	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新営	I・J－16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新営	J・K－17・18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		
	九田川局部改修	B－16・17 C－16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	国際交流会館新営	M・N－22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	B－20	97	1			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	L～N－12	98	55	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N－17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	J－20	100	0.5			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I－16	101	1	包含層か		立会		年報Ⅷ
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	N・O－22	102	35	河川跡（溝か）、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	J－18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F－19・21 G－18	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K～M－22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	J・L－15	106	4	古墳溝状遺構 柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、六連式製塩土器	事前		年報Ⅸ
	椹野寮ボイラー設備改修	O－20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H－22 I－21・22 J・K－21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K－21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	M－8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H－16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M－13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	M－8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	〃		
	第2武道場排水溝新営	G－15	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I－14 L－18	115	0.5			〃		
	本部車庫給水管改修	L－13	116	6.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭環境整備	N－14・15	117	35	中世溝		〃		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M－15	118	2			〃		年報X
	第1学生食堂設備改修	I・J－19	119	7			〃		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E－20	120	1			〃		
平成3年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P－17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		年報XI
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P－17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修	P－17	123	8			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M－15	124	2			〃		
	サークル棟新営	F－14	125	1			〃		
平成4年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P－17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		年報XII
	交通規制標識及びバリカー設置	H－22 M－10 O－22 R－19 S－20	127				立会		
	吉田構内道路（南門ロータリー）取設	H－23	128	40			〃		
	ボイラー室給水管漏水補修	O－16	129	4			〃		
	農学部附属農場ガラス室新営	S－14	130	3.5			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M－15	131	3			〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備工事及び山口大学吉田団地環境整備（正門周辺）	H－11・12	132				〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備（信号機設置）	I－11	133	7			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	本部裏給水管埋設	K～M－13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器 滑石製模造品	事前		年報XIII
	人文学部・理学部講義棟新営	M－20	135	4			試掘		
	第2屋内運動場新営	G・H－16	136	144	溝	弥生土器、須恵器 砥石	〃		
	農学部給水管埋設	N～P－18	137	9			〃		
	基幹整備（屋外他給水管改修）	L－15 M－17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新営電気設備	O－16	139	4			〃		
	大学会館前庭バリカー設置	N－14	140	1			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L－15	141	1.6			〃		
	九田川河川局部改良	C－16 D－15・16	142	40			〃		
	農学部電柱立替	V－17	143	0.2			〃		
	農学部ガラス室設置	S－14	144	10			〃		
	教育学部給水管埋設	H・J－19	145	15			〃		
	環境整備（大学会館前庭）	L－14 M－13～15 N－14・15	146	140.9			〃		
	環境整備（遺跡保存地区）	H－20 I－19～21 J－20・21	147	361			〃		
	環境整備（正門周辺）	G－13 H－12	148	350			〃		
平成6年	グランド屋外照明施設新設	E－20 F－21 G－18・22 H－19・20 I－21	149	600	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	事前	工法等変更	年報XIV
	第2屋内運動場新営	G・I－15・16	150	726	弥生～古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、磨石、敲石、剥片、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄	〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	F－21 G－20・21 H－19・20	151	200	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館新営	K・L－21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験廃液処理施設棟新営	H－12・13	153	2	河川		〃		
	体育器具庫及び便所新営	G・H－17	154	60	河川		〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館仮設電柱設置	L－22 M－22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K－23 L－22・23	156	6			〃		
	教育学部附属養護学校生活排水管改修	F－19	157	2			〃		
	テニスコート改修	B－17 C－16・18 D－15～17 E－15・16	158	15			〃		
	教育学部附属養護学校生活訓練施設棟新営	B－20・21・22 C－20	159	16			〃		
	陸上競技場整備（透水管埋設）	C－18 D－18・19	160	200			〃		
	ハンドボール場改修（プレハブ設置）	K－22	161	30			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成6年	野球場フェンス改修	H－22 I－21・22	162	3			立会		
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O－16	163	4	河川か		〃		
	九田川河川局部改良	D－15 E－14・15	164	100			〃		
	第2屋内運動場仮設電柱設置	G－14・15	165	0.5			〃		
	教養部水道管破裂修理	I－16	166	2			〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E－20 F－20～21 G－18・19・22 H－19・20 I－20・21	167	150			〃		年報XIV
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校プール排水施設設置)	A－21	168	4			〃		
	サークル棟給水管埋設	F－14	169	1			〃		
	プール新営給水管埋設	E－15 F－15・16	170	10			〃		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C－18	171	6	河川	土師器	〃		
	教育学部スロープ設置 (音楽棟)	H－17	172	10			〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報III
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報IV
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備 (特高受変電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟 病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃		年報V
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備 (樹木移植)		12	40			〃		
昭和61年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			〃		年報VI
	医学部附属病院外来診療棟 周辺環境整備等(雨水桝埋設)		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場 改修		15	6			〃		年報VII
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器 細石刃核	試掘		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報Ⅸ
平成2年	医学部附属病院動物・RI実験棟新営		20	40		剥片	〃		年報Ⅹ
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報Ⅺ
平成4年	焼却棟地盤調査		22				〃		年報Ⅻ
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他		23	9			〃		年報ⅩⅢ
	医学部附属病院基幹設備(焼却棟新営)		24	6			〃		
平成6年	医学部附属病院MRI－CT装置棟新営		25	300			〃		年報ⅩⅣ

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報Ⅴ
	工学部受水槽改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報Ⅵ
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間照明装置及び防球ネット設置		7	2			〃		年報Ⅸ
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報Ⅹ
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			〃		年報Ⅺ
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		年報Ⅻ
	工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営		12	40			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成4年	工学部および工業短期大学部職員宿舎取壊		13	9			立会		年報XII
	大学祭展示物設置		14	7			〃		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		15	12			試掘		年報XIII
	工学部地域共同研究開発センター新営		16	16			〃		

亀山構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報III
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報V
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木植樹)		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	5	57 20	中世土壙か 河川跡か杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体	試掘		年報VI
	教育学部附属山口小学校電柱移設		6				立会		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、掻器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、石核、砥石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園バレーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		11	170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剥片、石核	〃		
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12	70	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏃、敲石、扁平打製石斧、砥石、剥片	事前		年報X
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設		14	3			〃		年報XIV
	教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設		15	7			〃		

光 構 内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報III
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新営		2				立会		年報IV
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	〃		年報V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報VI
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、瓦質土器、土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報VII
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、陶磁器	〃		年報VIII
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土錘	〃	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、磁器、土錘、剥片、鉱滓	試掘	御手洗湾採集遺物含む	年報X
	教育学部附属光中学校 運動場改修		9	23	土壙	土師器、須恵器、須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新営		10	38	土壙、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報XI
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石錘	立会		
	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	〃		
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新営		13	500	土壙、柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、瓦器	事前		年報XII
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新営その他		15	6			〃		年報XIII
平成6年	教育学部附属光小中学校 プール新営給排水管埋設		16	19			〃		年報XIV

その他構内

調査年度	調査名	構内地区割	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫 合宿研修所整備	宇部市大字小野字土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット艇庫 合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町東字中道				〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3－21	7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8－29	35	杭		〃		年報VI
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通り2丁目3－32	1		土師質土器	〃	6号宿舎	
		山口市水の上町6－9	7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石二丁目8－7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報VIII

調査年度	調査名	構内地区割	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町6－1	1			〃	1号宿舎	年報Ⅸ
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石観音町1－25	1.2		陶磁器	〃	7号宿舎	年報Ⅹ
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町3－1	0.5			〃	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水 その他改修	山口市湯田温泉6丁目	30			〃		年報Ⅺ
	経済学部6号職員宿舎 電柱設置	山口市旭通り2丁目3－32	0.5			〃		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花932－2	1			〃		
平成4年	上竪小路共同下水管布設	山口市上竪小路字久保7－4	7			〃		年報Ⅻ
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8－29	44			〃		年報ⅩⅣ

※文献①　山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけでなく注意が必要である。

Summary

Ch.I This is a summary of the archaeological excavation carried out on the campuses of Yamaguchi University in the 1994 fiscal year. In the archaeological survey on the Yoshida campus, salvage excavation was carried out once, trial excavation was performed three times, and examination had done eleven times. In the archaeological survey on the Yoshida campus, salvage excavation was carried out three times, trial excavation performed three times, and examination had done eighteen times. Examination was carried out once on the Kogushi campus, twice on the Kameyama campus, once on the Hikari campus. Examination had done once on other campus.

Ch.II ; salvage excavations 1 In the salvage excavation that was involved with the plan of the construction of the new outdoor lightning equipment for an athletic field, we set A,B,C,D,E,F trenches around the athletic field. A river was discovered in the A trench, and a lot of broken pieces of pottery which belong to the period from the Yayoi Age to the Kofun Age were excavated in the river. Four pit houses were discovered in the B trench, and they were considered to be in the dating from the middle Yayoi Age to the late Yayoi Age. 37 glass beads were excavated from two pit houses of the late Yayoi Age. In the F trench, a river was discovered, and in which, a lot of broken pieces of pottery and stone implements that belong to the period dating from the late Jomon Age to the last Jomon Age.

Ch.III ; salvage excavations 2 The ditches and the earthen pit were discovered during the salvage excavation prior to the construction of the second new indoor athletic field. The excavation area was set 22 meters from south to north and 33 meters from east to west. A large number of pottery and stone implements which belong to the Yayoi Age were excavated in the large-scale ditch. Also, a lot of earthenware and porcelain that belong to Early Modern Age were excavated in the irrigation channel.

Ch.IV ; trial excavations Two river were discovered during the trial excavation prior to the construction of the Museum of commodity. Only a small amount of archaeological remains were found.

The trial excavation that was involved with the plan of the construction of the new facilities for wastewater center treatment was short scale. No archaeological remains or features were detected during this excavation.

Although we found a river during the trial excavation accompanied with the plan of the construction of the facilities for physical education, we could find only one piece of remains. We couldn't decide which period the river belongs to.

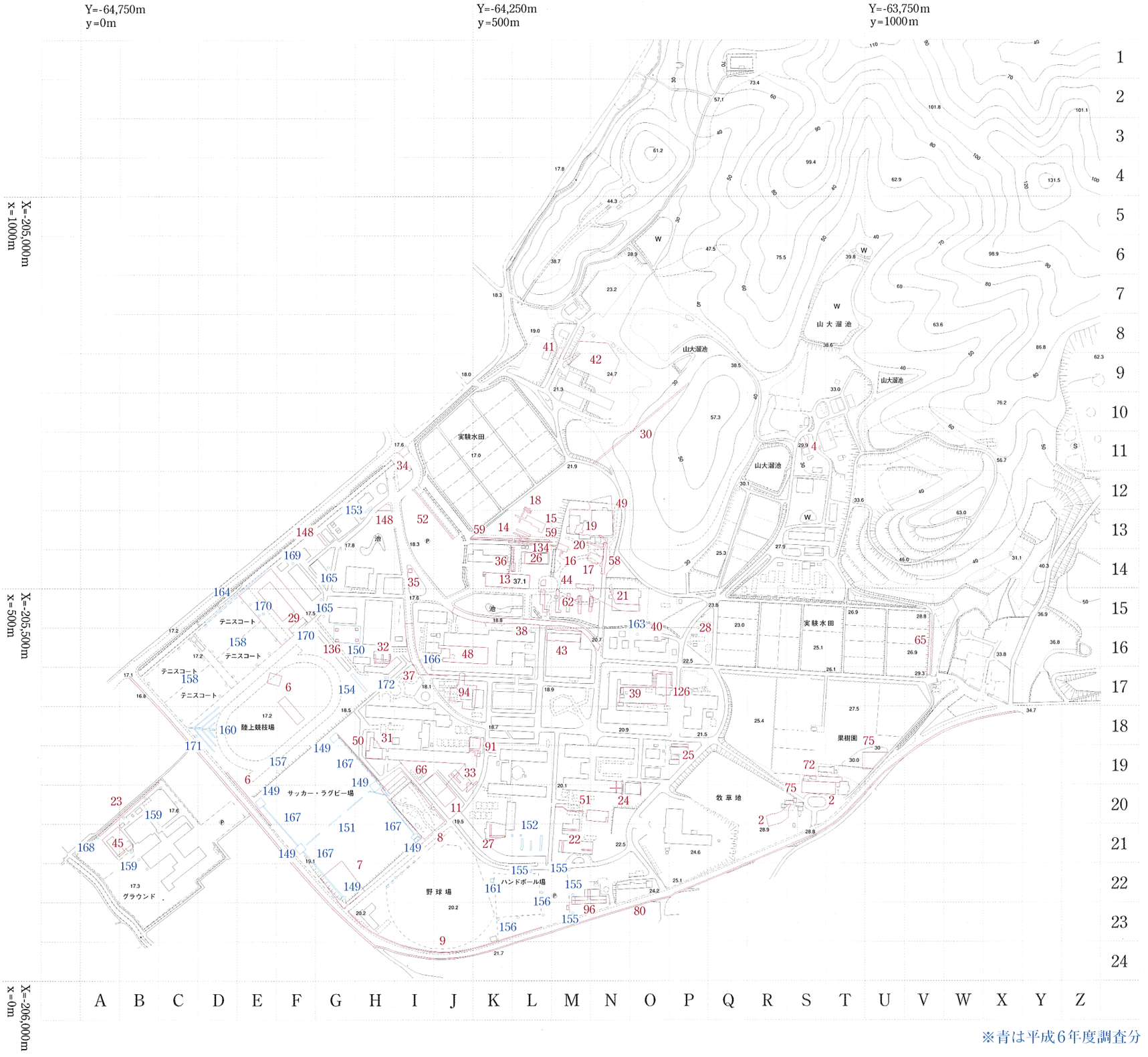
Ch. V ; examinations The examinations are run on a small scale. Through the examination accompanied with the laying cables underground for the new outdoor lightning equipment for an athletic field and prior to the laying a sewer pipe underground for the public, we confirmed the existence of layers containing cultural remains. No archaeological remains or features were detected during examinations in any other areas.

Appendix

I This is the observations on the glass beads from Yoshida site by using a stereomicroscope by Hirokazu Murata. The observations is composed of three part. In the beginning, he arranged a process in making the glass beads. In the second part, he explained his detailed observations on the surface and internal of the glass materials by some photomicrographs. In the last part, he made a conclusion and assumed that glass beads were stopped the link hole with clay to save the hole destroyed and they were heated up at the last process of making, because there is very small pin hole in some glass beads and inner wall of many link holes in the glass beads are formed by a flat surface.

II This is a report of an adze found somewhere in Yamaguchi city by Hirokazu Kominami. He appraised the adze to be Mikoshiba-type in incipient Jomon Age, because of the shape, the material, and the grinding on only the edge of it. He compared the adze with the series that range the western part of Shikoku.

III This is a reconsideration on the pottery excavated at the Yuda kusunokicho site in Yamaguchi city by Naohiko Tabata. The pottery is belong to the initial Kofun Age, came from a single feature and are suitable for a study. It is fairy rare to find these kind of archaeological remains in Yamaguchi prefecture. Most of the pottery are Furu-type including finely made examples of them. Also, it is important to study the appearance of Furu-type pottery in the western part of Setouchi area. In addition to the fact-report, he analyzed the pottery which belong to the period from the latest Yayoi Age to the initial Kofun Age in Yamaguchi prefecture. However, it is impossible to explicate the phase completely. It is necessary to continue to study for the increase of archaeological remains in the future.



※青は平成6年度調査分

Fig.144　山口大学吉田構内地区割及び主な調査区位置図

昭和63年度以前の調査区

平成元年度～平成5年度調査区

平成6年度調査区

0　100　200 m

Fig.145　山口大学小串構内調査区位置図

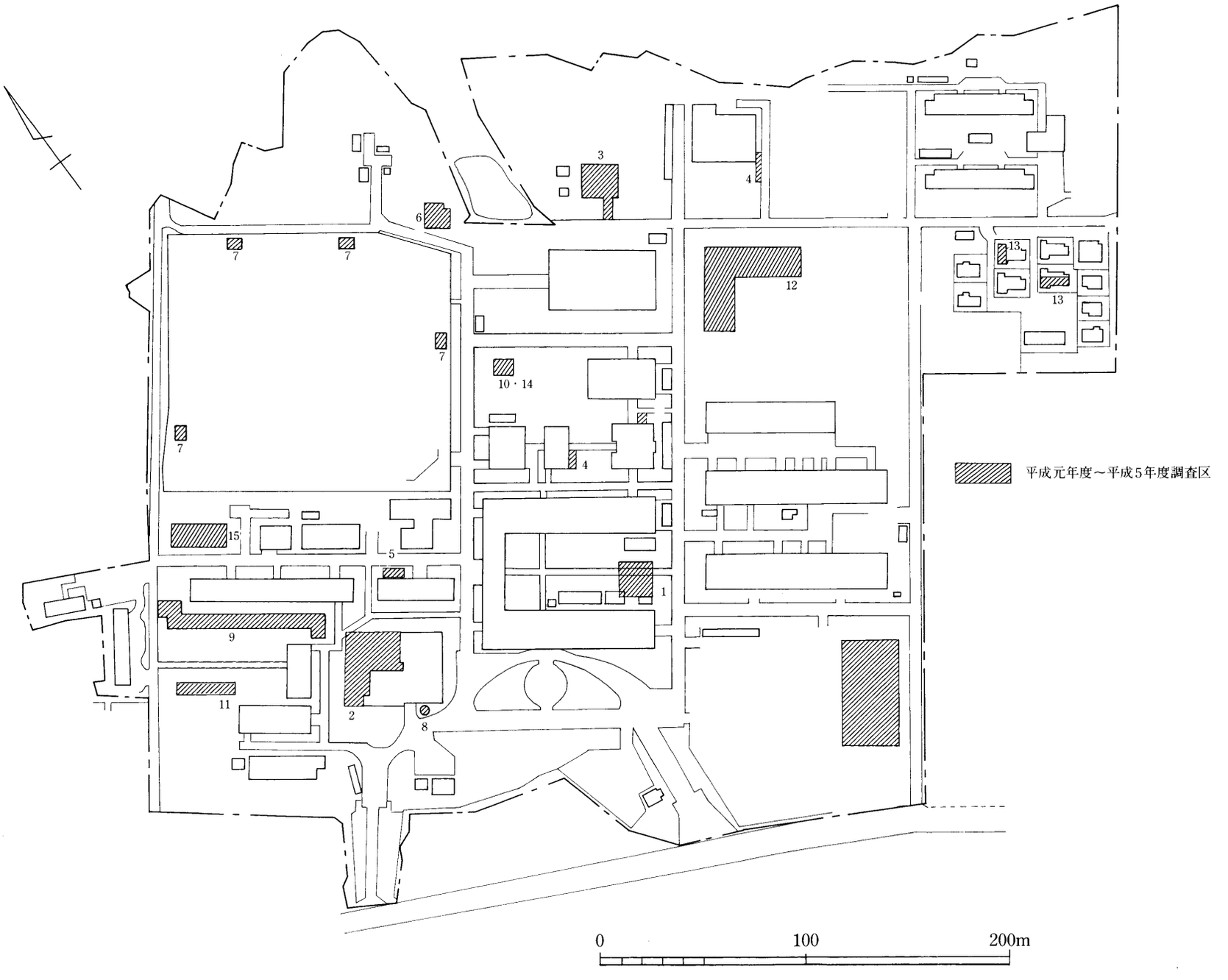


Fig.146　山口大学常盤構内調査区位置図

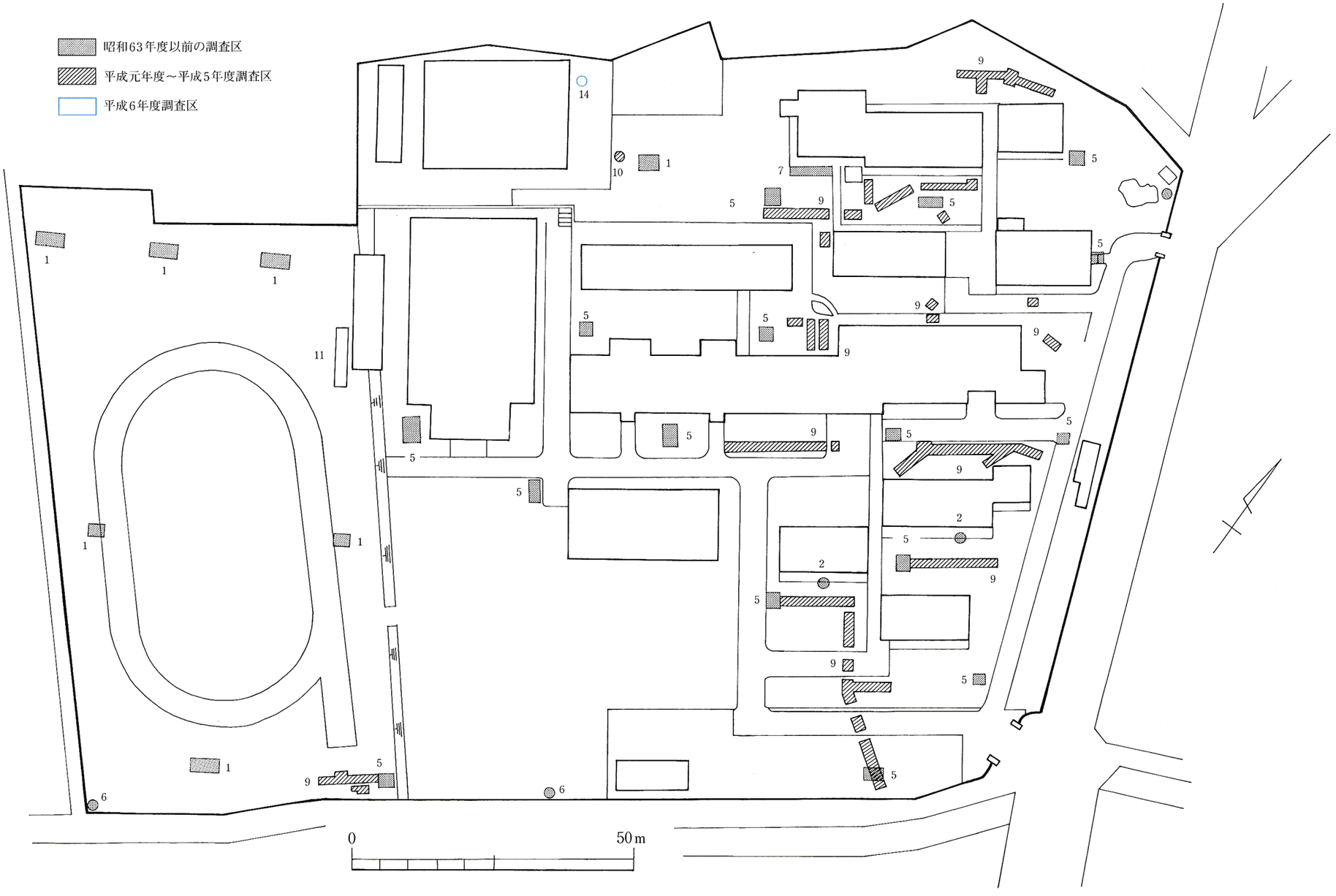


Fig.147　山口大学亀山構内（小学校）調査区位置図

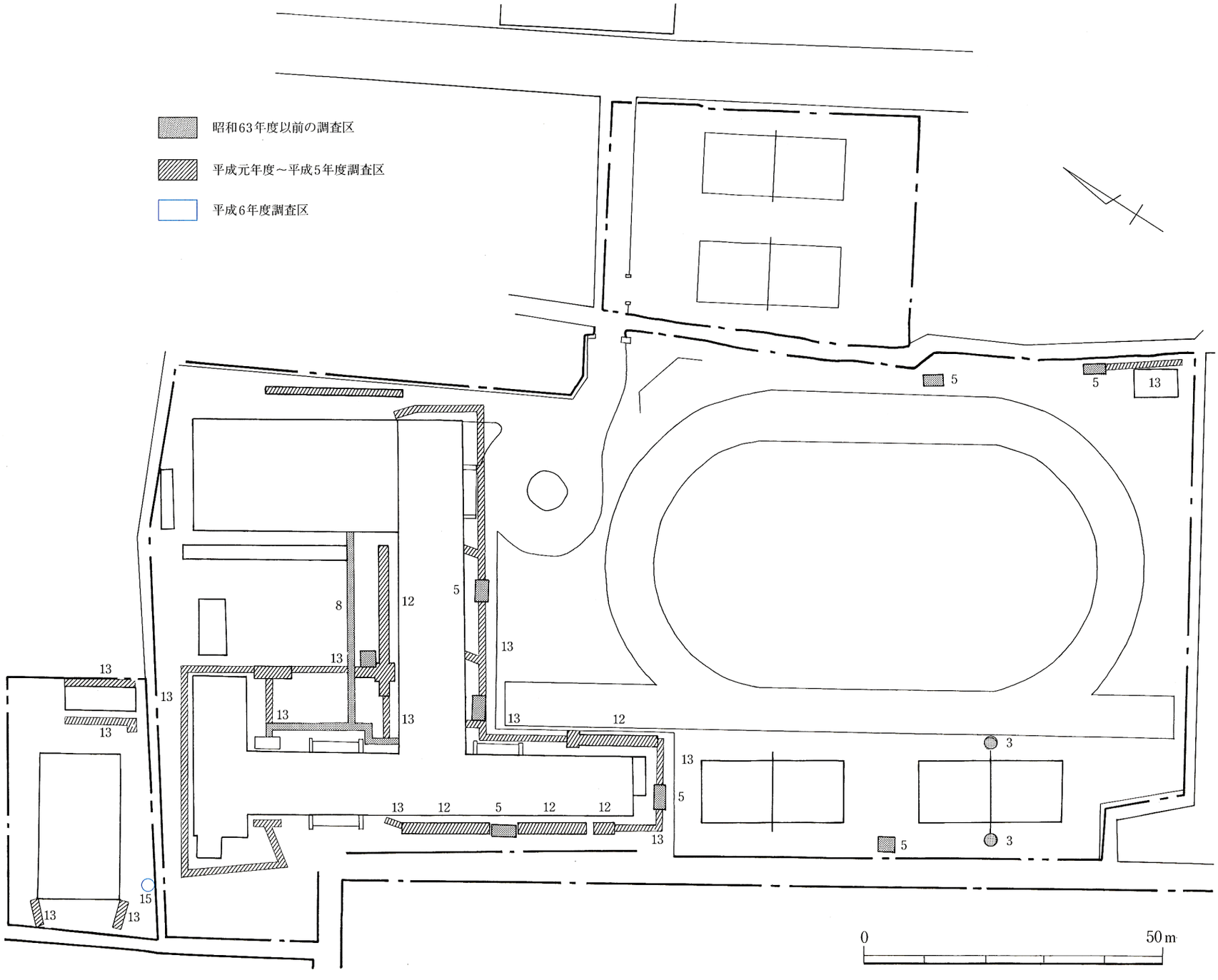


Fig.148　山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図

昭和63年度以前の調査区

平成元年度～平成5年度調査区

平成6年度調査区

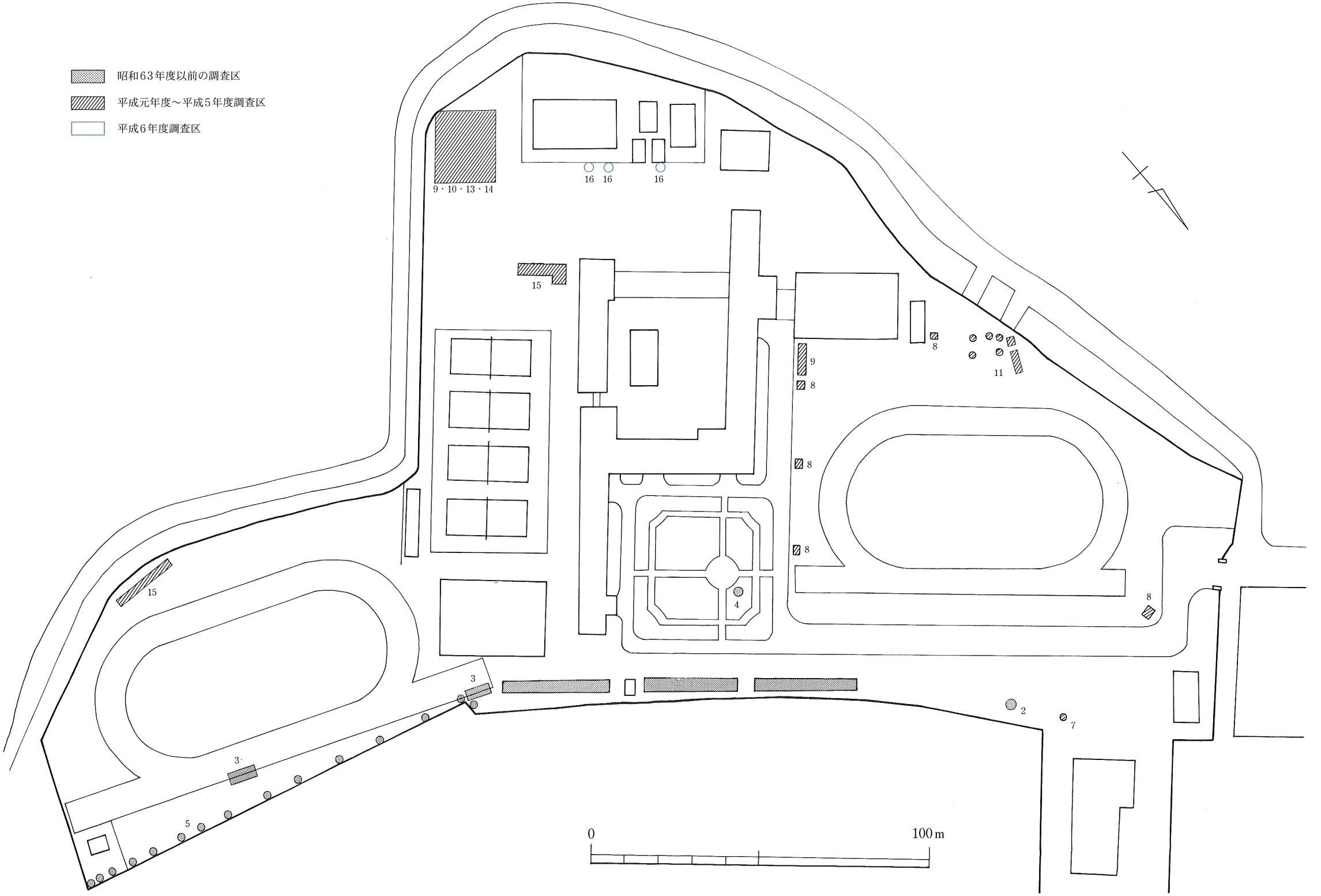
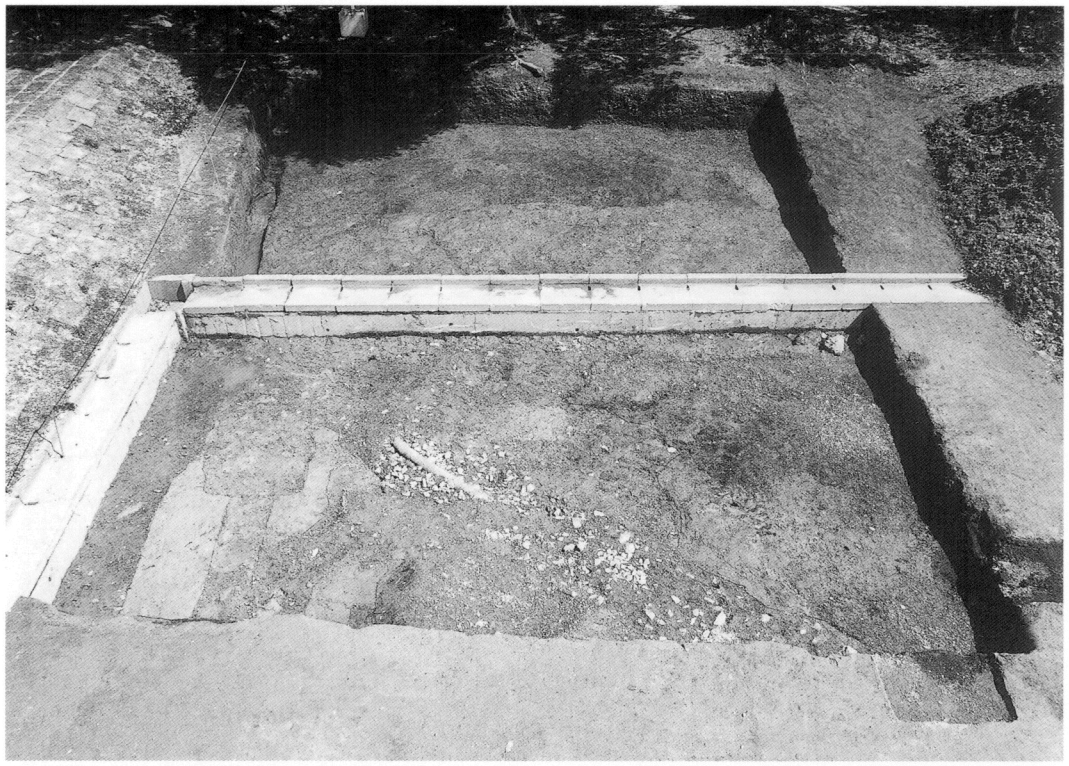


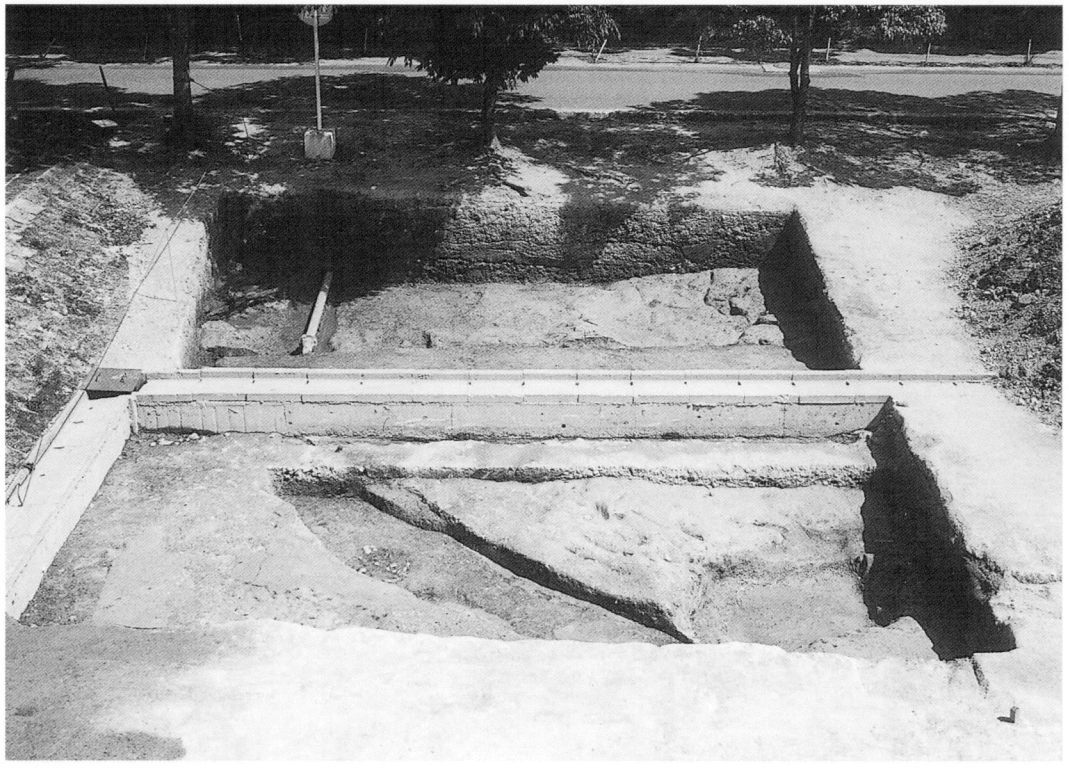
Fig.149　山口大学光構内調査区位置図

図　　版

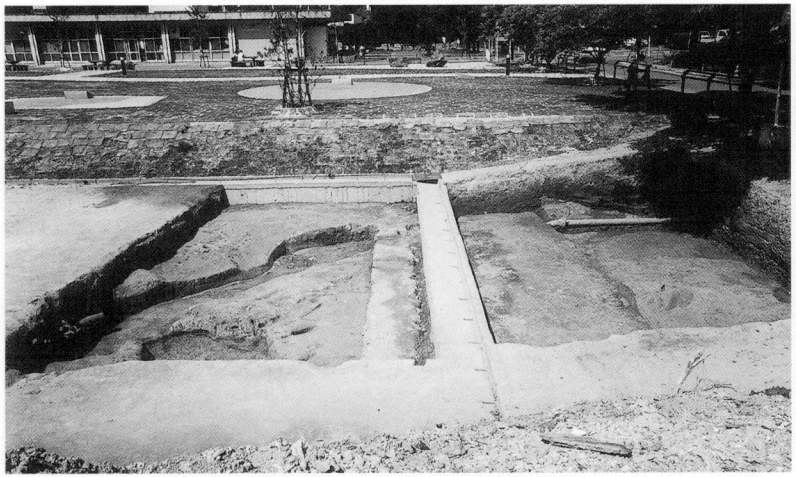
吉田構内全景（南から）



(1) Aトレンチ遺構検出状況（北西から）

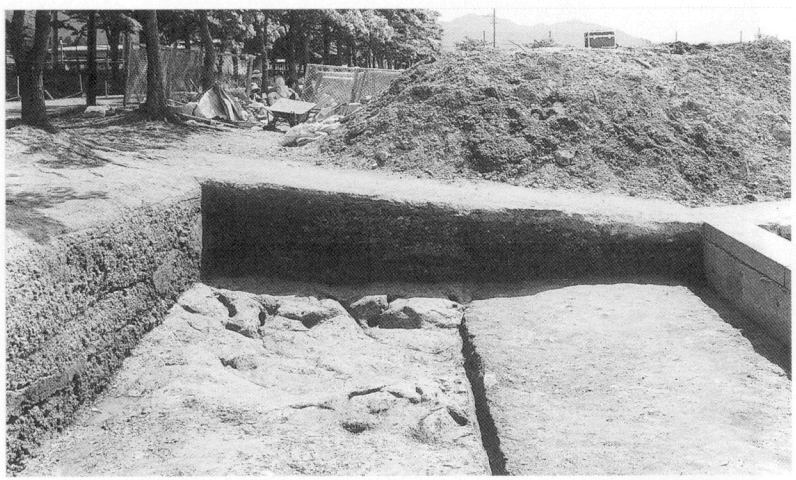


(2) Aトレンチ遺構完掘状況（北西から）



(1) Aトレンチ遺構完掘状況（南西から）

(2) Aトレンチ河川遺物出土状況（北から）

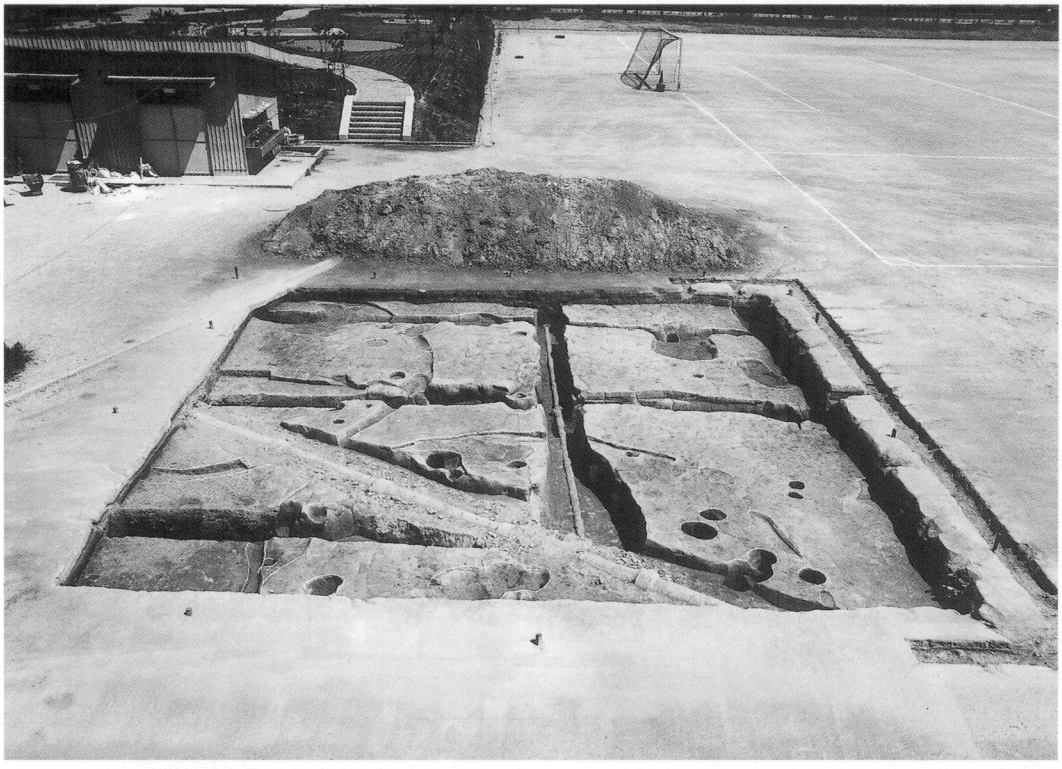


(3) Aトレンチ南西壁土層断面（北東から）

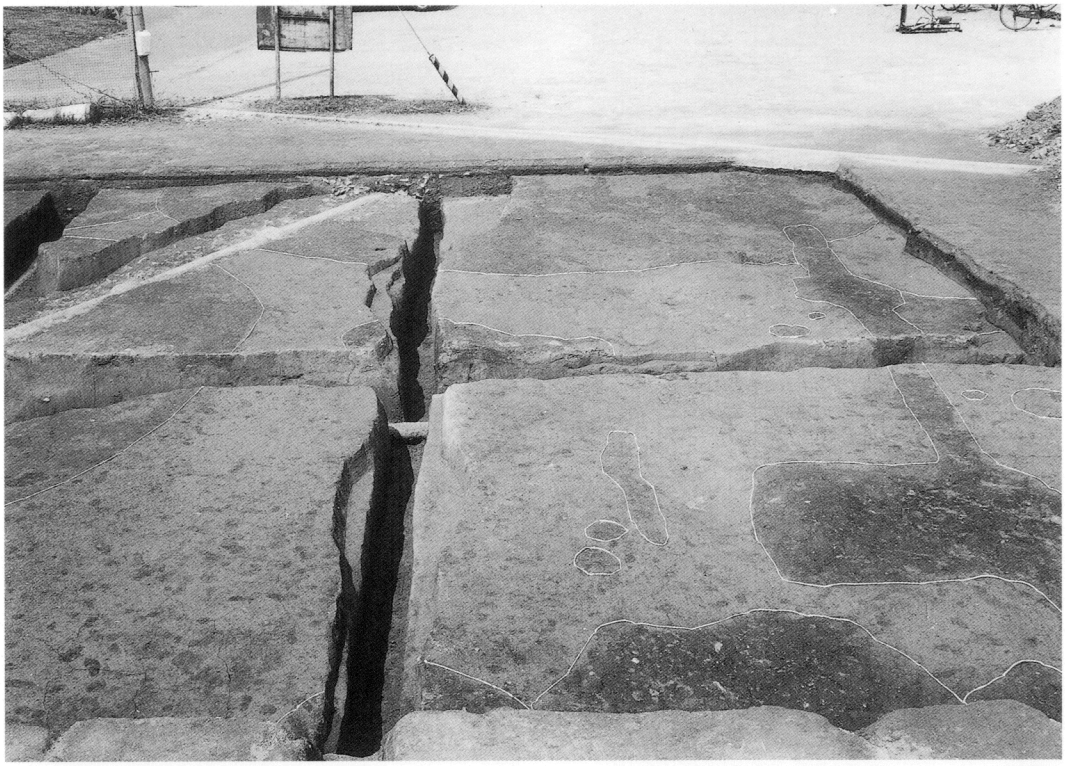
(4) Aトレンチ南西壁土層断面（北東から）

吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査 Ⅱ

(1) Bトレンチ遺構検出状況（北西から）



(2) Bトレンチ遺構完掘状況（北西から）



(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡検出状況（南西から）

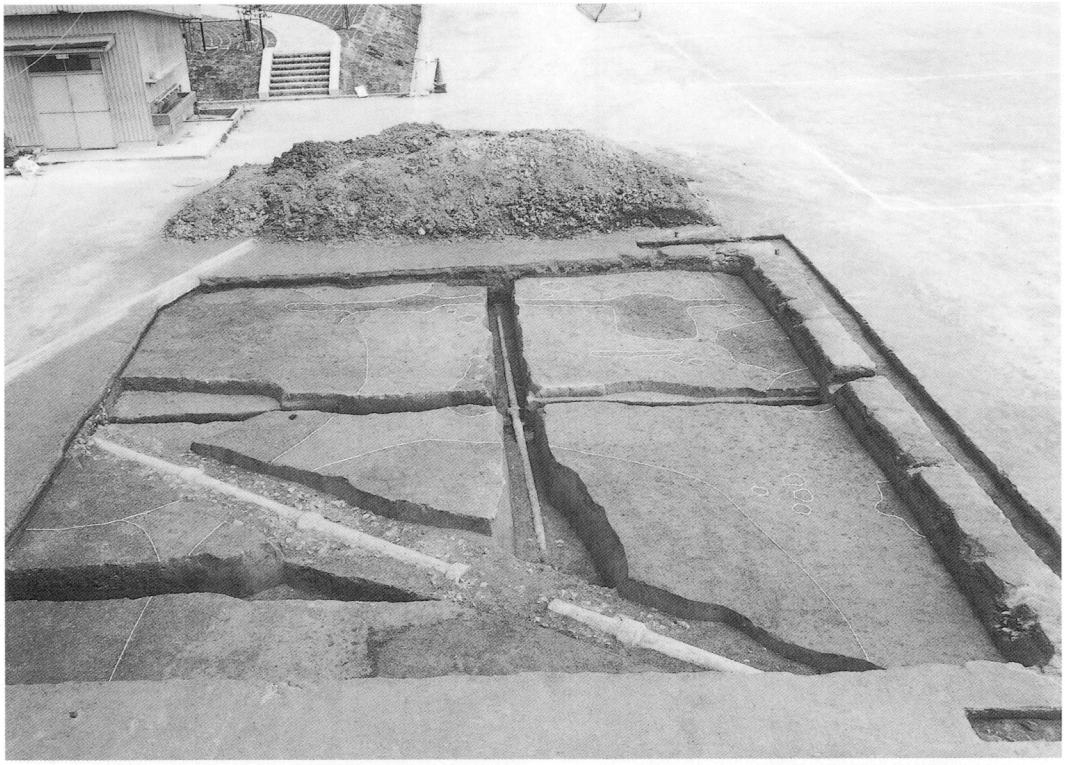
(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南西から）

(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南から）

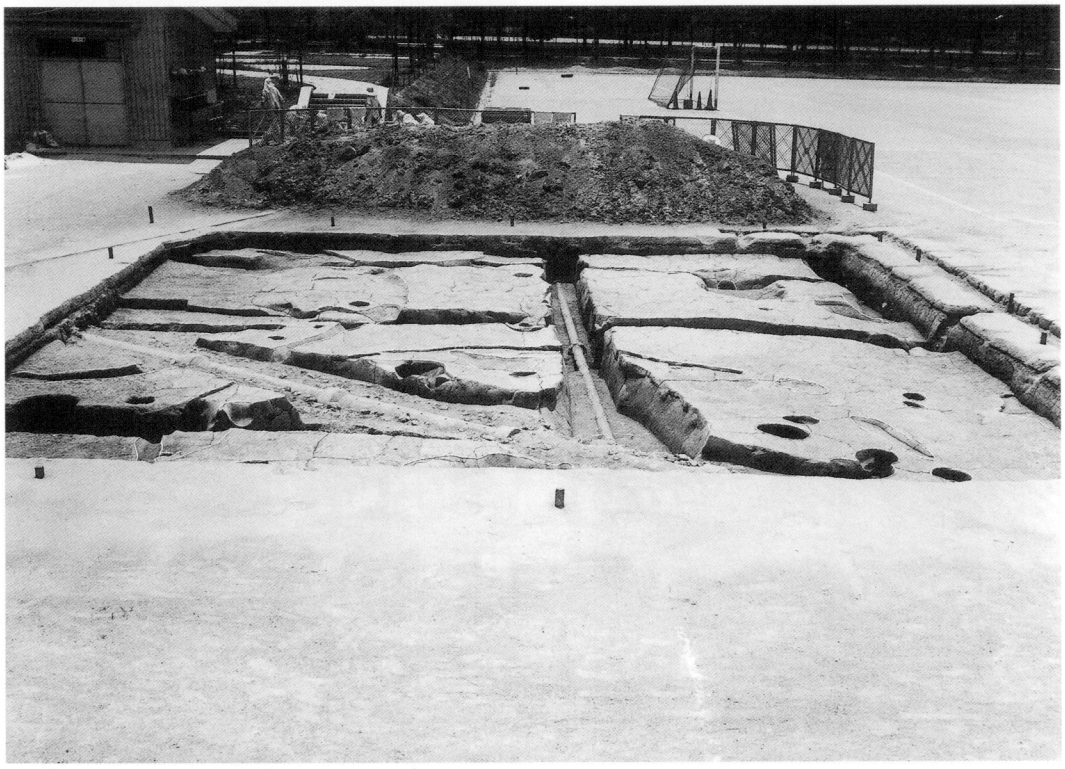
(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（北東から）

(3) 配線トレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況（南東から）

(4) Bトレンチ第1号竪穴住居跡滑石製紡錘車出土状況（東から）



(1) Bトレンチ第2号竪穴住居跡検出状況（北西から）



(2) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（北西から）

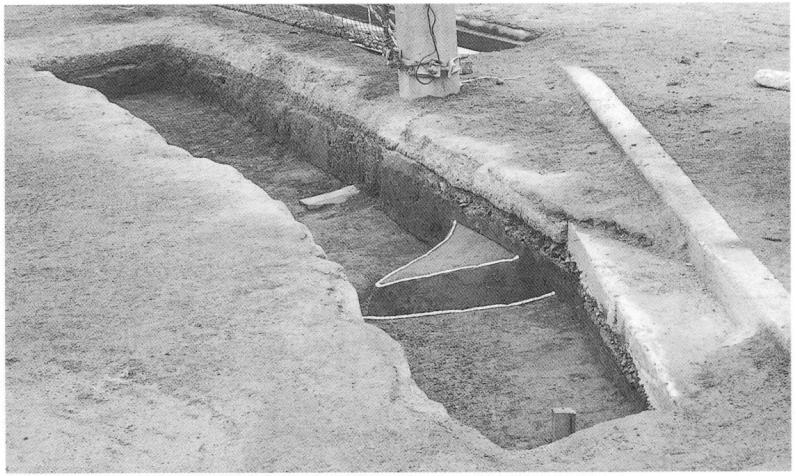
(1) Bトレンチ第2号竪穴住居跡検出状況（南東から）

(2) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（南東から）

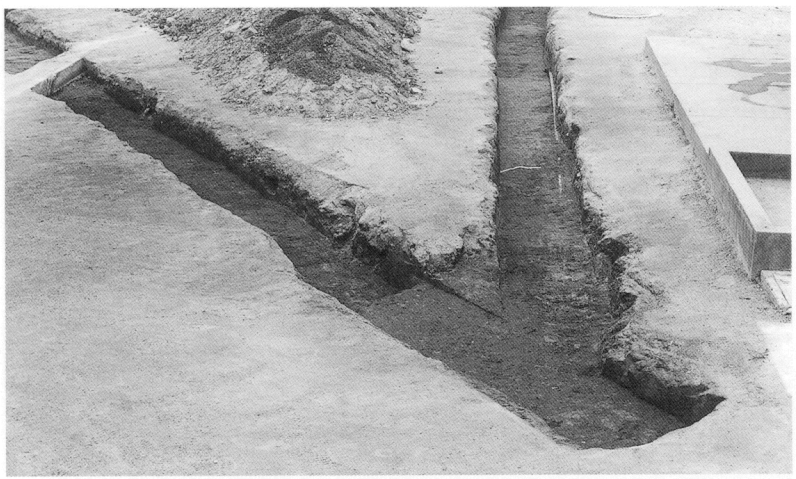
(3) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況（南から）

(4) Bトレンチ第2号竪穴住居跡炉跡検出状況（南西から）

(1) 配線トレンチ第 3 号竪穴住居跡検出状況（南東から）



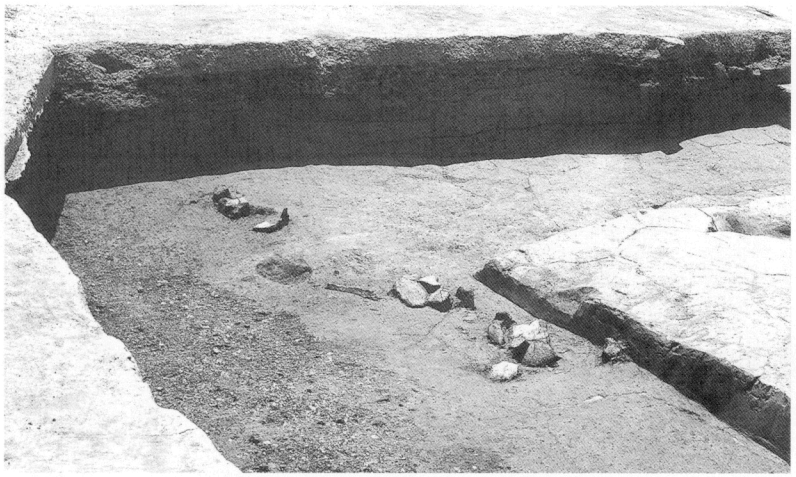
(2) 配線トレンチ第 3 号竪穴住居跡完掘状況（南東から）



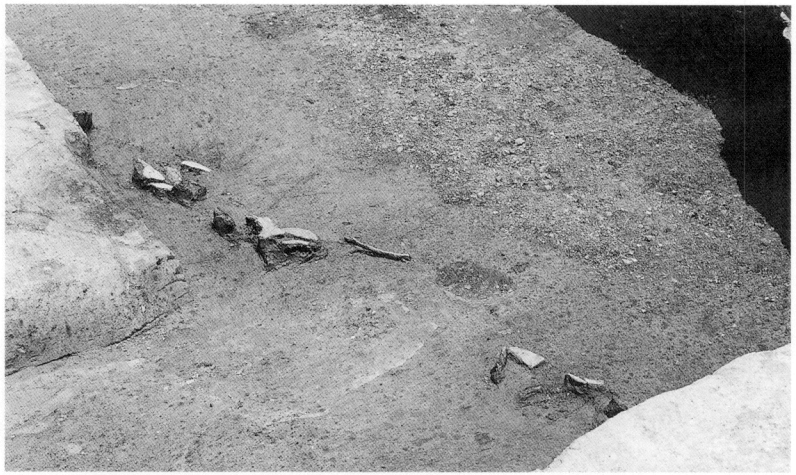
(3) 配線トレンチ第 4 号竪穴住居跡検出状況（南東から）

(4) 配線トレンチ第 4 号竪穴住居跡完掘状況（南東から）

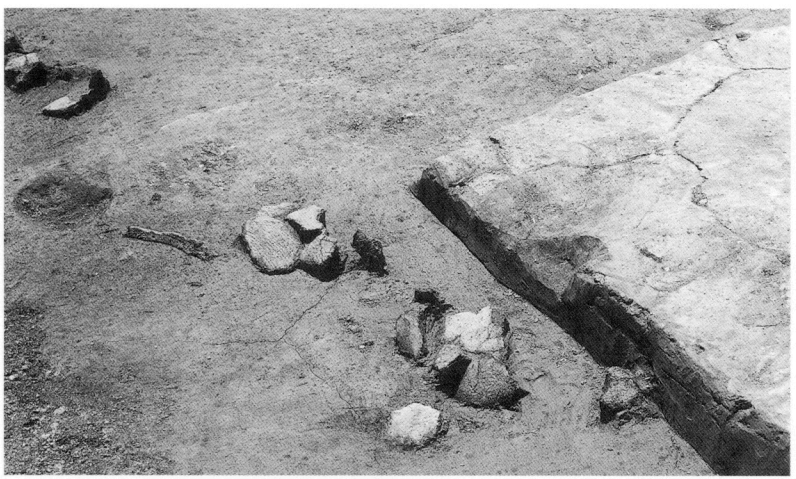
吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査



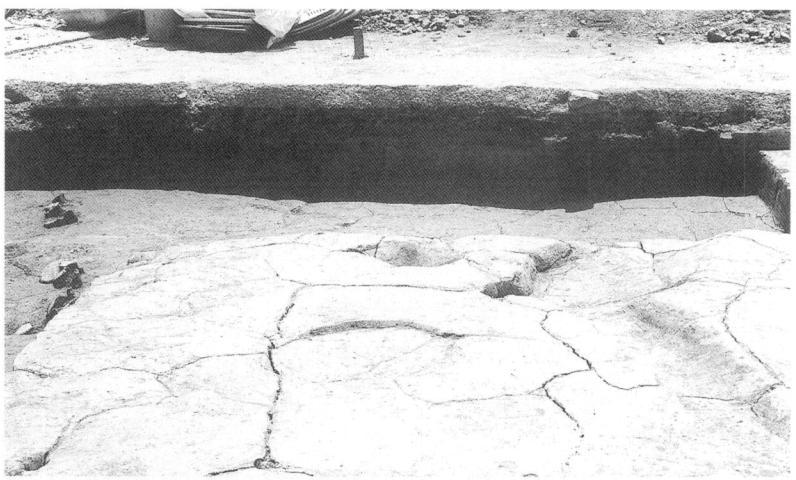
(1) Bトレンチ縄文土器検出状況（北西から）



(2) Bトレンチ縄文土器検出状況（南東から）



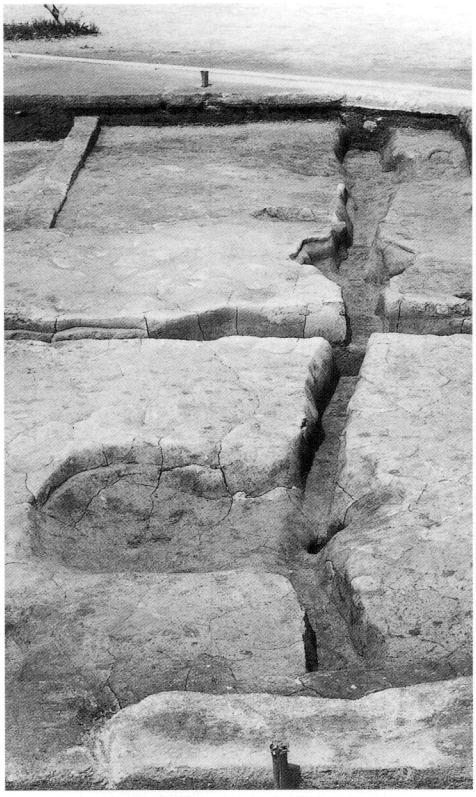
(3) Bトレンチ縄文土器検出状況（北から）



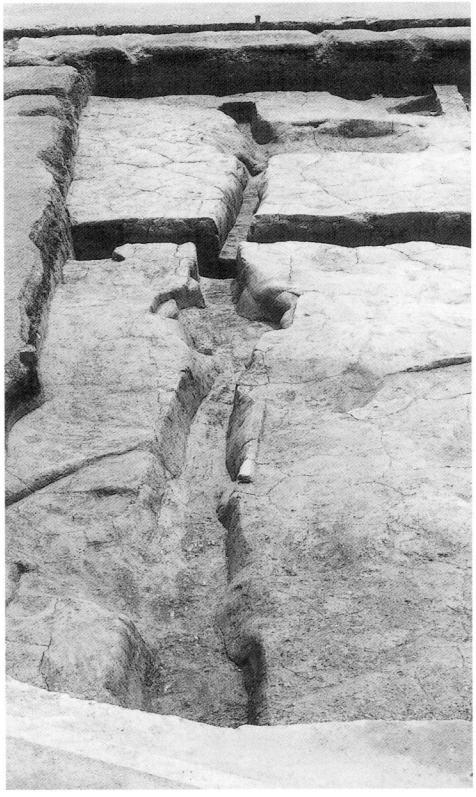
(4) Bトレンチ河川土層断面（北西から）

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査　一〇

(1) Bトレンチ第1号溝検出状況（南西から）

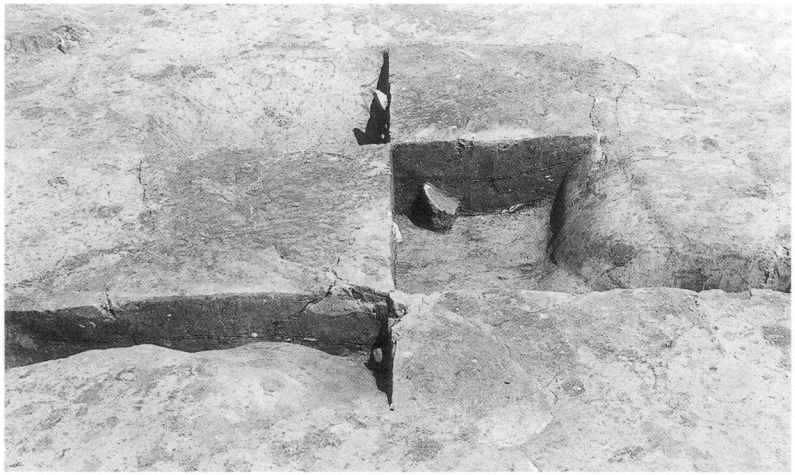


(2) Bトレンチ第1号溝完掘状況（南西から）



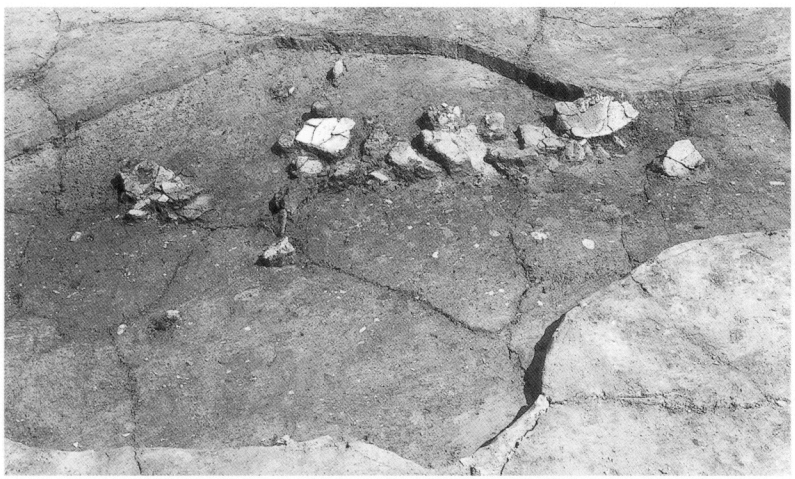
(3) Bトレンチ第1号溝完掘状況（北東から）

(4) Bトレンチ第1号溝土器出土状況（南西から）

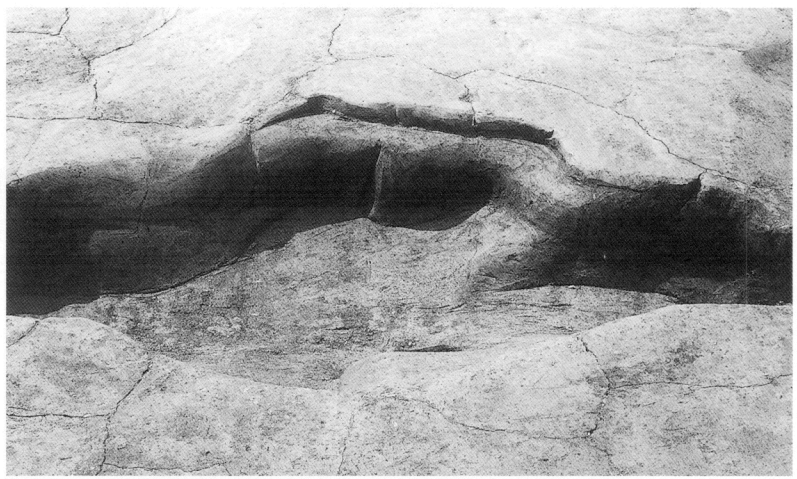


(1) Bトレンチ第3号土坑土層断面（南東から）

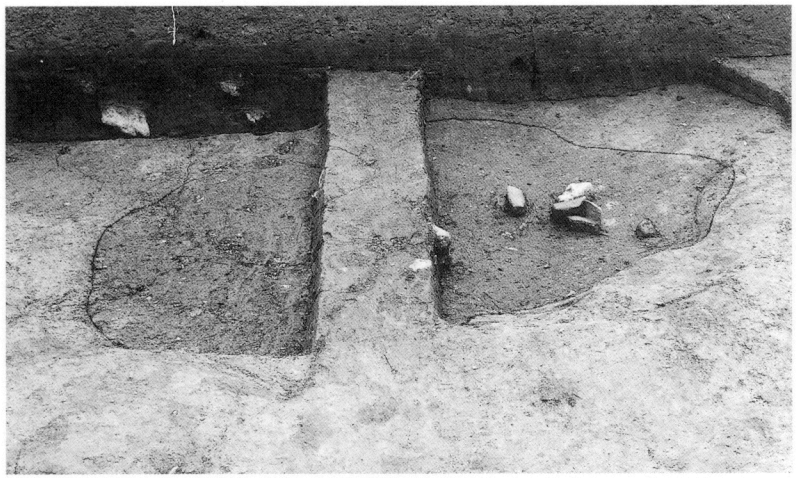
(2) Bトレンチ第3号土坑完掘状況（南東から）



(3) Bトレンチ第4号土坑土器出土状況（南東から）



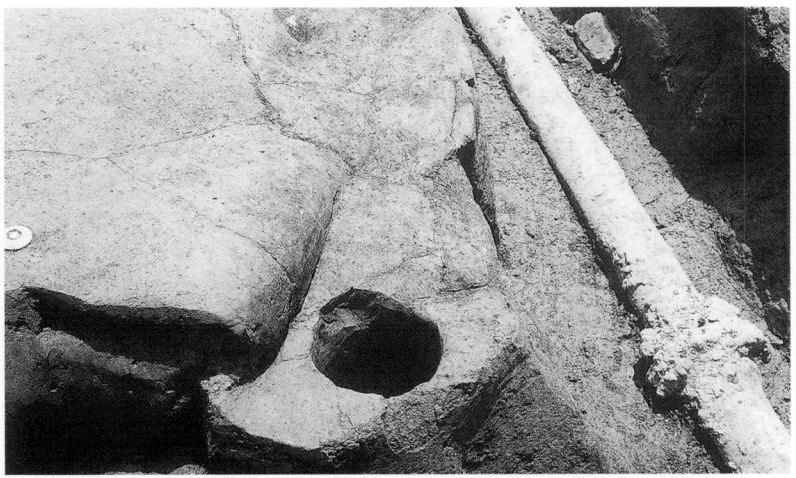
(4) Bトレンチ第4号土坑完掘状況（南東から）



(1) Bトレンチ第1号土坑検出状況（北東から）

(2) Bトレンチ第1号土坑完掘状況（北東から）

(3) Bトレンチ第2号土坑検出状況（北西から）

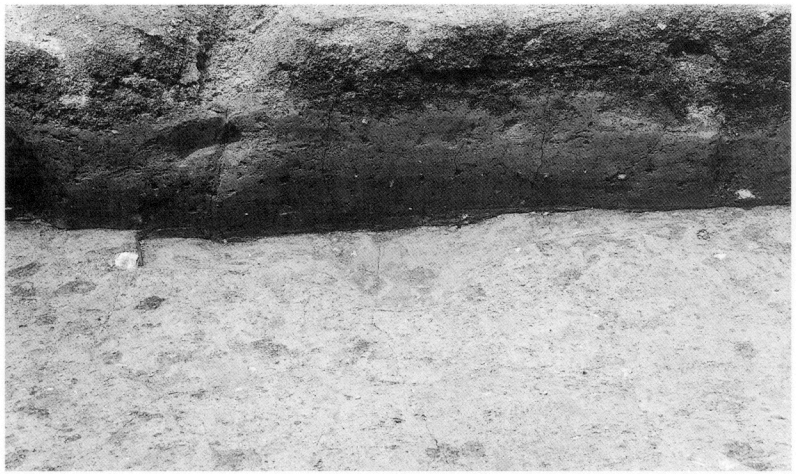


(4) Bトレンチ第2号土坑完掘状況（北西から）

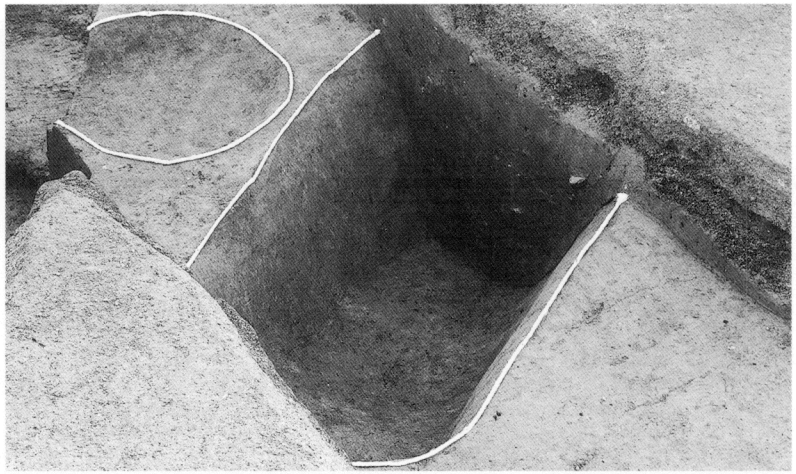
吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

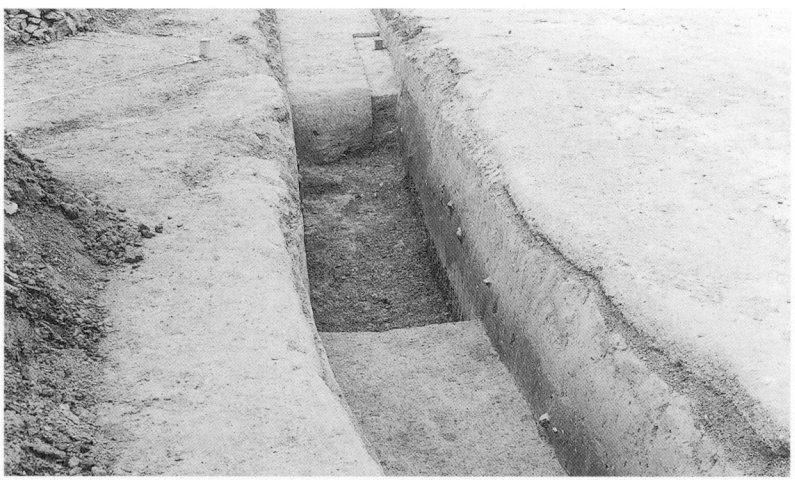
三



(1) Bトレンチ第5号土坑完掘状況（北東から）

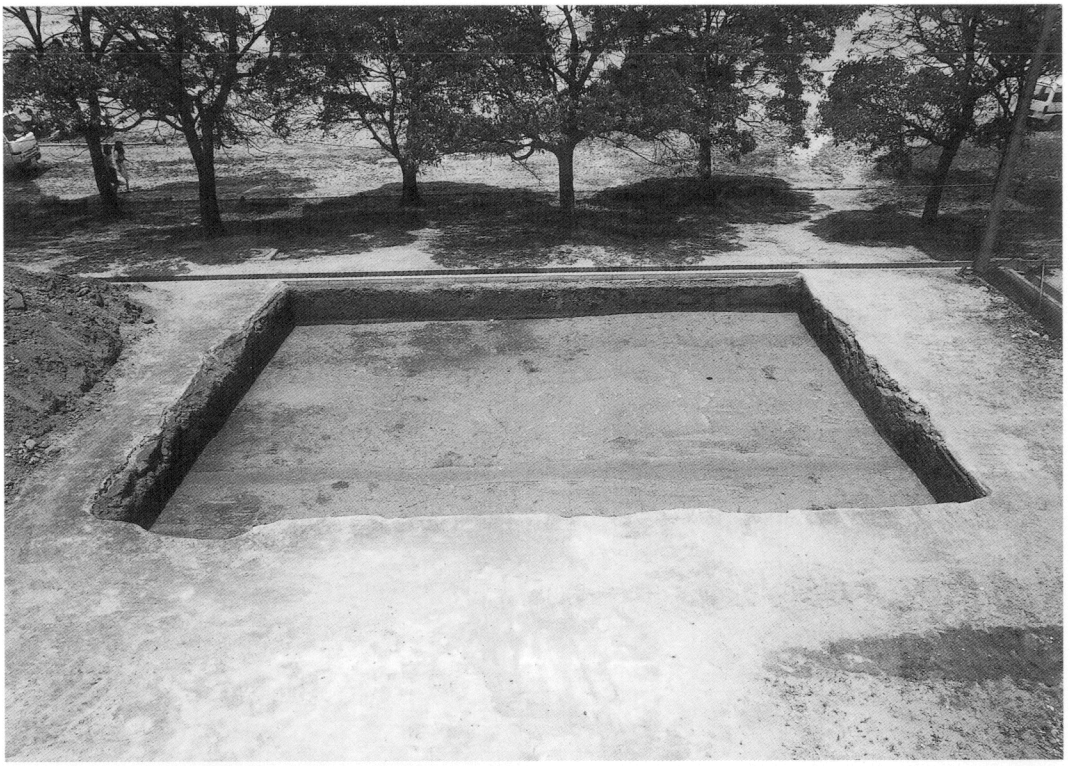


(2) 配線トレンチ第2号溝完掘状況（北西から）

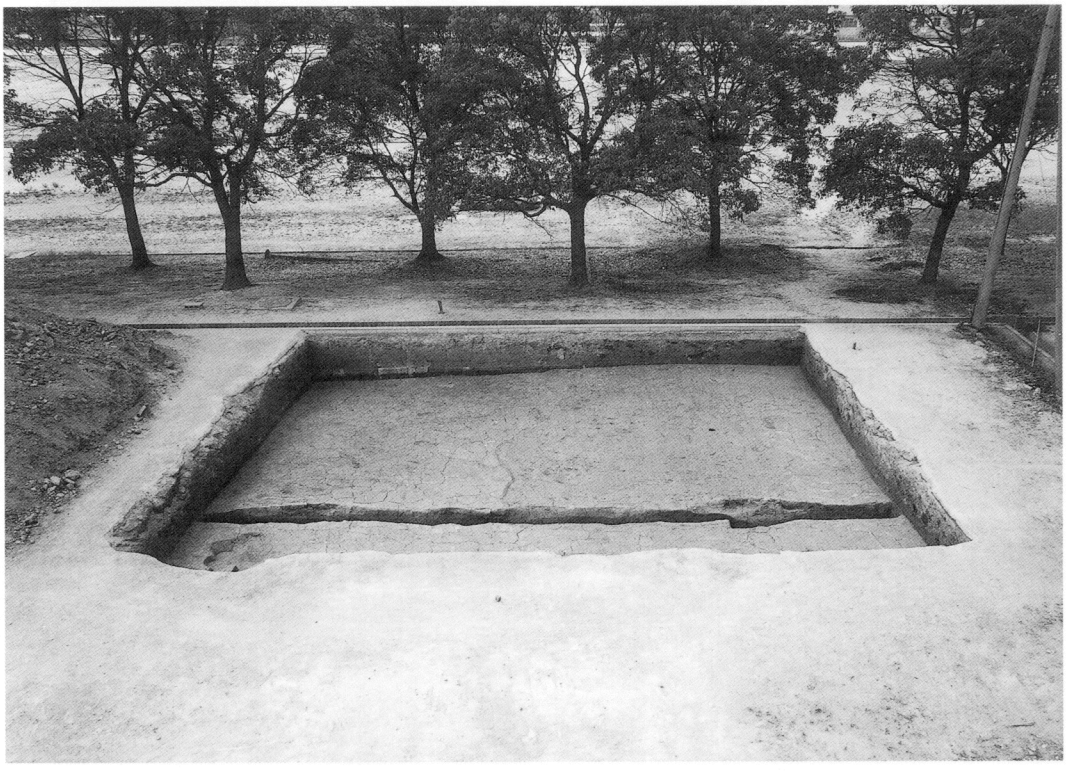


(3) 配線トレンチ落ち込み1完掘状況（南西から）

(4) Bトレンチ落ち込み1完掘状況（北西から）



(1) Cトレンチ遺構検出状況（南東から）



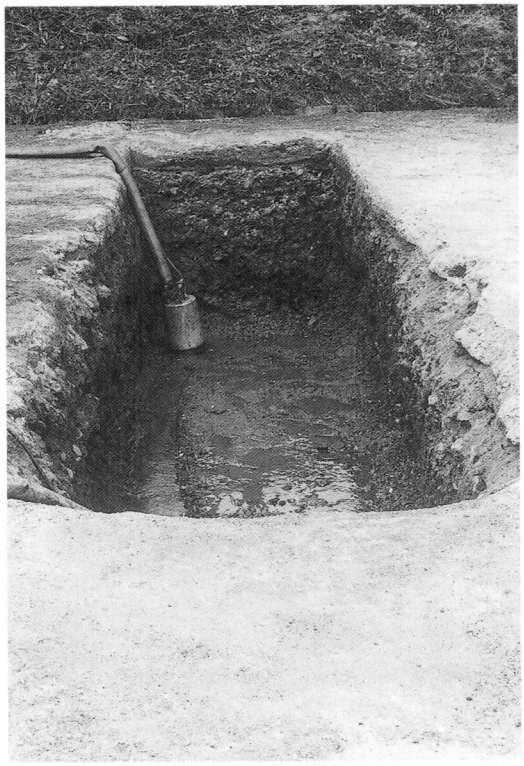
(2) Cトレンチ遺構完掘状況（南東から）

(1) Cトレンチ第1号土坑土層断面（北西から）

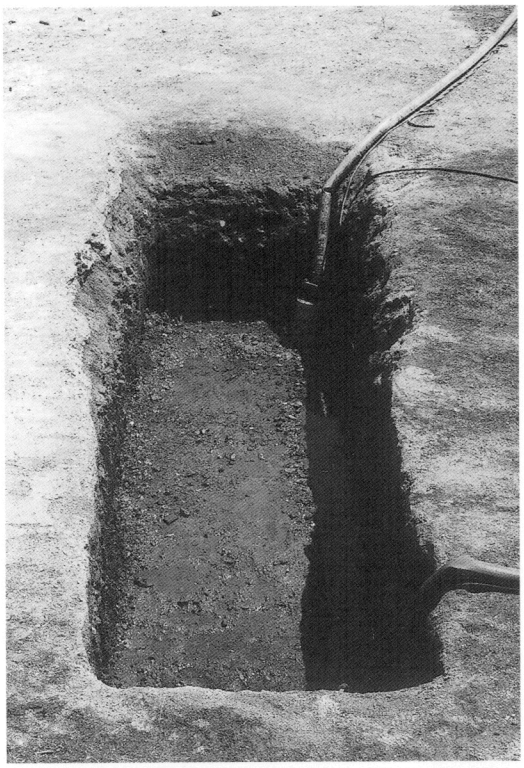
(2) Cトレンチ第1号土坑完掘状況（北西から）

(3) Cトレンチ落ち込み状遺構完掘状況（北東から）

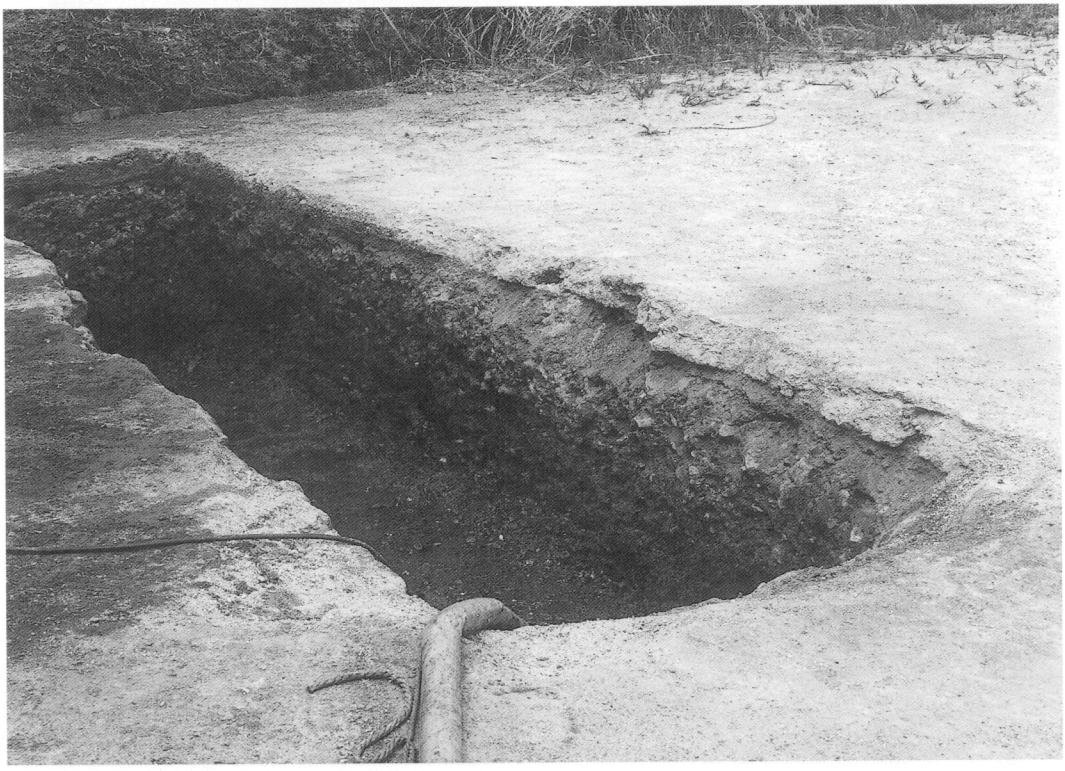
(4) Cトレンチ北西壁土層断面（南東から）



(1) Dトレンチ完掘状況（北東から）

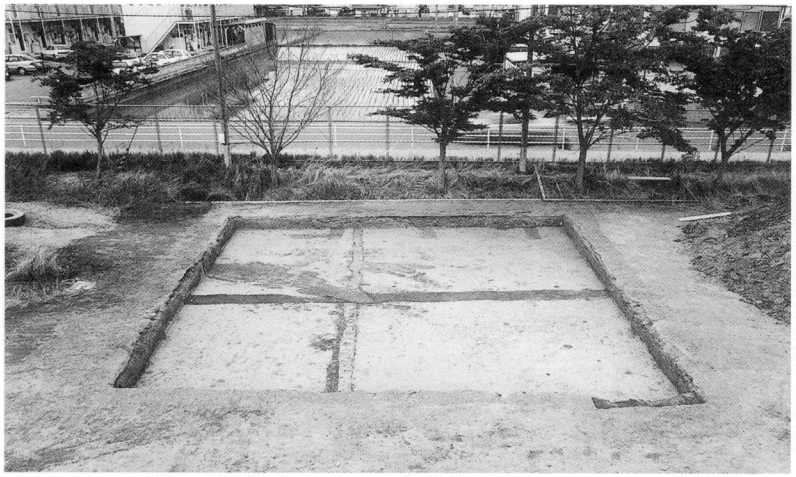


(2) Dトレンチ完掘状況（南西から）

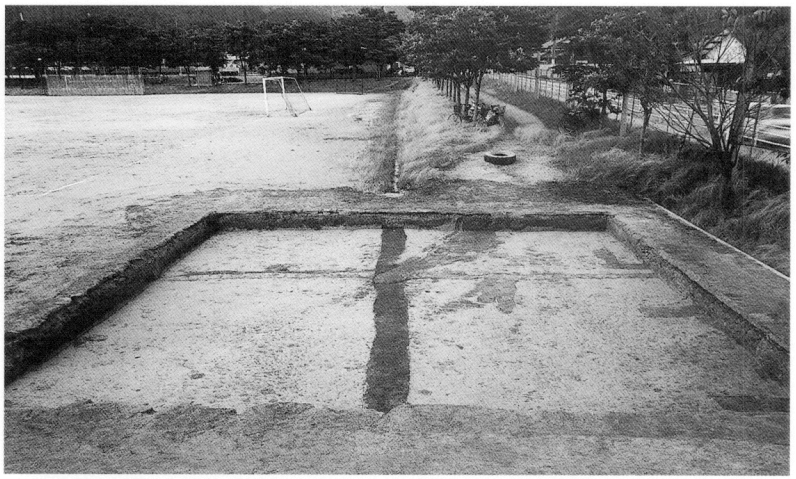


(3) Dトレンチ北西壁土層断面（東から）

吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査 ― 七



(1) E トレンチ全景（北東から）

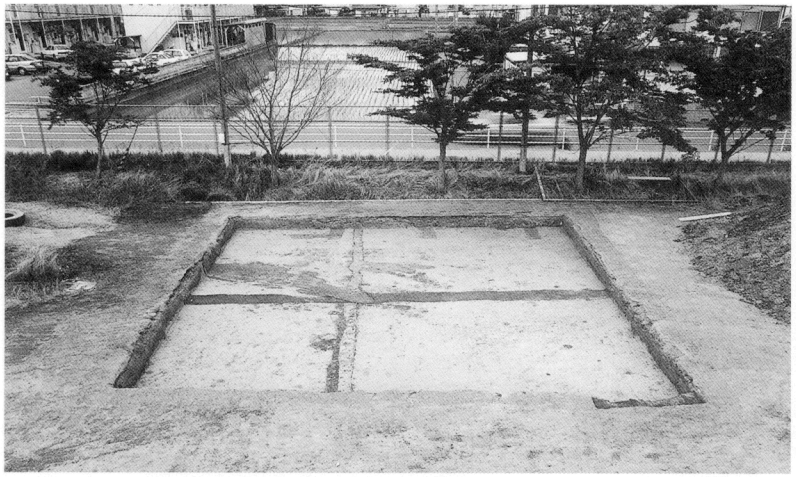


(2) E トレンチ全景（北西から）

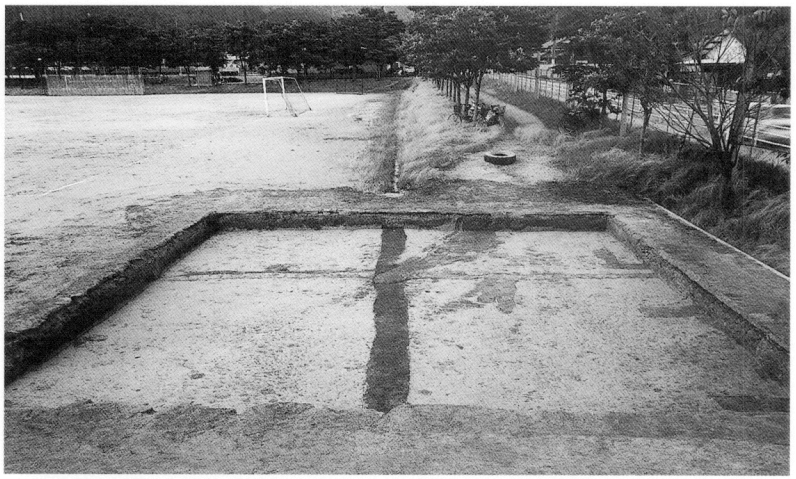
(3) E トレンチ南西壁土層断面（東から）

(4) E トレンチ北東壁土層断面（西から）

吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査 ― 七



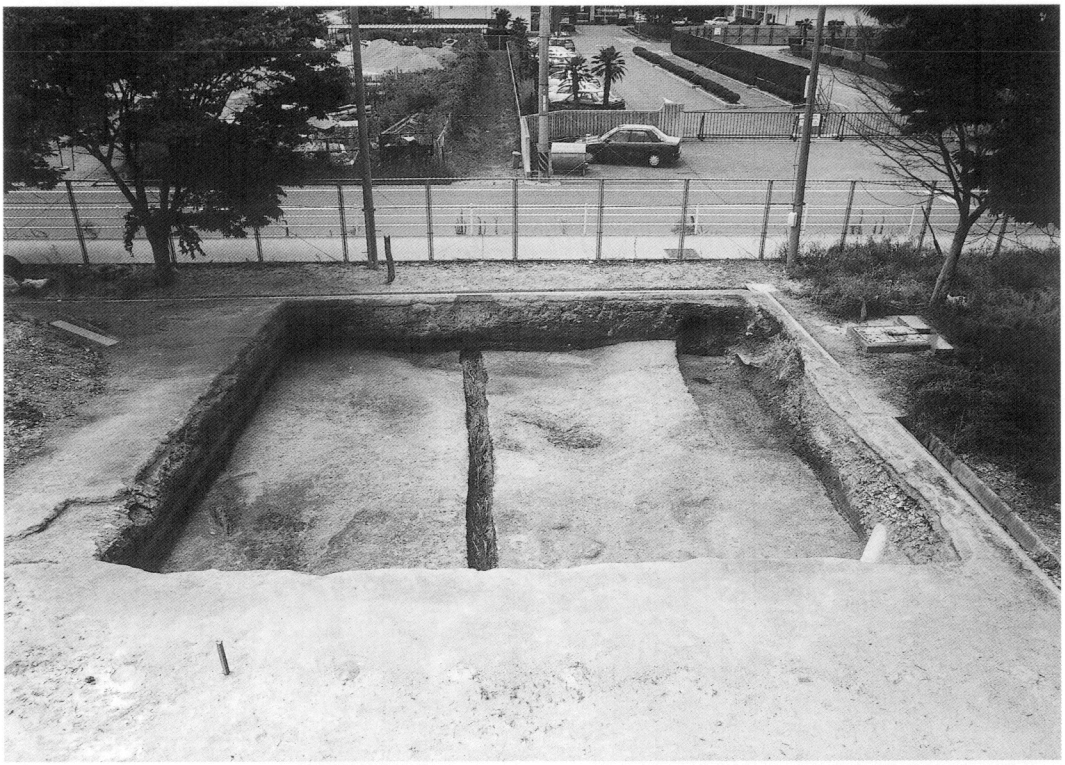
(1) E トレンチ全景（北東から）



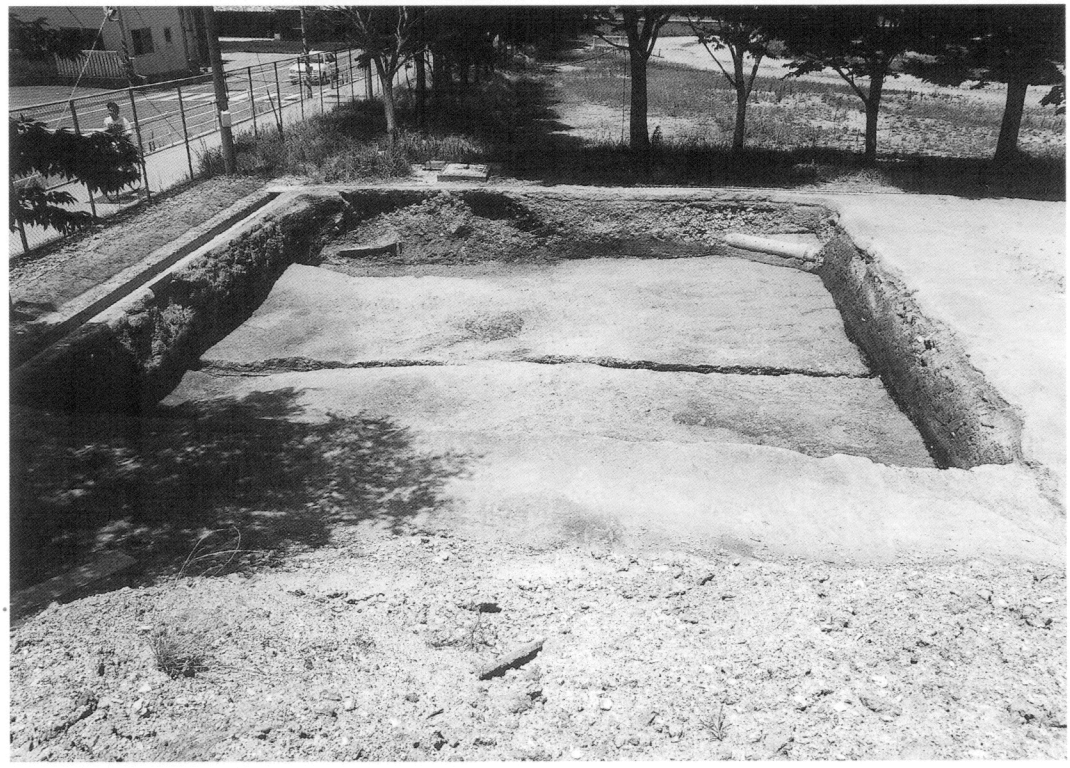
(2) E トレンチ全景（北西から）

(3) E トレンチ南西壁土層断面（東から）

(4) E トレンチ北東壁土層断面（西から）



(1) Ｆトレンチ遺構完掘状況（北東から）



(2) Ｆトレンチ遺構完掘状況（南東から）

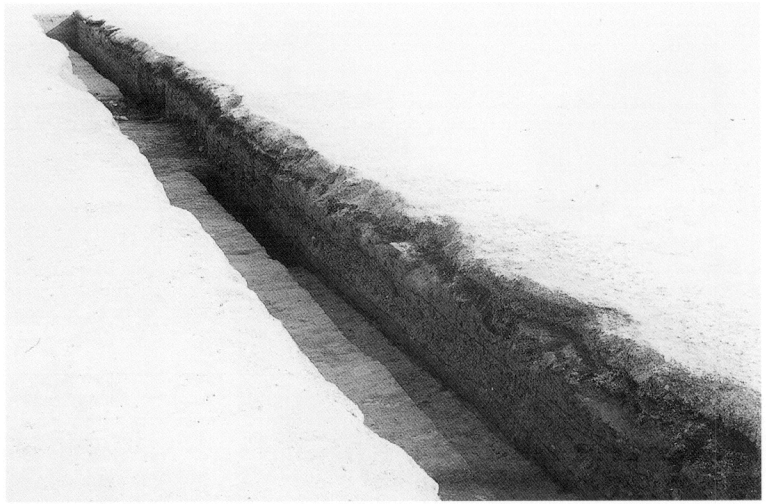
(1) Ｆトレンチ縄文土器出土状況（西から）

(2) Ｆトレンチ縄文土器出土状況（北西から）

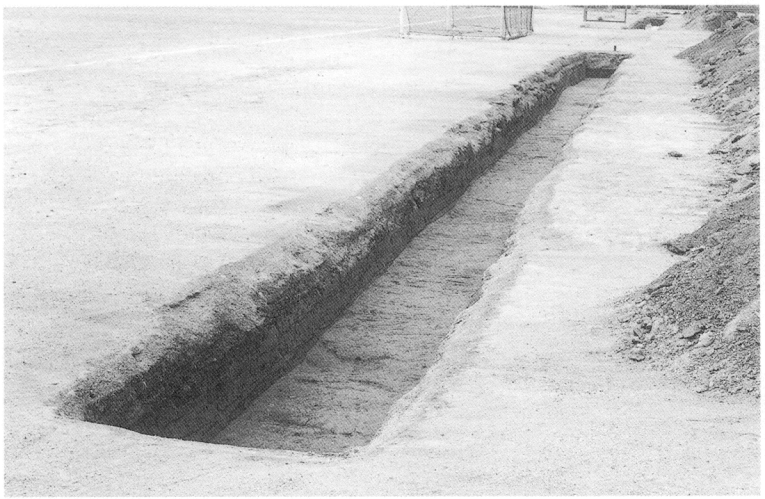
(3) Ｆトレンチ北東壁土層断面（西から）

(4) Ｆトレンチ南西壁土層断面（北から）

(1) 配線トレンチＥ区
遺構検出状況(北東から)



(2) 配線トレンチＥ区
土層断面（南西から）

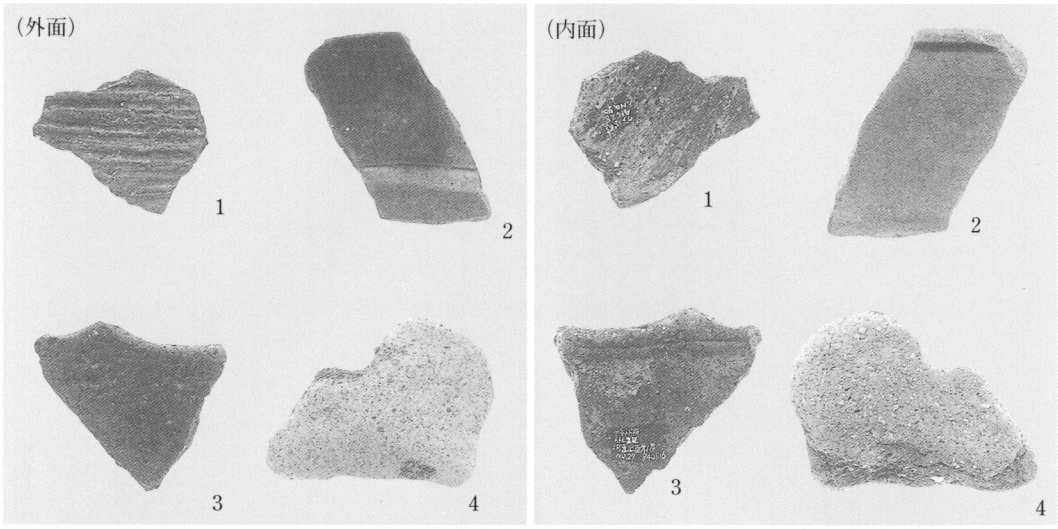


(3) 配線トレンチＦ区（北から）

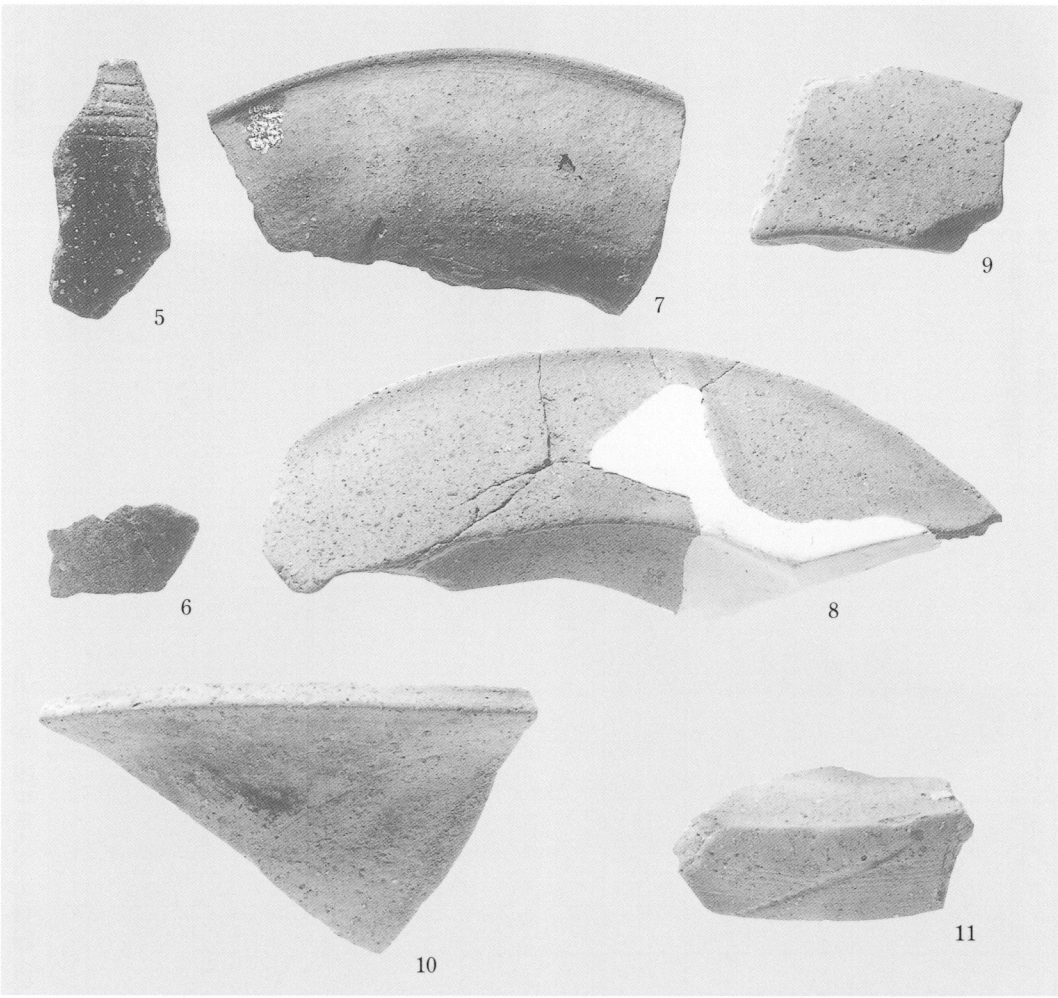
(4) 配線トレンチＧ区（北から）

吉田構内グラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査　一一〇

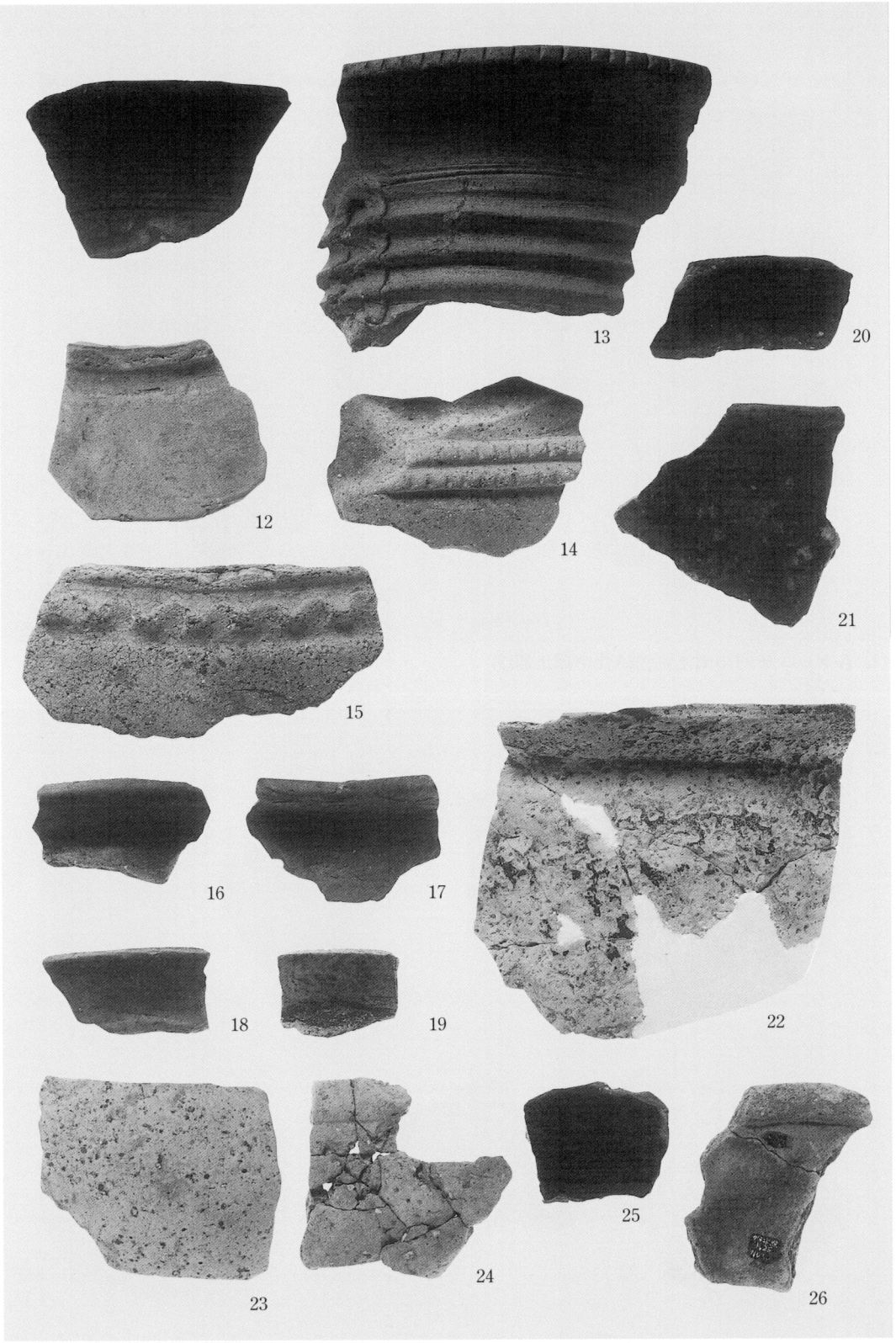
PL.21



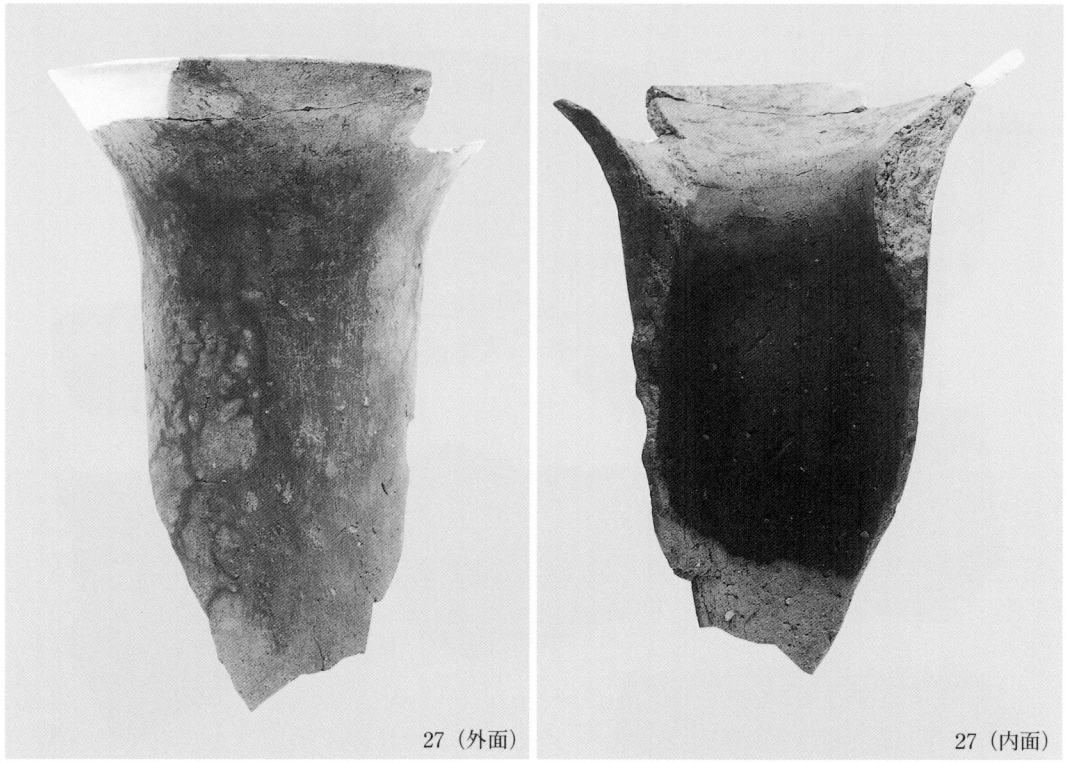
(1) Aトレンチ河川出土縄文土器



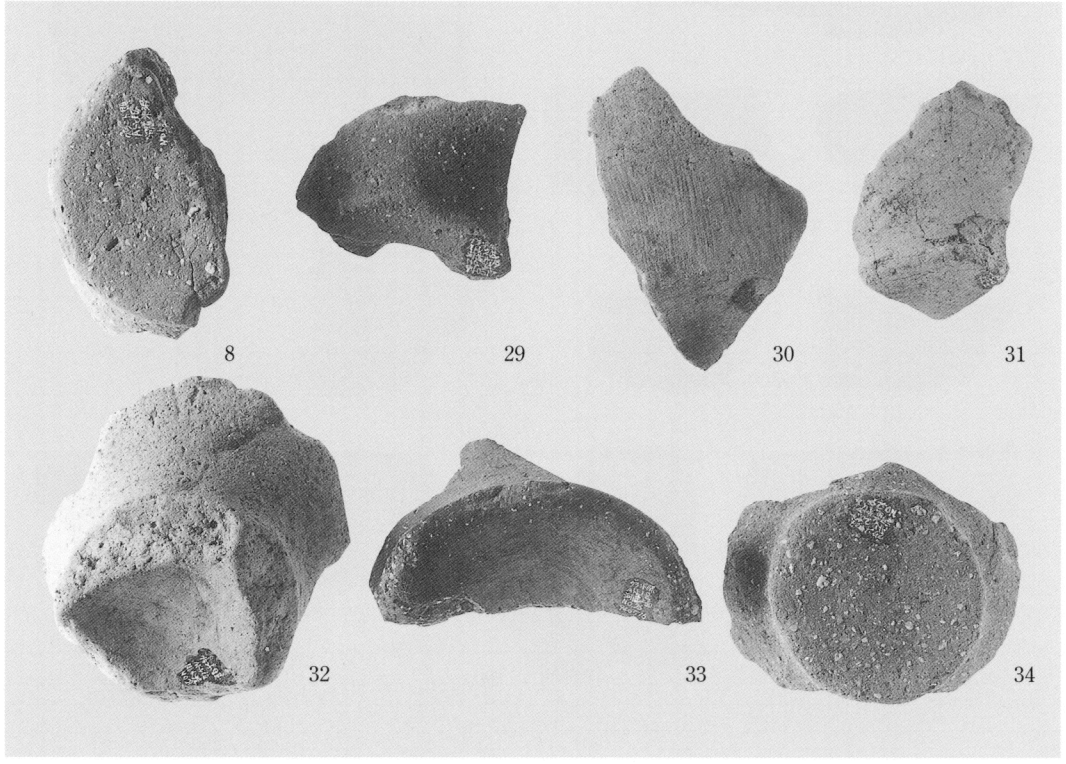
(2) Aトレンチ河川出土弥生時代前期～中期土器①



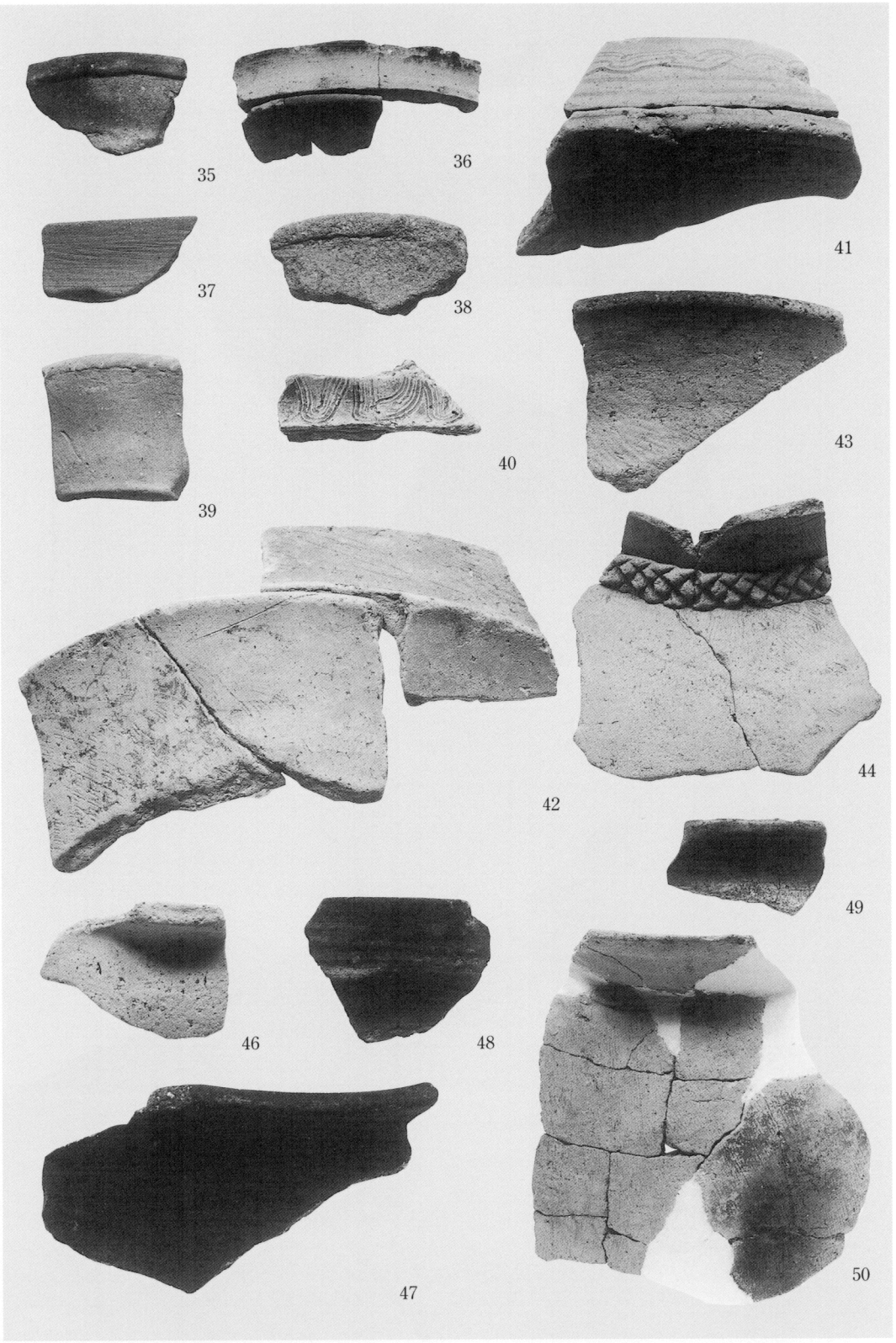
Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器②



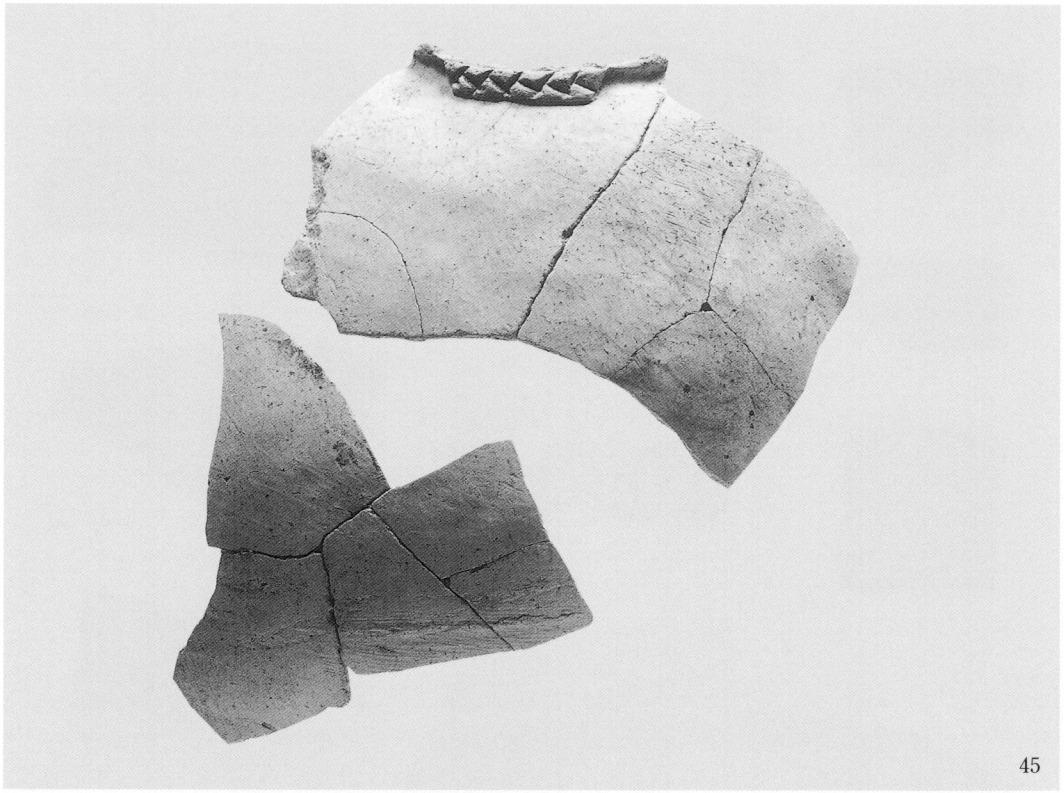
(1) Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器③



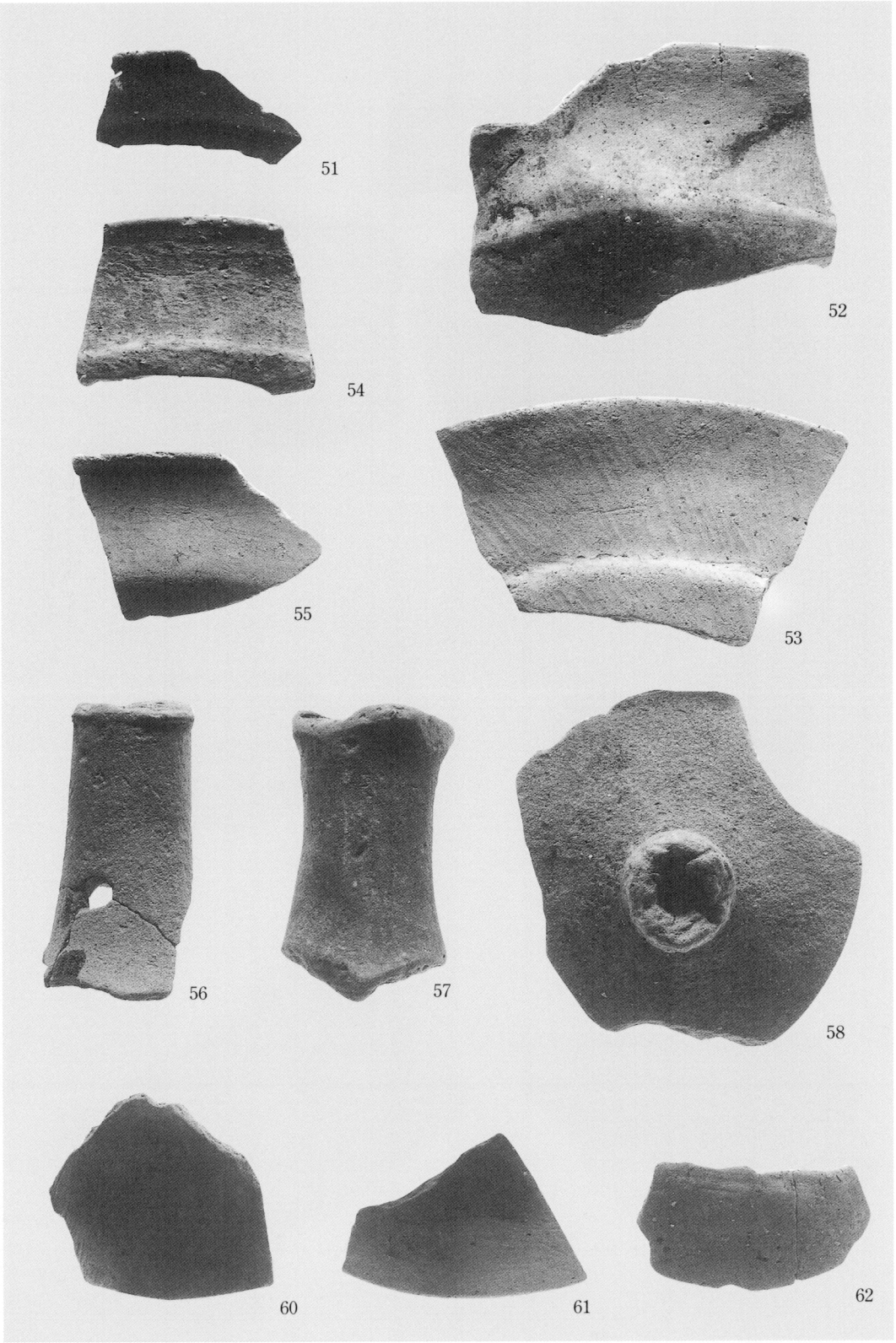
(2) Aトレンチ河川出土弥生時代中期土器④



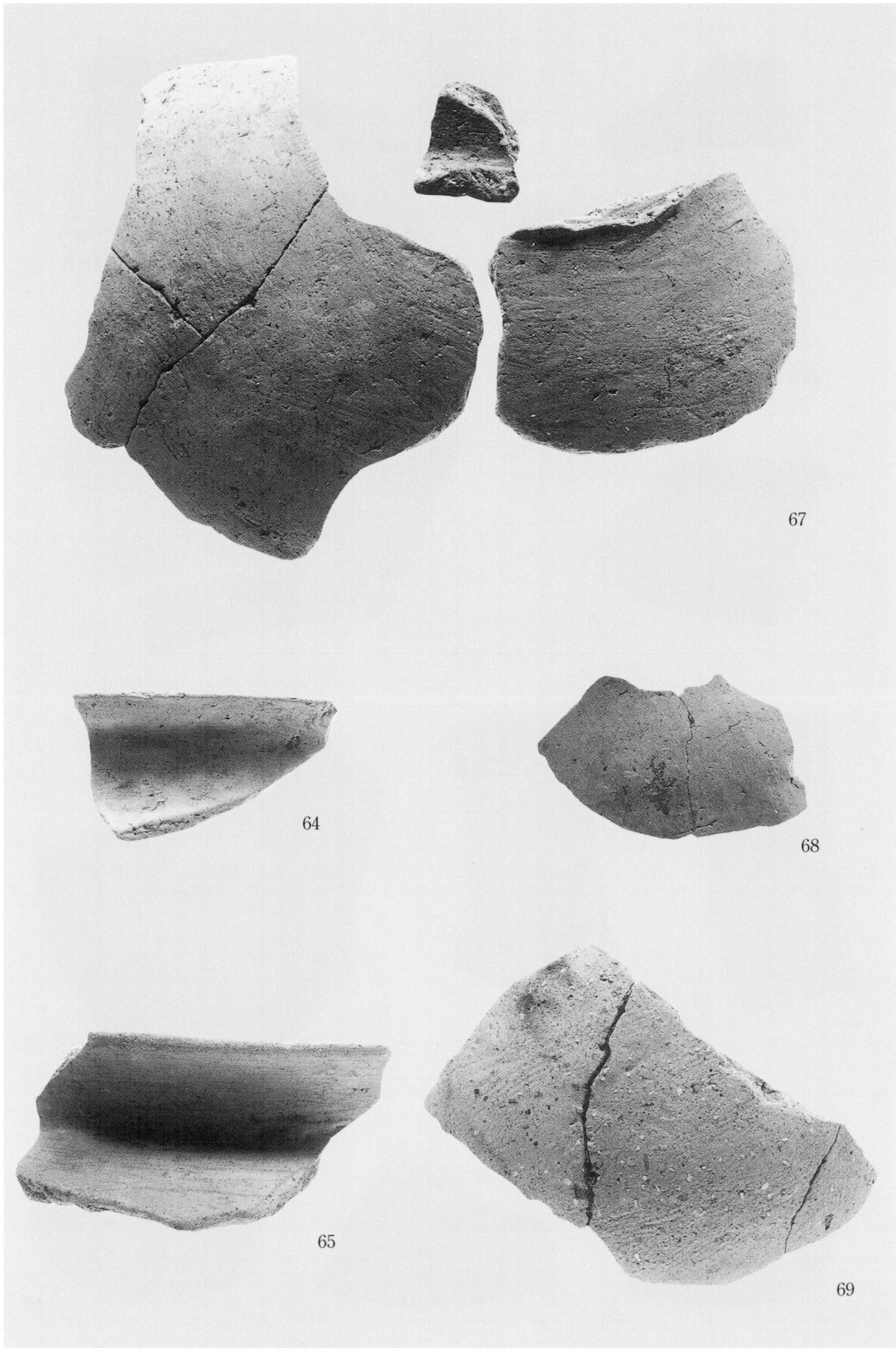
Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器①



Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器②



Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器③

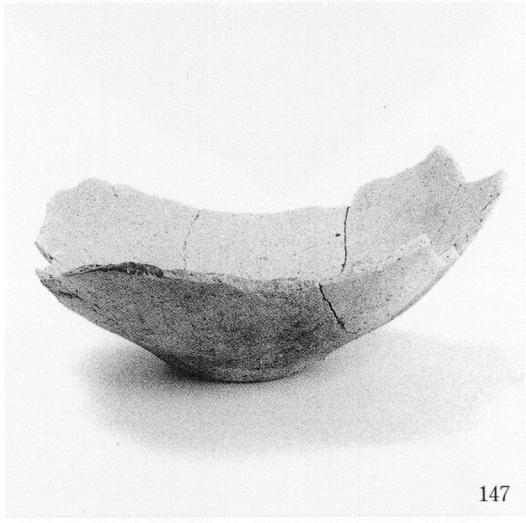


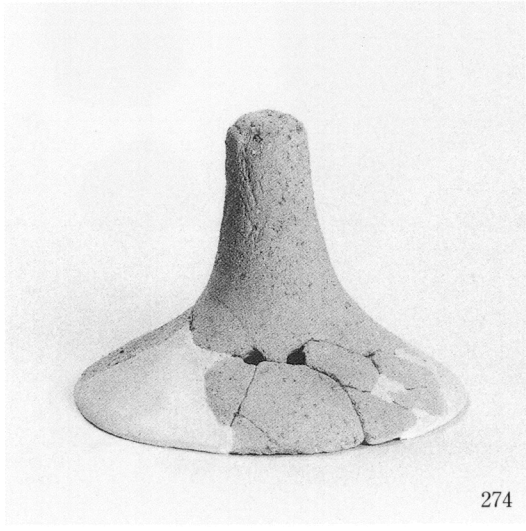
Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器①

59

63

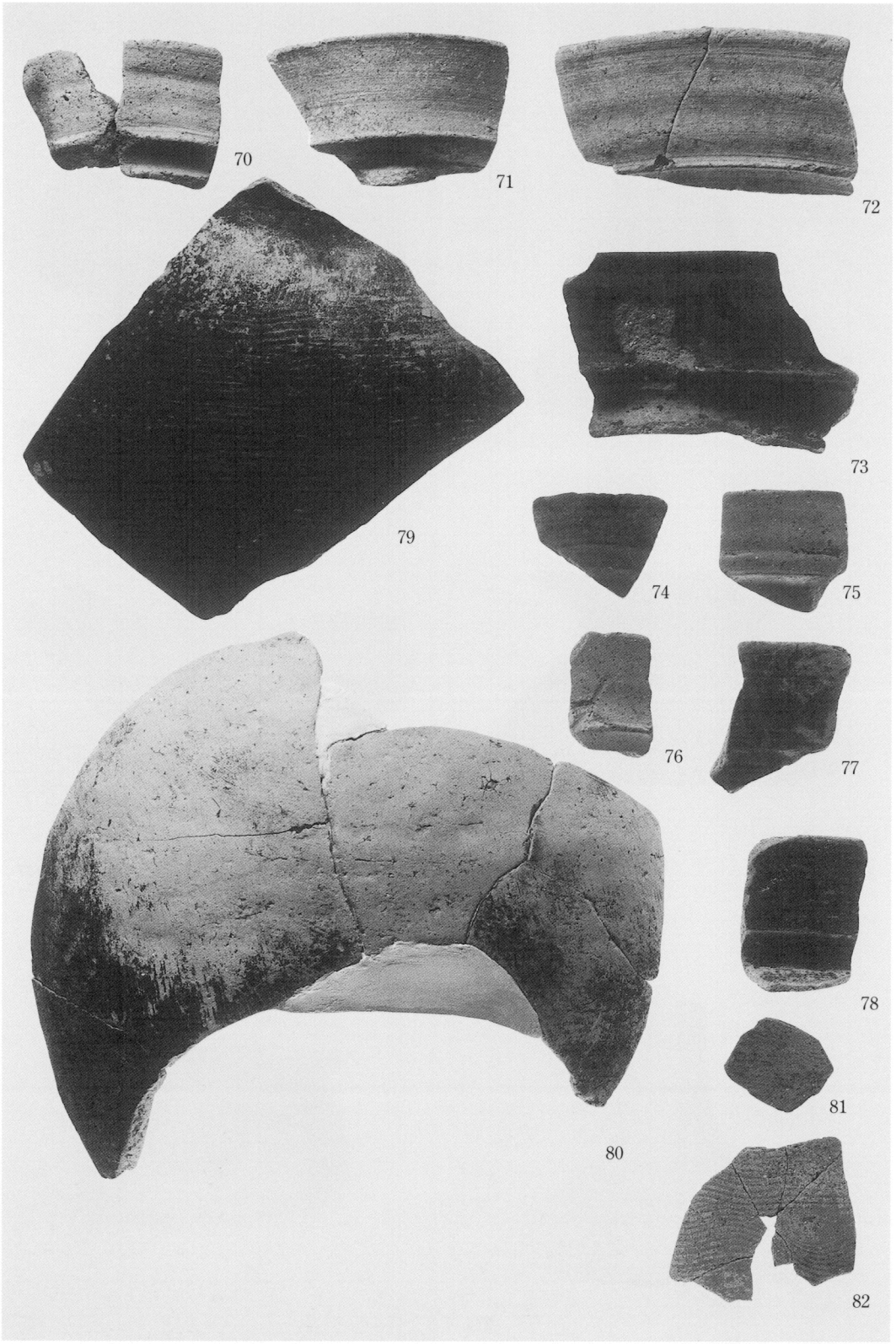
66


147


274

305

A・Bトレンチ出土土器



Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器②